

くろ　　に　　た
黒 仁 田 遺 跡

一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

2009

宮崎県埋蔵文化財センター

くろ　　に　　た
黒 仁 田 遺 跡

一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（5）



2009

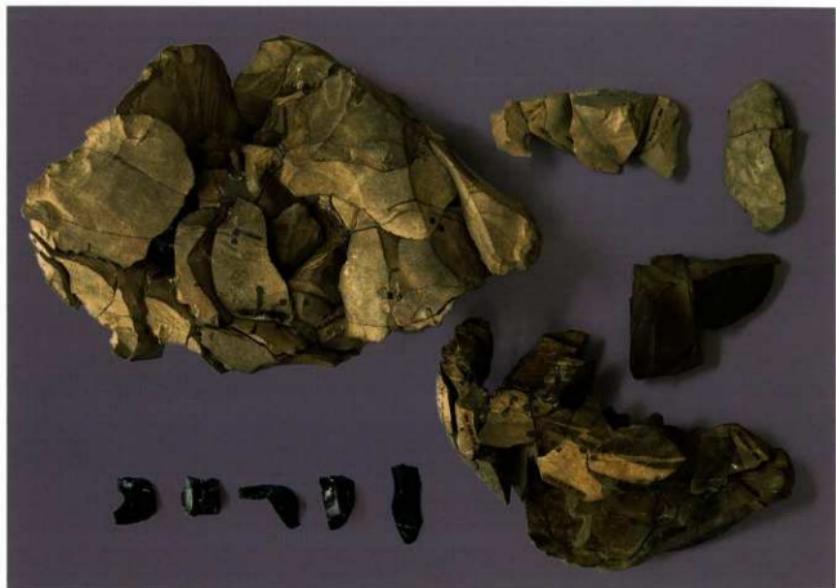
宮崎県埋蔵文化財センター



黒仁田遺跡遠景<遺跡西より五ヶ瀬川をのぞむ>



黒仁田遺跡全景<第三層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面>



旧石器時代接合資料〈旧石器時代第Ⅱ期〉



叩き目の見られる土師器

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚く御礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、一般国道218号北方延岡道路建設事業に伴い、宮崎県延岡市北方町に所存する黒仁田遺跡の調査を行いました。

今回の調査では、後期旧石器時代をはじめ、縄文時代早期、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物が確認されました。特に後期旧石器時代の細石刃石器群における接合資料や弥生時代・古墳時代の集落跡から多数の土器が出土したことは注目されます。

こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が得られたことは、大きな成果だと言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけではなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成21年2月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 福永展幸

例　　言

1. 本報告書は、一般国道218号北方延岡道路建設工事に伴い、宮崎県教育委員会が行った黒仁田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の委託を受けて、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、平成18年5月8日から平成18年12月8日まで行った。
4. 現地での実測・写真撮影等の記録は、平山十四郎・黒木俊彦・橋本憲二・古屋美樹が行い、空中写真撮影は、九州航空株式会社に、基準点・水準点・グリッド杭設置は、株式会社東九州コンサルタントに委託した。
5. 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレースは平山十四郎が整理作業員の協力を得て行った。一部の石器遺物の実測図作成・トレース図作成は、株式会社九州文化財研究所、株式会社パスコに委託した。自然科学分析については、株式会社古環境研究所、パリノ・サービス株式会社に委託した。
6. 本書で使用した位置図（第1図）は、国土地理院作成「延岡（1/50,000）」を、周辺地形図（第2図）は、国土地理院九州地方整備局延岡河川国道事務所から提供の1000分の1を基に作成した。
7. 土層断面の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帳」に掲っているが、数字等記載のない色名はその限りではない。
8. 本書で使用した方位は、「N」と記載しているものは磁北である。「G N」と記載しているものは座標北である。レベルは海拔絶対高である。報告書抄録に使用している経緯度数値は、世界測地系を使用している。
9. 本書で使用した遺構および石材の略号は次の通りである。

SA……竪穴住居跡 SC……土坑 Ob……黒曜石 ho……ホルンフェルス
10. 本書の執筆・編集は平山十四郎が行った。第Ⅲ章第1節については芝康次郎氏（当時、熊本大学大学院）と平山が共同で執筆し、第V章第1節については芝氏が主に執筆した。旧石器時代の執筆について、芝氏には多人な御教授を賜ったことに感謝申し上げる。
11. 出土遺物、その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第Ⅱ章 調査の概要	
第1節 調査の経過	5
第2節 基本層序	7
第Ⅲ章 調査の記録	
第1節 旧石器時代の調査	10
第2節 縄文時代早期の調査	73
第3節 弥生時代・古墳時代の調査	76
第4節 包含層出土の遺物	131
第5節 不明遺構	148
第Ⅳ章 自然科学分析	
第1節 黒曜石の原産地同定	149
第2節 炭化材についての分析	151
第3節 炭化種子についての分析	155
第Ⅴ章 まとめ	
第1節 旧石器時代の様相	160
第2節 縄文時代早期の様相	168
第3節 弥生時代・古墳時代の様相	169

挿図目次

第1図 延岡市周辺遺跡分布図	4	第14図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図2	19
第2図 黒仁田遺跡周辺地形図	6	第15図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図3	20
第3図 十層断面図1	8	第16図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図4	21
第4図 土層断面図2	9	第17図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図5	22
第5図 旧石器時代第1期検出状況図	11	第18図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図6	23
第6図 旧石器時代第1期石器実測図1	12	接合資料Ⅰ—①分布図	
第7図 旧石器時代第1期石器実測図2	13	第19図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図7	24
第8図 旧石器時代第1期石器実測図3	13	第20図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図8	25
接合資料Ⅰ—①分布図		接合資料Ⅰ—②分布図	
第9図 旧石器時代第1期石器実測図4	14	第21図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図9	26
第10図 旧石器時代第Ⅱ期1号土坑実測図	15	接合資料Ⅱ—③分布図	
第11図 旧石器時代第Ⅱ期検出状況図	16	第22図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図10	27
第12図 旧石器時代第Ⅱ期主要遺物の分布と接合関係	17	接合資料Ⅱ—④分布図	
第13図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図1	18	第23図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図11	28

第24図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図12	29
	接合資料Ⅱ—⑤分布図	
第25図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図13	30
第26図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図14	31
第27図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図15	32
	接合資料Ⅱ—⑥分布図	
第28図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図16	33
	接合資料Ⅱ—⑦分布図	
第29図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図17	34
	接合資料Ⅱ—⑧分布図	
第30図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図18	35
第31図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図19	35
第32図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図20	36
	接合資料Ⅱ—⑨分布図	
第33図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図21	36
	接合資料Ⅱ—⑩分布図	
第34図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図22	37
第35図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図23	37
	接合資料Ⅱ—⑪分布図	
第36図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図24	38
	接合資料Ⅱ—⑫分布図	
第37図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図25	39
	接合資料Ⅱ—⑬分布図	
第38図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図26	40
第39図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図27	41
第40図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図28	42
第41図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図29	43
第42図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図30	44
第43図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図31	45
	接合資料Ⅱ—⑭分布図	
第44図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図32	46
第45図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図33	47
第46図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図34	48
第47図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図35	49
第48図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図36	50
	接合資料Ⅱ—⑮分布図	
第49図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図37	51
第50図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図38	52
第51図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図39	53
第52図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図40	54
第53図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図41	55
第54図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図42	56
第55図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図43	57
第56図	旧石器時代接合資料Ⅱ—⑯分布図	58
第57図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図44	59
第58図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図45	60
第59図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図46	61
第60図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図47	62
第61図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図48	63
	接合資料Ⅱ—⑰分布図	
第62図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図49	63
	接合資料Ⅱ—⑱分布図	
第63図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図50	64
	接合資料Ⅱ—⑲分布図	
第64図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図51	65
第65図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図52	65
第66図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図53	66
第67図	旧石器時代第Ⅱ期石器実測図54	67
第68図	縄文時代早期1号集石遺構実測図	73
第69図	歌瀬検山状況図	74
第70図	縄文時代早期遺構検出状況図	74
第71図	縄文時代早期土器実測図・石器実測図	75
第72図	弥生時代・古墳時代遺構配置図	77
第73図	5号堅穴住居跡(SA5)実測図	79
第74図	5号堅穴住居跡(SA5)出土遺物実測図1	80
第75図	5号堅穴住居跡(SA5)山上遺物実測図2	81
第76図	7号堅穴住居跡(SA7)実測図	82
第77図	7号堅穴住居跡(SA7)出土遺物実測図	83
第78図	8号堅穴住居跡(SA8)実測図	84
第79図	8号堅穴住居跡(SA8)出土遺物実測図	85
第80図	2号堅穴住居跡(SA2)実測図	86
第81図	2号堅穴住居跡(SA2)山上遺物実測図1	87
第82図	2号堅穴住居跡(SA2)出土遺物実測図2	88
第83図	2号堅穴住居跡(SA2)出土遺物実測図3	89
第84図	2号堅穴住居跡(SA2)出土遺物実測図4	90
第85図	2号土坑(SC2)実測図	91
	山上遺物実測図	
第86図	9号堅穴住居跡(SA9)実測図1	93
第87図	9号堅穴住居跡(SA9)実測図2	94
	住居跡内土坑実測図	

第 88 図	9 号堅穴住居跡 (SA9) 出土遺物実測図 1	95
第 89 図	9 号堅穴住居跡 (SA9) 山上遺物実測図 2	96
第 90 図	9 号堅穴住居跡 (SA9) 出土遺物実測図 3	97
第 91 図	9 号堅穴住居跡 (SA9) 出土遺物実測図 4	98
第 92 図	1 号堅穴住居跡 (SA1) 実測図	99
第 93 図	1 号堅穴住居跡 (SA1) 出土遺物実測図 1	100
第 94 図	1 号堅穴住居跡 (SA1) 出土遺物実測図 2	101
第 95 図	1 号堅穴住居跡 (SA1) 山上遺物実測図 3	102
第 96 図	1 号堅穴住居跡 (SA1) 出土遺物実測図 4	103
第 97 図	3 号堅穴住居跡 (SA3) 実測図	104
第 98 図	3 号堅穴住居跡 (SA3) 山上遺物実測図 1	105
第 99 図	3 号堅穴住居跡 (SA3) 出土遺物実測図 2	106
第100図	3 号堅穴住居跡 (SA3) 山上遺物実測図 3	107
第101図	3 号堅穴住居跡 (SA3) 出土遺物実測図 4	108
第102図	4 号堅穴住居跡 (SA4) 実測図	109
第103図	4 号堅穴住居跡 (SA4) 出土遺物実測図 1	110
第104図	4 号堅穴住居跡 (SA4) 出土遺物実測図 2	111
第105図	10 分堅穴住居跡 (SA10) 実測図	112
第106図	10 分堅穴住居跡 (SA10) 山上遺物実測図 1	113
第107図	10 分堅穴住居跡 (SA10) 出土遺物実測図 2	114
第108図	11 号堅穴住居跡 (SA11) 実測図	115
第109図	11 号堅穴住居跡 (SA11) 山上遺物実測図 1	116
第110図	11 号堅穴住居跡 (SA11) 出土遺物実測図 2	117
第111図	12 分堅穴住居跡 (SA12) 実測図	118
第112図	12 分堅穴住居跡 (SA12) 山上遺物実測図 1	119
第113図	12 分堅穴住居跡 (SA12) 出土遺物実測図 2	120
第114図	12 号堅穴住居跡 (SA12) 出土遺物実測図 3	121
第115図	12 号堅穴住居跡 (SA12) 出土遺物実測図 4	122
第116図	4 号土坑 (SC4) 実測図	122
第117図	4 分十坑 (SC4) 出土遺物実測図 1	123
第118図	4 号土坑 (SC4) 出土遺物実測図 2	124
第119図	4 号土坑 (SC4) 出土遺物実測図 3	125
第120図	4 号土坑 (SC4) 出土遺物実測図 4	126
第121図	3 号土坑 (SC3) 実測図	127
第122図	3 号土坑 (SC3) 出土遺物実測図 1	128
第123図	3 分十坑 (SC3) 出土遺物実測図 2	129
第124図	1 号土坑 (SC1) 実測図	129
	出土遺物実測図	
第125図	6 号堅穴住居跡 (SA6) 住居跡内伊勢測図	130
	出土遺物実測図	
第126図	匂今届出土遺物実測図	131
第127図	不明十坑実測図	148
第128図	横石瓦呑器群におけるブロック構成概要図	161
第129図	石材別消費状況の比較	164
第130図	黒曜石產地別分布	166
第131図	南・北ブロック群の機能的差異	167
第132図	SA5の器種構成	169
第133図	SA7の器種構成	169
第134図	SA8の器種構成	170
第135図	SA2の器種構成	170
第136図	SA9の器種構成	170
第137図	SA1の器種構成	171
第138図	SA3の器種構成	171
第139図	SA4の器種構成	171
第140図	SA10の器種構成	172
第141図	SA11の器種構成	172
第142図	SA12の器種構成	172
第143図	遺構全体の器種構成	173
第144図	I 期の器種構成	173
第145図	II 期の器種構成	173

表目次

第 1 表	旧石器時代石器計測表 1	69
第 2 表	旧石器時代石器計測表 2	70
第 3 表	旧石器時代石器計測表 3	71
第 4 表	旧石器時代石器計測表 4	72
第 5 表	縄文時代土器観察表	76
第 6 表	縄文時代石器計測表	82
第 7 表	弥生時代・古墳時代鉄製品計測表	131
第 8 表	弥生時代・古墳時代石器計測表	132
第 9 表	弥生時代・古墳時代上器観察表 1	133
第10表	弥生時代・古墳時代土器観察表 2	134
第11表	弥生時代・古墳時代下器観察表 3	135
第12表	弥生時代・古墳時代土器観察表 4	136
第13表	弥生時代・古墳時代上器観察表 5	137
第14表	弥生時代・古墳時代下器観察表 6	138

第15表	弥生時代・古墳時代土器觀察表7	139
第16表	弥生時代・古墳時代土器觀察表8	140
第17表	弥生時代・古墳時代土器觀察表9	141
第18表	弥生時代・古墳時代土器觀察表10	142
第19表	弥生時代・古墳時代土器觀察表11	143
第20表	弥生時代・古墳時代土器觀察表12	144
第21表	弥生時代・古墳時代土器觀察表13	145
第22表	弥生時代・古墳時代土器觀察表14	146
第23表	弥生時代・古墳時代土器觀察表15	147
第24表	第Ⅱ期接合資料作業內容一覽	163
第25表	整穴性居跡(SA)一覽	175
第26表	土坑(SC)一覽	176

図版目次

図版1	巻頭1	185
黒仁田遺跡遠景<遺跡西より五ヶ瀬川をのぞむ>		
黒仁田遺跡全景<第Ⅲ層(鬼界アカホヤ火山灰層)上面>		
図版2	巻頭2	
旧石器時代接合資料(旧石器時代第Ⅱ期)		
叩き石の見られる土師器		
図版3	179	
黒曜石石器における使用痕		
図版4	180	
炭化材I		
図版5	181	
炭化材II		
図版6	182	
炭化種子		
図版7	183	
SA9遺物出土状況		
SA9壺(394)出土状況		
SA1上器集中部分		
SA7鉢(319)出土状況		
SA12炭化材検出状況		
SC4遺物出土状況		
集石遺構検出状況(绳文時代早期)		
作業風景		
図版8	184	
旧石器第Ⅰ期出土遺物(1~9)		
旧石器第Ⅰ期山上遺物(接合資料Ⅱ-①)		
旧石器第Ⅰ期出土遺物(接合資料Ⅱ-①構成剥片)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(12~21)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(22~25)		
旧石器第Ⅱ期山上遺物(26~29)		
図版9	185	
旧石器第Ⅱ期出土遺物(30~33)		
旧石器第Ⅱ期山上遺物(34~36)		
旧石器第Ⅱ期山上遺物(接合資料Ⅱ-①)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-①構成剥片)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-②)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-②構成剥片)		
図版10	186	
旧石器第Ⅱ期山上遺物(接合資料Ⅱ-③)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-③構成剥片)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-④)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-④構成剥片)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑤)		
旧石器第Ⅱ期山上遺物(接合資料Ⅱ-⑤構成剥片)		
図版11	187	
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑥)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑥構成剥片)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑦)		
旧石器第Ⅱ期山上遺物(接合資料Ⅱ-⑦構成剥片)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑧)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑧構成剥片)		
図版12	188	
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑨)		
旧石器第Ⅱ期山上遺物(接合資料Ⅱ-⑨構成剥片)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑩)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑩構成剥片)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑪)		
旧石器第Ⅱ期山上遺物(接合資料Ⅱ-⑪構成剥片)		
図版13	189	
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑫)		
旧石器第Ⅱ期出土遺物(接合資料Ⅱ-⑫構成剥片)		

旧石器第Ⅱ期山上遺物（接合資料Ⅱ-⑬）	図版20	196
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-⑭構成剥片）	弥生時代・古墳時代出土遺物	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-⑮構成剥片）	（7号堅穴住居跡）	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-⑯構成剥片）	図版21	197
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-⑰構成剥片）	弥生時代・古墳時代出土遺物	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-⑱構成剥片）	（7号・8号・2号堅穴住居跡）	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-⑲構成剥片）	図版22	198
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-⑳構成剥片）	弥生時代・古墳時代山上遺物	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉑構成剥片）	（2号堅穴住居跡）	
図版14	図版23	199
旧石器第Ⅱ期山上遺物（接合資料Ⅱ-㉒）	弥生時代・古墳時代出土遺物	
旧石器第Ⅱ期山上遺物（接合資料Ⅱ-㉓構成剥片）	（2号堅穴住居跡・2号土坑）	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉔構成剥片）	図版24	200
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉕構成剥片）	弥生時代・古墳時代山上遺物	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉖構成剥片）	（9号堅穴住居跡）	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉗構成剥片）	図版25	201
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉘構成剥片）	弥生時代・古墳時代出土遺物	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉙構成剥片）	（9号堅穴住居跡）	
図版15	図版26	202
旧石器第Ⅱ期山上遺物（接合資料Ⅱ-㉚）	弥生時代・古墳時代出土遺物	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉛構成剥片）	（9号・1号堅穴住居跡）	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉜構成剥片）	図版27	203
旧石器第Ⅱ期出土遺物（251～255）	弥生時代・古墳時代出土遺物	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（256～262）	（1号堅穴住居跡）	
図版16	図版28	204
旧石器第Ⅱ期山上遺物（接合資料Ⅱ-㉝）	弥生時代・古墳時代出土遺物	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉞構成剥片）	（1号堅穴住居跡）	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉟構成剥片）	図版29	205
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉟構成剥片）	弥生時代・古墳時代山上遺物	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉟構成剥片）	（1号堅穴住居跡）	
図版17	図版30	206
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉟）	弥生時代・古墳時代出土遺物	
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉟構成剥片）	（3号堅穴住居跡）	
旧石器第Ⅱ期山上遺物（接合資料Ⅱ-㉟）	図版31	207
旧石器第Ⅱ期出土遺物（接合資料Ⅱ-㉟構成剥片）	弥生時代・古墳時代出土遺物	
旧石器第Ⅱ期山上遺物（263～284）	（3号堅穴住居跡）	
旧石器第Ⅱ期山上遺物（285～287）	図版32	208
縄文時代早期出土遺物（288～290）	弥生時代・古墳時代出土遺物	
縄文時代早期出土遺物（291～299）	（4号堅穴住居跡）	
図版18		
旧石器第Ⅱ期出土遺物（283～284）		
旧石器第Ⅱ期山上遺物（285～287）		
縄文時代早期出土遺物（288～290）		
縄文時代早期出土遺物（291～299）		
図版19		
弥生時代・古墳時代出土遺物		
（5号堅穴住居跡）		

図版33	209	図版37	213
弥生時代・古墳時代出土遺物 (10号・11号堅穴住居跡)		弥生時代・古墳時代出土遺物 (4号土坑)	
図版34	210	図版38	214
弥生時代・古墳時代出土遺物 (11号堅穴住居跡)		弥生時代・古墳時代出土遺物 (4号土坑)	
図版35	211	図版39	215
弥生時代・古墳時代出土遺物 (12号堅穴住居跡)		弥生時代・古墳時代出土遺物 (3号土坑)	
図版36	212	図版40	216
弥生時代・古墳時代出土遺物 (12号堅穴住居跡・4号土坑)		弥生時代・古墳時代出土遺物 (1号土坑・6号堅穴住居跡・包含層・鉄製品)	

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

一般国道218号・北方延岡道路整備事業は、宮崎県北地域への高速交通サービスを提供し、地域活性化に寄与することを目的として、建設省九州地方整備局延岡工事事務所（現国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所）が平成8年度に高規格道路（延岡道路・北方延岡道路）を事業化した。

宮崎県教育委員会は、平成6年度に国の補助を受けて延岡市～西都市周辺を対象とした詳細分布調査を実施し、この成果を踏まえ、同事業による埋蔵文化財への影響や保護の方法について協議を開始した。以来、現在も同事業に伴う協議・調査を継続している。この協議を基に工事によって影響を受ける埋蔵文化財位置の試掘調査を実施した結果、今回報告する黒仁田遺跡において、古墳時代の遺構・遺物が確認され、記録保存の措置をとることとなった。

本充掘調査は、調査対象区12,000m²を平成18年5月8日～平成18年12月8日の約7か月間（調査実施日138日）実施した。また、今回報告する黒仁田遺跡における遺物整理作業と報告書作成作業を、平成19年度から平成20年度にかけて宮崎県埋蔵文化財センターで実施した。

第2節 調査の組織

黒仁田遺跡の発掘調査及び整理・報告書作成作業は下記の組織で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会 調査機関：宮崎県埋蔵文化財センター

(平成18年度)		(平成20年度)	
黒仁田遺跡発掘調査		黒仁田遺跡整理作業・報告書刊行	
所長	清野 勉	所長	福永 展幸
副所長	加藤 恒郎	副所長兼總務課長	長友 英詞
副所長兼調査第二課長	岩水 哲夫	總務課總務担当主幹	高山 正信
總務課長	宮越 尊	調査第二課長	石川 悅雄
總務課總務担当主幹	高山 正信	調査第二課調査第四担当主幹	近藤 協
調査第二課調査第四担当主幹	近藤 協	同調査第四担当主査	平山十四郎
同調査金第四担当主査	平山十四郎	事業調整担当主査	飯田 博之（文化財課）
同調査第四担当主査	黒木 俊彦		
同調査第四担当主査	橋本 恵二		
同調査第四担当主査	古屋 美樹		
事業調整担当主査	飯田 博之		
	（文化財課）		

(平成19年度)	
黒仁田遺跡整理作業	
所長	清野 勉
副所長	加藤 恒郎
總務課長	宮越 尊
總務課總務担当主幹	高山 正信
調査第二課長	石川 悅雄
調査第二課調査第四担当主幹	近藤 協
同調査第四担当主査	平山十四郎
事業調整担当主査	飯田 博之（文化財課）

第3節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

黒仁田遺跡は、宮崎県北部、延岡市北方町字子に所在する。延岡市は、九州山地や大崩・祖母・傾山系に源を発する五ヶ瀬川、北川、祝子川の下流域である。これら河川の沖積平野を中心に周辺山地や丘陵地より構成されている。五ヶ瀬川流域には、阿蘇火碎流堆積物の堆積とその浸食によって形成された河岸段丘と台地や丘陵地が分布している。本遺跡は、延岡市南方地区、旧北方町との隣接側にあり、五ヶ瀬川流域に広く分布する阿蘇火碎流堆積物が、五ヶ瀬川本流やその支流の曾木川によって浸食されできた丘陵上に位置している。そのなだらかな丘陵は標高約66mであり、丘陵間には狭小な谷部が、基底部には湧水が存在する。

2 歴史的環境

遺跡の立地する延岡市には、黒仁田遺跡のほか多くの遺跡が分布している。

旧石器時代では、矢野原遺跡、岩土原遺跡、藤山遺跡、畠下遺跡、赤木遺跡、吉野遺跡等、始良Tn火山灰層（以下、AT）下位で石器群の確認例がある。AT上位の石器群としては、切出形ナイフ形石器や剥片尖頭器を中心とする一群と細石器を中心とする一群の2つの文化層が確認されている赤木遺跡をはじめ、ナイフ形石器や剥片尖頭器、細石器などが出土している畠下遺跡等、林遺跡や黒土田遺跡、地蔵ヶ森遺跡、吉野遺跡、下曾木慈眼寺塗苑遺跡、片田遺跡等がある。岩土原遺跡では、半船底型細石核と陰帯上に爪形文を施した土器が共伴して出土している。

縄文時代では、矢野原遺跡、地蔵ヶ森遺跡、山田遺跡等がある。地蔵ヶ森遺跡では、押型文土器と窓ノ神式土器の時期の集石遺構8基が確認されている。また、山田遺跡では、集石遺構や炉穴群、陥し穴状遺構、円形配石遺構などが確認され、集落構成の理解ができる事例の一つである。

弥生時代では、弥生時代前期から中期については様相が不明瞭である。後期では、貝の畑遺跡で堅穴住居跡が確認されている。延岡城内遺跡や曾木野遺跡では、後期の水田跡が確認されている。また、瀬戸内地方の交流を示す資料として、三須町出土の二段矢羽透かしのある尚坏が有名であり、恒富本村遺跡や曾木野遺跡でも瀬戸内系上器が出土している。

弥生時代後期末から古墳時代後期では、中尾原遺跡をはじめ、藤山遺跡、畠下遺跡、地蔵ヶ森遺跡、山口遺跡第2地点、林遺跡、野田町八田遺跡等、集落の確認例が増加する。そのうち山口遺跡第2地点では網見川左岸の微高地に弥生時代後期から古墳時代中後期の住居跡が約30軒確認されており、64軒の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑等、大規模集落が確認されている中尾原遺跡や堅穴住居跡6軒のうち1軒から小縫治跡と考えられる遺構が確認されている畠下遺跡と、同流域上に展開するこれらの遺跡間の関連性が注目される。藤山遺跡では、古墳時代の堅穴住居跡が1軒確認され、その一角から磨製石鎌の木製品が15個程確認され、工房の可能性が指摘されている。また、南方古墳群をはじめ北方村古墳、延岡古墳群等、数多くの古墳があり、国指定・県指定史跡になっている。

古代から中世では、苅田窯跡があり、9世紀から10世紀前半にかけて須恵器が生産されている。また、1-2軒の掘立柱建物跡や土坑が確認されている畠下遺跡や大型掘立柱建物跡群や上墳墓、五輪塔等の確認された林遺跡等がある。

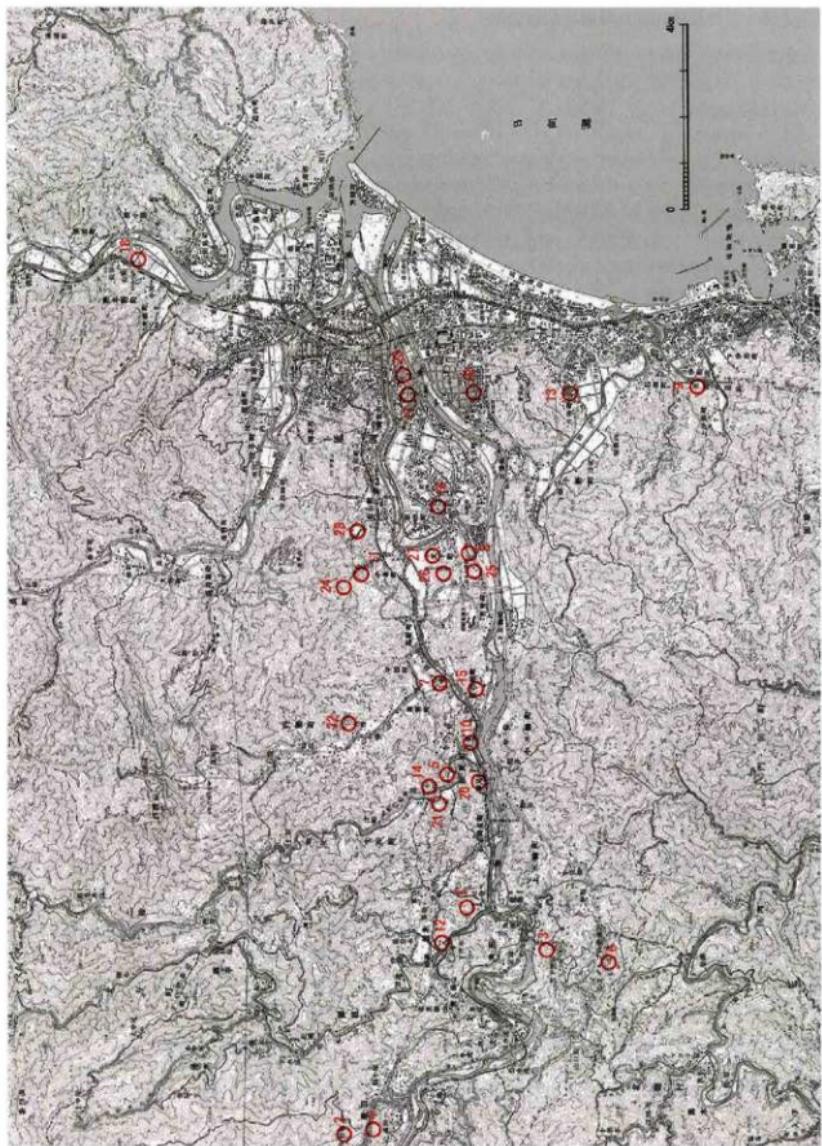
近世にはいると延岡城（延岡城内遺跡）や城下町（延岡城下町遺跡）、窯跡（小峰窯跡）等が確認されている。延岡城については、初代延岡藩主高橋元種が松尾城から中州内の丘陵地に築城したもので、この時に城下町の整備にも着手している。やがて高橋氏から有馬氏、三浦氏、牧野氏を経て、内藤氏の藩政に至り、安定期を迎えることとなる。

3 延岡道路・北方延岡道路建設事業関連遺跡

国土交通省は平成6年度から北川町大字長井字上迫～延岡市伊形町間の全長20.6kmの国道10号延岡道路の事業に着手し、それに伴い宮崎県埋蔵文化財センターは、林遺跡、吉野第2遺跡、今井野第2遺跡、天下城山遺跡の発掘調査を行った。林遺跡は、平成9～12年度の4か年調査を行い、旧石器時代から近世にかけての幅広い時代の遺構・遺物が検出された。吉野第2遺跡は、平成12・13・15年度に調査を行い、旧石器時代から近世にかけての幅広い時代の遺構・遺物が検出された。天下城山遺跡は中世山城に關連する遺構・遺物が検出された。平成8年度からは、北方町大字歳田から延岡市天下町の全長11.0kmの国道218号北方延岡道路事業にも着手した。それに伴い、山田遺跡、山口遺跡第2地点、野門遺跡、赤木遺跡第8地点の発掘調査を行った。山田遺跡は主に旧石器時代や縄文時代早期の遺構や遺物が、山口遺跡第2地点は弥生時代後期から古墳時代中後期にかけての集落跡が、野門遺跡は縄文時代から古代にかけての幅広い時代の遺構・遺物が、赤木遺跡第8地点（第二次・三次調査）は始良Tn火山灰屑を挟む上下位において、旧石器時代の遺構・遺物が検出された。

【参考文献】

- 北方町教育委員会1990「笠下遺跡」「北方町文化財報告書第1集」
北方町教育委員会2004「町内遺跡詳細分布調査報告書」『北方町文化財報告書第23集』
延岡市教育委員会1978「野田町八洲遺跡」
延岡市教育委員会1987「延岡市の歴史的環境・赤木遺跡・多々羅遺跡」『延岡市文化財調査報告書第3集』
延岡市教育委員会1992「差木野遺跡」『延岡市文化財調査報告書第9集』
延岡市教育委員会1991「上南方地区遺跡 中尾原遺跡 山口遺跡」『延岡市文化財調査報告書第6集』
延岡市教育委員会1992「上南方地区遺跡 中尾原遺跡 煙山遺跡」『延岡市文化財調査報告書第8集』
延岡市教育委員会1996「市内遺跡詳細分布調査報告書」『延岡市文化財調査報告書第16集』
延岡市教育委員会2001「古野遺跡（第4次）、吉野遺跡（第6次）、延岡古墳群第16号墳、多々羅第1遺跡、新宮遺跡、吉野遺跡（第7次）」『延岡市文化財調査報告書第24集』
延岡市教育委員会2002「延岡城内遺跡Ⅰ」『延岡市文化財調査報告書第26集』
鈴木重治1973「宮崎県岩土原遺跡の調査—土器伴出石器文化の一例—」『石器時代』第10号 石器時代文化研究会
宮崎県教育委員会1995「打畠遺跡、早日波遺跡、矢野原遺跡、薩田遺跡」一般国道218号椎畠バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
宮崎県教育委員会1987「林遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第30集』
宮崎県教育委員会1988「地蔵ヶ森遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第31集』
宮崎県教育委員会1990「林遺跡」『一般国道10号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書』
宮崎県教育委員会1992「延岡市苅田窯遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第9集』
宮崎県埋蔵文化財センター2005「山口遺跡第2地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第99集』
宮崎県埋蔵文化財センター2006「今井野第2遺跡・天下城山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第135集』
宮崎県埋蔵文化財センター2006「野門遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第136集』
宮崎県埋蔵文化財センター2007「赤木遺跡第8地点（第二次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第145集』
宮崎県埋蔵文化財センター2007「川上遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集』
宮崎県埋蔵文化財センター2007「吉野第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第155集』
宮崎県埋蔵文化財センター2008「赤木遺跡第8地点（第三次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第165集』
宮崎県埋蔵文化財センター2008「林遺跡II」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第174集』



1. 鹿仁田邊跡 2. 天野原邊跡 3. 岩十原邊跡 4. 藤田邊跡 5. 煙川邊跡 6. 宮下邊跡 7. 紫木邊跡 8. 山野邊跡 9. 林邊跡 10. 黑土田邊跡 11. 地藏ヶ岳邊跡
 12. 下竹不老眼寺臺邊跡 13. 片田邊跡 14. 山田邊跡 15. 只の姫邊跡 16. 新田町八田邊跡 17. 走間坂内邊跡 18. 新木野邊跡 19. 仰高木村邊跡
 20. 中尾原邊跡 21. 山口邊跡第2地点 22. 寺田空跡 23. 遠明坂下町邊跡 24. 小坪空跡 25. 吉野原2邊跡 26. 今井野第2邊跡 27. 天下坂山邊跡 28. 新門邊跡

第1図 延岡市周辺邊跡分布図 (S=1/100,000)

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の経過

調査対象区は北方延岡道路建設部分である約12,000m²であり、平成18年5月8日より調査を開始した。文化財課の試掘では、基本土層第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面に古墳時代の遺構・遺物が確認されていた。そこで、重機を使って第Ⅰ～Ⅱ層の除去を行った。排土置き場等の関係で、調査区の3分の2程の除去を行った。重機による除去は2週間程の日数を要した。第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰層）は、ほとんどのところで確認できたが、調査区南側や東側では、耕作により削平されていた。

この段階で国土地標に準じて東側から西にA～O、北から南に1～9の10m×10mのグリッドを設定し、人力による作業を開始した。

調査区西側から精査を行い、はじめに竪穴住居跡の黒色のにじみを検出した。それ以後、全部で7軒の住居跡と1基の土坑を検出した。

6月に入り新たに1軒の住居跡と3基の土坑を検出した。さらに、多数のピットも検出した。第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面での精査から、竪穴住居跡8軒、土坑4基、ピット群の遺構を確定し、遺構掘削を開始していった。

7月は、第Ⅲ層上面検出の各遺構掘削に併行して、遺構・遺物の確認されなかった調査区南西部分から、縄文時代早期の確認として、第Ⅲ～V層の掘削を開始した。

8月は、削平により鬼界アカホヤ火山灰層の残存していない調査区東側部分の黒褐色土に覆われた部分の精査を行った。杉や竹の切り株、密生する竹の地下茎等が多数存在し、作業は難航したが、その部分から、新たに2軒の住居跡を検出した。この2軒の住居跡は、埋土と堆積土の判別が容易ではなかった。縄文時代早期の確認（第Ⅲ～V層掘削）では、石器等が山上した他、散発のまとまりが3か所見られ、そのうちの1か所の下位より、集石遺構を1基検出した。しかし、点数は極めて少なく、密度は散漫としていた。下旬には、1回日の空撮を行った。その後、重機を使って排土を移動し、その部分の第Ⅰ～Ⅱ層の除去を行った。

9月は、排土を移動した部分から、新たに2軒の住居跡を検出した。第Ⅲ層上面検出の各遺構掘削に併行して、調査区南側部分から、グリッドごとにL字トレーナーを設定し、旧石器時代の確認として、第Ⅲ～IX層の掘削を開始した。9月10日（日）には、現地説明会を行い、53名の参加があった。

10月は、第Ⅲ層上面検出の各遺構掘削を継続していった。また、旧石器時代の確認（第Ⅲ～IX層掘削）トレーナーで剥片が数点出土した部分を広げ、掘削を行っていった。下旬には、2回目の空撮を行った。その後、トレーナーで剥片等がまとまって確認された調査区東側部分に重機を投入し、第Ⅲ～V層の掘削を行った。

11月は、第Ⅲ層上面検出の住居跡の調査と併行して、旧石器時代の掘削も行った。重機で掘削した部分の各グリッドに5m×5mのトレーナーを設定し、第VI～IX層までの掘削を行った。剥片等がまとまって確認されれば、周辺まで範囲を広げるという方法で調査を行っていった。

12月は、旧石器時代の掘削を行った。剥片等は、第VI層上部からの出土がほとんどで、一部第VII層中からも出土した。最終的には、一部第XII層上部まで掘削を行ったが、遺物は、第VI・VII層以外からは確認されなかつた。

約7か月にわたる調査の中、気温が40度を超す日も幾度かあったが、作業員のけが等もなく平成18年12月8日に無事調査を終了した。



第2図 黒仁田遺跡周辺地形図 (S=1/1,500)

第2節 基本層序

黒仁田遺跡で確認された層序は12層である。第VII層から第X層は、土質が硬質で安定した堆積ではなく混交している。径2~3mmの白色鉱物粒を含むもの、始良Tn火山灰がブロック状に堆積しているもの、径1~2mmの円礫が混じるもので細分した。以下層ごとに堆積状況を記述する。

第I層 表土(10YR1.7/1)…現地表面の表土。

第II層 黒色土(10YR2/1)…やわらかくしまりがない。

第III層 黄橙色火山灰土(10YR7/8)…鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah)。調査区の3分の2程に堆積しており、Hラインより東は消滅している。また一部耕作により削平されている。

第IV層 黒色土(10YR2/2)…やや粘質がある。

第V層 黒褐色土(10YR2/3)…第VI層への漸移層。

第VI層 暗褐色土(10YR3/4)…粘性がある。第V層よりやわらかい。

第VII層 暗褐色土(7.5YR4/1)…粘性がある。第VI層よりやわらかい。

第VIII層 暗褐色土(10YR3/3)…やや砂質を帯びる。硬質でブロック状に割れる。径2~3mmの白色鉱物粒を全体に含んでいる。

第IX層 黑褐色土(10YR3/1)…始良Tn火山灰層(AT)がブロック状に混じる。硬質でブロック状に割れる。

第X層 黑褐色土(10YR2/3)…径1~2mmの円礫が混じる。硬質でブロック状に割れる。

第XI層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)…第X層への漸移層。

第XII層 黄褐色粘質土(10YR5/8)…粘性が非常にあり、保水力がある。



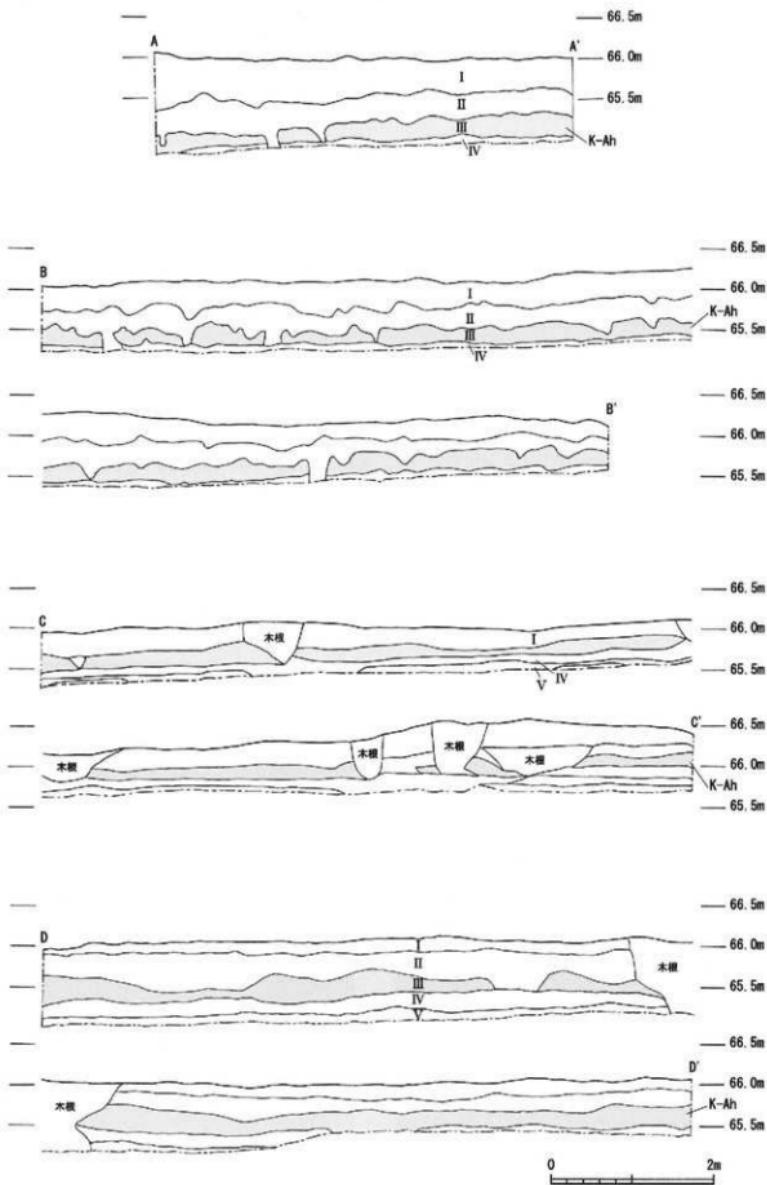
土層堆積状況①

第I層～第IX層：A1・2グリッド西側< E～E' >

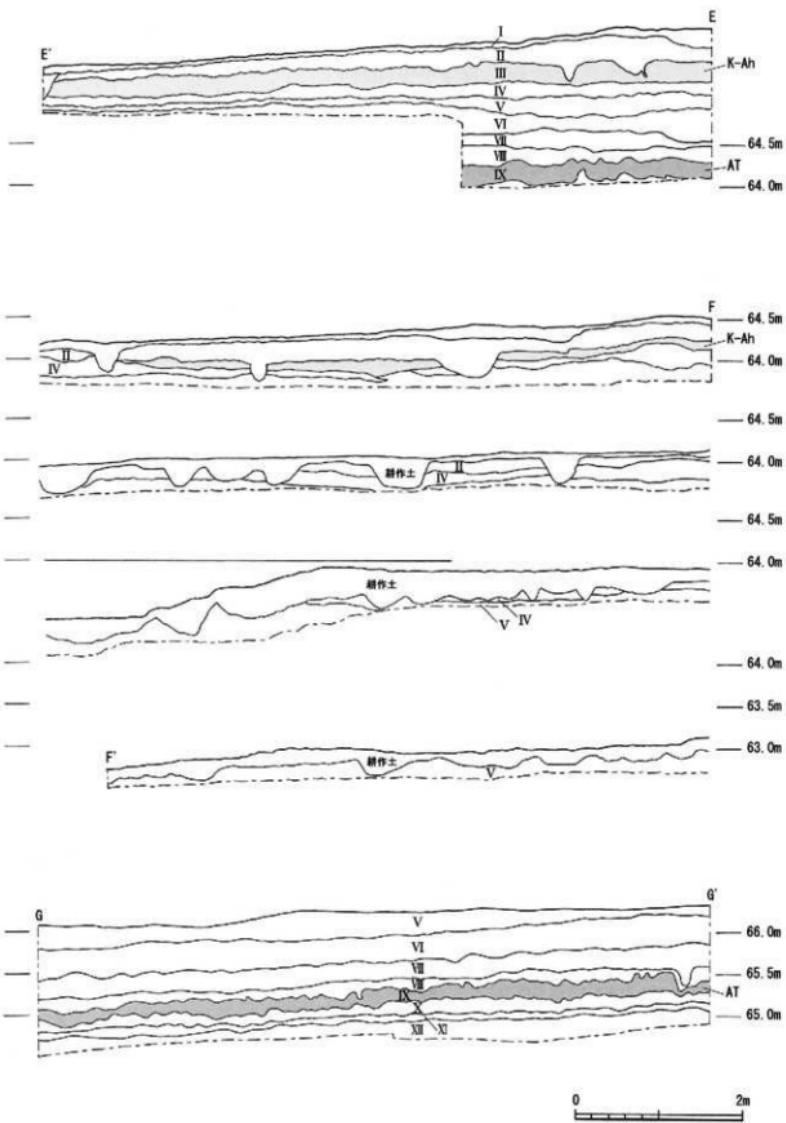


土層堆積状況②

第V層～第XII層：J3グリッド西側< G～G' >



第3図 土層断面図1 (S=1/60)



第4図 土層断面図2 (S=1/60)

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 旧石器時代の調査（第5～67図）

旧石器時代の調査は、調査区の各グリッドにL字型、または5m×5mのトレンチを設定し、これらのうちを第IX層まで掘削していった（第5図）。トレンチ内に剥片等がまとまって確認されれば、トレンチ外周辺まで範囲を広げるという方法で調査を行っていった。その結果、調査区の中央より東側に遺物の集中区が確認できた。遺物は、VII層中部とVI層上部それぞれに出土レベルのピークがある。以上のことから、同時代を大きく2時期に設定した。第Ⅰ期は、VII層中部に遺物が散漫に分布している。遺構は確認できなかつた。第Ⅱ期はVI層上部に遺物が集中し、遺構は土坑を1基、調査区南東側1.5グリッド部分において検出した。

1 第Ⅰ期（VII層）の調査（第5～9図）

第Ⅰ期は、VII層中部に遺物が分布している。調査区南東部K6グリッド付近、調査区東部N5グリッド付近の2か所を中心にして散漫な状態で出土した（第5図）。

(1) 出土石器（第6～9図—1～11）

遺物は合計72点を確認した。器種別の内訳は、ナイフ形石器2点、剥片尖頭器2点、スクレイバー1点、その他は剥片類である。石材別に見ると、流紋岩61点、ホルンフェルス11点である。なお、流紋岩は色調で肉眼分類でき、白色系、暗灰色系、黒色系の3系統に分類した。しかし、接合作業を試みた結果、白色系と暗灰色系で接合するなど、別系統に分類したものでも接合しており、分類はあまり意味を持たないと考えた。そこで、一括して流紋岩と記述する（第Ⅱ期も同様）。また、第Ⅰ期の特徴的な石器は全て流紋岩製石器である為、ここでは流紋岩製石器のみ図化している。

流紋岩製石器

<単体資料>

ナイフ形石器 2点（第6図—1・2）

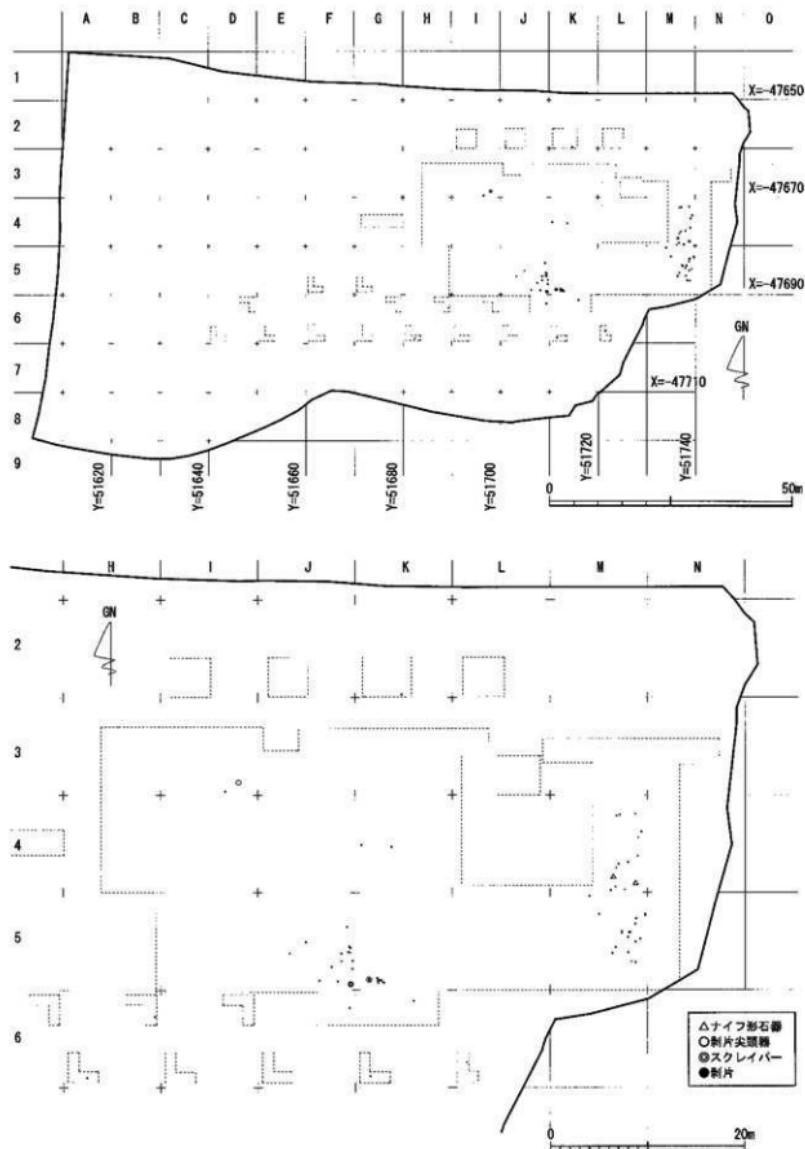
1は、分厚い幅広剥片を素材とする。背面の剥離面は腹面のそれとは逆方向であることから、打面転移の行われた石核からの産物であることが想定される。右側縁の全体（長側縁）、左側縁下部（短側縁）および下端に急角度（70～80°）のプランティング加工が施されている。短側縁と刃部とをなす角度は90°に近く、ノッチ状である。加工のほとんどが腹面側からだが、基部付近では背面側からの加工も施されている。いわゆる狸谷型ナイフ形石器（松藤1992・岩谷1998）に類似する。

2は、分厚い幅広剥片を素材とする。背面の剥離面は腹面のそれとは逆方向であることから、打面転移の行われた石核からの産物であることが想定される。素材剥片の打面を除去するように、腹面側から右側縁に急角度（80°前後）のプランティング加工が施されている。短側縁は欠損しており、全体形は不明だが、素材の利用方法や加工状況から、1と同様、いわゆる狸谷型ナイフ形石器に類似する。

剥片尖頭器 2点（第6図—3・4）

3は、縦長剥片を素材とする。背面構成から、連続的な縦長剥片剥離が行われた石核からの産物であることが想定される。打面部を基部に設定し、両側縁にプランティング加工が施されている。プランティングによる抉りは認められない。打面は欠損している。

4は、縦長剥片を素材とする。背面構成から、連続的な縦長剥片剥離が行われた石核からの産物であることが想定される。打面部を基部に設定し、両側縁にプランティング加工が施されている。プランティングによる抉りは左側縁に若干認められるが、右側縁には認められない。



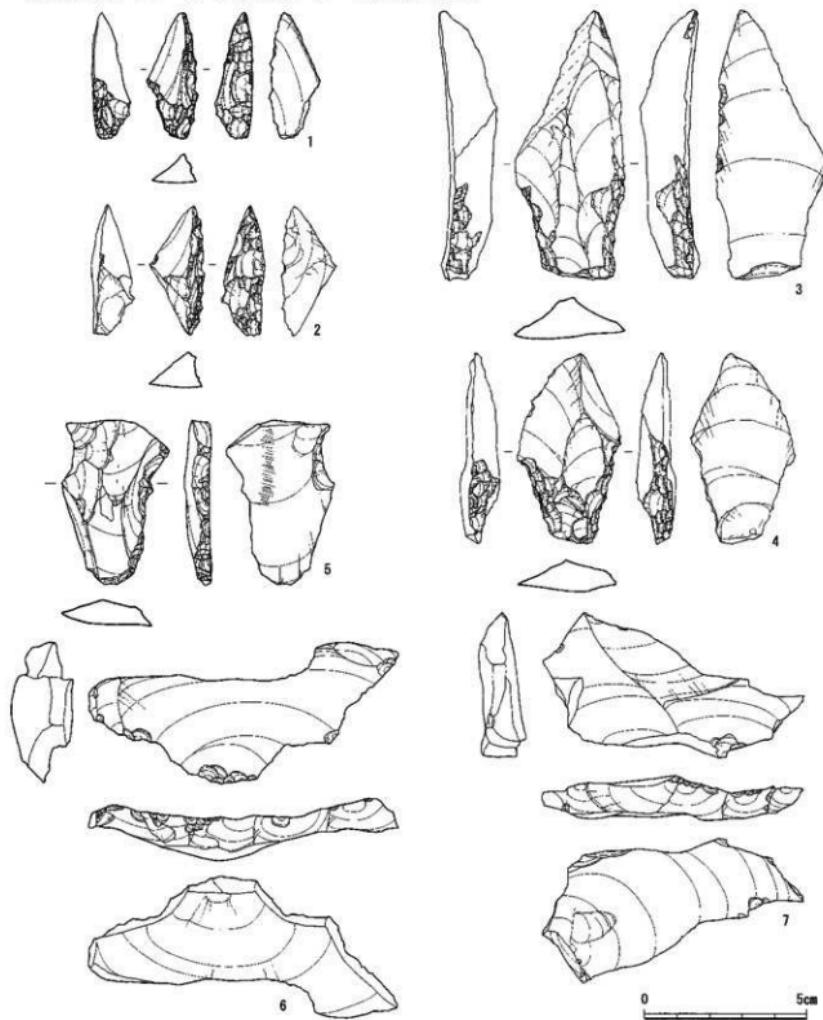
第5図 旧石器時代第I期検出状況図 (S=1/1,000、1/500)

スクレイパー 1点（第6図-5）

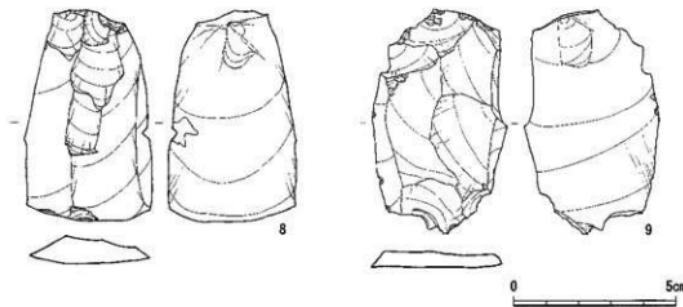
縦長剥片を素材とする。背面構成から、連続的な縦長剥片剥離が行われた石核からの産物であることが想定される。右側縁部から下端部にかけて二次加工が施されている。右側縁部の刃部角は40~55°とどまるものに対して、下端部では70°以上に及ぶ。

剥片 4点（第6・7図 6~9）

打面再生剥片（6・7）と縦長剥片（8・9）が見られる。



第6図 旧石器時代第1期石器実測図1 (S=2/3)



第7図 旧石器時代第I期石器実測図2 (S=2/3)

<接合資料>

接合作業を試みた結果、接合資料は4例確認され、そのうち1例の図化を行った。なお、以下の接合資料の記述において、矢印(→)は剥離接合を示している。

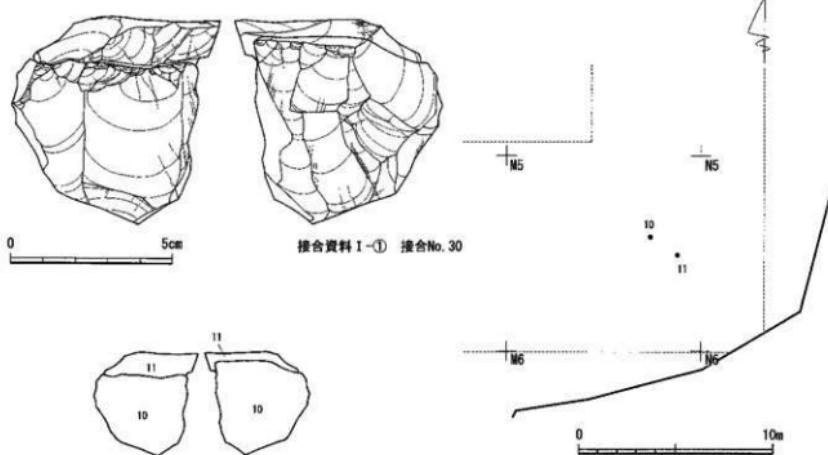
接合資料I-① 接合No.30 (第8・9図—10・11)

作業内容：縦長剥片製作

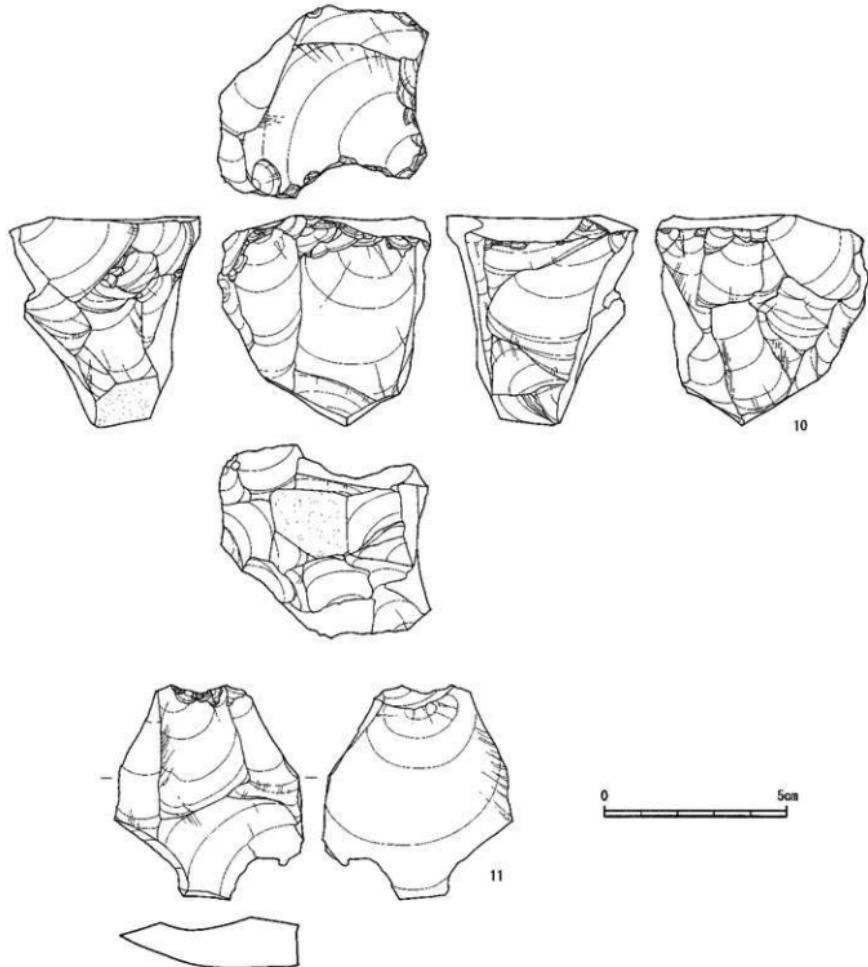
剥片作業の復元：[10→11]

剥離面の切り合い関係の観察によると、まず打面が形成され、その打面から縦長剥片剥離が行われる。その後、打面が入念に整形され、縦長剥片が剥離される。さらに打面再生(11)が行われ、再び縦長剥片が剥離される。残核形態は角錐状である。

分布：調査区南側に分布。両者の距離は1.0m程しか離れていない。



第8図 旧石器時代第I期石器実測図3 (S=2/3) 接合資料I-①分布図 (S=1/250)



第9図 旧石器時代第Ⅰ期石器実測図4 (S=2/3)

2 第II期（VI層）の調査（第10～67図）

第II期は、VI層上部を主体とした細石刃石器群で、一部上下層に遊離した状態で遺物が出土している（第11図）。遺構は、土坑1基（第10図）を検出した。

（1）土坑（第10図）

1号土坑は、焼土を伴う土坑である。調査区東部L5グリッドで検出し、検出面はVI層上部である。長径1.0m、短径0.7m、深さ0.2mで、楕円形に近い不定形である。埋土は、焼土粒を含む赤褐色土が主である。遺物は出土していない。しかし、遺物との出土高低差もさほど違いないことから、第II期に帰属するものと考えられる。

（2）出土石器（第13～67図—12～287）

第II期の石器は、調査区南東部のK4グリッドとJ4～5グリッドの2か所に密集して分布している。これをA・Bブロックと呼称する。出土石器量はそれより少ないものの、この他にも数か所のブロックが認められる。これらを調査区南東側から順にC・D・E・Fブロックと呼称する（第12図）。

遺物は合計793点を確認した。器種別の内訳は、細石刃9点、細石刃核25点、スクレイバー12点、敲石2点、磨石1点、その他は剥片類である。

石材別に見ると、剥片石器については大きく流紋岩製と黒曜石製とに分けられ、前者が720点、後者が40点と前者のほうが主体となる。

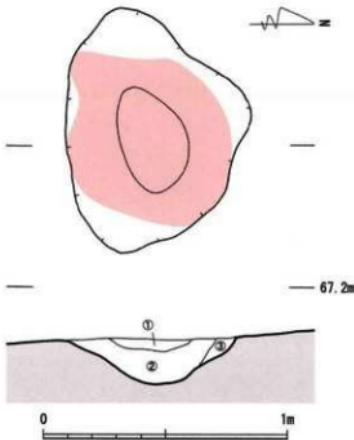
黒曜石は、螢光X線分析の黒曜石産地同定結果（第IV章第1節）から、同定可能な試料39点を産地別に分けると、大きく桑ノ木津留産と腰岳系に分けられ、前者が25点、後者が11点となる。この他の3点が現時点では産地不明に該当する元素比を示しており、未知の産地由来の黒曜石である可能性がある。

その他の石材製石器として、敲石にはチャート製のものと礫岩製のものがあり、磨石は砂岩製である。

接合作業を試みた結果、接合資料が76例確認され、そのうち19例の図化を行った。これを石材別にみると、流紋岩69例、黒曜石5例、ホルンフェルス2例である。これらの接合状況はそれぞれ異なっている。すなわち、流紋岩には、10点以上の剥片が接合し、大きさも拳大以上の大さきに復元されるものがあるのに対し、黒曜石やホルンフェルスには2点程が接合するもので、大きさも5.0cm以下という状況である。

なお、以下の接合資料の記述において、剥片剥離作業の復元経過を次のように示す。すなわち、矢印（→）は剥離接合を示し、プラス（+）は折れ接合を示す。また、接合資料の中に欠落部分があり、それが残存する資料との関係の中で捉えられる場合、これを（○）として記述している。

以下、石材別に記述していく。



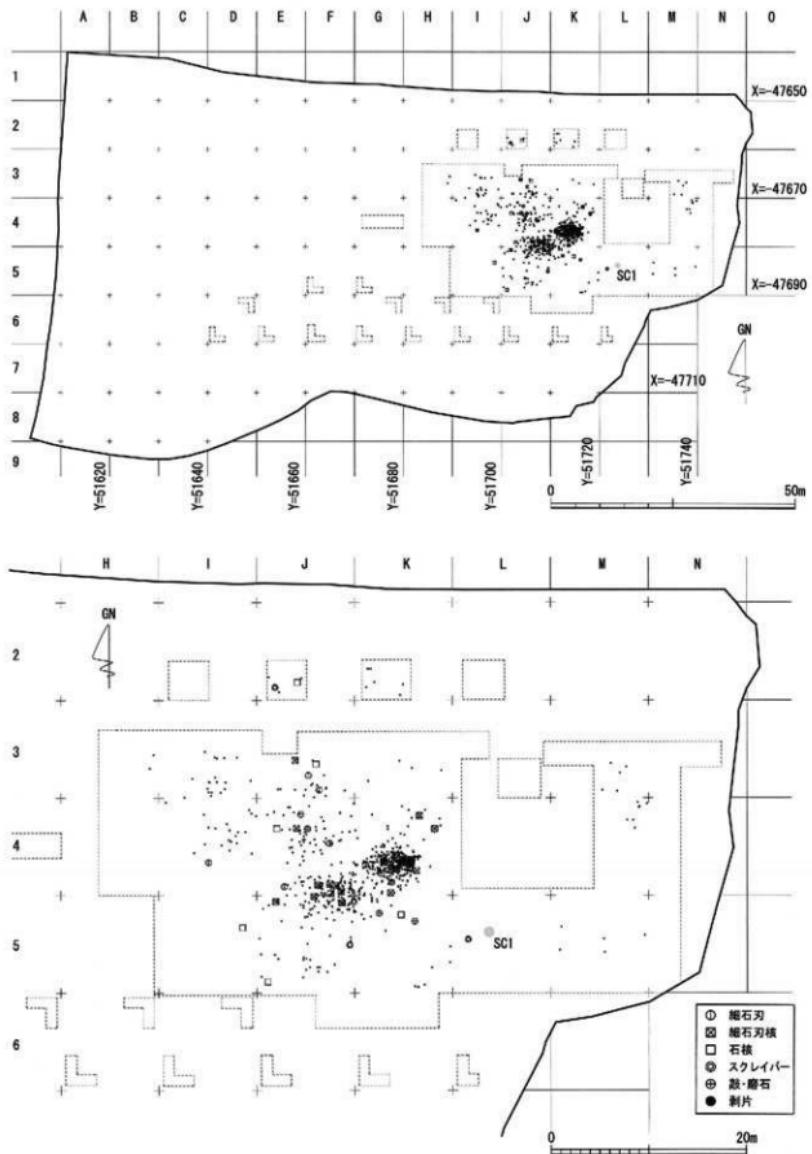
1号土坑土層記

①赤褐色土 (5M4/8) …径1mm以下の炭化粒を含む。

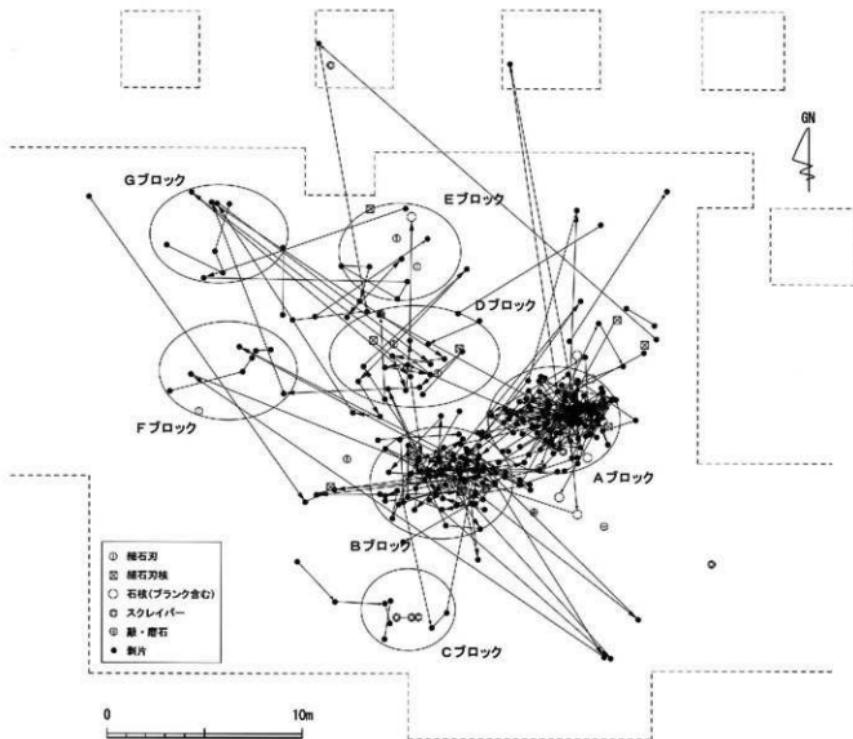
②明赤褐色土 (2.5M4/8) …径5mm程の焼土ブロックを多量に含む。

③に赤褐色土 (5M4/4) …①と似ているが、炭化物粒を含む割合が少ない。

第10図 旧石器時代第II期1号土坑実測図 (S=1/20)



第11図 旧石器時代第Ⅱ期検出状況図 (S=1/1,000, 1/500)



第12図 旧石器時代第Ⅱ期主要遺物の分布と接合関係 ($S=1/250$)

流紋岩製石器

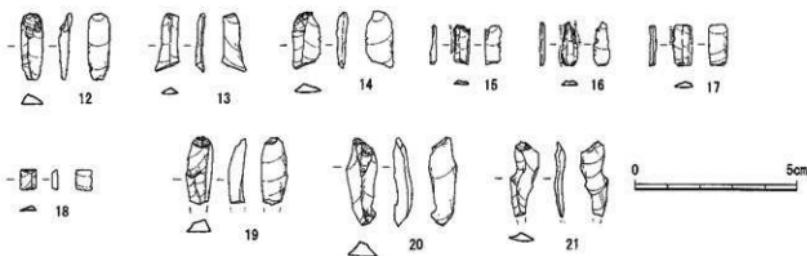
<単体資料>

細石刃 7点 (第13図—12~18)

部位別には、頭部が4点、中間部が3点である。13を除いて頭部には、頭部調整が認められる。全て單側面打面である。また16の両側辺、15・17の片側辺には、微小剥離痕が認められる。

細石刃様剥片 3点 (第13図—19~21)

形態的には細石刃に類似するが、厚みがあること(19・20)、直線的ではないこと(21)から、細石刃と呼べるものではない。調整剥片あるいは失敗品であると考えられる。



第13図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図1 (S-2/3)

細石刃核 8点 (第14・15図—22~29)

22は、厚みのある剥片を素材とする。素材剥片の一端に打撃が加えられ半割される。この時、主要剥離面が石核の側面に設定される。石核調整は右側面における調整が主体である。調整は細石刃核の打面からが中心だが、右側面では一部下(背)縁からの調整も認められる。打面上には側面からの打撃が加えられ、剥離痕が認められる。細石刃剥離は、両小口面で行われた可能性があるが、作業面aでの剥離作業が主体となる。作業面bでの細石刃剥離痕は明瞭ではないが、種々調整と考えられる細やかな調整痕が認められ、細石刃剥離が行われた可能性がある。

23は、厚みのある剥片あるいは分割標を素材とする。まず、打面形成が行われる。この打面はネガ面である。次いで行われる石核調整は、そのほとんどが、この打面からの打撃による。どちらの側面から先に行われたかは定かではない。両側面ともに石核の中央部分に大きな剥離面が認められる。この他に両側面において下縁調整が行われる。これと並行して打面上には、側面からの打撃による調整が施される。細石刃剥離は22と同様に両小口面で行われる。

24は、自然面のある石核から剥離された剥片を素材とする。素材剥片の背面側に打撃が加えられ、細石刃核の打面が形成される。打面には全く調整が施されていない。石核整形は、自然面を打面とした右側面および下面の形成である。さらに、右側面において細やかな調整が施される。細石刃剥離は小口面で行われ、7条の細石刃剥離痕が認められる。

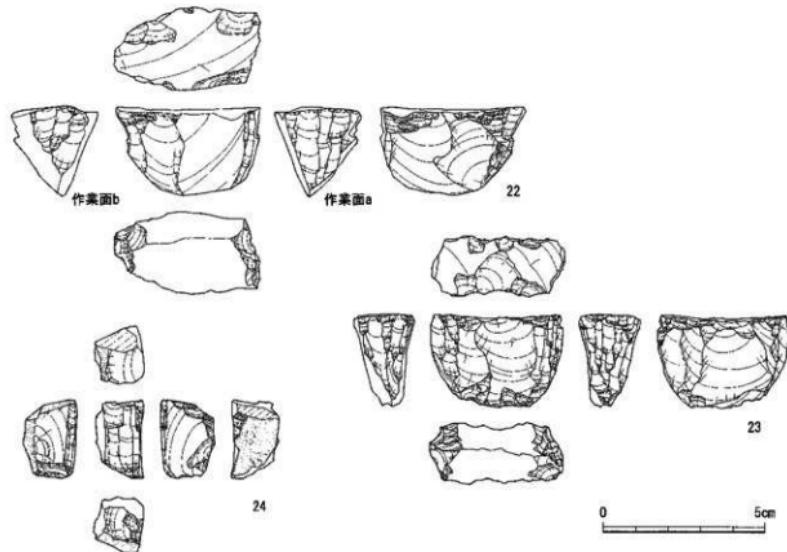
25は、板状の剥片を素材とする。この素材剥片を分割して打面が形成される。打面には全く調整が施されていない。石核調整は、打面からの打撃による右側面および左側面における下縁から背縁の調整である。調整は非常に細やかなものである。細石刃剥離は小口面で行われ、3条の細石刃剥離痕が認められる。

26は、2.0 cm 前後の厚みをもつ剥片を素材とする。素材剥片の剥離は、残核の背面を打面として行われている。この素材剥片の右側に打撃が加えられ、平坦面が形成される。これが将来の細石刃核打面である。打面には全く調整が施されていない。石核調整は、左側面における背線調整および側面調整、右側面における側面調整である。左側面には、作業面側からの剥離痕が認められることから、細石刃剥離に先立って種調整が介在している可能性がある。細石刃剥離は小口面側で行われ、5条の細石刃剥離痕が認められる。

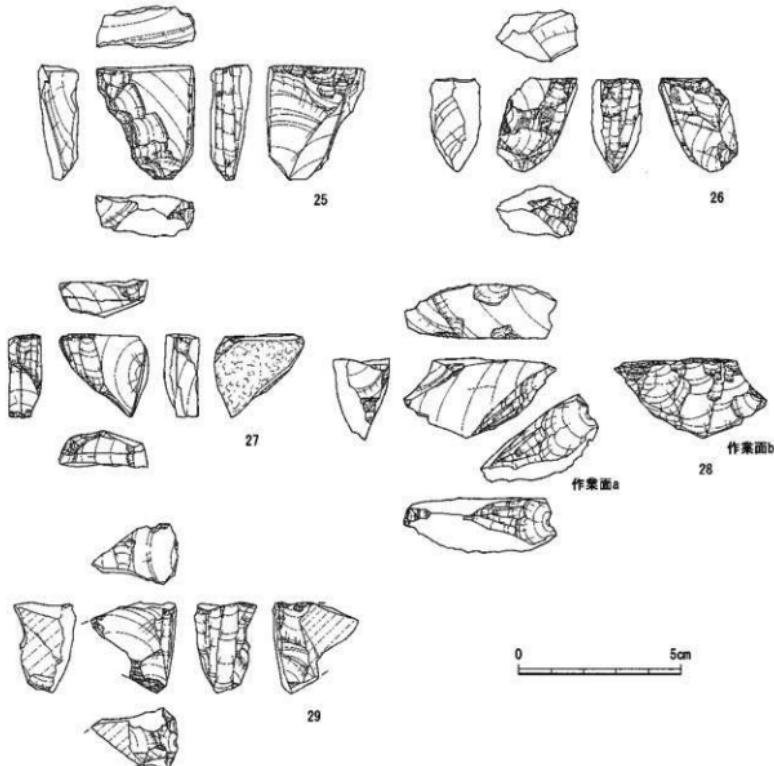
27は、直方体状の石核から剥離された薄手の剥片を素材とする。細石刃核の打面には、石核の右側面が利用され、素材剥片の主要剥離面が設定される。打面には全く調整が施されていない。細石刃剥離は、小口面から右側面側にかけて行われる。

28は、剥片を素材とする。この背面形態は不明である。素材剥片の背面側に打撃が加えられ、打面が形成される。打面にはいくつかの小さな剥離が認められるが、意図的なものかどうかは不明である。石核調整は右側面のみで行われる。全て細石刃核打面からの側面調整である。縦石刃剥離は両小口面で行われた可能性がある。1つは作業面aでの細石刃剥離で、5条の細石刃剥離痕が認められる。最終的には細石刃剥離痕の上部全体に広がる剥離が施される。剥離は細石刃剥離とは異なる強い打撃によるものだが、剥離痕が下端に抜けないため、作業面再生の失敗剥離と見なされる。もう一方の作業面bでは、細石刃剥離痕が明瞭ではない。剥離痕は短く下部がステップ状になっていることから、ヒンジ・フラクチャーによる失敗剥離と考えられる。

29は、おそらく厚みのある剥片あるいは分割礫を素材とする。打面は、作業面側から形成される。打面には全く調整が施されていない。石核整形は、両側面とともに下面からの側面調整が主体であり、右側面においてのみ細石刃核打面からの側面調整が施される。細石刃剥離は、残核においては小口面の一部で行われているが、石核背面が節理によって欠損しており、実態は不明である。



第14図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図2 (S=2/3)



第15図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図3 (S=2/3)

流紋岩製細石刃核単体資料の評価

素材の利用：剥片素材で、剥片の主要剥離面を側面に設定する。

打面の設定：单剥離面を打面に設定する。打面の加工痕はあるものの、細石刃剥離に直接関係するものではない。

石核の調整：細石刃剥離時と同様の打面から、側面調整が施される。側面調整の他に下縁調整や背縁調整が施される個体もある。正面形はV字状あるいは長方形状である。

作業面の設定：素材剥片の一端を作業面とする。基本的に打面転移は行われないが、短軸両端で細石刃剥離が行われるもの（22・23）や、異なる平坦面を打面とした細石刃剥離が見られるもの（28）がある。

細石刃核は、従来の分類でみれば全て船野型の特徴を備えるものである。ただし、23には下縁調整が、26には背縁調整が施されており、25には両方の調整が認められる。これらの特徴は、船野型というよりも福井型の特徴といえる。

スクレイパー 5点 (第16・17図-30~34)

30は、厚みのある剥片を素材とする。背面のほとんどは自然面に覆われている。剥片の左側縁部に連続的な二次加工が認められる。刃部角は40~50°である。

31は、縦長剥片を素材とする。剥片の左側縁部には、連続的な二次加工が認められる。刃部角は30~40°である。

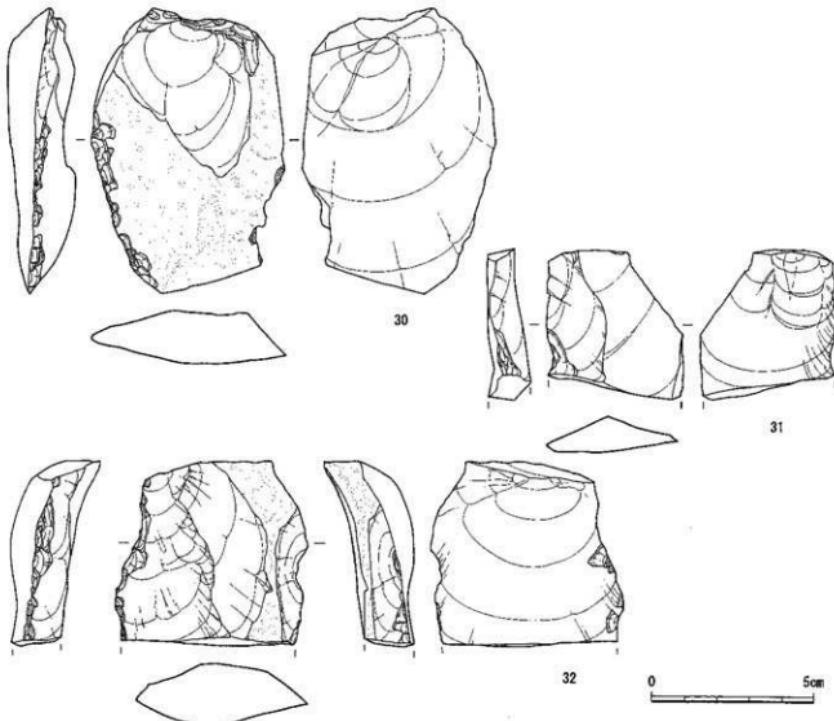
32は、分厚い縦長剥片を素材とする。単剥離打面をもち、連続的な縦長剥片剥離の行われた石核から剥離されたものであると想定される。背面右側には、自然面が残っている。両側縁には二次加工が施されているが、左側縁の方がより丁寧である。刃部角は左側縁で40~70°、右側縁で60~90°である。下半部は欠損している。

33は、縦長剥片を素材とする。剥片の右側縁、下部に連続的な二次加工が認められる。刃部角は右側縁で30~50°、下部で30~40°である。

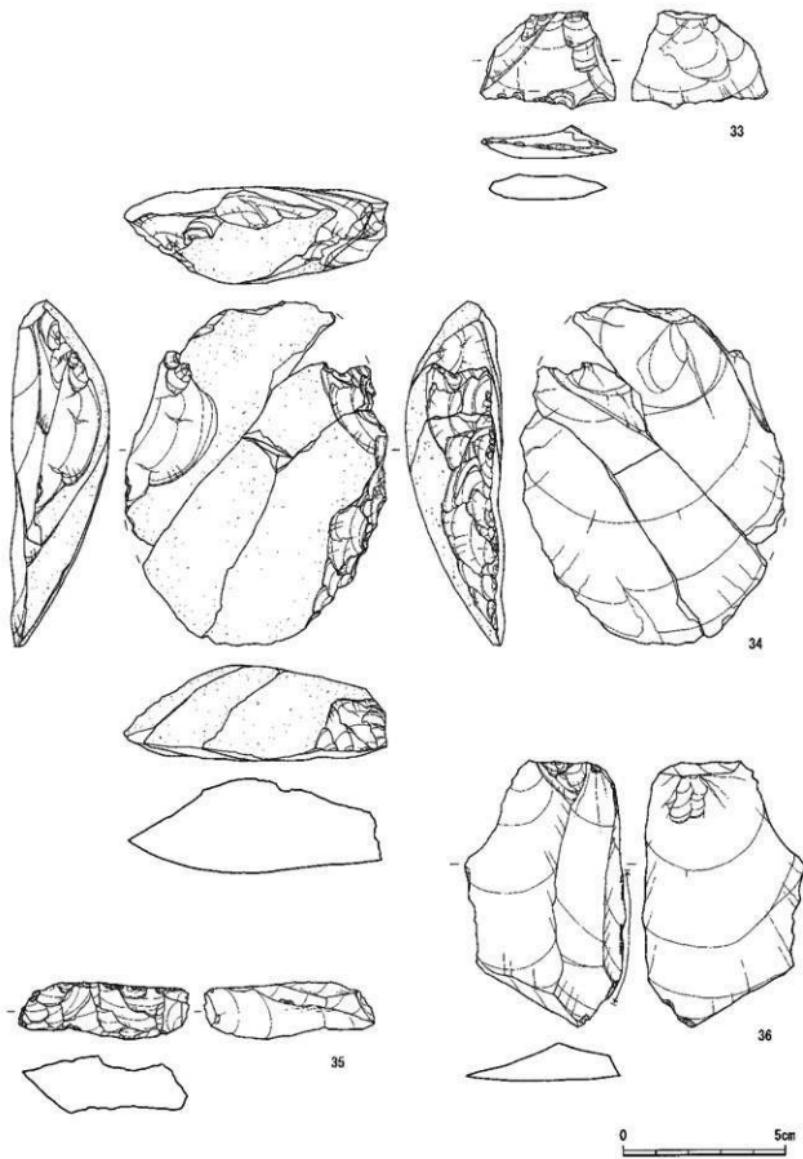
34は、円錐から剥離された大型の剥片を素材とする。背面のほとんどが自然面で構成され、打面は単剥離打面である。剥片の右側縁には、粗い二次加工が施されている。刃部角は50~80°で、下部ほど角度は浅い。欠損が激しく、4つの石片から構成されている。

剥片 2点 (第17図-35・36)

35は、調整剥片と考えられる剥片である。36は、縦長剥片素材で右側縁に微小剥離痕が認められる。



第16図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図4 (S=2/3)



第17図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 5 (S=2/3)

<接合資料>

接合資料 II-① 接合No.7 (第18・19図—37~40)

作業内容：細石刃製作

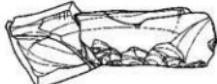
剥離作業の復元： [37→38+39→40]

素材は、板状の剥片である。素材剥片の背面と腹面で同一の方向からの剥離面であることから、同一打面からの連続的な剥片剥離の行われた石核の存在が予想される。素材剥片の背面側に打撃を加え、細石刃核の打面が形成される。そして、素材剥片の小口面側で細石刃が剥離される（推定作業面長：6.0 cm以上）。

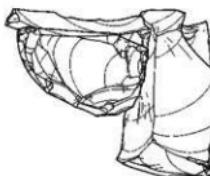
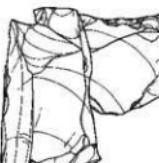
その後、2回の打撃によって打面再生が行われる。打面再生後、残った石核を用いて細石刃核の整形が行われる。石核整形の内容は、側面の形成および下縁や背縁調整で、これらは右側面においてのみ実施される。以前の細石刃核の背面部分を打面とし、横打調整による打面形成が行われる。その後、打面再生を介在しつつ、細石刃剥離が行われる。

この接合資料は、2回の異なる細石刃製作過程に分かれている。最初の段階では、平坦打面からの細石刃剥離であるのに対して、次の段階では、横打調整打面からの細石刃剥離である。石核調整に関しては、前者ではあまり施されていないのに対して、後者では、下縁や背縁に調整が認められる。これは、従来の細石刃核分類では、前者が船型、後者が橋型に属すると考えられているものである。

分布：Bブロックに分布する。最大で3.5 m離れる。

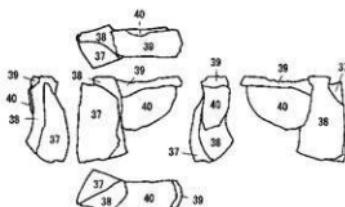


接合資料 II-① 接合No.7



0

5cm



+J5

38
37
36
40

39

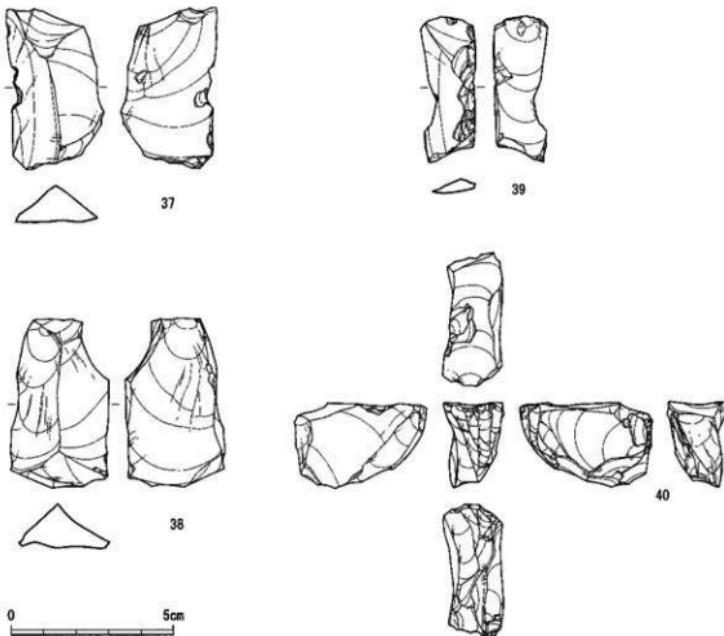
GN
7



0

10m

第18図 IB石器時代第II期石器実測図6 (S=2/3) 接合資料 II-①分布図 (S=1/250)



第19図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図7 (S=2/3)

接合資料II—② 接合No.16 (第20図—41)~(48)

作業内容：細石刃製作

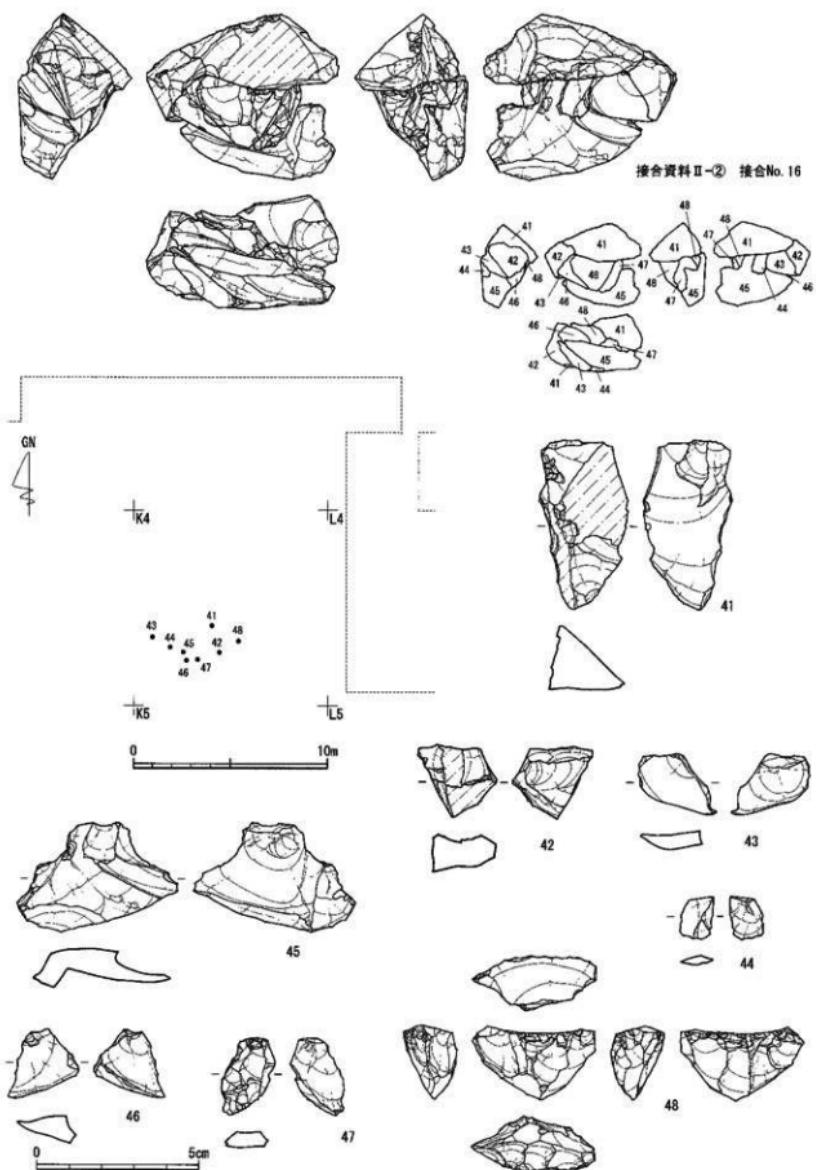
剥片作業の復元： [41+42→43→44→45→○→46→○→○→○→47→○→48]

径約10.0 cm の直角の半削離を素材とする。その平坦な分割面を打面として石核整形が行われるが、数枚の剥片を剥離した後に、剥片(41+42)を剥離することによって打面を一新する。この剥片(41)には、二次加工が認められることから、石器あるいは(細)石刀核プランクとして利用された可能性がある。

その後、先に形成された剥離面を打面とした細石刃製作が開始される。左右両側面において側面調整が行われる。この調整は、ほとんどが細石刀核打面からの打撃によるものだが、左側面においては下線調整が施される。以上の石核整形の状態は、間違いなく細石刃核の整形に関係するものである。しかし、明瞭な細石刃剥離痕は認められず、細石刃剥離に至る前に廃棄された可能性が高い。

なお、初期段階の石核の打面が、打面形成剥片から推測して長軸4.5 cm、短軸3.5 cm の打面を有したものであるのに対して、最終的に整形された細石刃核の打面は、長軸3.5 cm、短軸1.5 cm まで縮小している。これは、石核整形時における石核の縮小過程の一端を示している。

分布：A ブロックに分布する。



第20図 旧石器時代第II期石器実測図 8 (S=2/3) 接合資料 II-②分布図 (S=1/250)

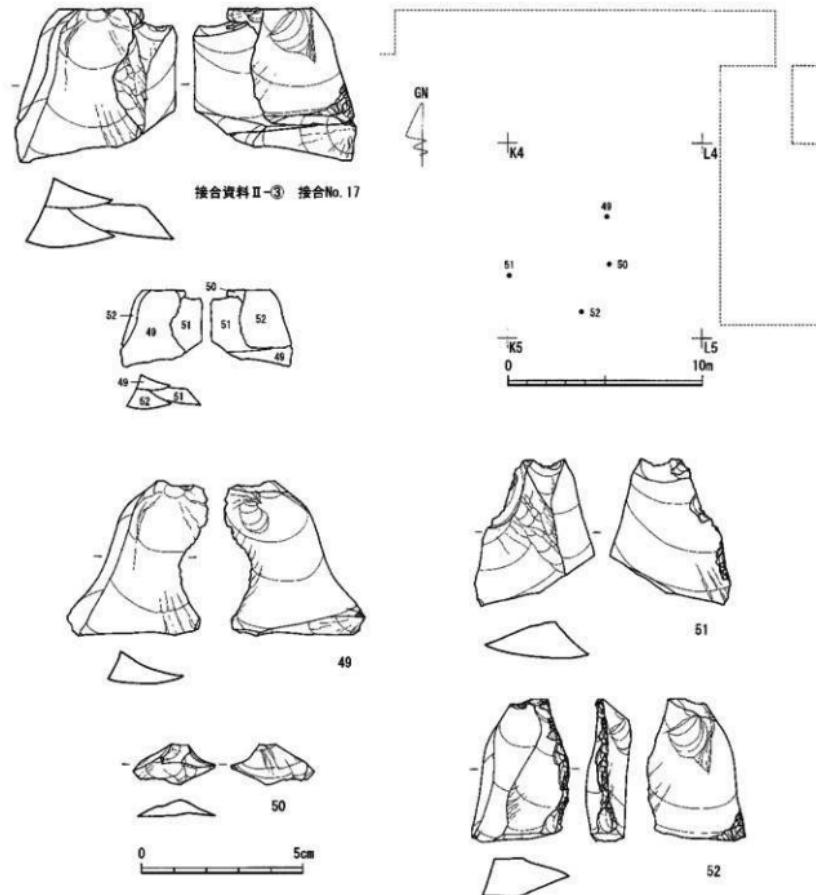
接合資料II-③ 接合No.17 (第21図-49~52)

作業内容：一般剥片剥離・スクレイバー製作

剥片作業の復元： [49→50→51→52]

幅広の縦長剥片が3枚剥離される。石核が欠落しており、その形態の詳細は不明だが、側面や下面が意図的に形成されており、立方体状の石核が想定される。剥離された3枚の剥片は、それぞれほとんど同じ大きさであり、このうち剥片(51)の腹面左側縁には、二次加工が施されている。また、剥片(52)の背面右側縁には、急角度の調整が施され。スクレイバーとして利用されたものと考えられる。

分布：Aブロックに分布する。それぞれが3.0～4.0m離れている。



第21図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図9 (S=2/3) 接合資料II-③分布図 (S=1/250)

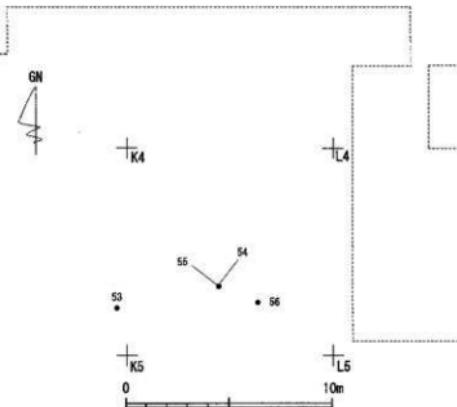
接合資料II-④ 接合No.18 (第22図-53~56)

作業内容：細石刃製作

剥片作業の復元： [53→54→55→56]

自然面を有し、厚みが3.0cm以上ある剥片を素材とする。この剥片の主要剥離面を打面に設定し、左右の側面調整が繰り返して行われる。このうち、左側面の下方から連続的な剥片剥離が行われ（54・55）、その後、左右両側面で細やかな下縁調整が施される。打面に設定された主要剥離面の打点が非常に遠いと考えられることから、かなりの枚数の細石刃が剥離されたと考えられる。

なお、右核調整の過程で剥離された剥片（54）には、微小剥離痕が認められる。
分布：Aブロックに分布する。



第22図 旧石器時代第II期石器実測図10 (S=2/3) 接合資料II-④分布図 (S=1/250)

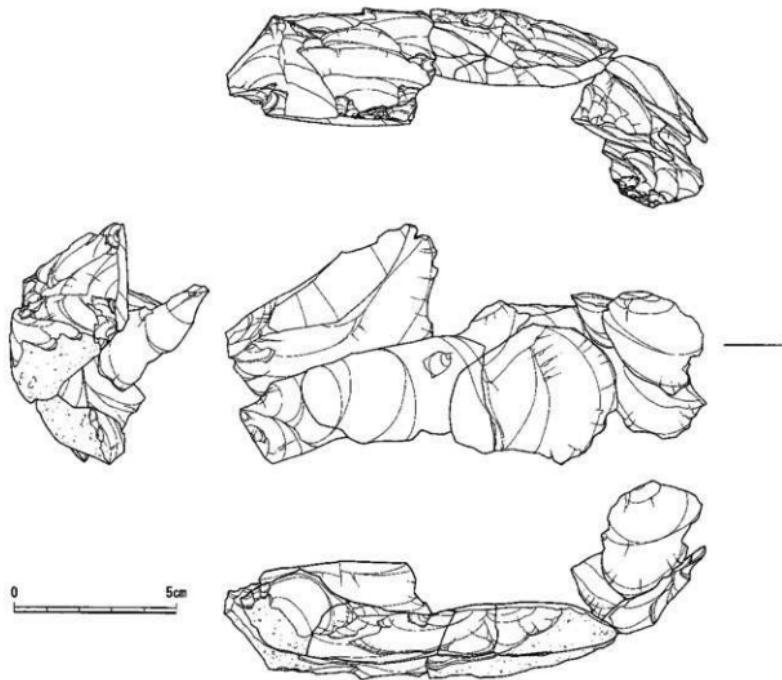
接合資料II-⑤ 接合No.24 (第23~25図-57~65)

作業内容：細石刃核製作（プランク）

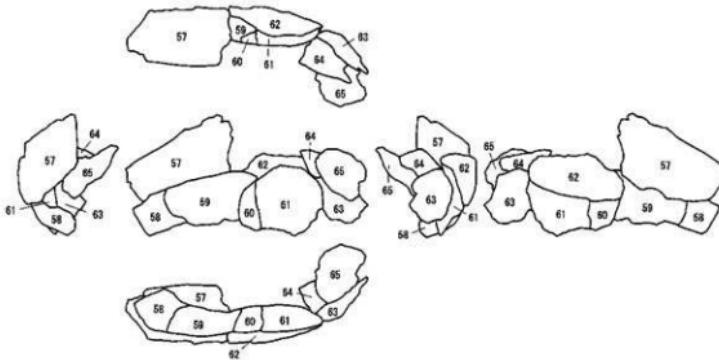
剥離作業の復元： [57→(58+59+60+61+62)→63→64→65]

まず、楕円形の円礫（長さ20.0cm、幅10.0cm、厚さ10.0cm<推定>）が分割される。次いで、右核整形が行われる。接合資料において下面を構成している剥片（58+59+60+61+62）は、剥離面の状態から、おそらく1回の打撃によって剥離されたものとを考えられる。その後、礫の半剖面を打面として側面調整が行われる。この際の打面は平坦打面である。これらの作業の後に、おそらく右核（プランク）が製作されたと考えられるが、それは欠落している。

分布：Eブロックを中心に分布するが、Gブロックに1点分布する。剥離順序から見ると、E→G→Eと分布している。

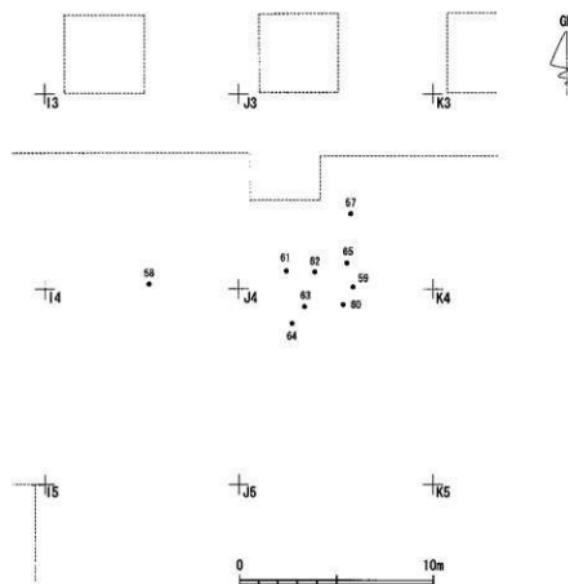
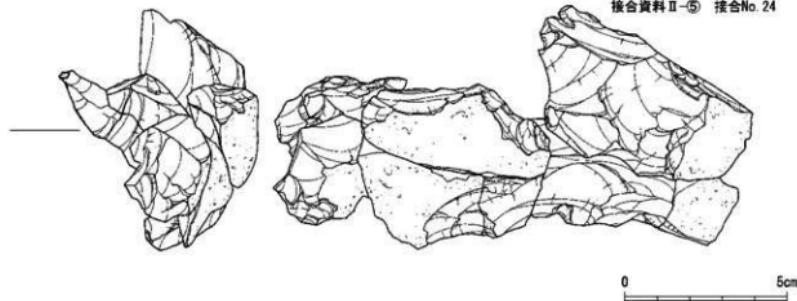


接合資料 II-⑤ 接合No. 24

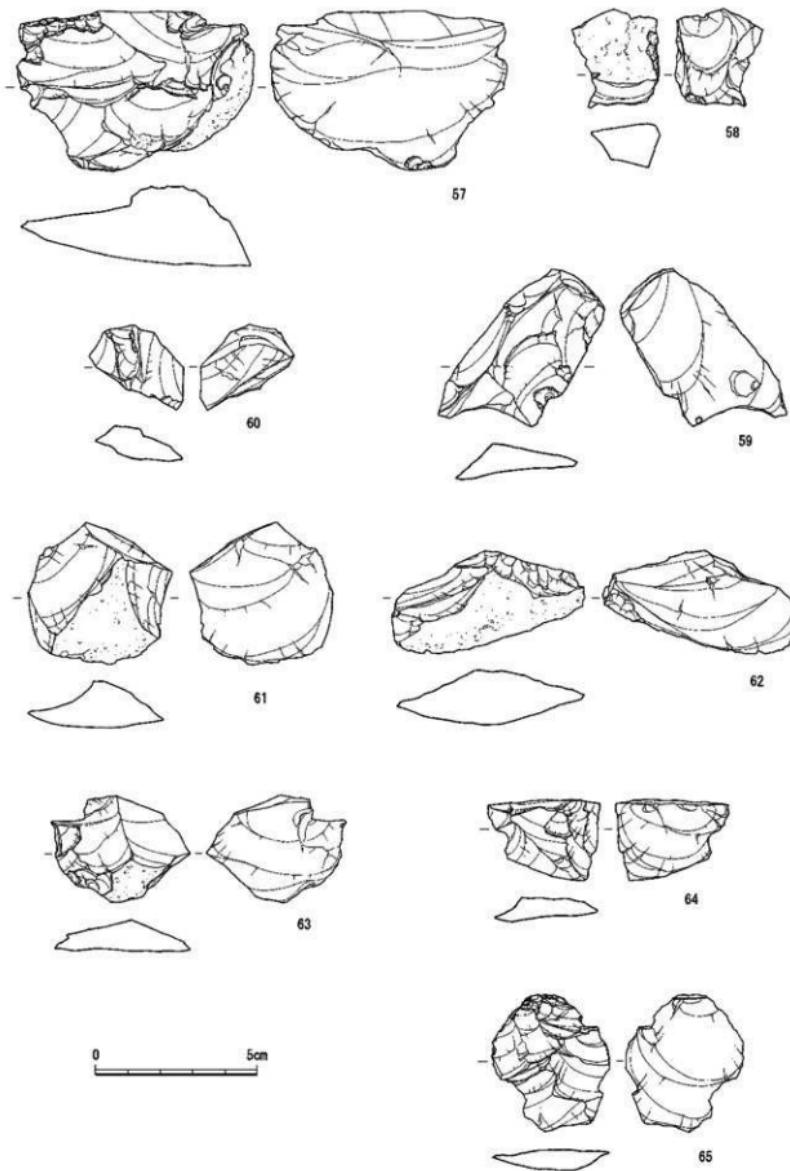


第23図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 11 (S=2/3)

接合資料 II-⑤ 接合No. 24



第24図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 12 (S=2/3) 接合資料 II-⑤分布図 (S=1/250)



第25図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 13 (S=2/3)

接合資料 II-⑥ 接合No.31 (第26・27図—66~75)

作業内容：細石刃製作？

剥離作業の復元：「①66 ②67→68 ③69→70 ④71→72→73→74→75」

本接合資料は、4つの工程に区分される。

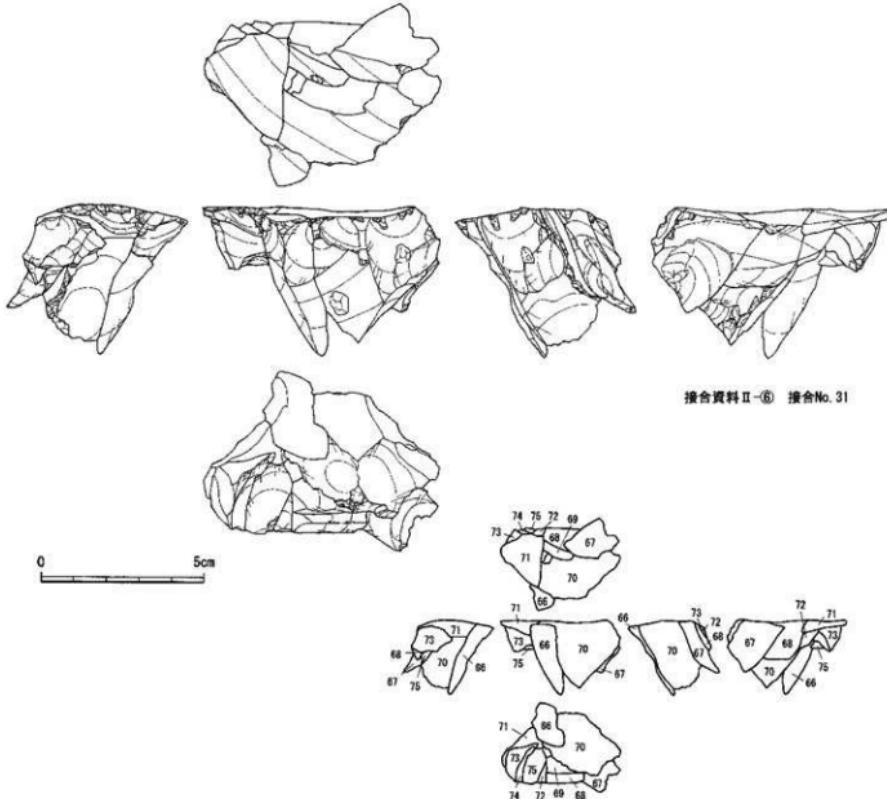
(工程①) まず、原礫あるいは大ぶりな剥片を半剖する。そして、その半剖面(ネガ面)を打面とした縦長剥片剥離作業が行われる。

(工程②) 先の打面とは対極の面を打面として、大振りな剥片a ($71-72+73+74+75+\alpha$)、剥片b ($67+\alpha$) が剥離される。

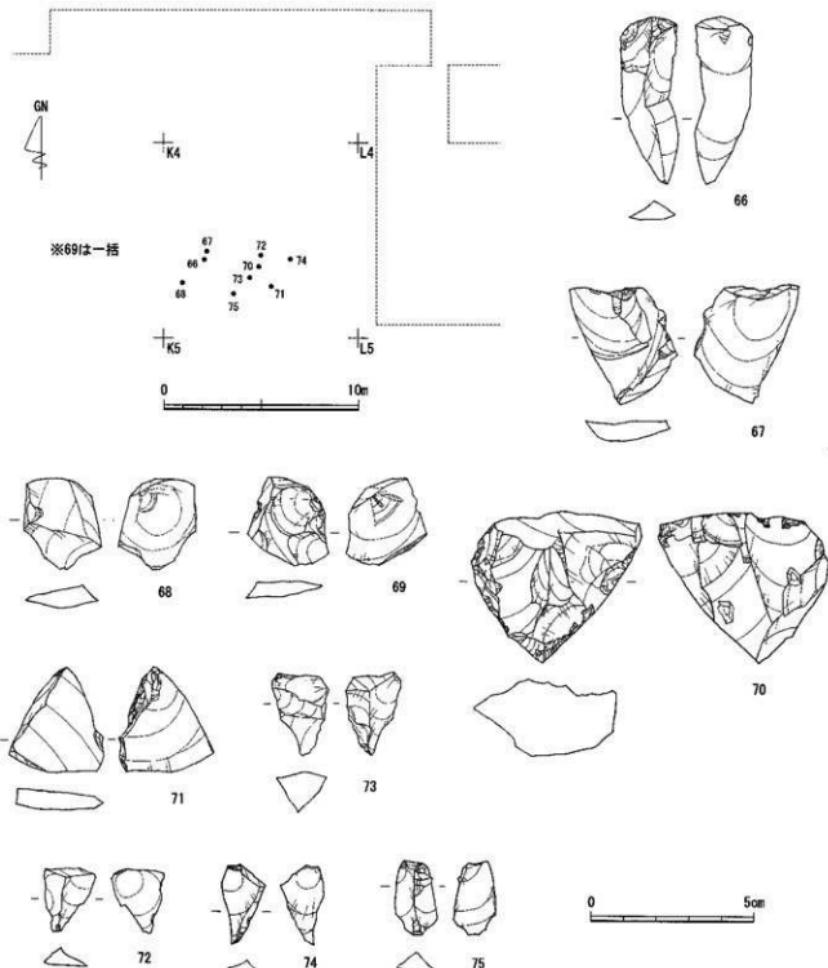
(工程③) 次いで、剥片aの剥離によって生じた剥離面に打面転移が行われ、数枚の剥片が剥離される。

(工程④) 剥片aが石核に転用される。剥片の主要剥離面を側面に設定した剥片剥離が行われる。剥片は全て小さいが、細石刃とは言えない。石核部分は欠落している。

分布：A ブロックに分布する。



第26図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 14 (S=2/3)



第27図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図15 (S=2/3) 接合資料II-⑤分布図 (S=1/250)

接合資料 II-⑦ 接合No.33 (第28図-76~78)

作業内容：細石刃製作

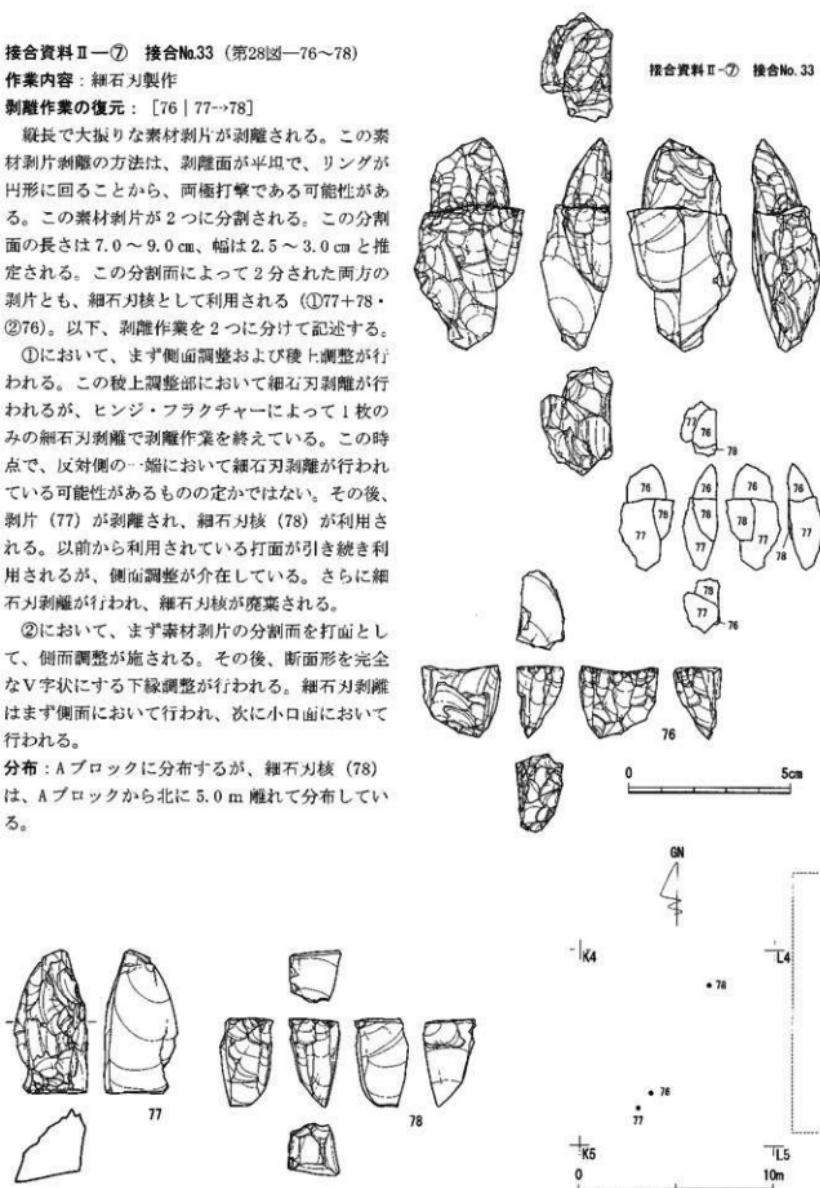
剥離作業の復元： [76 | 77→78]

縦長で大振りな素材剥片が剥離される。この素材剥片剥離の方法は、剥離面が平坦で、リングが円形に回ることから、両極打撃である可能性がある。この素材剥片が2つに分割される。この分割面の長さは7.0~9.0cm、幅は2.5~3.0cmと推定される。この分割面によって2分された両方の剥片とも、細石刃核として利用される(①77+78・②76)。以下、剥離作業を2つに分けて記述する。

①において、まず側面調整および稜上調整が行われる。この稜上調整部において細石刃剥離が行われるが、ヒンジ・フラクチャーによって1枚のみの細石刃剥離で剥離作業を終えている。この時点で、反対側の一端において細石刃剥離が行われている可能性があるものの定かではない。その後、剥片(77)が剥離され、細石刃核(78)が利用される。以前から利用されている打面が引き続き利用されるが、側面調整が介在している。さらに細石刃剥離が行われ、細石刃核が廃棄される。

②において、まず素材剥片の分割面を打面として、側面調整が施される。その後、断面形を完全なV字状にする下縁調整が行われる。細石刃剥離はまず側面において行われ、次に小口面において行われる。

分布：Aブロックに分布するが、細石刃核(78)は、Aブロックから北に5.0m離れて分布している。



第28図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図16 (S=2/3) 接合資料II-⑦分布図 (S=1/250)

接合資料II-⑧ 接合No.34 (第29・30図—79~89)

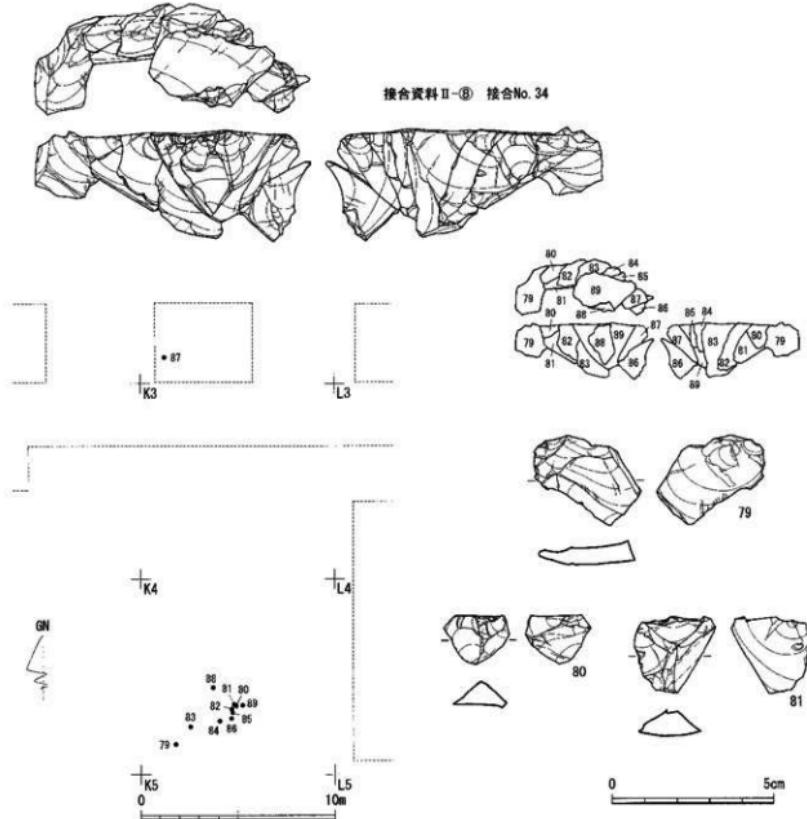
作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元： [79→80+81→82→83→84→85→86→87→88→89]

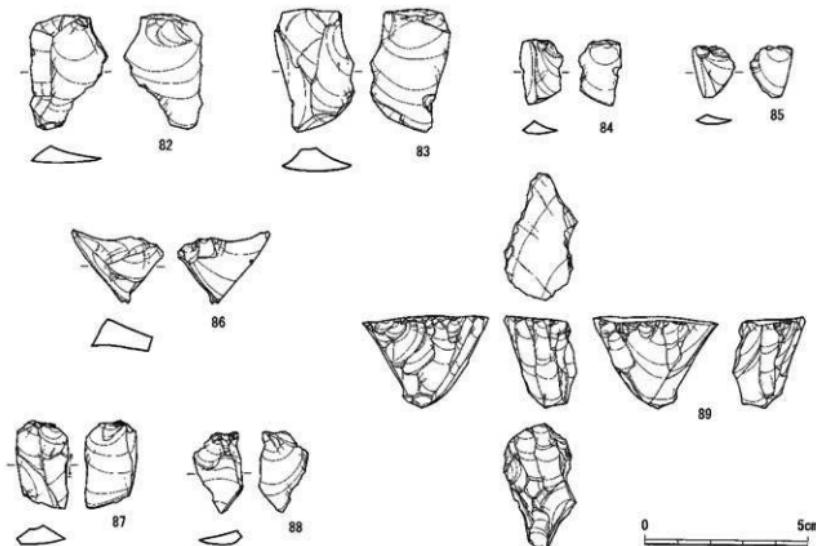
砾を素材として、自然面を打面として分割される。その剥離面のネガ面を将来の細石刃核打面に設定する。その打面から、側面調整が施される。この調整は、細石刃核の左側面においてほぼ連続的に行われている。わずかではあるが、この間に下面(縁)調整が施されている。その後、右側面において再び側面調整が行われ、細石刃が剥離される。

本資料には、細石刃核と側面調整剥片の接合によって生じた欠落部分が見られる。これは、細石刃剥離開始時から終了時までの縮小部分と考えられ、その長さは約3.0 cmと推定される。

分布：Aブロックに分布するが、剥片(87)のみ、それらから18.0 m離れたブロック外に存在している。なお、この剥片には微小剥離痕が認められる。



第29図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図17 (S=2/3) 接合資料II-⑧分布図 (S=1/250)



第30図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 18 (S=2/3)

接合資料Ⅱ-⑨ 接合No.37 (第31・32)

図-90~92)

作業内容：一般剥片剥離か

剥離作業の復元：[90→91→92]

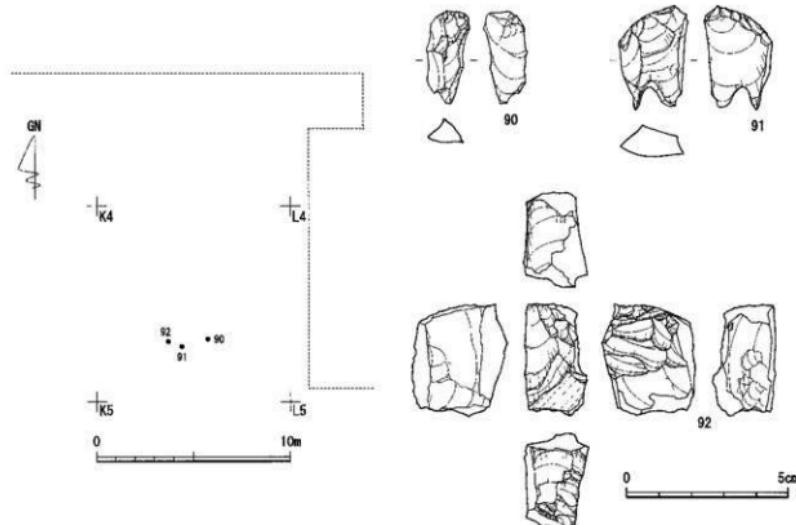
板状の剥片を素材とする。剥片剥離は3回の打面転移を経つつ進行する。まず、素材剥片の下面に打面が形成され、素材剥片の左側面において2枚の剥片が剥離される。次に、右側面において素材剥片剥離後に生じたと考えられる折断面を打面にした剥片剥離が行われ、最後に、最初の剥片剥離で生じた剥離面を打面とした剥片剥離が行われる。

これらの作業面に認められる剥離痕は、幅は狭いものの一定しておらず、細石刃剥離によって生じたものとは考えられない。

分布：Aブロックに分布する。



第31図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 19 (S=2/3)



第32図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図20 (S=2/3) 接合資料II-⑨分布図 (S=1/250)

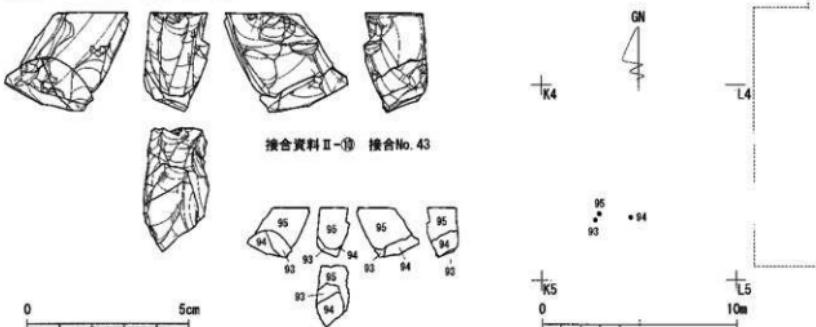
接合資料II-⑩ 接合No.43 (第33・34図--93~95)

作業内容：細石刃製作

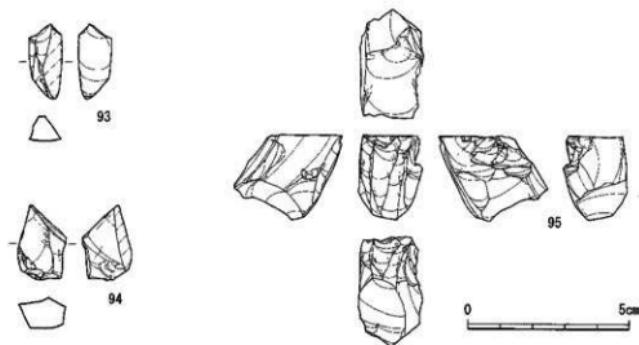
剥離作業の復元： [93+94→95]

不定形で分厚い剥片を素材とする。その素材剥片が分割され、その分割面のボジ面が細石刃核の打面として利用される。次に、石核の下面からの調整が行われ、その下面において剥片（93+94）が剥離される。この下面調整が行われている間に細石刃剥離が介在している可能性もある。その後、細石刃核打面から、側面調整、細石刃剥離が行われる。

分布：Aブロックに分布する。



第33図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図21 (S=2/3) 接合資料II-⑩分布図 (S=1/250)



第34図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 22 (S=2/3)

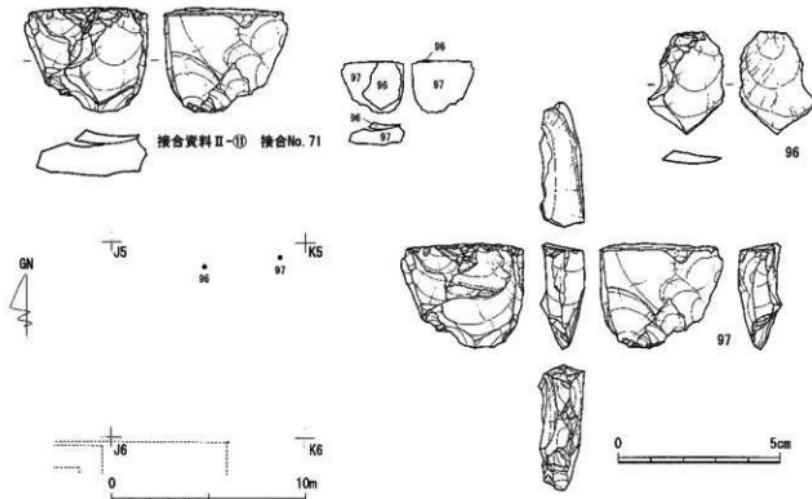
接合資料II-⑪ 接合No.71 (第35図-96・97)

作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元： [96-97]

素材剥片が剥離される。形状は不明であるが、厚みはさほどないものと考えられる。この素材剥片の主要剥離面が、石核の側面に設定される。次いで、素材剥片の背面側に打撃が加えられ、細石刃核の打面が形成される。その後、左右向侧面において下縁調整が、左側面においては細石刃核打面からの側面調整も行われる。その際、剥片(96)も剥離される。最後に小口面において細石刃剥離が行われる。なお、その細石刃剥離作業面とは反対側の小口面にも、幅狭で綫長の剥離痕が認められ、細石刃剥離痕とも考えられるが1条のみであり、失敗の可能性もある。

分布：Bブロックに分布する。両者間の距離は3.5mである。



第35図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 23 (S=2/3) 接合資料II-⑪分布図 (S=1/250)

接合資料II-⑫ 接合No.78 (第36図-98~100)

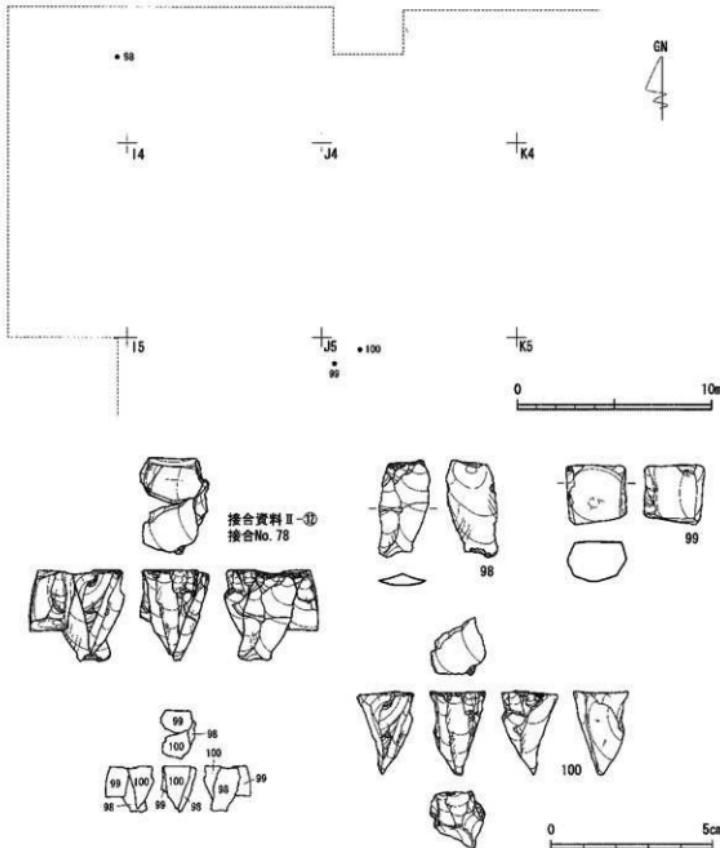
作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元： [98→99→100]

分厚い素材剥片が剥離される。しかし、その剥離面のリングが円形であることから、剥離というよりも分割と考えられる。この素材剥片の一端に打撃が加えられ、細石刃核打面が形成される。その打面からの側面調整が行われるが、どちらの側面から調整が行われたかは不明である。その後、細石刃剥離が行われ、最も右端の剥離がヒンジを起こしたことから、細石刃剥離が終えられる。

この細石刃剥離後に剥片(99)、さらに現在の欠落部分が剥離される。この2回の剥離は、あたかも細石刃核を分割するように行われているが、その意図は不明である。

分布：どのブロックにも属さない。細石刃核(100)はBブロックの西2.0mの位置に分布している。



第36図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図24 (S=2/3) 接合資料II-⑫分布図 (S=1/250)

接合資料II—⑬ 接合No.79 (第37~41図—101~123)

作業内容：縦石刃核製作か

剥離作業の復元：

- ① ○→ {○→ (101+102) →103} ② {104→ (105+○) →○}
- ③ {○→106→107→108→109→110→○→○→○→111→112};
- ④ {113→○→○→114→115→116→117→118→119→120→ (121+122) →○→○→123}

本接合資料は、4つの工程に区分される。接合No.79 a 実測図正面の剥片 (108) と接合No.79 b 実測図正面の剥片 (113) とが接合し、第37図のようになるが、便宜上、作業工程①~④の接合No.79 a と作業工程④の接合No.79 b の2つに分けて実測図展開を行っている。

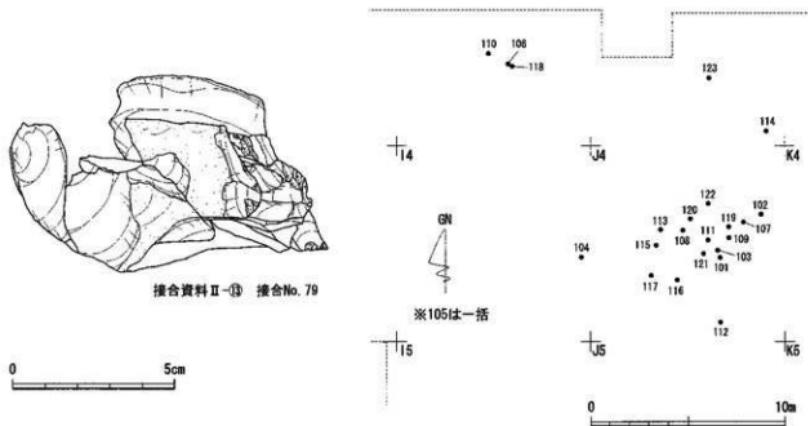
（工程①）径約 10.0 cm 前後の亜円錐の一端に打撃が加えられ、石核打面が形成される。この打面から縦長剥片が少なくとも 2 枚は剥離される。このうち剥片 (101) には、二次加工が施されているが、その加工は非常に粗い。

（工程②）工程①において剥離された剥片 (101) によって生じた剥離面を打面とした剥片剥離が行われる。この工程においても、少なくとも 2 枚以上の剥片が剥離される。

（工程③）工程①②において利用されていた石核がそのまま利用される。石核の小口面側に稜上調整が施された後、打面が形成され、その打面から剥片剥離が行われる。その後、小口面における連続的な縦長剥片剥離が行われる。この連続的な縦長剥片剥離の途中に、作業面の更新が行われている。

（工程④）工程③の作業面更新時の剥片を石核に転用して、剥片剥離が行われる。まず、小口面において剥片 (113) が剥離される。その後、両側面において求心状に剥片剥離が行われる。この際、右側面が先行する。小口面において縦長剥片が剥離される。その後、下端に打面が形成され、少なくとも 3 枚の縦長剥片が剥離される。

分布：D ブロックを中心に分布する。しかし G ブロックに 3 点、B・E・F ブロックに 1・2 点分布している。とくに石核 (112・123) の分布は特徴的で、112 は E ブロックに、123 は B ブロックに分布している。

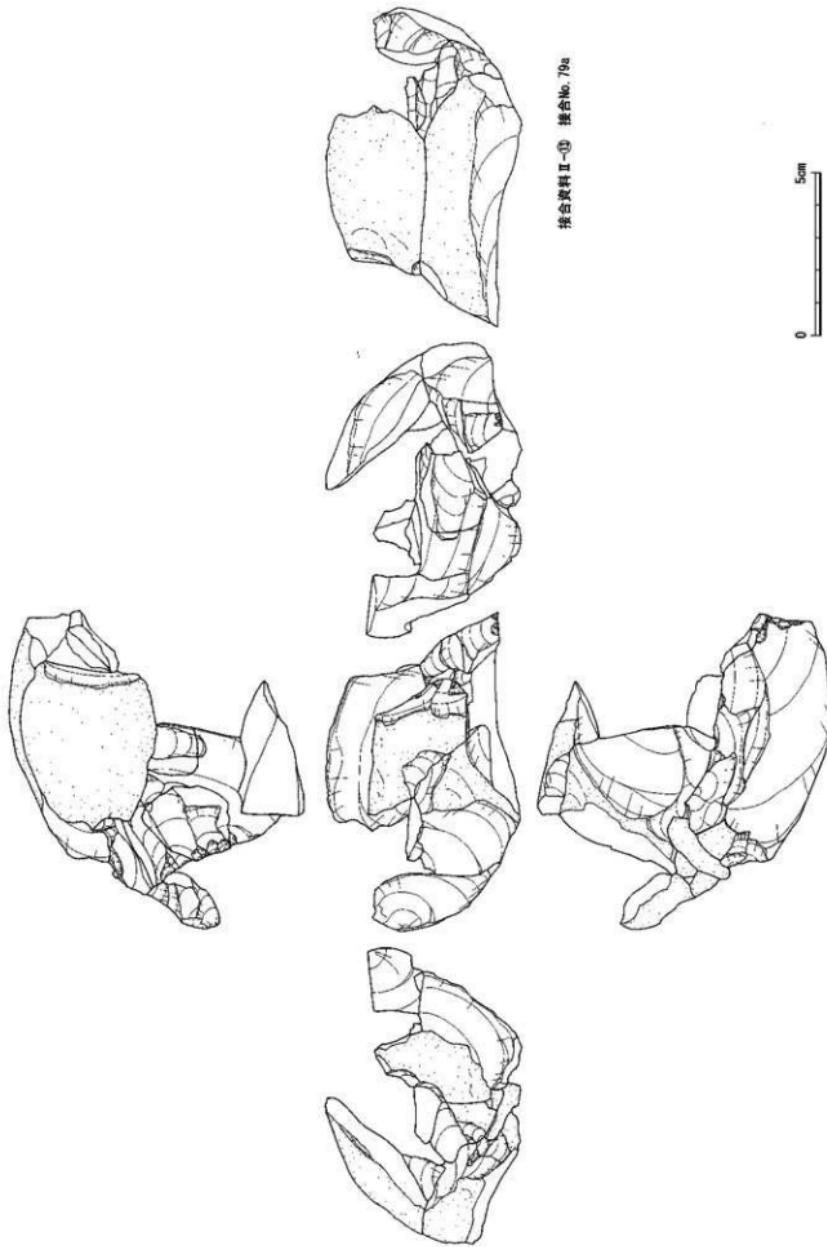


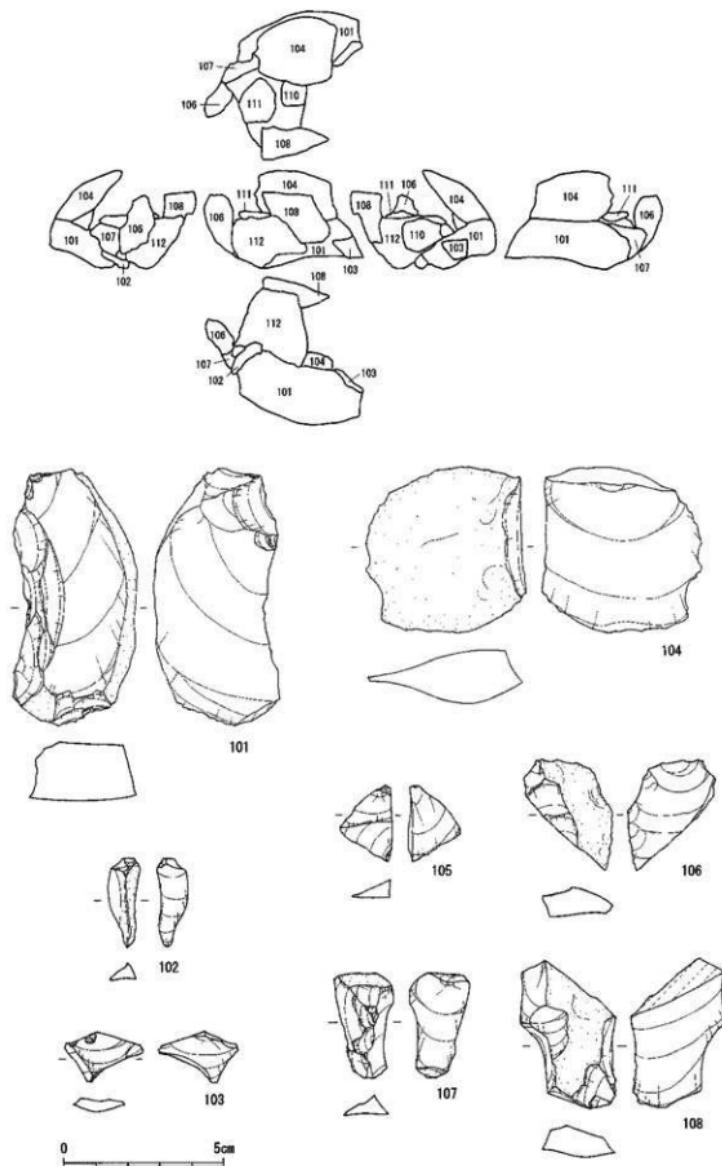
第37図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 25 (S=2/3) 接合資料II—⑬分布図 (S=1/250)

第38圖 旧石器時代第Ⅱ期石器實測圖 26 (S=2/3)

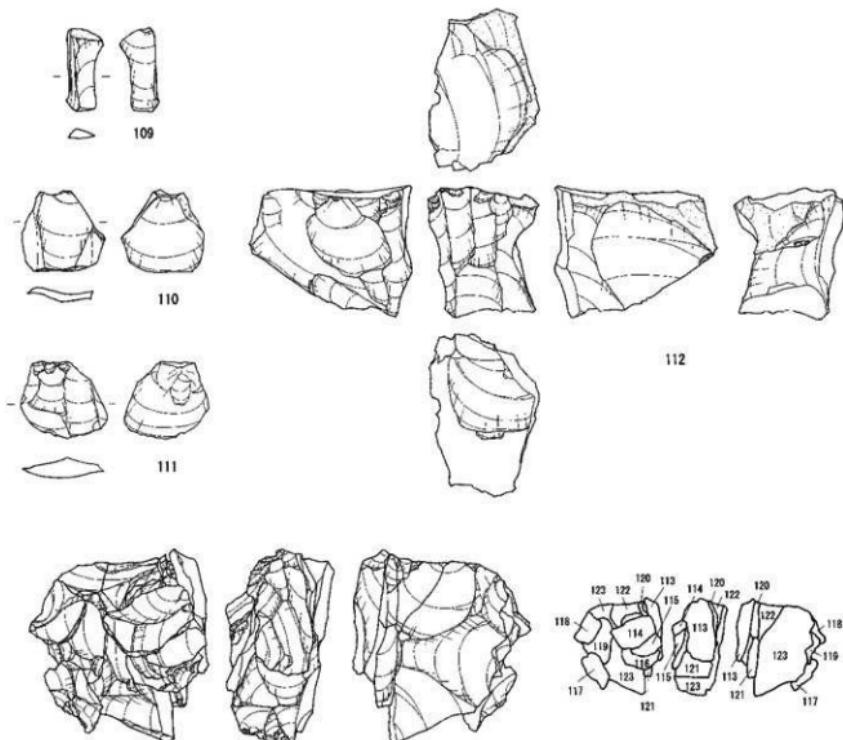
接合資料 II-⑪ 接合No. 79a

0 5cm

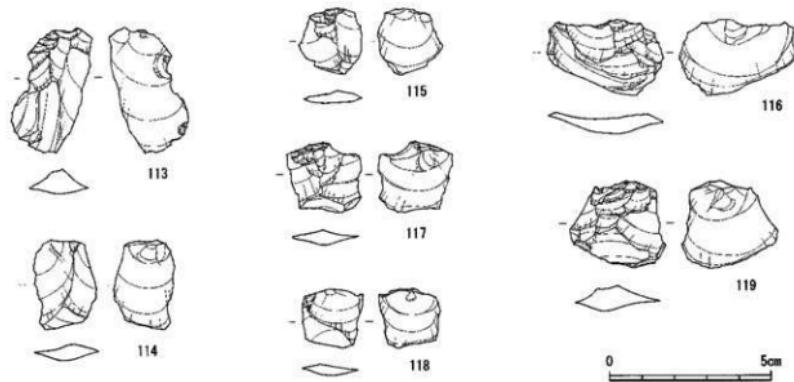




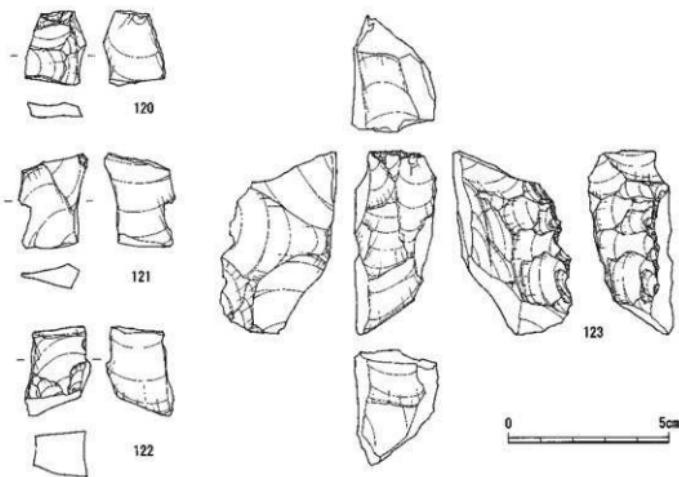
第39図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 27 (S=2/3)



接合資料 II-③ 接合No. 79b



第40図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 28 (S-2/3)



第41図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 29 (S=2/3)

接合資料II—⑩ 接合No.80 (第12~46図—124~162)

作業内容：細石刃核製作

剥離作業の復元：椎円礫を2つ(aとb)に分割して、両者で剥片剥離が行われる。

a : ①なし ②124+125→126→127→128 →129→130 ③131+132+α→133+134+135+136

④137+138→139 ⑤140→141→142+143→144→145+146

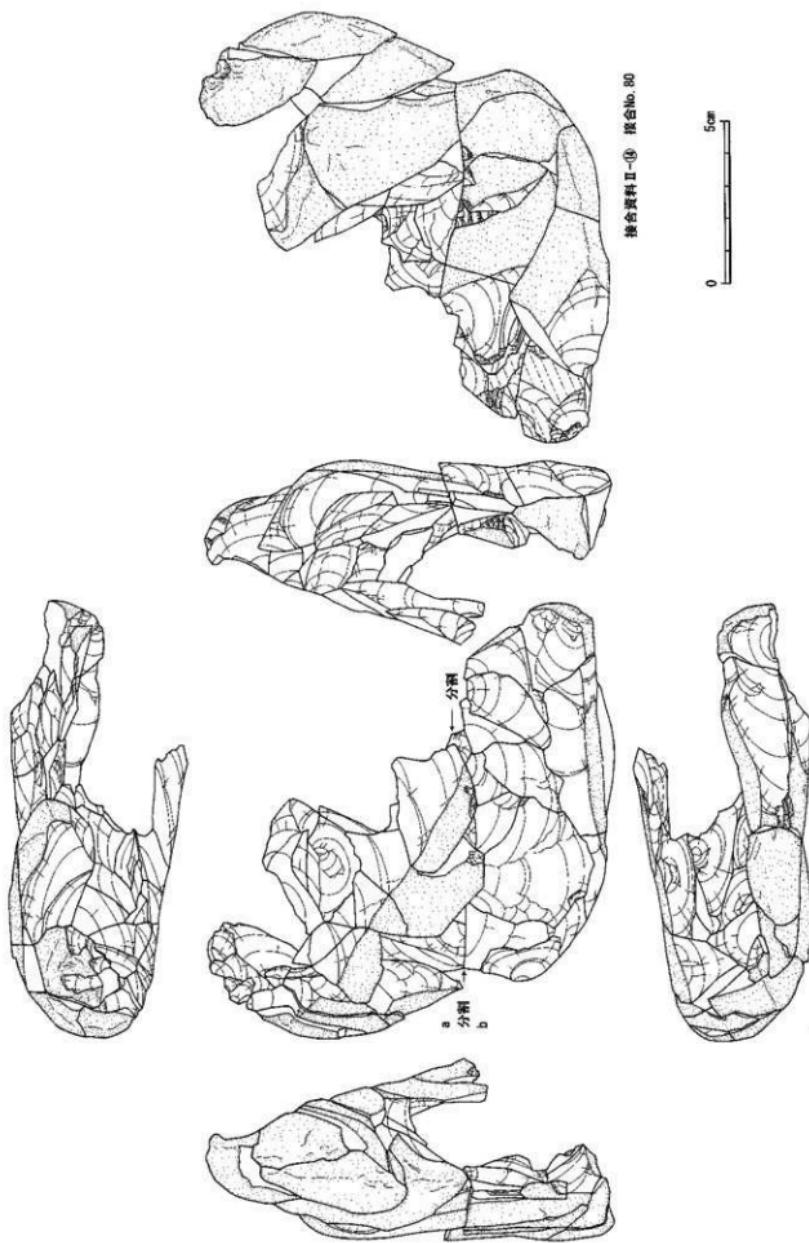
b : ①147+148+149+150 ②151+152→153→154→ (155+156+157+158+159) →160→161→162

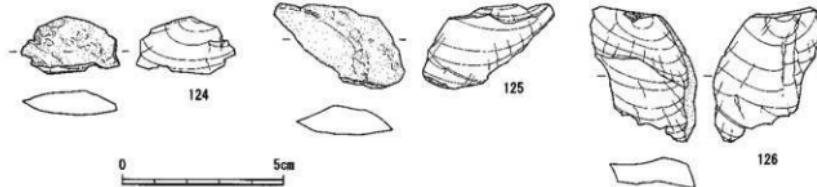
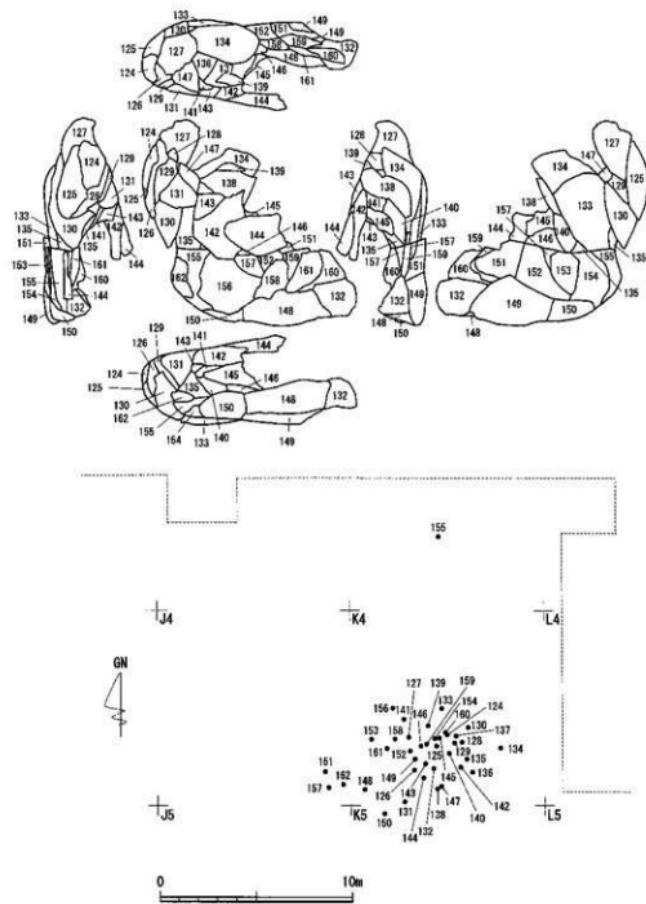
aは、細石刃核ブランクの製作痕跡と想定される。分割縫の分割面とは対極する一端に打面が形成される。この打面から少なくとも6枚の剥片が剥離される。次に、打面を分割面に転移して剥片剥離が行われる。この2つの剥離作業が数回繰り返され、いずれかの段階に、細石刃核ブランクが形成されたものと考えられる。この細石刃核ブランクは欠落しているが、ブランクの左側面にあたる剥片(137+138+139→140→141)と右側面にあたる剥片(142+143→144)との間に生じた欠落部分は、正面形V字状を呈し、分割面が打面に設定された細石刃核と想定される。復元される細石刃核の打面最大長は約12.0cm、最大幅は約5.0cm、作業面の長さは約4.5cmと想定される。

bは、aと同様に細石刃核ブランクの製作痕跡と想定される。まず、礫の下端における剥片剥離が行われる。この剥離に関しては、aとbとの分割以前である可能性が考えられる。次いで、分割面を打面にした剥片剥離が行われる。この剥離によって少なくとも6枚の剥片が剥離される。以上の剥離が行われたと考えられる石核部分は、平坦打面を有するものであり、その他の資料を加味すると、これは細石刃核として利用された可能性がある。

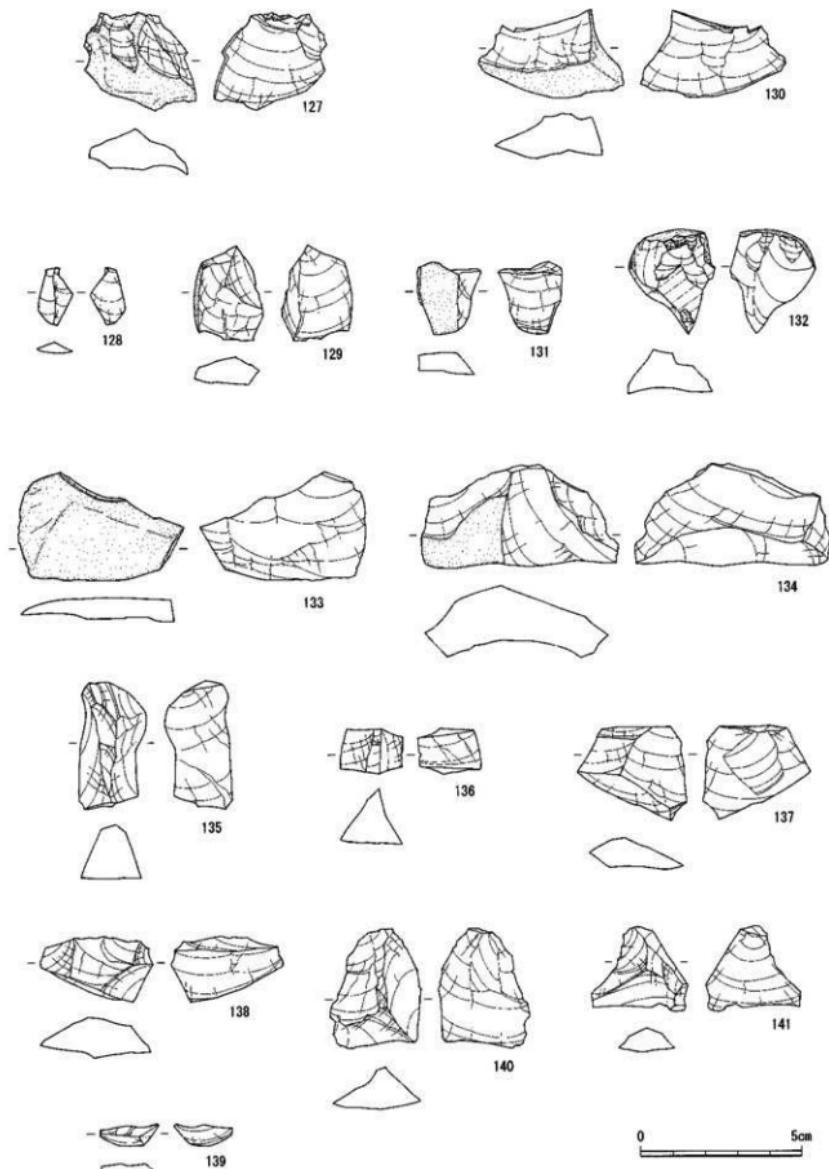
分布：Aブロックを中心に分布する。このうち分割縫aはAブロックに集中するが、分割縫bは、Bブロックに5点、さらにAブロックから北に約10.0m離れたブロック外に1点(155)分布する。

第42圖 旧石器時代第Ⅱ期石器采辦圖 30 (S-2/3)

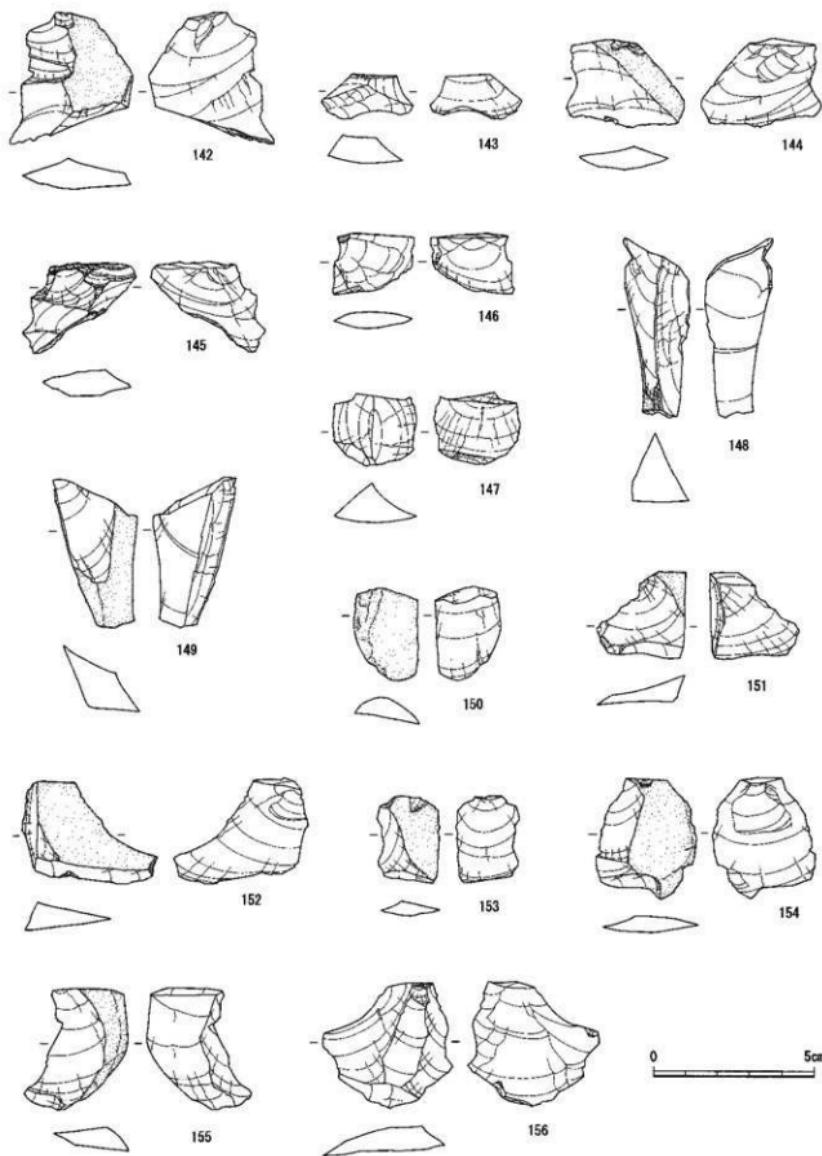




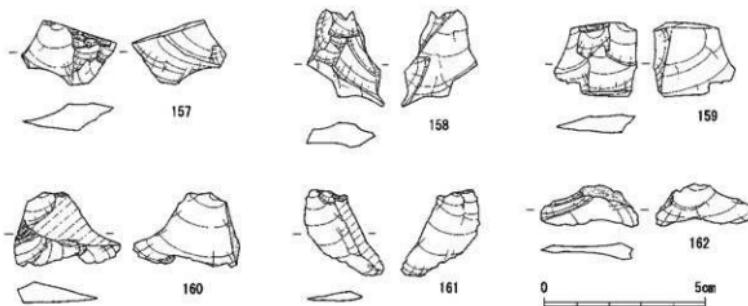
第43図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 31 (S=2/3) 接合資料II-⑭分布図 (S=1/250)



第44図 古石器時代第Ⅱ期石器実測図 32 (S=2/3)



第45図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 33 (S=2/3)



第46図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図34 (S-2/3)

接合資料II-⑤ 接合No.81 (第47~53図-163~224)

作業内容：一般剥片剥離

剥離作業の復元：

- ① $(163 \rightarrow (164+165+166+167) \rightarrow (168+169) \rightarrow 170+171 \rightarrow 172)$ ② 173
- ③ $\{(174+175) \rightarrow 176+177\}$ ④ ○
- ⑤ $\{(178+179) \rightarrow 180 \rightarrow 181 \rightarrow 182 \rightarrow 183 \rightarrow (184+185) \rightarrow (186+187) \rightarrow 188 \rightarrow 189\}$
- ⑥ $\{190 \rightarrow 191 \rightarrow (192+193) \rightarrow 194\}$
- ⑦ $\{195 \rightarrow 196 \rightarrow 197 \rightarrow (198+199+200) \rightarrow 201 \rightarrow 202 \rightarrow 203 \rightarrow 204 \rightarrow 205\}$
- ⑧ 206・207・208・209・210・211・212・213・214・215・216・217・218・219・220・221・222・223・224

接合資料中最も多くの剥片が後合したものである。剥片剥離工程は大きく4つの工程に区分される。

（工程①）長軸約28.0 cm、短軸約15.0 cm、最大厚約15.0 cm（推定）の楕円礫が長軸方向に分割される。この分割面を打面とした剥片が剥離される。

（工程②）礫の短軸の面を打面とした打面再生が行われる。この剥片（173）の下部には、急角度の加工が施されている。

（工程③）②の打面再生によって生じた剥離面を打面とした剥片剥離が行われる。

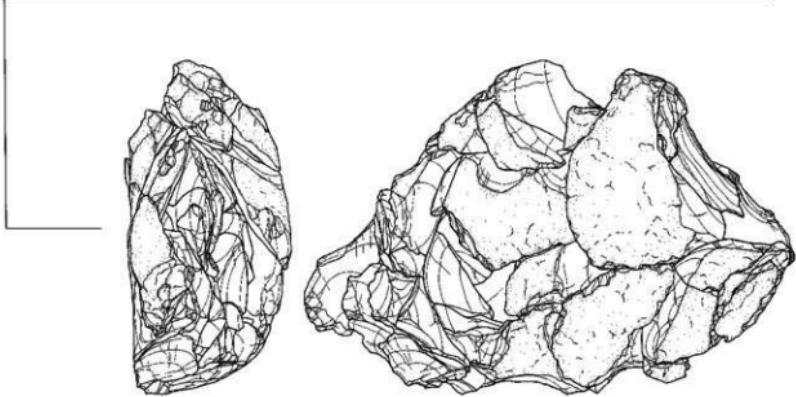
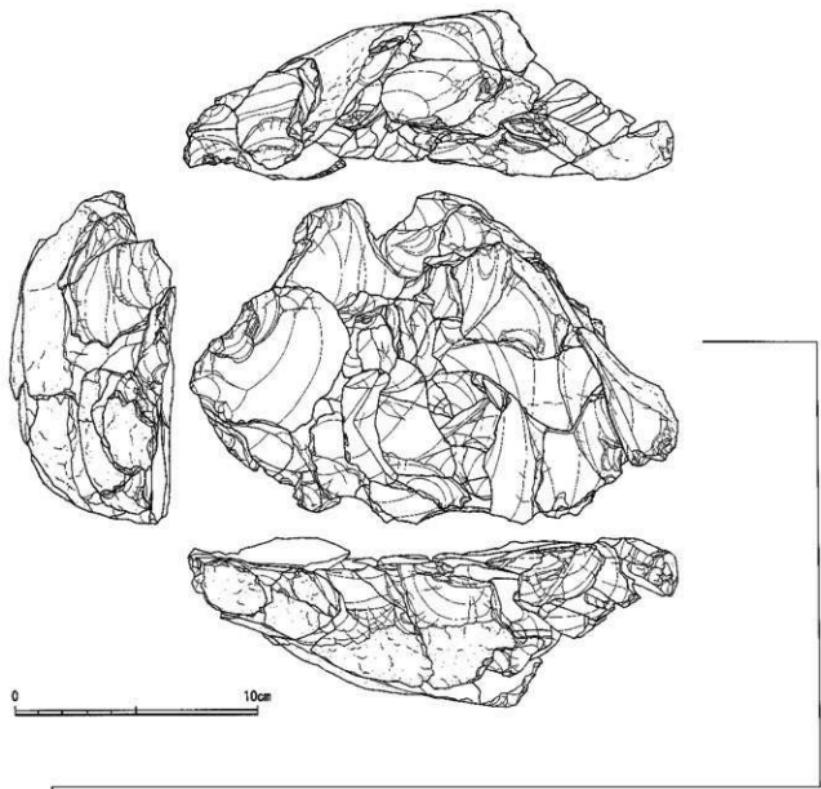
（工程④）さらに打面再生が行われる。この剥片は存在しないが剥離方向は工程②と同じである。

（工程⑤）④の打面再生によって生じた剥離面を打面とした剥片剥離が行われる。

（工程⑥）⑤において生じた剥離面に打面が転移される。数枚の剥片が剥離される。

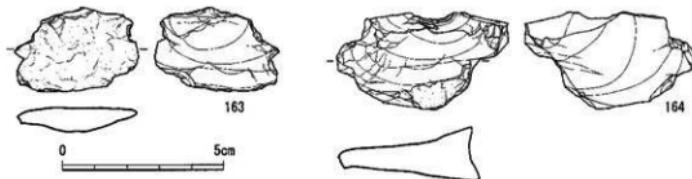
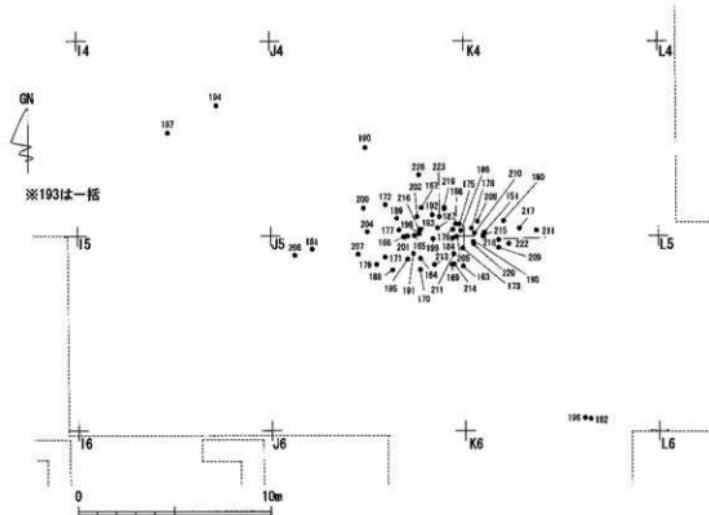
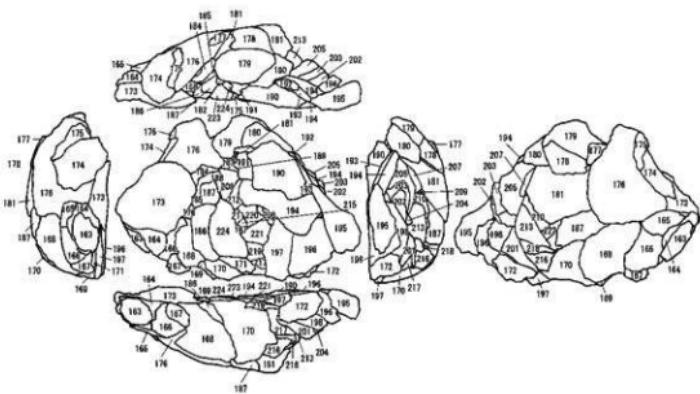
（工程⑦）①において生じた剥離面に打面が転移される。ここまで剥片剥離をもって、目的剥片の剥離は終了している。最終的に残された石核は円形である。この石核は、19点の剥片で構成されるが、明確な剥片剥離ではなく、全て偶発的な剥離による。

分布：工程①②は、Bブロックに分布する。径3.0 mにまとまる。工程③は、Bブロックに分布する。径2.0 mにまとまる。工程⑤は、Bブロックに分布する。全体が径10.0 m前後にまとまり、剥片（182）は南に12.0 m離れている。工程⑥は、Bブロックを中心に分布するが、構成点数4点中2点がブロック外（ドブロック）に分布する。最大10.0 m離れる。工程⑦は、工程中で最も広範囲に分布する。Bブロックを中心に分布するが、剥片（196・197）は、ともにブロックから10.0 m以上離れて分布する。工程⑧は、Bブロックを中心に分布するが、最大12.0 m離れて分布する。

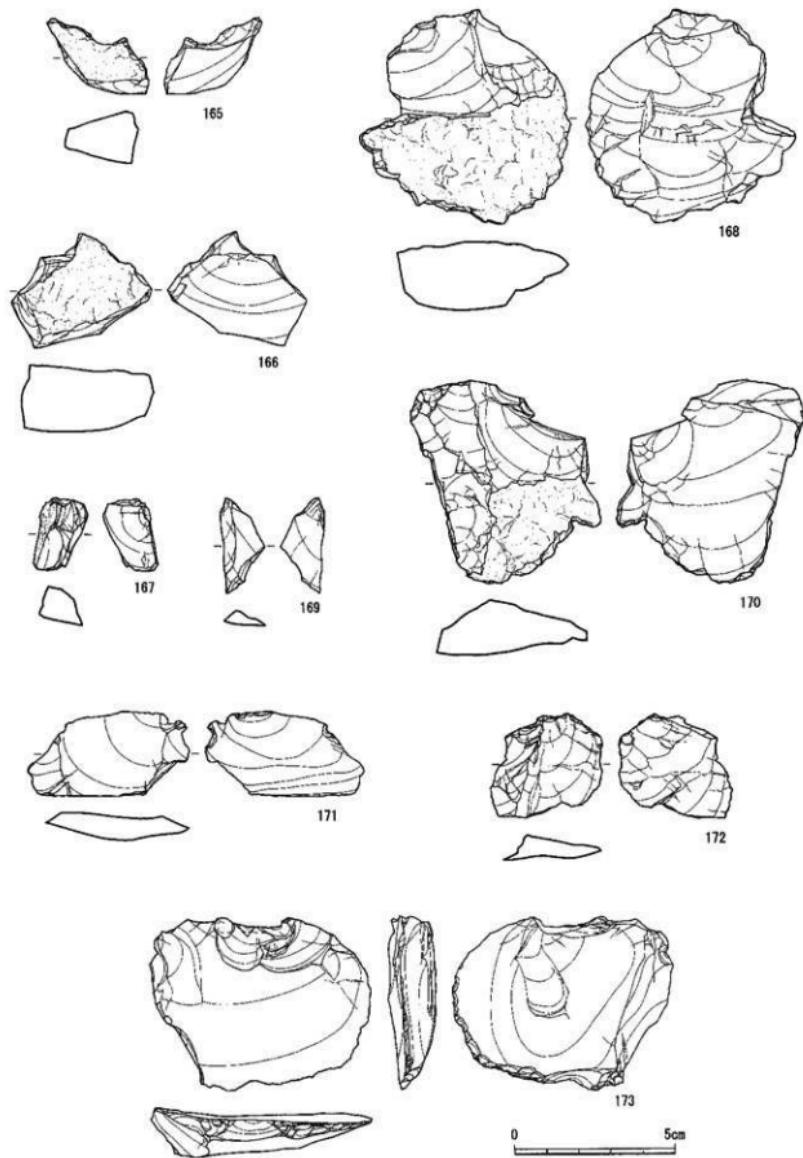


第47図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 35 (S=1/2)

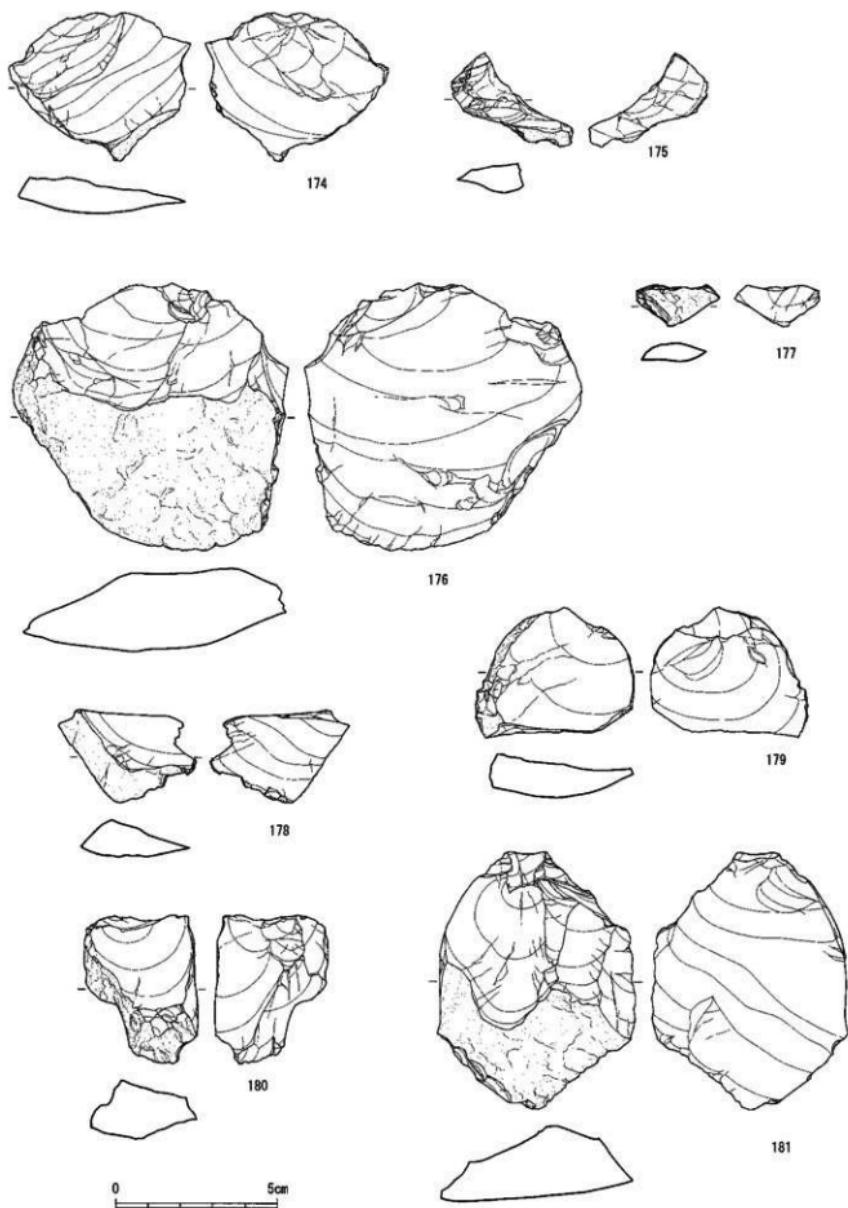
接合資料 II-⑮ 接合No. 81



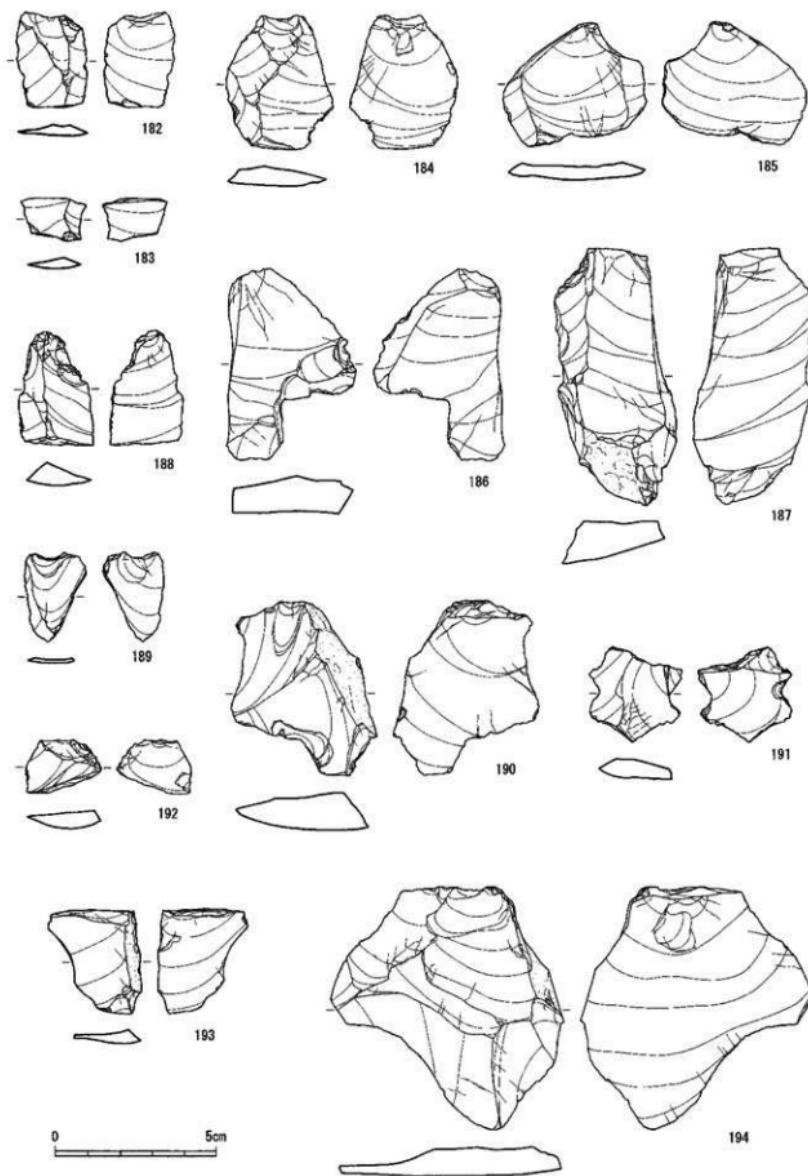
第48図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図36 (S=2/3) 接合資料II-⑤分布図 (S=1/250)



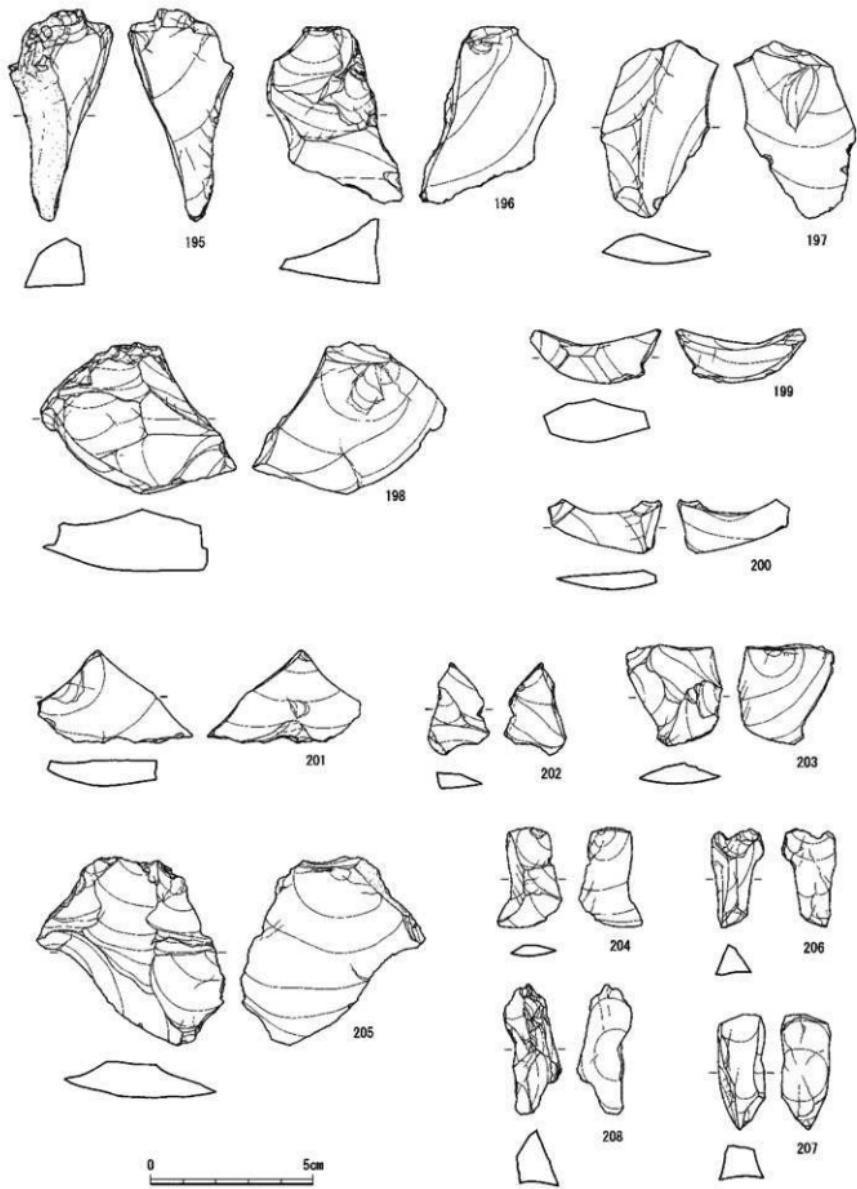
第49図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 37 (S=2/3)



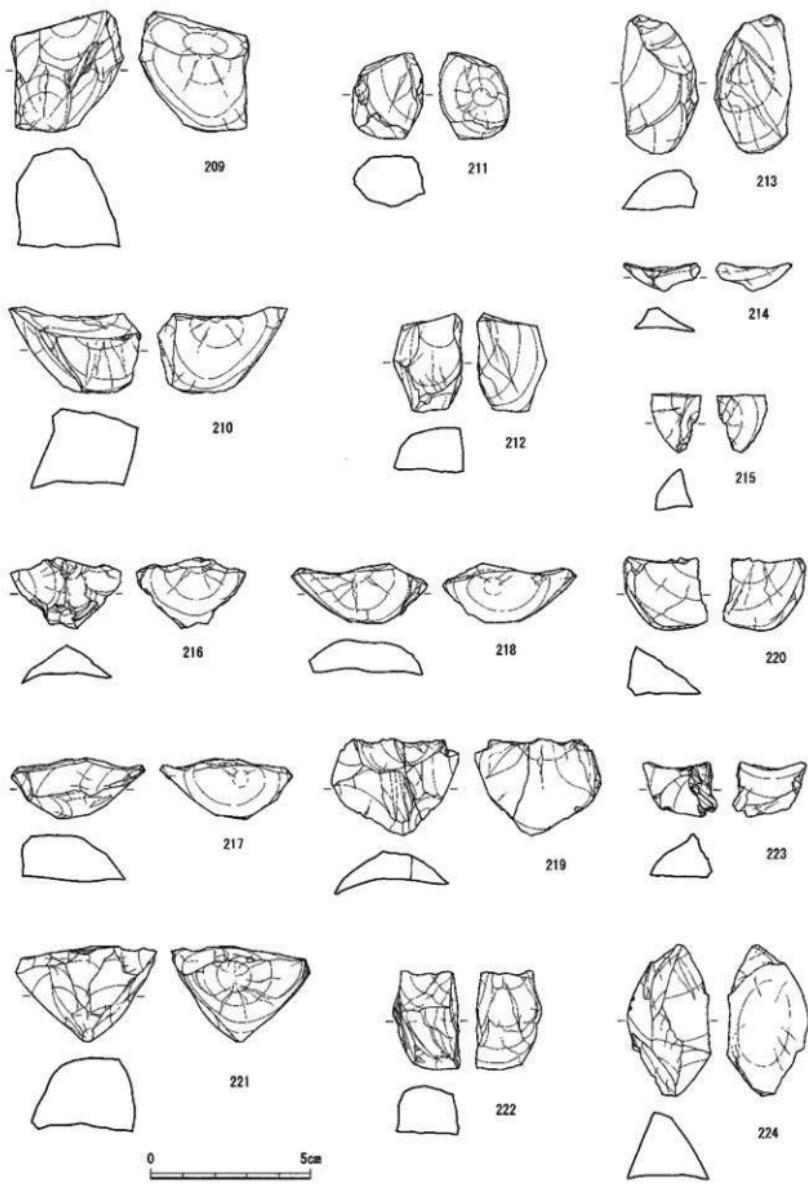
第50図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 38 (S-2/3)



第51図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 39 (S=2/3)



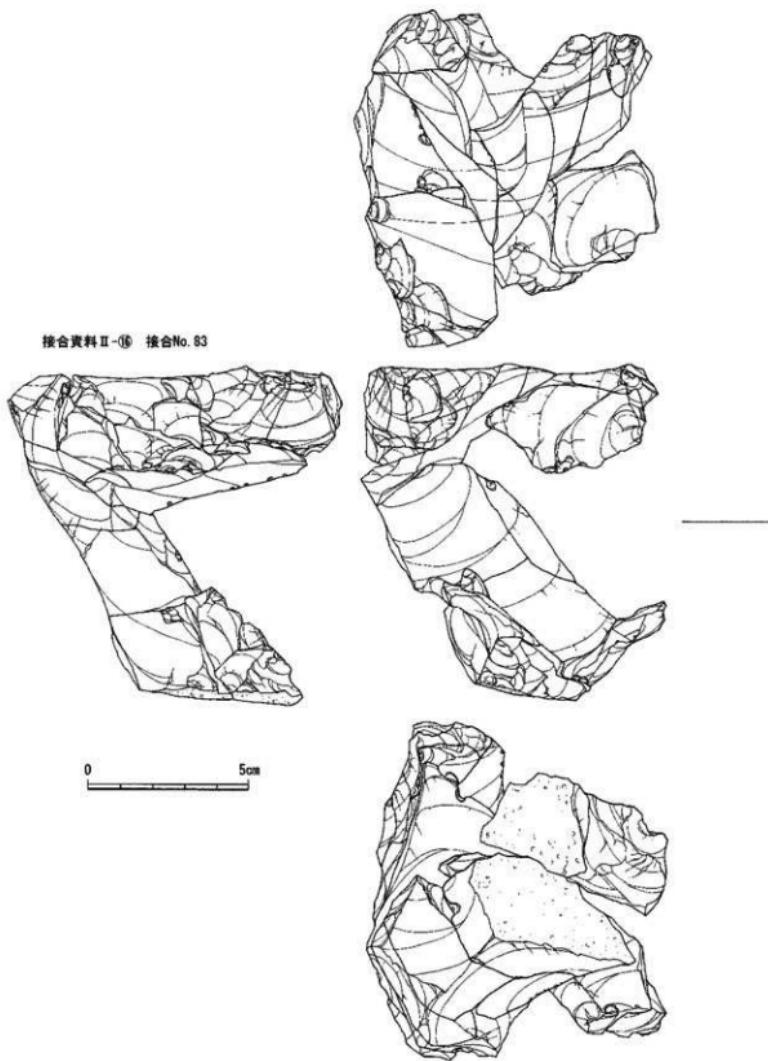
第52図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 40 (S=2/3)



第53図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 41 (S=2/3)

接合資料 II-⑯ 接合No.83 (第54~58図 - 225~250)

作業内容：一般剥片剥離・細石刃製作か



第54図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 42 (S=2/3)

剥離作業の復元：

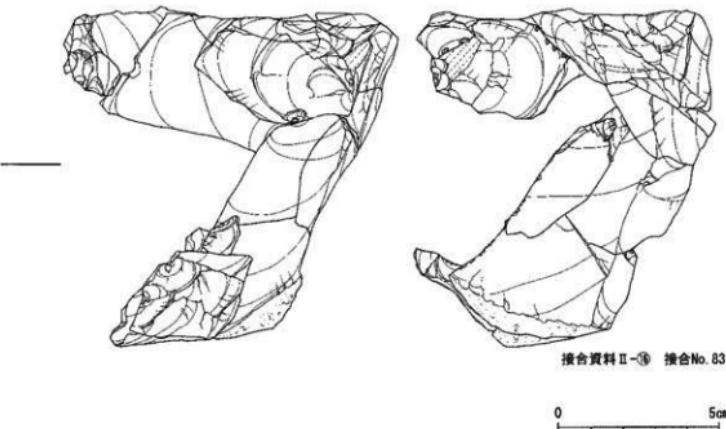
- ①225→226→227+228→229→230→231→232→233→234→235→236 ②237+238+239+240
③241→242→243 ④244+245→246 ⑤247+248; 249→250

奥行 13.0 ~ 15.0 cm、長さ 12.0 cm 以上、幅 10.0 ~ 12.0 cm の円錐を素材とし、これを分割する。この分割面は、ほぼ正円形である。これが打面として利用される。

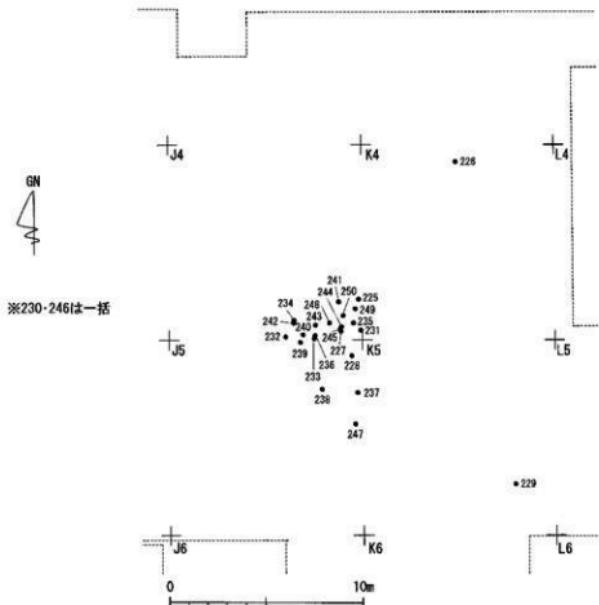
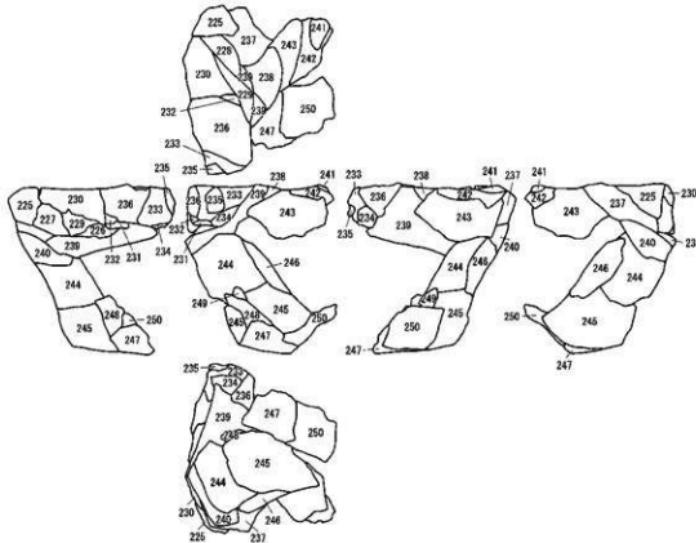
工程①②③での分割面を打面とした縦長剥片剥離が行われる。このうち 1 枚の縦長剥片 (225→226→227 + 228→229→230→231→232) は、細石刃核として利用されている。まず、素材剥片の腹面を打面として、側面調整が施される。この段階では、細石刃剥離は行われていない。その後、先の側面調整面を打面に変更し、その打面から側面調整が施される。その後、細石刃核の後方部分が折れる。さらに側面調整が施され、細石刃剥離が行われる。あまり多くの細石刃は剥離されていない。

工程④⑤は、工程①②③における剥離面を打面とした剥片剥離が行われる。工程①②は、同一の石核で行われており、この右核は欠落している。残核形態は不明である。

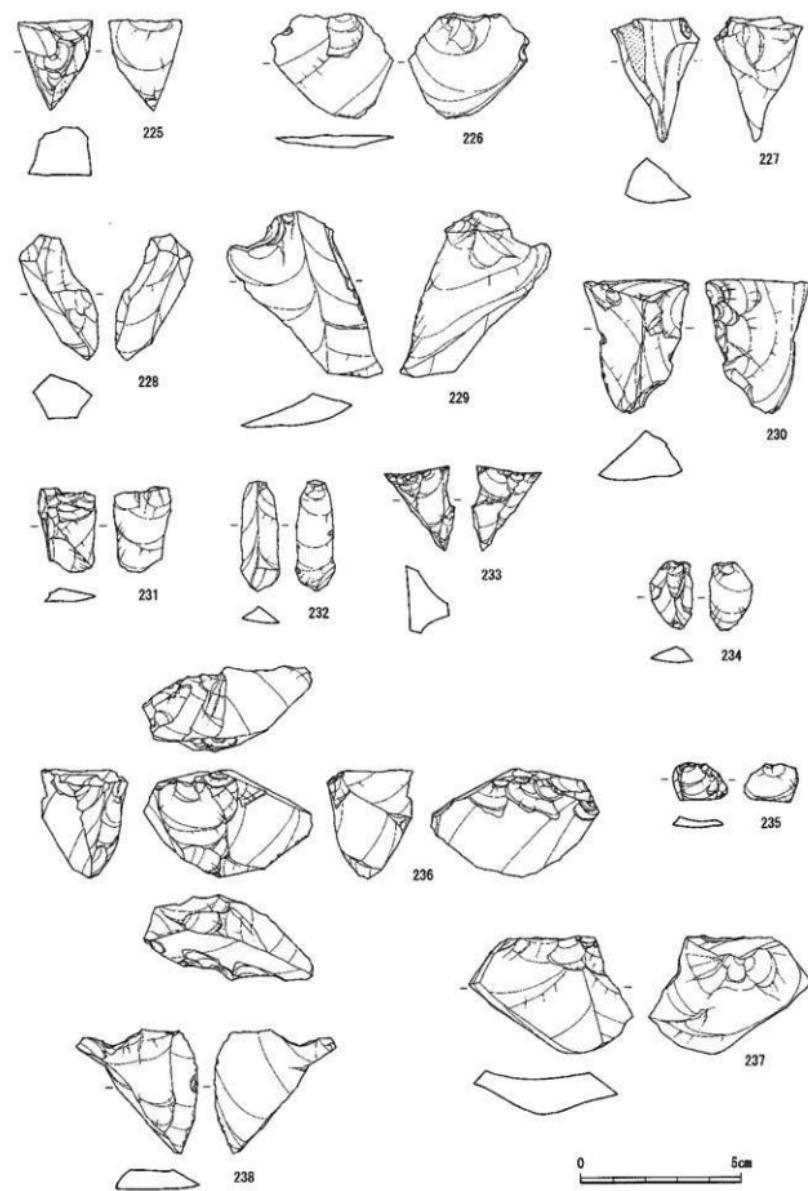
分布：B ブロックを中心に分布する。ただし、剥片 (226・229) はブロック外に分布する。剥片 (226) は北に 10.0 m、剥片 (229) は南東に 8.0 m に位置する。



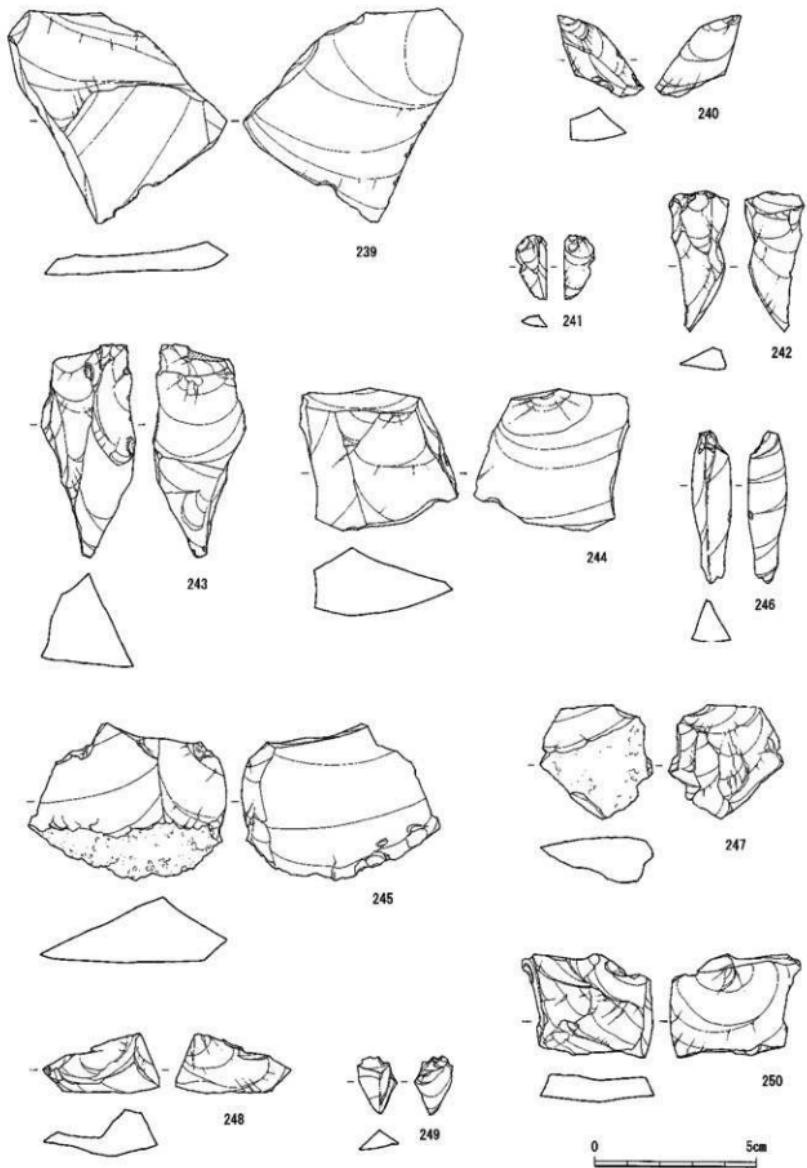
第55図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 43 (S=2/3)



第56図 旧石器時代接合資料II-⑯分布図 (S=1/250)



第57図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 44 (S=2/3)



第58図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 45 (S-2/3)

黒曜石製石器

桑ノ木津留産黒曜石

<単体資料>

細石刃 1点 (第59図—251)

251の部位は中間部である。背面左側辺と腹面右側辺に微小剥離痕が認められる (図版3)。

細石刃核 4点 (第59図—252~255)

252は、角礫を素材とする。平坦な自然面を打面とする。石核調整の痕跡は認められない。作業面に見られる剥離面の形状は一定せず、これが細石刃かどうかは不明である。石核の下面においても剥片剥離が行われている。それぞれの剥離痕は離れており、それらの切り合い関係は不明である。

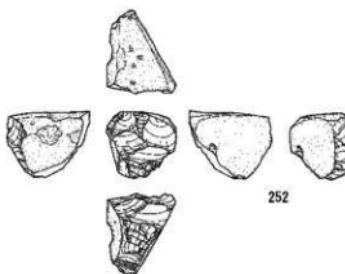
253は、角礫を素材とする。まず下面が形成され、次いで打面が形成される。石核調整はまったく行われていない。細石刃剥離は小口面の一端で行われる。

254は、薄い亜角礫を素材とする。細石刃剥離が亜角礫の2つの小口面で行われているが、その剥離は、双方の作業面を打面として行われている。切り合い関係からそれぞれの作業面を、先に剥離しているものを作業面a、後のものを作業面bとする。作業面bの右側にある剥離痕は、稜調整の可能性がある。しかし、それが作業面aでの細石刃剥離に先立つことから、作業面aを主体に考えた場合に、石核の側面調整とも考えられる。

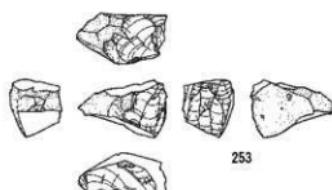
255は、角礫を素材とする。平坦な自然面から細石刃に類似する剥片が剥離される。細石刃の剥離痕と確実に言えるものがなく、失敗品と考えられる。



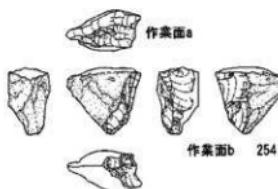
251



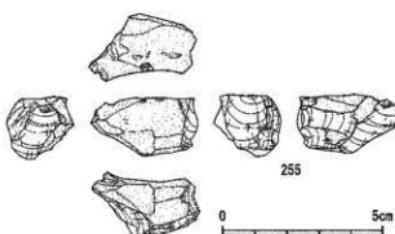
252



253



254



255



第59図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 46 (S=2/3)

桑ノ木津留産黒曜石製細石刃核単体資料の評価

素材の利用：小角礫素材。

打面の設定：角礫平坦面を打面に設定するものが多く、単剥離打面のもの（252）や、先行する細石刃作業面を打面とするもの（254）がある。

石核の調整：基本的には施されないが、稜上調整が見られるもの（254）がある。

作業面の設定：打面転移が行われるもの一定量認められる。異なる平坦面を打面とするもの（255）や、先行する細石刃作業面に打面を転移するもの（254）がある。

細石刃核は、打面の設定方法から見れば、船野型に近いが、側面調整が行われないことや打面転移を行うことなど異なる点もある。これらの特徴は、野岳・休場II型（芝2007）に近いものである。

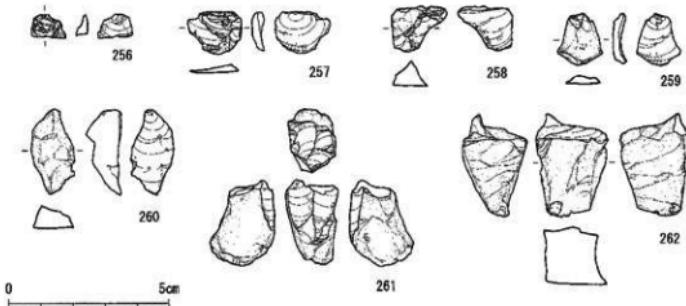
剥片 5点（第60図—256～260）

259・260は、自然面付きの剥片、その他は調整剥片と考えられる剥片である。出土した細石刃核は、細やかな石核調整が施されていないものであり、剥片剥離が行われたとすれば、打面形成あるいは調整に関連するものと予想される。これらの剥片もそうした類のものと想定される。

石核・原石 各1点（第60図—261・262）

261は石核である。石核調整は全く施されておらず、打面再生の痕跡が認められる。形態的に細石刃核に類似するが、作業面の剥離面がやや大きいことから、ここでは石核とした。

262は原石である。細石刃核、石核も同様のサイズであることから、こうした角礫を複数搬入していたものと考えられる。



第60図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図47 (S-2/3)

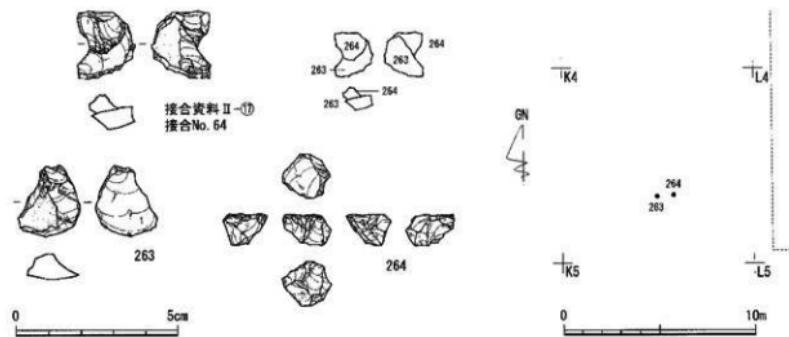
<接合資料>

接合資料II—⑪ 接合No.64（第61図—263・264）

作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元：「263→264」

角礫を素材とする。まず、2～3回の打撃によって打面が形成される。石核調整等は行われず、打面から細石刃と思われる小剥片が剥離されている。剥離面からみて2～3枚しか剥離されていない。その後打面再生が行われ、更新された打面（単剥離打面）から細石刃が剥離される。この細石刃は、かなり短く細い。最後に、意図は不明だが、右側面から作業面側へ、作業面から背側への剥片剥離が行われている。



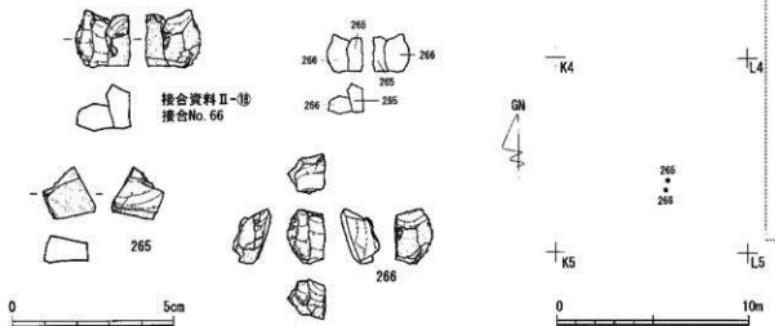
第61図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 48 (S=2/3) 接合資料Ⅱ-⑪分布図 (S=1/250)

接合資料Ⅱ-⑩ 接合No.66 (第62図-265・266)

作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元： [265→266]

角礫を素材とする。角礫が (265) と (266) の 2 つに分割される。265は剥離された後に折れている。以下は266における作業である。まず、1回の打撃によって打面が形成される。打面調整などは行われていない。最後に細石刃剥離が行われる。細石刃剥離痕は 2 条残っている。



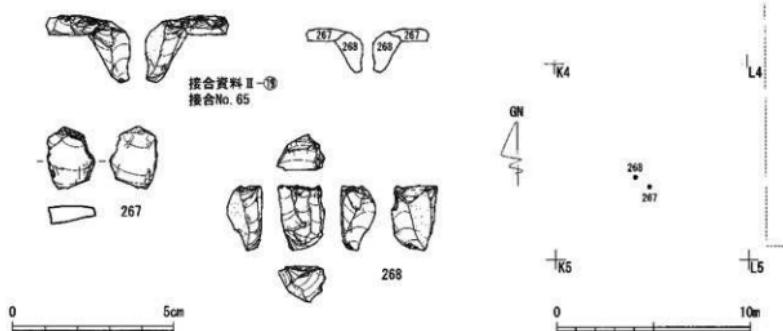
第62図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 49 (S=2/3) 接合資料Ⅱ-⑩分布図 (S=1/250)

接合資料Ⅱ-⑪ 接合No.65 (第63図-267・268)

作業内容：細石刃製作

剥離作業の復元： [267→268]

角礫を素材とする。その他のものよりもや大ぶりである。まず、石核調整が行われる。これは背面下端からの加撃によるもので、その他に調整は認められない。次いで、打面が形成される。打面と作業面の接触部には、細やかな調整が施される。これを打面とした細石刃剥離が行われるが、この剥離は細石刃核の側面部でのものである。その後打面再生が行われ、再び細石刃剥離が行われる。細石刃核の下部に大きな剥離面が認められることから、細石刃剥離の過程で作業面再生が行われた可能性がある。



第63図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 50 (S=2/3) 接合資料II-⑩分布図 (S=1/250)

腰岳系黒曜石

〈単体資料〉

細石刃 1点 (第64図-269)

269の部位は中間部である。上下の端部に微小剥離痕が認められ、さらにそれとともに線状痕が認められる(図版3)。線状痕は、上下端部の全面に著しく認められ、その縁辺に直交している。腹面左側縁には刃部に平行する線状痕も認められるが、その他の刃部には認められない。

細石刃核 1点 (第64図-270)

270は、本遺跡唯一の腰岳系黒曜石の細石刃核である。大きさからおそらく剥片素材と考えられるが、素材面が認められず、詳細は不明である。石核調整は側面において認められる。どちらの側面から調整したかは不明だが、両側面ともに、下面から打面へ向かう打撃によって側面が形成される。右側面では、下方および作業面側からの打撃による、やや細やかな側面調整も行われる。細石刃剥離は2面で行われ、両者は双方の作業面を打面としている。先に剥離されているものを作業面a、後のものを作業面bとすると、作業面aには細石刃剥離面が5条、作業面bには4条残る。

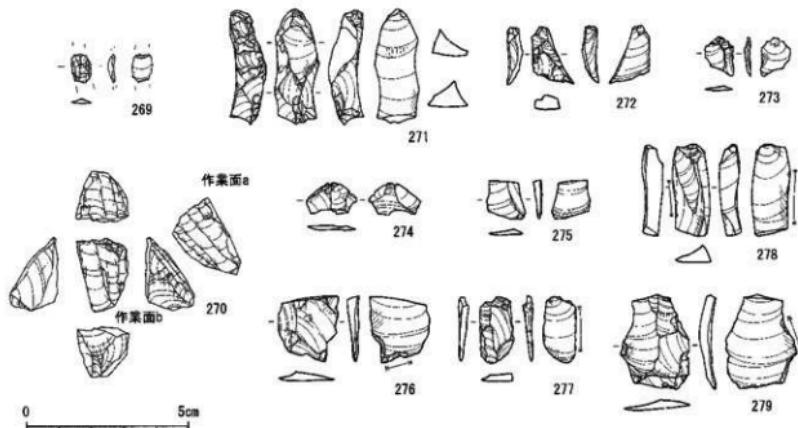
スパール 1点 (第64図-271)

271は腰岳系黒曜石製のスパールである。背面側から細やかな調整が行われており、とさか状の稜が形成される。背面には、同一方向の剥離面が認められることから、スパール剥離以前にも同様のスパールが剥離されたものと想定される。左側面下部の稜線には消れが認められる。下半部を欠損する。

なお、このスパールの打面部全体に横方向の擦痕が認められる。こうした資料は、唐津市の上場台地の細石刃石器群(田島編)や泉福寺洞穴(麻生1984)において特徴的に認められるものである。

剥片 8点 (第64図-272~279)

調整剥片と見られる小さな剥片(272~273)と、形態的に整ったもの(276~279)とに分類される。後者には、微小剥離痕が認められる。特に、278には左側縁の表裏両面に認められる(図版3)。276と279は、厚さが0.3cmに満たない薄手の剥片である。製作された痕跡が認められず、この状態で搬入されたものと考えられる。その他の剥片は非常に小さな剥片で、何らかの調整剥片と考えられるが、実態は定かではない。



第64図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 51 (S=2/3)

不明黒曜石

色調や質感は腰岳系黒曜石に類似するが、蛍光X線分析の結果（第IV章第1節）、化学組成が腰岳系とは異なり産地不明と考えられるので、ここでは腰岳系黒曜石とは分けて記述する。

<単体資料>

剥片 3点（第65図—281～282）

剥片全てのものに折れ、稜上のつぶれが認められる。かなり消費されたものと考えられる。



第65図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 52 (S=2/3)

その他の石材製石器

スクレイバー 2点（第66図—283・284）

283は、ホルンフェルス製の紙長剣片を素材とする。剥片の右側縁には、連続的な二次加工が認められる。刃部角は30～40°である。

284は、砂岩製の厚みのある剥片を素材とする。腹面のほとんどが自然で構成され、打面は単剥離打面である。剥片の下部に粗い二次加工が施されている。刃部角は30～40°である。

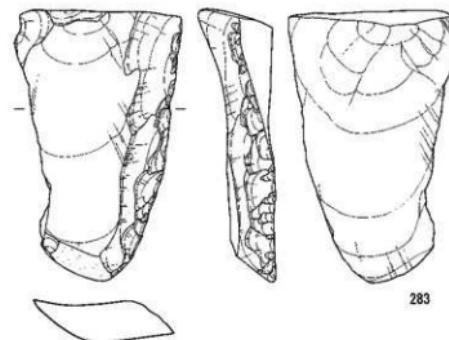
敲石 2点（第67図—285・286）

285は、拳よりもやや大きい礫岩（長軸10.0 cm、短軸8.0 cm）を素材とする。長軸の両端部にあばた状のつぶれ痕が認められるが、先端部には痕跡がなく、斜辺部に径2.0 cm前後の大きさで認められる。

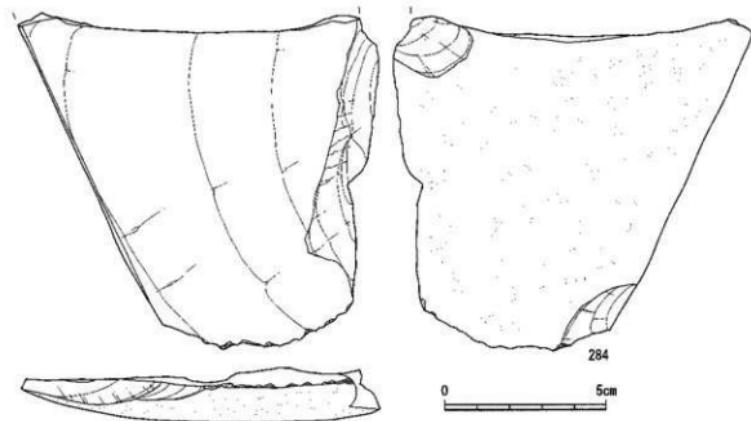
286は、楕円形のチャート礫（長さ6.1 cm、幅3.5 cm）を素材とする。両端部が敲打部として使用され、中央部にあばた上の敲打痕が認められる。そのつぶれの範囲は、上部が13.5 cm×14.7 cm、下部が21.5 cm×19.5 cmであり、下部においてつぶれが著しい。

磨石 1点 (第67図-287)

287は、拳大の硬砂岩（長軸 10.5 cm、短軸 5.5 cm）を素材とする。穂の平坦面に擦痕が認められ、特にその上部から中央部にかけて著しい。その平坦面は、使用のためかやや凹んでいる。

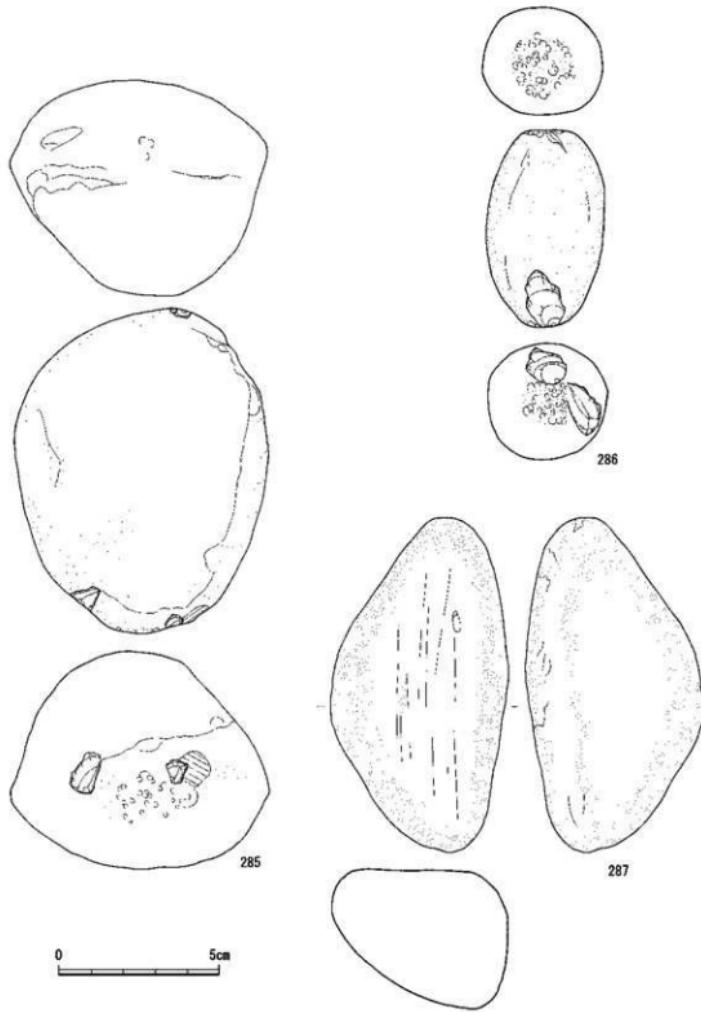


283



284

第66図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 53 (S-2/3)



第67図 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 54 (S-2/3)

【参考文献】

- 麻生優編1984『東福寺洞穴の発掘記録』集地書館、東京。
- 岩谷史記1998「狸谷遺跡V層石器群における特徴的なナイフ形石器について－狸谷型ナイフ形石器研究（1）－」『肥後考古』第11号、p. 81-102、肥後考古学会、熊本。
- 芝康次郎2007「九州細石刃石器群編年の再検討」『古文化談叢』第56号、p. 1-23、九州古文化研究会、福岡。
- 山島龍太編1992『中尾ニッ枝遺跡（2）』唐津市埋蔵文化財調査報告第50集 唐津市教育委員会、佐賀。
- 松藤和人1992「南九州における姶良In火山灰直後の石器群の評価をめぐって」『考古学と生活文化』同志社大学文学部 生活文化学科、京都。

番号	器種	記号番号	石材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合率%	備考
1	ナイフ形石器	789	武鉄岩	-47679.071	51738.917	67.684	M4	3.8	1.6	1.0	4.7		
2	ナイフ形石器	835	流紋岩	-47678.409	51736.509	67.119	M1	3.9	1.7	1.2	5.4		
3	剣形石器頭部	136	流紋岩	-47658.932	51711.423	66.335	K5	8.2	3.3	1.5	31.5		
4	剣形石器頭部	638	流紋岩	-47668.708	51698.012	65.399	J3	5.8	3.1	1.1	15.1		
5	スクレイパー	134	流紋岩	-47668.297	51709.533	66.160	J5	5.0	3.5	0.9	9.5		
6	剣片	773	流紋岩	-47628.569	51738.854	67.183	M5	3.2	8.1	1.9	34.1		
7	剣片	780	流紋岩	-47663.991	51737.371	67.284	M5	4.0	7.7	1.1	31.9		
8	剣片	782	流紋岩	-47684.774	51735.283	67.124	M5	6.5	3.9	0.8	30.2		
9	剣片	836	流紋岩	-47677.480	51736.708	67.128	M4	6.9	4.2	0.6	26.3		
10	手斧	781	流紋岩	-47684.169	51727.418	67.135	M5	5.7	5.8	5.2	176.3	30	接合資料I-①
11	手斧	763	流紋岩	-47668.072	51738.802	67.202	M5	4.8	5.9	1.4	37.2	30	接合資料I-①
12	錐形石刀	408	流紋岩	-47671.760	51712.722	66.792	K4	2.0	6.7	0.5	0.4		
13	錐形石刀	809	流紋岩	-47673.152	51715.581	66.991	K4	1.7	6.6	0.3	0.4		
14	錐形石刀	331	流紋岩	-47677.182	51715.581	66.991	K4	1.7	6.6	0.3	0.4		
15	錐形石刀	561	流紋岩	-47678.538	51713.127	66.446	K4	1.2	6.5	0.2	0.1		
16	錐形石刀	618	流紋岩	-47669.157	51706.305	66.354	J3	1.3	6.5	0.2	0.1		微小刮削
17	錐形石刀	720	流紋岩	-47674.651	51707.464	66.199	J4	1.3	6.6	0.2	0.1		微小刮削
18	錐形石刀	325	流紋岩	-47676.333	51713.223	66.714	K4	0.6	6.5	0.2	0.1		
19	錐形石刀破片	199	流紋岩	-47679.092	51702.821	66.149	J4	2.0	6.9	0.4	0.9		
20	錐形石刀様似片	278	流紋岩	-47676.853	51711.116	66.722	K4	2.7	6.9	0.5	1.1		
21	錐形石刀様似片	433	流紋岩	-47676.345	51713.131	66.757	K4	2.4	6.9	0.3	0.4		
22	海心形刃	7	武鉄岩	-47679.583	51706.656	66.445	J3	2.7	4.4	2.7	30.1		
23	海石刃核	237	武鉄岩	-47678.988	51709.127	66.526	J4	2.3	4.1	1.3	24.5		
24	海石刃核	451	武鉄岩	-47676.430	51715.802	66.583	K4	2.4	4.5	1.7	7.7		
25	海心形刃	488	流紋岩	-47676.611	51714.706	66.732	K4	3.5	8.0	1.3	44.9		
26	海石刃核	556	武鉄岩	-47676.145	51712.972	66.633	K4	2.9	2.4	1.5	10.0		
27	海石刃核	777	武鉄岩	-47674.505	51706.090	66.452	J4	2.5	2.7	1.1	7.3		
28	海石刃核	766	流紋岩	-47673.170	51718.166	66.548	K4	2.3	4.5	1.7	18.2		
29	海石刃核	870	流紋岩	-47674.895	51707.412	66.618	I4	2.8	2.6	1.9	9.9		
30	スクレイパー	176	流紋岩	-47682.177	51711.873	66.553	K5	8.7	8.0	2.1	108.5		
31	スクレイパー	648	流紋岩	-47667.430	51713.496	67.391	M3	4.6	4.2	1.3	21.9		
32	スクレイパー	100	流紋岩	-47669.198	51735.290	67.389	M3	3.0	4.2	1.0	9.7		
33	スクレイパー	643	流紋岩	-47658.873	51702.500	66.304	J5	5.7	5.9	2.5	77.9		
34	スクレイパー	551	流紋岩	-47658.873	51702.500	66.304	J2	10.5	8.0	3.0	242.5		
35	手斧	57	流紋岩	-47694.594	51702.023	66.382	J5	1.7	5.2	1.4	16.3		
36	手斧	168	流紋岩	-47688.539	51719.733	66.829	K5	8.2	5.0	1.2	54.7		
37	洞片	10	流紋岩	-47690.181	51708.689	66.388	J5	4.9	3.0	1.5	7.4	7	接合資料II-①
38	洞片	592	武鉄岩	-47679.440	51708.704	66.335	J4	5.1	3.1	1.7	21.6	7	接合資料II-①
39	洞片	61	武鉄岩	-47691.008	51709.791	66.361	J5	4.4	1.7	1.0	5.7	7	接合資料II-①
40	海心形刃	29	武鉄岩	-47680.726	51706.757	66.596	J5	2.6	1.9	4.0	20.0	7	接合資料II-①
41	一次加工剣片	331	武鉄岩	-47675.909	51714.039	66.661	K4	5.1	2.7	2.0	21.9	16	接合資料II-②
42	剣片	335	流紋岩	-47677.227	51714.417	66.781	K4	2.2	2.4	1.2	5.5	16	接合資料II-②
43	剣片	286	流紋岩	-47676.486	51710.379	66.677	K4	1.9	2.3	0.6	2.0	16	接合資料II-②
44	剣片	401	武鉄岩	-47676.988	51711.892	66.747	K4	1.3	1.0	0.3	0.3	16	接合資料II-②
45	剣片	416	武鉄岩	-47675.255	51712.559	66.712	K4	3.3	4.9	1.2	14.4	16	接合資料II-②
46	洞片	409	流紋岩	-47677.686	51712.229	66.766	K4	2.1	2.1	0.9	2.6	16	接合資料II-②
47	剣片	423	流紋岩	-47677.836	51713.296	66.795	K4	2.3	1.6	0.5	2.4	16	接合資料II-②
48	縫合石刀	317	流紋岩	-47676.894	51713.861	66.839	K4	2.2	3.8	1.6	9.5	16	接合資料II-②
49	洞片	740	武鉄岩	-47673.781	51715.109	66.802	K4	4.7	4.1	1.9	19.5	17	接合資料II-③
50	洞片	516	武鉄岩	-47676.156	51715.227	66.662	K4	1.2	2.5	0.5	1.0	17	接合資料II-③
51	二次加工剣片	271	流紋岩	-47678.792	51710.092	66.616	J4	4.5	3.5	1.1	16.6	17	接合資料II-③
52	スクレイパー	366	流紋岩	-47878.847	51713.801	66.771	K4	4.3	3.8	1.2	18.5	17	接合資料II-③
53	手斧	233	流紋岩	-47677.716	51705.516	66.682	J4	2.4	2.2	0.7	2.6	18	接合資料II-④
54	洞片	487	武鉄岩	-47676.619	51711.444	66.691	K4	3.1	1.8	0.5	2.8	18	接合資料II-④
55	洞片	660	武鉄岩	-47676.360	51711.533	66.598	K4	1.4	1.1	0.4	0.4	18	接合資料II-④
56	縫合石刀	707	武鉄岩	-47677.444	51711.363	66.929	K4	2.8	1.6	2.5	9.6	18	接合資料II-④
57	洞片	607	武鉄岩	-47660.154	51705.772	66.400	J3	4.9	7.1	2.9	74.6	21	接合資料II-⑤
58	洞片	634	武鉄岩	-47669.716	51695.376	66.985	I3	3.0	2.7	1.4	10.3	24	接合資料II-⑤
59	洞片	619	武鉄岩	-47669.909	51705.902	66.434	J3	4.8	3.0	1.4	21.9	24	接合資料II-⑤
60	洞片	823	武鉄岩	-47670.813	51705.396	66.510	J4	2.0	2.0	1.2	6.1	24	接合資料II-⑤
61	剣片	847	流紋岩	-47669.084	51702.466	66.268	J3	4.1	4.1	1.6	25.1	21	接合資料II-⑤
62	洞片	848	武鉄岩	-47669.112	51703.925	66.414	J3	3.1	5.9	1.5	23.9	24	接合資料II-⑤
63	洞片	924	武鉄岩	-47670.925	51703.398	66.398	J4	3.3	4.3	1.0	11.4	24	接合資料II-⑤
64	洞片	940	流紋岩	-47671.763	51702.756	66.294	J4	2.6	3.5	0.7	6.1	24	接合資料II-⑤
65	洞片	611	武鉄岩	-47668.686	51705.586	66.389	J3	4.2	3.6	0.7	8.8	24	接合資料II-⑤
66	洞片	564	武鉄岩	-47675.972	51712.103	66.644	K4	5.1	1.7	0.6	5.8	31	接合資料II-⑥
67	洞片	286	流紋岩	-47675.554	51712.234	66.829	K4	3.5	3.3	0.6	6.3	31	接合資料II-⑥
68	洞片	274	流紋岩	-47677.108	51710.909	66.703	K4	2.8	2.4	0.6	4.0	31	接合資料II-⑥
69	手斧	1-4	流紋岩	-47676.517	51711.904	66.710	K4	2.7	2.5	0.5	4.3	31	接合資料II-⑥
70	手斧	505	流紋岩	-47677.367	51715.342	66.907	K4	3.2	2.9	0.5	6.8	31	接合資料II-⑥
71	洞片	333	流紋岩	-47675.796	51715.020	66.761	K4	1.9	1.6	0.5	1.4	31	接合資料II-⑥

第1表 旧石器時代石器計測表1

番号	器種	注記番号	石材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	検査番号	備考
73	刮片	337	流紋岩	47676.911	51714.545	66.891	K4	2.6	1.7	1.2	4.6	31	混合資料Ⅱ⑤
74	刮片	739	流紋岩	47675.963	51716.531	66.762	K4	2.4	1.3	0.3	1.4	31	混合資料Ⅱ⑥
75	刮片	349	流紋岩	47677.726	51713.614	66.697	K4	2.3	1.3	0.6	1.3	31	混合資料Ⅱ⑦
76	細石工具	526	流紋岩	47677.320	51713.673	66.696	K4	2.2	1.5	2.4	7.8	33	混合資料Ⅱ⑦
77	刮片	373	流紋岩	47676.884	51713.026	66.716	K4	4.4	2.3	2.1	29.4	33	混合資料Ⅱ⑦
78	薄刃石核	713	流紋岩	47671.812	51716.836	66.557	K4	2.7	1.5	1.6	9.0	33	混合資料Ⅱ⑦
79	刮片	393	流紋岩	47678.402	51711.791	66.670	K4	2.7	3.7	0.8	5.6	34	混合資料Ⅱ⑧
80	刮片	507	流紋岩	47676.491	51714.908	66.773	K4	1.5	2.0	0.9	1.9	34	混合資料Ⅱ⑨
81	刮片	501	流紋岩	47676.423	51714.811	66.711	K4	2.3	3.5	0.8	3.8	34	混合資料Ⅱ⑩
82	刮片	702	流紋岩	47676.660	51714.692	66.592	K4	3.5	2.4	0.5	4.2	34	混合資料Ⅱ⑪
83	刮片	416	流紋岩	47677.561	51712.563	66.789	K4	3.8	2.5	0.8	6.4	34	混合資料Ⅱ⑫
84	刮片	341	流紋岩	47671.361	51714.670	66.813	K4	2.0	1.3	0.4	0.9	34	混合資料Ⅱ⑬
85	刮片	485	流紋岩	47676.823	51714.727	66.729	K4	1.6	1.3	0.3	0.5	34	混合資料Ⅱ⑭
86	二次加工刮片	478	流紋岩	47677.666	51714.663	66.699	K4	2.2	2.8	1.0	3.2	34	混合資料Ⅱ⑮
87	刮片	698	流紋岩	47658.852	51711.232	66.759	K2	2.7	1.6	0.6	2.8	34	混合資料Ⅲ①
88	刮片	291	流紋岩	47675.558	51713.730	66.754	K4	2.5	1.5	0.6	1.3	34	混合資料Ⅲ②
89	擦痕工具	512	流紋岩	47676.456	51715.248	66.730	K4	2.8	2.2	3.8	20.1	34	混合資料Ⅲ③
90	刮片	396	流紋岩	47676.791	51715.731	66.850	K4	2.8	1.3	0.8	2.5	37	混合資料Ⅲ④
91	刮片	671	流紋岩	47677.176	51714.391	66.761	K4	3.2	2.1	0.6	6.1	37	混合資料Ⅲ⑤
92	刮片	526	流紋岩	47676.971	51713.687	66.698	K4	3.5	1.9	2.9	23.3	37	混合資料Ⅲ⑥
93	刮片	417	流紋岩	47676.791	51712.771	66.818	K4	2.3	1.0	0.8	1.6	43	混合資料Ⅲ⑦
94	刮片	494	流紋岩	47676.783	51714.598	66.769	K4	2.3	1.5	1.0	3.7	43	混合資料Ⅲ⑧
95	刮片	430	流紋岩	47676.812	51712.913	66.818	K4	2.6	3.0	3.5	17.8	43	混合資料Ⅲ⑨
96	刮片	87	流紋岩	47681.262	51704.793	66.171	J5	3.1	2.3	0.1	2.1	71	混合資料Ⅳ①
97	擦痕工具	30	流紋岩	47680.127	51708.695	66.309	J5	3.2	1.3	3.8	18.2	71	混合資料Ⅳ②
98	刮片	852	流紋岩	47665.595	51689.490	66.853	I73	3.0	1.5	4.0	1.7	78	混合資料Ⅳ③
99	刮片	85	流紋岩	47681.358	51706.651	66.002	J5	1.9	1.3	7.3	7.3	78	混合資料Ⅳ④
100	擦痕工具	82	流紋岩	47680.838	51701.968	66.987	J5	2.6	1.7	1.7	5.4	78	混合資料Ⅳ⑤
101	二次加工刮片	225	流紋岩	47675.717	51706.666	66.381	J4	7.9	3.9	1.8	79.6	79	混合資料Ⅳ⑥
102	刮片	725	流紋岩	47675.763	51708.870	66.377	J4	2.7	0.9	0.5	1.5	79	混合資料Ⅳ⑦
103	刮片	224	流紋岩	47675.344	51706.630	66.372	J4	1.8	2.4	0.4	1.5	79	混合資料Ⅳ⑧
104	刮片	865	流紋岩	47675.581	51699.314	66.987	J4	5.1	1.9	1.7	45.2	79	混合資料Ⅳ⑨
105	刮片	5	流紋岩	47676.754	51706.673	66.927	J4	2.3	1.6	0.8	1.9	79	混合資料Ⅳ⑩
106	刮片	661	流紋岩	47605.808	51695.754	65.827	I3	3.1	2.2	1.2	9.1	79	混合資料Ⅳ⑪
107	刮片	723	流紋岩	47673.809	51707.860	66.312	J4	3.2	1.8	1.0	5.2	79	混合資料Ⅳ⑫
108	刮片	763	流紋岩	47674.321	51701.751	66.353	J4	4.6	3.0	1.8	16.6	79	混合資料Ⅳ⑬
109	刮片	721	流紋岩	47674.701	51707.119	66.230	J4	2.6	1.2	0.3	1.4	79	混合資料Ⅳ⑭
110	刮片	456	流紋岩	47683.374	51694.336	66.039	I3	2.5	2.6	0.3	2.9	79	混合資料Ⅳ⑯
111	刮片	750	流紋岩	47674.814	51706.046	66.426	J4	2.4	2.6	0.6	4.2	79	混合資料Ⅳ⑰
112	石核	998	流紋岩	47619.917	51706.673	66.185	J4	4.0	3.6	4.6	61.7	79	混合資料Ⅳ⑱
113	刮片	761	流紋岩	47674.298	51703.602	66.437	J4	3.8	3.5	0.8	5.1	79	混合資料Ⅳ⑲
114	刮片	796	流紋岩	47669.235	51706.630	66.515	J5	2.8	1.9	0.4	2.2	79	混合資料Ⅳ⑳
115	刮片	191	流紋岩	47675.102	51703.378	66.294	J4	2.0	1.9	0.5	1.5	79	混合資料Ⅳ㉑
116	刮片	195	流紋岩	47676.861	51704.160	66.225	J4	2.3	3.5	0.6	3.9	79	混合資料Ⅳ㉒
117	刮片	199	流紋岩	47676.833	51709.127	66.277	J4	2.2	2.3	0.4	2.2	79	混合資料Ⅳ㉓
118	刮片	622	流紋岩	47665.922	51696.960	66.994	J3	1.8	1.8	0.1	1.1	79	混合資料Ⅳ㉔
119	刮片	722	流紋岩	47674.143	51707.106	66.302	J4	2.7	2.9	0.7	4.5	79	混合資料Ⅳ㉕
120	刮片	769	流紋岩	47673.734	51703.620	66.057	J4	2.3	1.9	0.4	2.6	79	混合資料Ⅳ㉖
121	刮片	223	流紋岩	47675.518	51706.815	66.255	J4	2.9	2.1	0.9	4.3	79	混合資料Ⅳ㉗
122	刮片	607	流紋岩	47676.040	51706.040	66.323	J4	2.7	2.0	1.5	9.8	79	混合資料Ⅳ㉘
123	石核	608	流紋岩	47666.527	51706.080	66.349	J3	5.6	2.6	3.2	48.0	79	混合資料Ⅳ㉙
124	刮片	307	流紋岩	47676.374	51701.951	66.873	K4	1.7	2.9	0.8	4.2	80	混合資料Ⅳ㉚
125	刮片	336	流紋岩	47676.960	51714.454	66.791	K4	2.6	4.1	0.9	6.7	80	混合資料Ⅳ㉛
126	刮片	366	流紋岩	47678.176	51713.314	66.702	K4	4.2	3.4	1.0	10.2	80	混合資料Ⅳ㉝
127	刮片	435	流紋岩	47676.502	51713.028	66.795	K4	3.0	3.5	1.5	14.1	80	混合資料Ⅳ㉞
128	刮片	314	流紋岩	47676.720	51715.761	66.879	K4	1.9	1.1	0.4	0.5	80	混合資料Ⅳ㉟
129	刮片	318	流紋岩	47676.791	51713.378	66.890	K4	2.9	2.2	0.8	5.7	80	混合資料Ⅳ㉟
130	刮片	446	流紋岩	47675.992	51716.040	66.621	K4	2.7	4.3	1.3	15.0	80	混合資料Ⅳ㉟
131	刮片	160	流紋岩	47679.810	51712.801	66.763	K5	2.2	2.0	0.7	3.6	80	混合資料Ⅳ㉟
132	刮片	359	流紋岩	47678.111	51714.310	66.856	K4	3.2	2.7	1.4	11.5	80	混合資料Ⅳ㉟
133	刮片	297	流紋岩	47675.018	51711.728	66.795	K4	3.3	5.1	0.9	12.7	80	混合資料Ⅳ㉟
134	刮片	747	流紋岩	47677.948	51717.725	66.819	K4	3.1	6.1	2.2	36.9	80	混合資料Ⅳ㉟
135	刮片	456	流紋岩	47677.613	51716.066	66.715	K4	3.9	2.1	1.1	14.1	80	混合資料Ⅳ㉟
136	刮片	706	流紋岩	47678.299	51716.305	66.598	K4	1.3	1.9	1.7	5.0	80	混合資料Ⅳ㉟
137	刮片	309	流紋岩	47676.154	51715.464	66.757	K4	2.9	3.3	1.0	8.8	80	混合資料Ⅳ㉟
138	刮片	362	流紋岩	47679.143	51714.495	66.845	K4	2.0	3.5	1.2	7.1	80	混合資料Ⅳ㉟
139	刮片	699	流紋岩	47675.905	51714.205	66.588	K4	0.7	1.8	0.4	0.4	80	混合資料Ⅳ㉟
140	刮片	517	流紋岩	47677.552	51715.111	66.700	K4	3.7	2.6	1.3	9.7	80	混合資料Ⅳ㉟
141	刮片	582	流紋岩	47675.575	51712.778	66.592	K4	2.6	3.0	0.9	4.2	80	混合資料Ⅳ㉟
142	刮片	350	流紋岩	47678.035	51715.693	66.944	K4	4.1	3.8	1.0	11.0	80	混合資料Ⅳ㉟
143	刮片	348	流紋岩	47677.857	51713.850	66.821	K4	1.4	2.9	1.3	3.5	80	混合資料Ⅳ㉟
144	刮片	366	流紋岩	47678.584	51713.782	66.796	K4	2.7	3.7	0.8	7.0	80	混合資料Ⅳ㉟

第2表 旧石器時代石器計測表2

番号	器種	作記番号	石材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合No.	備考
140	刮片	653	流紋岩	-47076.541	51714.699	66.843	K4	2.8	3.5	0.8	6.6	80	接合資料Ⅱ-⑩
146	刮片	527	流紋岩	-47676.955	51713.648	66.833	K4	1.9	2.5	0.6	3.2	80	接合資料Ⅱ-⑨
147	刮片	619	流紋岩	-47679.007	51714.698	66.599	K4	2.2	2.6	1.3	7.5	80	接合資料Ⅱ-⑧
148	刮片	390	流紋岩	-47679.176	51710.736	66.897	K4	5.5	2.1	2.1	19.7	80	接合資料Ⅱ-⑦
149	刮片	422	流紋岩	-47077.017	51713.342	66.795	K4	4.6	2.5	2.1	19.3	80	接合資料Ⅱ-⑥
150	刮片	156	流紋岩	-47680.128	51711.759	66.696	K5	2.9	2.1	1.0	4.7	80	接合資料Ⅱ-⑤
151	刮片	240	流紋岩	-47678.268	51706.661	66.533	J4	2.7	2.8	0.8	4.7	80	接合資料Ⅱ-④
152	刮片	425	流紋岩	-47677.216	51713.098	66.737	K4	3.2	4.2	0.9	8.6	80	接合資料Ⅱ-③
153	刮片	793	流紋岩	-47666.212	51714.620	66.871	K3	3.7	3.2	0.3	6.4	80	接合資料Ⅱ-②
156	刮片	666	流紋岩	-47675.004	51712.201	66.802	K4	3.8	3.9	0.9	11.6	80	接合資料Ⅱ-①
157	刮片	249	流紋岩	-47679.041	51709.865	66.493	J4	2.0	3.0	0.9	3.5	80	接合資料Ⅱ-⑩
158	刮片	419	流紋岩	-47676.586	51712.307	66.155	K3	3.0	2.4	0.8	3.8	80	接合資料Ⅱ-⑨
159	刮片	342	流紋岩	-47676.945	51713.943	66.889	K4	2.3	3.5	0.6	9.3	80	接合資料Ⅱ-⑧
160	刮片	506	流紋岩	-47676.264	51714.927	66.711	K4	2.3	3.3	0.7	3.6	80	接合資料Ⅱ-⑦
161	刮片	670	流紋岩	-47677.081	51711.886	66.584	K4	2.6	2.4	0.3	1.2	80	接合資料Ⅱ-⑥
162	刮片	258	流紋岩	-47678.918	51709.621	66.895	J4	1.3	3.0	0.3	1.4	80	接合資料Ⅱ-⑤
163	刮片	18	流紋岩	-47681.551	51709.955	66.646	J5	2.6	3.8	0.8	8.5	81	接合資料Ⅱ-④
164	刮片	69	流紋岩	-47681.151	51707.747	66.447	J5	3.0	3.3	1.9	24.0	81	接合資料Ⅱ-③
165	刮片	40	流紋岩	-47679.384	51707.437	66.286	J5	2.3	3.1	1.7	8.8	81	接合資料Ⅱ-②
166	刮片	48	流紋岩	-47680.049	51706.578	66.388	J5	3.5	4.3	2.0	32.7	81	接合資料Ⅱ-①
167	丸片	238	流紋岩	-47678.547	51707.812	66.509	J4	2.2	1.7	1.5	4.5	81	接合資料Ⅱ-⑩
168	刮片	263	流紋岩	-47670.385	51709.566	66.414	J4	6.6	6.4	2.1	58.7	81	接合資料Ⅱ-⑨
169	刮片	23	流紋岩	-47681.581	51709.393	66.450	J5	2.9	1.4	0.6	1.3	81	接合資料Ⅱ-⑧
170	刮片	71	流紋岩	-47681.731	51707.796	66.495	J5	6.2	5.8	1.9	53.5	81	接合資料Ⅱ-⑦
171	刮片	60	流紋岩	-47681.698	51705.921	66.391	J5	2.6	1.9	0.8	9.9	81	接合資料Ⅱ-⑥
172	刮片	605	流紋岩	-47678.394	51705.940	66.107	J4	3.2	3.5	0.8	6.5	81	接合資料Ⅱ-⑤
173	スレーブバー	13	流紋岩	-47680.630	51709.934	66.331	J5	5.3	6.9	1.5	54.9	81	接合資料Ⅱ-④
174	丸片	248	流紋岩	-47679.613	51708.742	66.549	J4	4.6	5.6	1.0	21.6	81	接合資料Ⅱ-③
175	丸片	262	流紋岩	-47679.399	51709.760	66.364	J4	2.9	3.7	0.9	4.5	81	接合資料Ⅱ-②
176	丸片	4	流紋岩	-47679.670	51709.425	66.404	J5	8.1	8.5	2.9	186.0	81	接合資料Ⅱ-①
177	丸片	46	流紋岩	-47679.692	51706.640	66.332	J5	1.2	2.6	0.6	1.9	81	接合資料Ⅱ-⑩
178	丸片	387	流紋岩	-47679.591	51710.391	66.644	K4	2.6	4.3	1.2	10.9	81	接合資料Ⅱ-⑨
179	丸片	74	流紋岩	-47681.561	51705.479	66.289	J5	3.9	4.9	1.2	28.0	81	接合資料Ⅱ-⑧
180	刮片	380	流紋岩	-47679.212	51712.021	66.730	K4	4.5	3.5	1.9	26.1	81	接合資料Ⅱ-⑦
181	刮片	83	流紋岩	-47680.679	51702.143	66.927	J5	7.8	6.1	2.3	93.8	81	接合資料Ⅱ-⑥
182	刮片	5	流紋岩	-47680.066	51709.424	66.341	J5	4.1	3.3	0.8	9.7	81	接合資料Ⅱ-⑤
183	刮片	67	流紋岩	-47681.187	51707.680	66.457	J5	3.7	4.4	0.7	8.5	81	接合資料Ⅱ-④
184	刮片	172	流紋岩	-47689.391	51716.459	66.695	K5	2.9	2.2	0.4	2.4	81	接合資料Ⅱ-⑩
185	刮片	34	流紋岩	-47679.663	51707.737	66.391	J5	1.3	2.0	0.3	0.8	81	接合資料Ⅱ-⑨
186	刮片	255	流紋岩	-47679.721	51709.831	66.518	J4	5.9	1.0	1.6	25.3	81	接合資料Ⅱ-⑧
187	刮片	245	流紋岩	-47679.579	51706.651	66.302	J1	7.9	3.7	1.7	47.0	81	接合資料Ⅱ-⑦
188	刮片	72	流紋岩	-47681.747	51706.302	66.430	J5	3.5	2.3	0.7	5.2	81	接合資料Ⅱ-⑥
189	刮片	399	流紋岩	-47679.082	51706.529	66.206	J4	2.7	1.9	0.4	1.0	81	接合資料Ⅱ-⑤
190	刮片	192	流紋岩	-47675.467	51704.909	66.277	J4	5.3	4.5	1.6	24.5	81	接合資料Ⅱ-④
191	刮片	65	流紋岩	-47680.908	51707.366	66.445	J5	2.9	2.9	0.8	4.4	81	接合資料Ⅱ-③
192	刮片	597	流紋岩	-47678.916	51708.376	66.300	J4	1.6	2.3	0.5	1.7	81	接合資料Ⅱ-②
193	刮片	15	流紋岩	-47680.222	51707.386	66.332	J4	3.2	2.9	0.6	4.1	81	接合資料Ⅱ-①
194	刮片	862	流紋岩	-47673.502	51697.376	65.987	J4	7.4	7.2	1.3	47.5	81	接合資料Ⅱ-⑩
195	刮片	384	流紋岩	-47680.291	51710.482	66.510	K4	6.5	3.2	1.6	27.2	81	接合資料Ⅱ-⑨
196	刮片	173	流紋岩	-47689.141	51716.165	66.675	K5	5.5	4.2	2.0	21.5	81	接合資料Ⅱ-⑧
197	刮片	129	流紋岩	-47674.715	51694.737	66.051	J4	5.4	5.6	1.0	15.5	81	接合資料Ⅱ-⑦
198	刮片	38	流紋岩	-47679.897	51707.696	66.458	J5	4.6	6.0	1.9	49.5	81	接合資料Ⅱ-⑥
199	刮片	33	流紋岩	-47680.141	51705.103	66.392	J5	1.6	4.0	1.4	8.0	81	接合資料Ⅱ-⑤
200	刮片	212	流紋岩	-47687.561	51704.800	66.142	J4	1.6	3.5	0.8	3.6	81	接合資料Ⅱ-④
201	刮片	47	流紋岩	-47689.007	51707.090	66.320	J5	2.8	4.7	1.0	9.8	81	接合資料Ⅱ-③
202	刮片	231	流紋岩	-47679.003	51707.576	66.476	J4	2.8	1.9	0.5	2.2	81	接合資料Ⅱ-②
203	刮片	226	流紋岩	-47676.853	51707.083	66.460	J4	3.1	3.0	0.7	5.7	81	接合資料Ⅱ-①
204	刮片	202	流紋岩	-47679.791	51701.988	65.965	J4	3.1	2.0	0.9	1.7	81	接合資料Ⅱ-⑩
205	刮片	266	流紋岩	-47680.029	51709.822	66.669	J4	5.8	5.7	1.1	28.1	81	接合資料Ⅱ-⑨
206	刮片	54	流紋岩	-47690.389	51701.253	66.906	J5	3.0	1.6	1.2	3.3	81	接合資料Ⅱ-⑧
207	刮片	62	流紋岩	-47680.937	51704.510	66.339	J5	3.5	1.3	1.1	6.7	81	接合資料Ⅱ-⑦
208	刮片	389	流紋岩	-47679.245	51710.993	66.675	K4	4.0	1.7	2.1	6.2	81	接合資料Ⅱ-⑥
209	刮片	157	流紋岩	-47680.603	51711.762	66.708	K5	3.7	3.4	3.0	46.5	81	接合資料Ⅱ-⑤
210	刮片	150	流紋岩	-47679.850	51710.513	66.601	K5	2.6	4.1	2.9	26.7	81	接合資料Ⅱ-④
211	刮片	162	流紋岩	-47679.711	51713.690	66.902	K5	2.7	2.2	1.6	11.3	81	接合資料Ⅱ-③
212	刮片	151	流紋岩	-47679.811	51711.656	66.898	K5	3.0	2.1	1.9	11.7	81	接合資料Ⅱ-②
213	丸片	26	流紋岩	-47681.473	51708.467	66.472	J5	4.3	2.4	1.5	12.3	81	接合資料Ⅱ-①
214	丸片	21	流紋岩	-47681.432	51709.463	66.849	J5	0.9	2.3	0.7	0.8	81	接合資料Ⅱ-⑩
215	丸片	385	流紋岩	-47679.971	51710.977	66.337	K4	1.8	1.5	1.7	3.4	81	接合資料Ⅱ-⑨
216	丸片	35	流紋岩	-47679.693	51707.711	66.397	J5	2.1	3.4	1.3	4.5	81	接合資料Ⅱ-⑧

第3表 旧石器時代石器計測表3

番号	器種	注記番号	石材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合No	備考
217	刮削	377	滅蚊石	-47679.597	51712.829	66.696	K4	1.6	4.0	1.6	12.1	81	結合資料Ⅰ-⑨
218	刮片	152	滅蚊石	-47680.012	51709.986	66.621	K5	1.8	4.1	1.3	8.9	81	接合資料Ⅱ-⑩
219	重片	262・259	滅蚊石	-47678.549	51709.998	66.532	J4	2.9	3.7	1.0	9.9	81	接合資料Ⅱ-⑩
220	刮片	383	滅蚊石	-47690.409	51710.497	66.554	K4	2.2	2.5	1.7	8.1	81	接合資料Ⅱ-⑩
221	刮片	16	滅蚊石	-47680.916	51709.467	66.563	J5	2.9	4.3	2.4	27.9	81	接合資料Ⅱ-⑩
222	刮片	158	滅蚊石	-47680.401	51712.290	66.660	K5	3.0	2.1	1.6	10.6	81	接合資料Ⅱ-⑩
223	刮片	251	滅蚊石	-47678.605	51708.992	66.585	J4	1.6	2.3	1.7	3.9	81	接合資料Ⅱ-⑩
224	刮片	155	滅蚊石	-47680.195	51711.167	66.525	K5	4.6	2.5	2.3	19.7	81	接合資料Ⅱ-⑩
225	刮片	268	滅蚊石	-47677.919	51708.821	66.507	J4	2.8	2.3	1.7	9.8	81	接合資料Ⅱ-⑩
226	刮片	792	滅蚊石	-47670.581	51711.873	66.724	K4	3.2	3.7	0.5	4.5	83	接合資料Ⅱ-⑪
227	刮片	593	滅蚊石	-47679.539	51708.920	66.084	J4	3.8	2.8	1.5	9.0	83	接合資料Ⅱ-⑪
228	刮片	16	滅蚊石	-47680.811	51709.637	66.496	J5	3.8	2.4	1.4	9.1	83	接合資料Ⅱ-⑪
229	刮片	169	滅蚊石	-47687.393	51717.893	66.078	K5	5.1	1.8	1.1	14.6	83	接合資料Ⅱ-⑪
230	刮片	45	滅蚊石	-47679.524	51709.924	66.388	J4	4.0	3.3	1.8	16.2	83	接合資料Ⅱ-⑪
231	刮片	589	滅蚊石	-47679.508	51709.924	66.388	J4	2.8	1.6	0.4	2.1	83	接合資料Ⅱ-⑪
232	刮片	52	滅蚊石	-47678.814	51706.069	66.367	J5	3.4	1.2	0.6	2.1	83	接合資料Ⅱ-⑪
233	刮片	39	滅蚊石	-47670.930	51707.542	66.297	J5	2.6	2.2	2.3	8.1	83	接合資料Ⅱ-⑪
234	刮片	601	滅蚊石	-47679.001	51706.599	66.202	J4	2.1	1.3	0.5	1.2	83	接合資料Ⅱ-⑪
235	刮片	260	滅蚊石	-47679.137	51709.588	66.612	J4	1.1	1.7	0.3	0.3	83	接合資料Ⅱ-⑪
236	心模	36	滅蚊石	-47679.786	51707.586	66.437	J5	3.5	5.2	2.6	33.1	83	接合資料Ⅱ-⑫
237	刮片	91	滅蚊石	-47682.706	51709.742	66.446	J5	3.6	5.0	1.4	20.0	83	接合資料Ⅱ-⑫
238	刮片	90	滅蚊石	-47682.327	51707.926	66.500	J5	3.8	3.8	1.0	5.4	83	接合資料Ⅱ-⑫
239	刮片	49	滅蚊石	-47680.131	51706.820	66.286	J5	0.5	6.7	1.1	33.9	83	接合資料Ⅱ-⑫
240	刮片	45	滅蚊石	-47679.732	51706.961	66.461	J5	3.4	3.6	1.4	10.2	83	接合資料Ⅱ-⑫
241	刮片	588	滅蚊石	-47678.651	51708.809	66.236	J4	2.0	1.0	0.4	0.6	83	接合資料Ⅱ-⑫
242	刮片	210	滅蚊石	-47679.147	51706.480	66.456	J4	1.3	1.6	1.1	5.3	83	接合資料Ⅱ-⑫
243	刮片	230	滅蚊石	-47679.247	51707.611	66.109	J4	5.6	2.9	2.9	48.0	83	接合資料Ⅱ-⑫
244	刮片	591	滅蚊石	-47679.339	51708.946	66.274	J4	4.1	4.8	2.3	52.3	83	接合資料Ⅱ-⑫
245	刮片	246	滅蚊石	-47679.480	51706.873	66.407	J4	4.9	6.1	2.2	55.1	83	接合資料Ⅱ-⑫
246	刮片	一添	滅蚊石	-47679.538	51706.873	66.398	J4	4.7	1.2	1.6	6.6	83	接合資料Ⅱ-⑫
247	刮片	98	滅蚊石	-47684.308	51709.615	66.578	J5	3.5	3.5	1.7	17.1	83	接合資料Ⅱ-⑫
248	刮片	596	滅蚊石	-47679.132	51708.328	66.271	J4	1.8	3.6	1.5	4.6	83	接合資料Ⅱ-⑫
249	刮片	254	滅蚊石	-47678.404	51709.648	66.438	J4	1.6	1.2	0.8	0.8	83	接合資料Ⅱ-⑫
250	刮片	250	滅蚊石	-47678.753	51709.201	66.536	J4	3.2	5.1	1.0	11.0	83	接合資料Ⅱ-⑫
251	新石刀	609	魚木ノホリ	-47667.673	51705.302	66.379	J5	2.0	0.5	0.2	0.12	83	微小形態
252	新石刀	54	魚木ノホリ	-47660.062	51705.884	66.454	J5	2.0	2.1	2.5	9.1		
253	新石刀	596	魚木ノホリ	-47662.912	51708.503	66.271	J4	1.8	3.6	1.5	4.6	83	接合資料Ⅱ-⑬
254	新石刀	232	魚木ノホリ	-47678.811	51707.303	66.286	J4	1.8	2.7	1.6	6.9		
255	新石刀	473	魚木ノホリ	-47677.315	51714.305	66.408	K4	2.0	2.3	1.2	4.5		
256	新石刀	603	魚木ノホリ	-47678.819	51708.228	66.171	J4	1.8	3.2	2.1	11.1		
256	新石刀	247	魚木ノホリ	-47679.446	51708.742	66.157	J4	0.7	1.1	0.4	0.3		
257	刮片	539	魚木ノホリ	-47675.507	51711.184	66.617	K4	1.3	1.2	0.2	0.5		
258	刮片	746	魚木ノホリ	-47676.050	51716.458	66.619	K4	1.3	1.7	0.8	1.2		
259	刮片	385	魚木ノホリ	-47678.013	51714.977	66.777	K4	1.5	0.9	0.2	0.5		
260	刮片	755	魚木ノホリ	-47678.219	51713.304	66.798	K4	2.6	1.3	0.7	2.6		
261	心模	548	魚木ノホリ	-47676.456	51713.143	66.616	K4	2.4	1.9	1.9	7.7		
262	新石刀	86	魚木ノホリ	-47662.608	51708.539	66.082	J5	3.0	2.2	1.7	11.1		
263	刮片	508	魚木ノホリ	-47675.574	51714.941	66.732	K4	2.2	1.9	0.9	2.4	64	接合資料Ⅱ-⑯
264	新石刀	310	魚木ノホリ	-47676.501	51711.784	66.773	K4	0.9	1.5	1.3	1.4	64	接合資料Ⅱ-⑯
265	刮片	449	魚木ノホリ	-47676.292	51716.860	66.588	K4	1.6	1.6	0.8	1.7	64	接合資料Ⅱ-⑯
266	新石刀	315	魚木ノホリ	-47676.153	51715.743	66.872	K4	1.6	1.2	1.2	1.9	66	接合資料Ⅱ-⑯
267	刮片	504	魚木ノホリ	-47676.279	51714.978	66.778	K4	1.9	1.5	0.6	1.7	65	接合資料Ⅱ-⑯
268	新石刀	302	魚木ノホリ	-47673.799	51714.141	66.849	K4	2.0	1.5	1.1	2.7	65	接合資料Ⅱ-⑯
269	#7 刃	867	櫛状	-47678.599	51693.695	66.013	J4	0.9	0.6	0.3	0.12	64	櫛状形態
270	新石刀	850	櫛状	-47661.119	51703.953	66.389	J5	2.2	1.6	1.5	4.2		
271	スパード	610	櫛状	-47660.102	51702.201	66.184	J3	3.5	1.2	0.9	0.2		
272	刮片	63	櫛状	-47669.549	51707.225	66.422	J5	1.6	1.0	0.4	0.6		
273	刮片	208	櫛状	-47679.826	51706.115	66.158	J4	1.0	0.9	0.2	0.1		
274	刮片	411	櫛状	-47677.490	51712.571	66.816	K4	0.9	1.6	0.2	0.3		
275	刮片	851	櫛状	-47668.513	51706.732	66.389	J3	1.0	1.2	0.2	3.9		
276	刮片	79	櫛状	-47679.370	51705.997	66.234	J5	2.1	1.8	0.4	0.9		
277	刮片	97	櫛状	-47684.124	51707.518	66.302	J5	2.1	1.0	0.3	0.5		
278	刮片	663	櫛状	-47659.770	51711.366	66.831	K2	2.8	1.1	0.6	1.9		
279	刮片	845	櫛状	-47671.338	51699.553	66.121	I4	2.9	2.1	0.4	1.8		
280	刮片	356	不規則	-47679.426	51714.703	66.823	K4	1.7	0.5	0.4	0.2		
281	刮片	613	不規則	-47668.913	51707.150	66.387	J3	0.8	1.1	0.3	0.2		
282	主刀	625	不規則	-47668.392	51696.842	65.867	I3	1.3	1.2	0.3	0.1		
283	スクレイパー	652	不規則	-47656.777	51711.477	66.942	K2	8.3	5.2	2.3	64.8		
284	スクレイパー	183	砂岩	-47664.511	51721.397	66.967	L5	10.2	11.1	1.7	228.0		
285	蔽石	175	砂岩	-47651.833	51721.2515	66.588	K5	9.8	7.9	6.5	633.0		
286	蔽石	515	チャート	-47676.512	51713.223	66.607	K4	6.1	3.5	3.3	117.3		
287	蔽石	166	砂岩	-47682.651	51716.137	66.811	K5	10.3	5.5	4.3	351.5		

第4表 旧石器時代石器計測表4

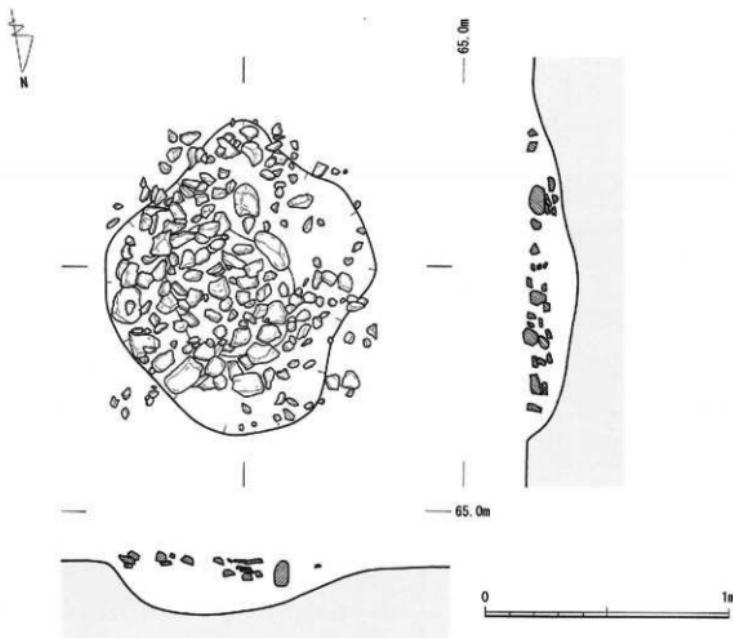
第2節 繩文時代早期の調査（第68～71図）

1 造構（第68～70図）

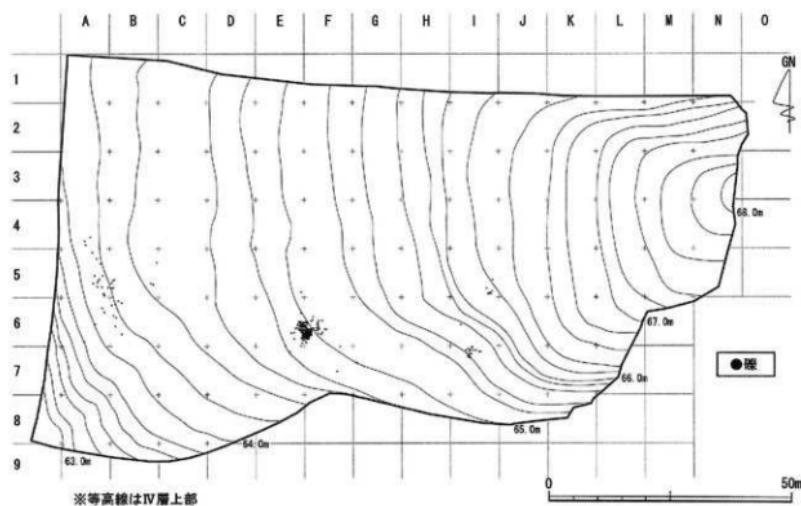
(1) 集石造構

調査区西側A5グリッド、中央部F7グリッド、東側I6グリッド付近の3群の散礫（第69図）を、IV層上部において検出した。3群いずれも散漫な状態で、礫总数は289個、総重量は29.25kgである。利用石材は、砂岩、泥岩、緑色岩等があり、親指大から拳大の大きさがほとんどである。赤化している割合は、総重量の約15%と低かったが、中央部F7グリッドで検出した散礫群は、そのほとんどが赤化しており、その下層からは、集石造構（第70図）を検出している。

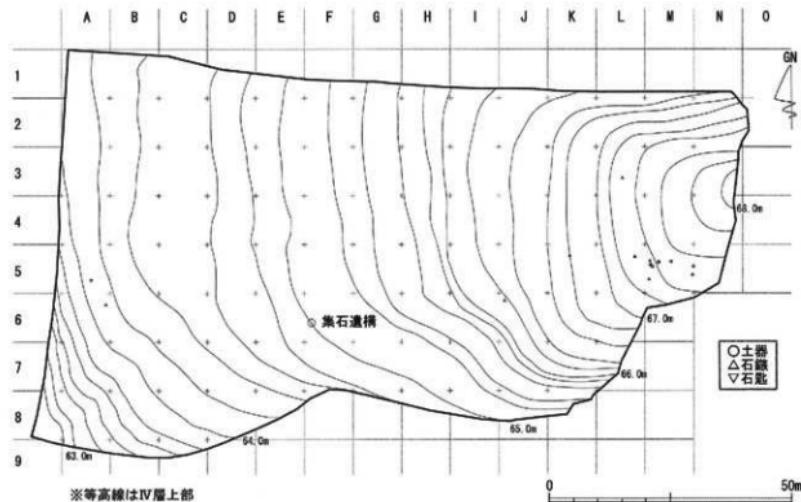
1号集石造構（第68図）は、調査区中央部F6グリッドで検出した。検出面はV層上部である。長軸は1.27m、短軸は1.12m、深さ0.22mの規模で、掘り込みがあり、構成される礫は密集していた。礫は597個使用されており総重量は83.90kgである。花崗斑岩が13個（うち1個は完形）、砂岩549個、泥岩4個、凝灰岩11個、礫岩20個で、全て赤化しており、完形礫は花崗斑岩1点（6.10kg）のみで、他は全て破碎礫であった。また、炭化物粒・焼土が埋土中に見られた。遺物は含まれていなかった。



第68図 繩文時代早期1号集石造構実測図 (S=1/20)



第69図 散疎検出状況図 (S=1/1,000)



第70図 純文時代早期遺構検出状況図 (S=1/1,000)

2 遺物 (第71図—288~299)

(1) 土器 (第71図—288~290)

調査区中央部M5グリッド、検出面はV層上部で検出したが、いずれも現代の耕作による擾乱部分である。288は深鉢の口縁部である。直立しやや丸みをおびている。口縁部に貝殻腹縫刺突文を、口縁下に貝殻条痕文を、その上から列点状の刺突文を施している。289・290は、深鉢の脚部である。外面に荒い条痕文を施し、内面はナデ調整である。胎土に纖維を含んでいる。

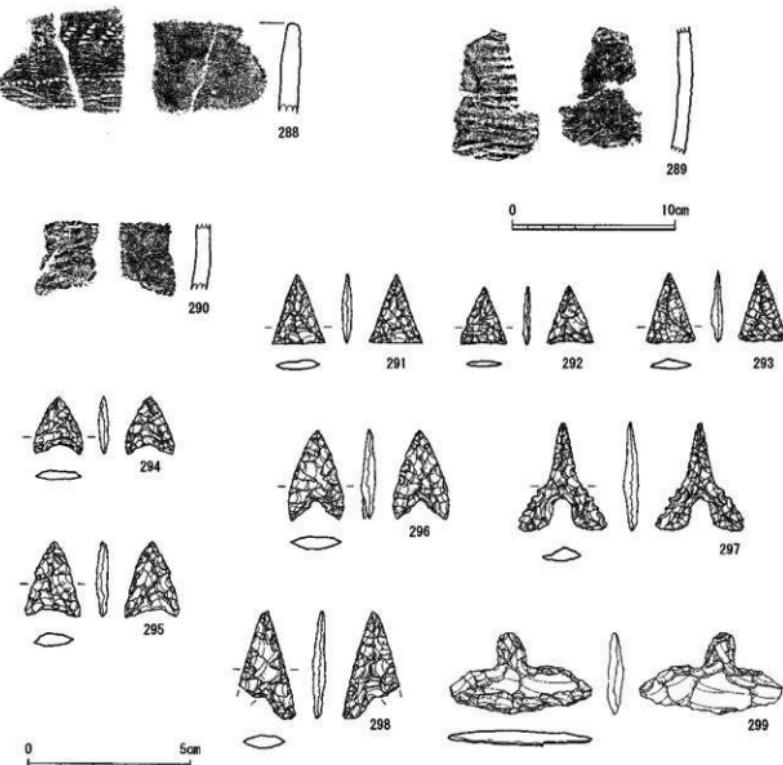
(2) 石器 (第71図—291~299)

石鏸 8点 (第71図—291~298)

石材は全てチャートである。二等辺三角形の形状で、平基のもの(291~293)、正三角形に近い形状で、基部に浅い抉りのあるもの(294・295)、二等辺三角形の形状で、抉りのあるもの(296~298)がある。

石匙 1点 (第71図—299)

石材はサスカイトで、つまみから身が横に広がる横型である。遺跡周辺には採取不可能な石材のため、持ち込まれたものと考えられる。



第71図 縄文時代早期土器実測図 (S=1/3) 石器実測図 (S=2/3)

番号	出土地点	器種	部位	手法・調査・文様ほか				色調		胎上の特徴
				外面	内面	外面	内面			
288	M5G	深鉢	口縁部	貝殻腹縫刺 突文、貝殻 条痕文、刺 突文	ナデ	にぶい黄橙 色	にぶい黄橙 色	1.5mm以下の透明光沢粒・黒色光沢 粒・褐色・灰白色・明赤褐色、4mm 以下のにぶい黄橙色・明褐色・にぶ い褐色粒を含む。		
289	M5G	深鉢	胴部	条痕文	ナデ	にぶい黄橙 色	灰黃褐色	1mm以下のにぶい褐色・灰白色、6mm 以下のにぶい黄橙色・褐色・灰黃 褐色粒を含む。繊維を含む。		
290	M5G	深鉢	胴部	条痕文	ナデ	にぶい黄橙 色	にぶい黄橙 色	5mm以下のにぶい黄橙色・灰白色・ 褐色粒を含む。繊維を含む		

第5表 縄文時代土器観察表

番号	器種	件記番号	石材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
291	石鎚	641	チャート	-47666.392	51725.396	67.320	L 3	2.1	1.6	0.3	0.7
292	石鎚	797	チャート	-47687.176	51730.862	67.382	M 5	1.7	1.3	0.2	0.4
293	石鎚	165	チャート	-47682.347	51714.539	66.660	K 5	2.1	1.4	0.3	0.7
294	石鎚	182	チャート	-47686.225	51739.771	67.680	M 5	1.7	1.1	0.3	0.7
295	石鎚	179	チャート	-47682.522	51727.952	67.352	L 5	2.2	1.6	0.4	1.2
296	石鎚	1	チャート	-47691.535	51701.173	66.293	J 6	2.7	1.7	0.1	1.6
297	石鎚	2	チャート	-47692.397	51619.145	64.039	A 6	3.3	2.6	0.4	1.7
298	石鎚	180	チャート	-47683.390	51731.046	67.514	M 5	3.2	1.7	0.4	1.6
299	石匙	3	サヌカイト	-47687.324	51616.107	63.969	A 5	2.4	4.2	0.5	2.7

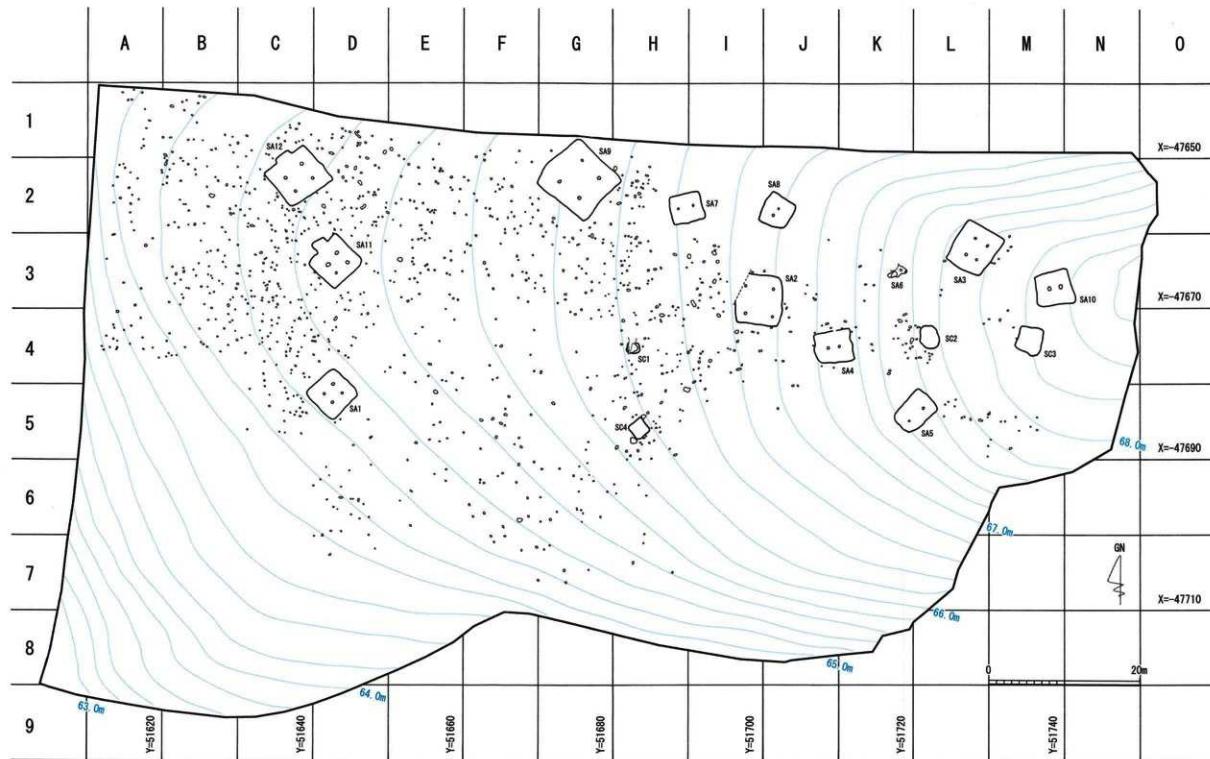
第6表 縄文時代石器計測表

第3節 弥生時代・古墳時代の調査（第72～125図）

第III層の鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah）上面において、弥生時代・古墳時代のものと考えられる遺構（第72図）として竪穴住居跡が1軒、土坑4基と、それに伴う遺物を検出した。掲載している遺物は遺構堆積土の下位～床面のものであるが、堆積土中においても、床面で取り上げたものと接合した遺物を取り扱っている。ピット状の穴は多数検出したが、掘立柱建物跡に結びつくものはなかった。

後述する遺構番号は、整理の都合上、調査時点で付与した番号を用いている。また、報告する順番は、時期別に「弥生時代終末から古墳時代初頭」として竪穴住居跡4軒（SA5→SA7→SA8→SA2）、土坑1基（SC2）の順番で、「古墳時代前期から中期」として竪穴住居跡7軒（SA9→SA1→SA3→SA4→SA10→SA11→SA12）、土坑3基（SC4→SC3→SC1）の順番で、「古墳時代後期」として6号竪穴住居跡（SA6）の地床炉のみと、それぞれ時期の古い順となっている。なお、大きく3時期に設定しているが、各時期において、さらに細分することが可能であると考えられる。しかし、時間的な制約上、行っていない。

掲載遺物の器種名の中で、鉢については、松永幸寿氏（松永2001）の分類を用いている。鉢の形態によって、器高が体部径と等しいか凌駕し、内湾しながら立ち上がる直口のものを「深鉢」、体部径が器高を凌駕し、外傾口縁を有する碗状のものを「浅鉢」に分類し、本文中の呼称に用いている。



第72図 弥生時代・古墳時代遺構配置図 (S=1/500)

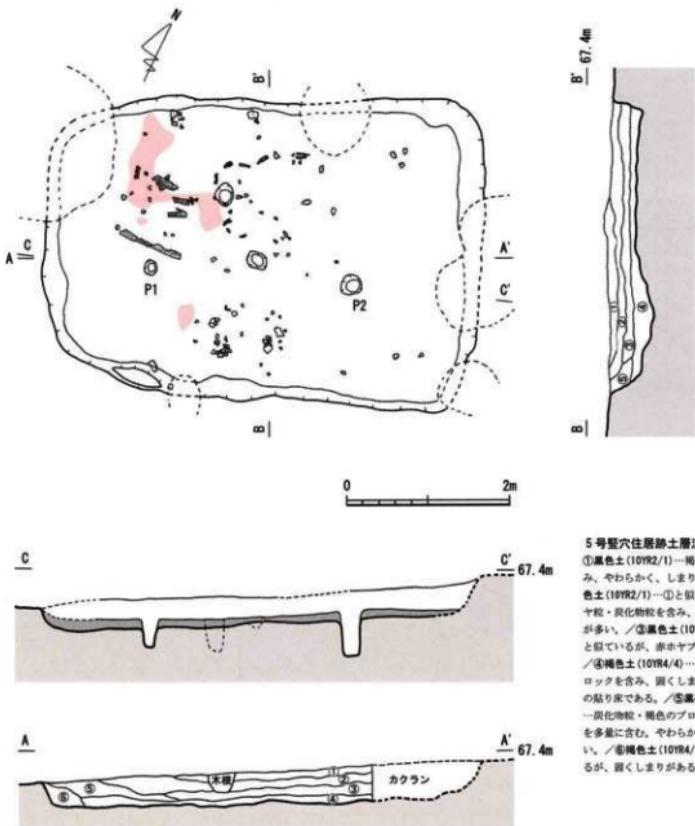
1 弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構と遺物（第73～85図）

竪穴住居

5号竪穴住居跡（SA5）

遺構（第73図）

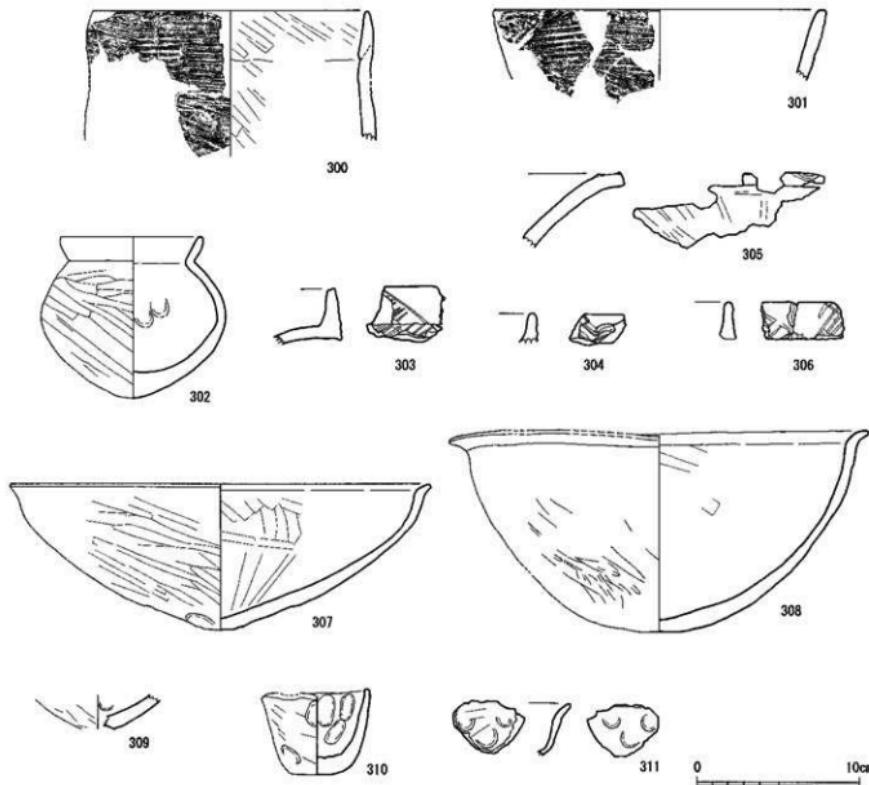
調査区K5 グリッドに位置し、長軸 5.40 m、短軸 3.60 m、推定床面積は 19.44 m² の長方形である。検出面からの深さは最深で 0.55 m である。赤ホヤブロックの混じる褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は 2 本（深さ 0.35 m～0.55 m）で、柱穴の距離は東西 2.50 m で長軸方向にならんでいる。西側部分の貼り床面柱穴付近には、炭化材を良好な状態で検出し、焼失住居の可能性も考えられる。樹種同定の結果（第IV章 第2節）ツブラジイ、コナラ属コナラ節、放射性炭素年代分析の補正値は 1760±40 年 BP、1790±40 年 BP であった。



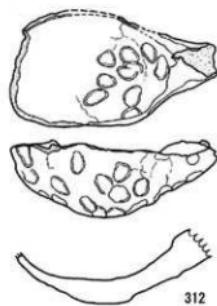
第73図 5号竪穴住居跡（SA5）実測図 (S=1/60)

遺物（第74・75図—300～318）

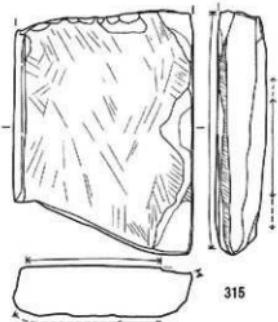
300～312は弥生土器である。300・301は壺で、どちらも表面にタタキ目を施してある。302～306は壺である。302は口縁部が短く外傾し、わずかに平坦面を残す尖底に近い平底である。303～306は、櫛描波状文や線刻による直線的な文様のある二重口縁壺の口縁部である。307～309は鉢である。口縁部は短くしっかりと外傾しており、底部は丸底、貼付凹盤状の平底、平底がある。310・311は内外面に指頭痕がある手握土器である。312は抉子状土器で、内外面に指頭痕がある。313は抉りのある砂岩製の石庖丁である。314・315は擦痕の残る砥石である。314は砂岩製、315は頁岩製である。316は花崗斑岩製の磨石である。317・318は鉄製品である。317は鉄鎌の刃部が2枚重なった状態の破片である。318は残存長4.1cm、鎌身部最大幅1.5cmの小型の柳葉鎌である。鎌身部には布・木質が付着している。



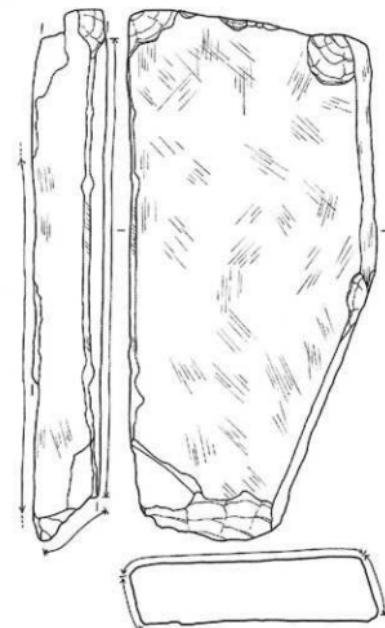
第74図 5号堅穴住居跡（SA5）出土遺物実測図1 (S=1/3)



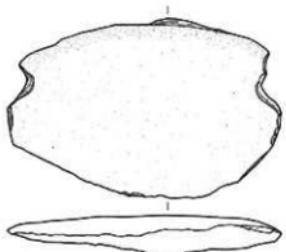
312



315



314



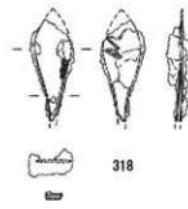
313



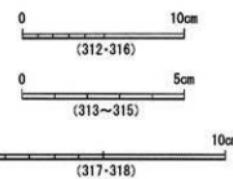
316



317



318



第75図 5号整穴住居跡 (SA5) 出土遺物実測図 2 (S=1/3, 2/3, 1/2)

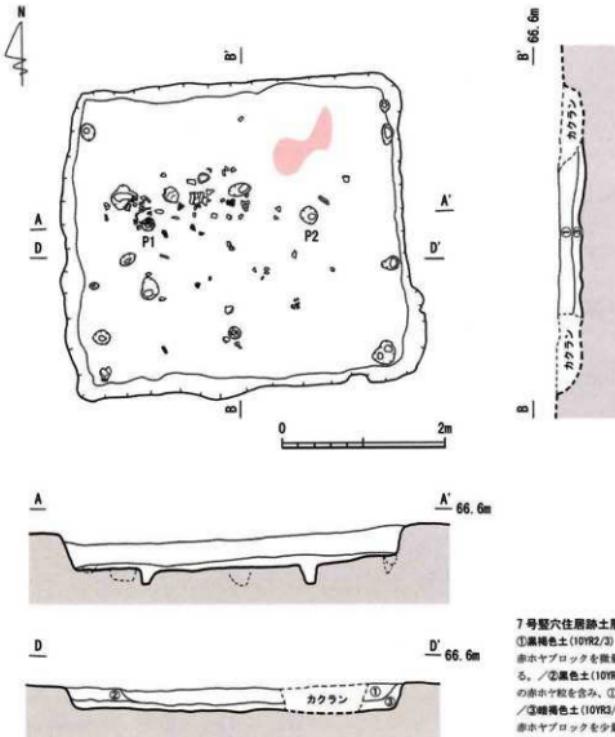
7号竪穴住居跡 (SA7)

遺構 (第76図)

調査区 H2 グリッドに位置し、長軸 4.20 m、短軸 3.80 m、推定床面積は 15.96 m² の方形である。検出面からの深さは最深で 0.30 m である。赤ホヤブロックの混じる暗褐色の貼り床が施されていた。貼り床面では検出できなかったが、主柱穴は 2 本（深さ 0.20 m～0.25 m）で、柱穴の距離は東西 2.00 m で長軸方向にならんでいる。貼り床面北東側に焼土が広がり、主柱穴付近には炭化材が少量検出され、樹種同定の結果（第IV章第2節）サカキ、放射性炭素年代分析の補正值は 1860±40 年 BP であった。

遺物 (第77図—319～337)

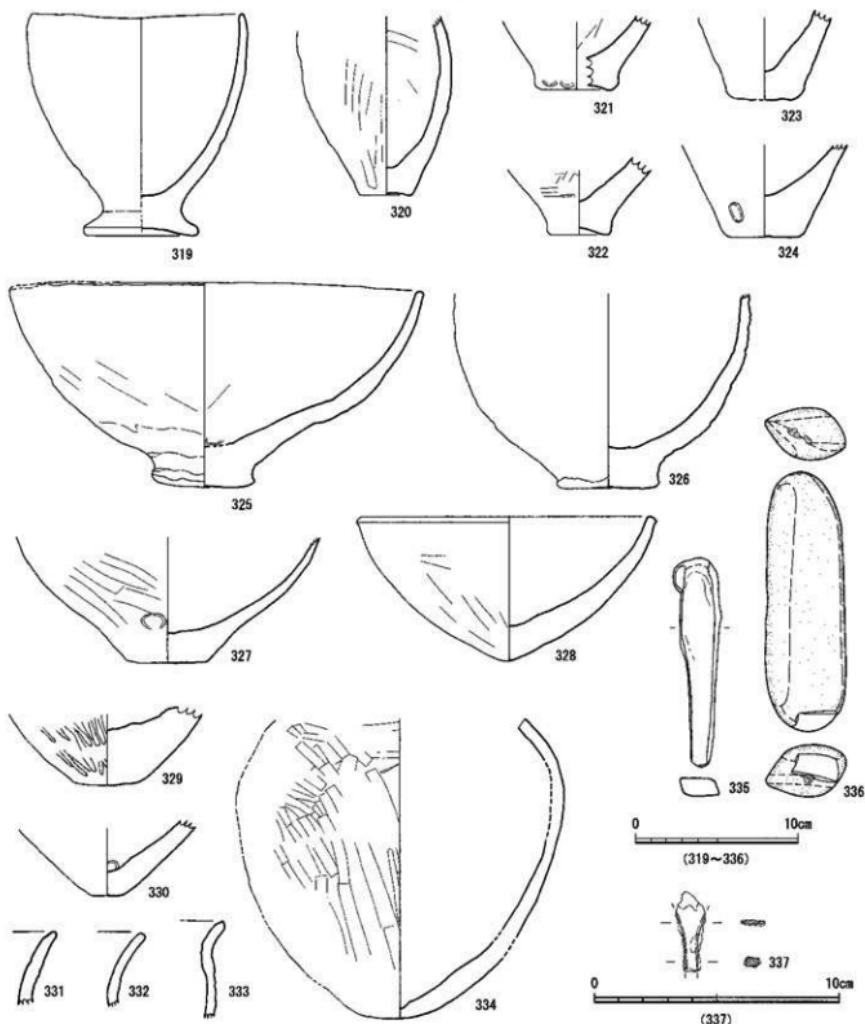
319～328は弥生土器の鉢である。319～324は深鉢、325～328は浅鉢である。深鉢の底部は、上げ底で端部がわずかに張り出すもの（319）、張り出さないもの（320～322）、平底で端部が張り出さないもの（323・



7号竪穴住居跡土層注記 (SA7)
 ①黒褐色土 (10YR2/3)…径 5～10 mm 程の赤ホヤブロックを微量に含み、粘性がある。
 ②黒褐色土 (10YR2/1)…径 1 mm 以下の赤ホヤ粒を含み、①よりも粘性がある。
 ③暗褐色土 (10YR2/4)…径 1 cm 以上の赤ホヤブロックを少量含む。非常に固くしまりがあり、住居の貼り床である。

第76図 7号竪穴住居跡 (SA7) 実測図 (S=1/60)

324) がある。浅鉢の底部は、貼付円盤状の平底 (325~327)、尖底 (328) がある。329~333は土師器の壺である。329・330は底部で、内面が平坦ではない平底である。331~333は口縁部で、ゆるやかに外反している。334は土師器の蓋である。長形胴で、わずかに平坦面を残す尖底に近い平底である。335は頁岩製の棒状石製品である。敲打痕等はない。336はホルンフェルス製の敲石で、両端に敲打痕が残る。337は鉄錐の茎部片で、半頭鐵、柳葉鐵、向方の可能性が考えられる。



第77図 7号堅穴住居跡 (SA7) 出土遺物実測図 (S=1/3, 1/2)

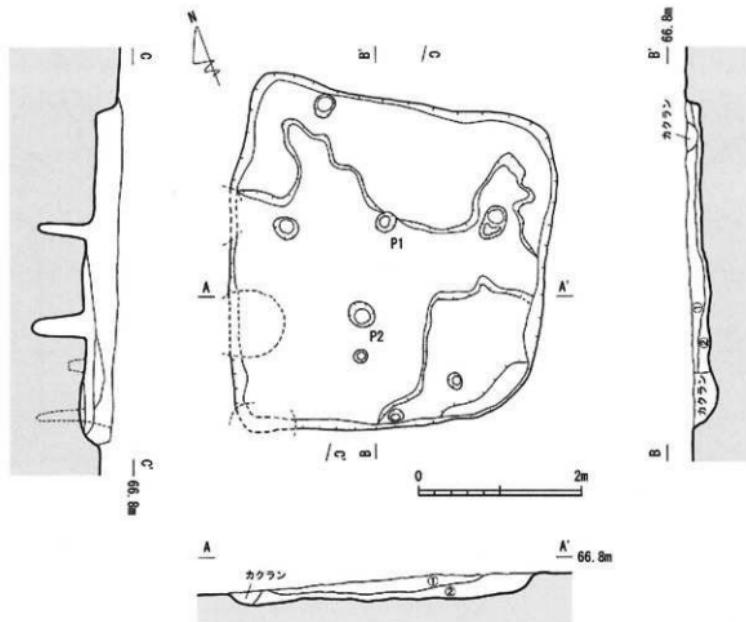
8号竪穴住居跡 (SA8)

遺構 (第79図)

調査区J2グリッドに位置し、長軸4.10m、短軸3.40m、推定床面積は13.94m²の長方形である。検出面からの深さは最深で0.30mである。赤ホヤ粒の混じる黒褐色の貼り床が施されていた。貼り床面では検出できなかったが、主柱穴は2本（深さ0.60m～0.65m）で、柱穴の距離は南北1.20mで長軸方向にならんでいる。

遺物 (第79図—338～348)

338～340は弥生土器である。338・339は壺の口縁部である。端部に貼付突帯があり、弥生前期末～中期前半の龟の甲系上器と考えられ、堆積土の下位出土であるが、流入したものと考えられる。突帯には縦位の刻目をもつ。340は鉢である。深鉢の底部で、上げ底で端部がわずかに張り出している。341～344は土師器である。341～343は壺で、口縁部は直線的に開き（341）、底部は平底（342・343）である。344は外反する口縁部をもつ壺である。345は頁岩製の棒状石製品で、前述したSA7においても出土した。346は砂岩製の敲石で、両端に敲打痕が残る。347・348は台石である。347は磨り面の残る砂岩製で、348は花崗斑岩製である。

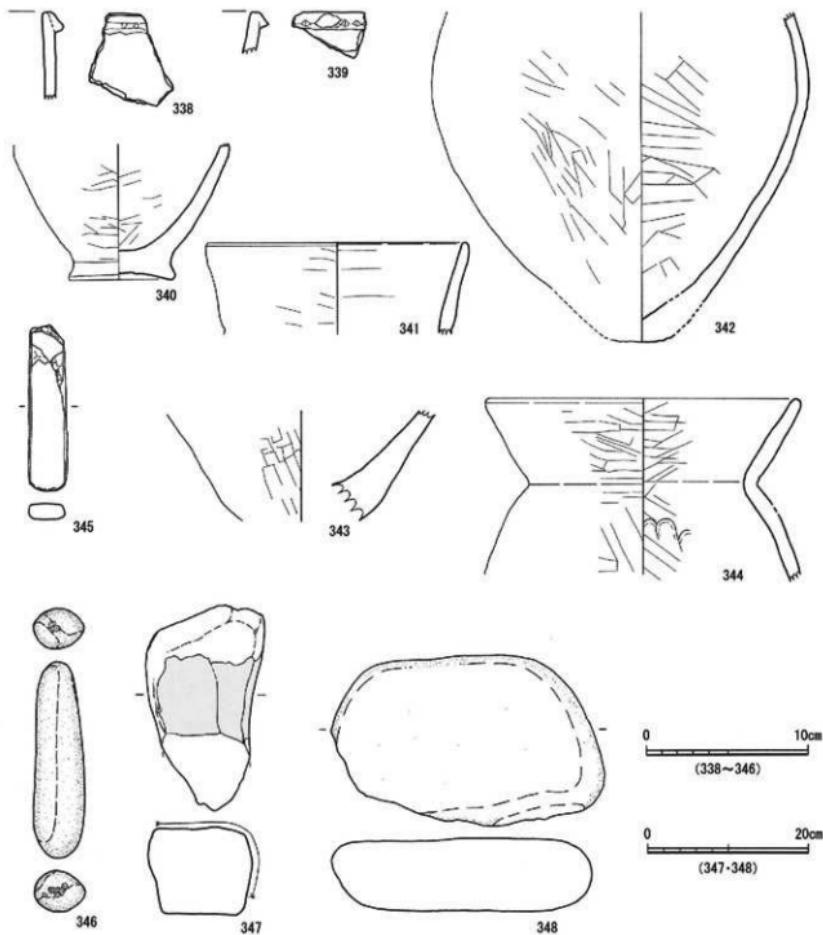


8号竪穴住居土層注記 (SA8)

①黒色土(10R2/1)…底1mm以下の赤ホヤ粒を少量含む。

②黒褐色土(10R2/3)…底2～5mm程の赤ホヤ粒の混じる割合が①より多い。固くしまりがあり。住居の貼り床である。

第79図 8号竪穴住居跡 (SA8) 実測図 (S=1/60)

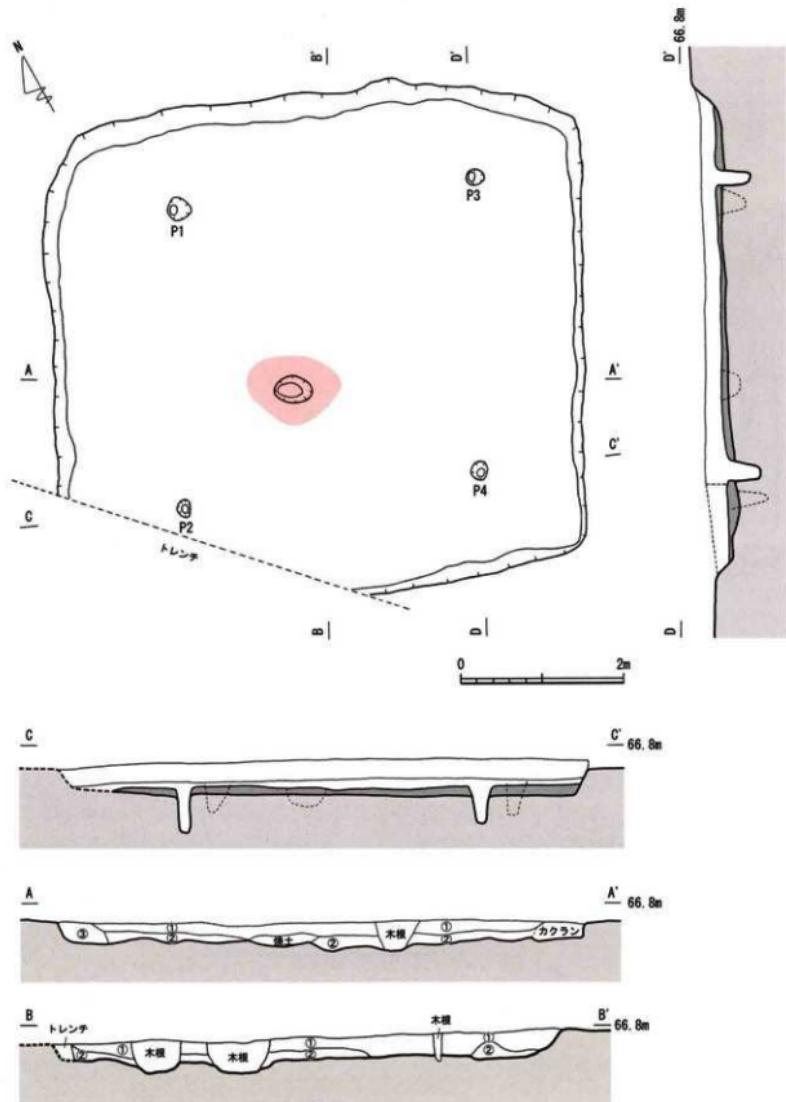


第79図 8号竖穴住居跡 (SA8) 出土遺物実測図 (S=1/3, 1/6)

2号竖穴住居跡 (SA2)

遺構 (第80図)

調査区 I 3 グリッドに位置し、長軸 6.55 m、短軸 6.22 m、推定床面積は 40.93 m² の方形である。検出面からの深さは最深で 0.40 m である。赤ホヤブロックの混じる黒褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は 4 本（深さ 0.45 m～0.50 m）で、柱穴の距離は東西 3.65 m～3.70 m、南北 3.65 m の、ほぼ対角線上の配置である。中央部の貼り床面では、柱穴間に焼土が広がり、0.51 m × 0.35 m 程の地床炉がある。



2号竪穴住居跡層記 (SA2)

- ①黒色土 (7.SYR2/1)…竹根に覆われ、やわらかく、しまりがない。
- ②黒褐色土 (7.SYR2/2)…径 5 ~ 10 mm 程の赤ホヤブロックを含む。固くしまりがあり、住居の貼り床である。
- ③黒色土 (7.SYR2/1)…①と似ているが、極小の赤ホヤ粒を少量含む。

第80図 2号竪穴住居跡 (SA2) 実測図 (S=1/60)

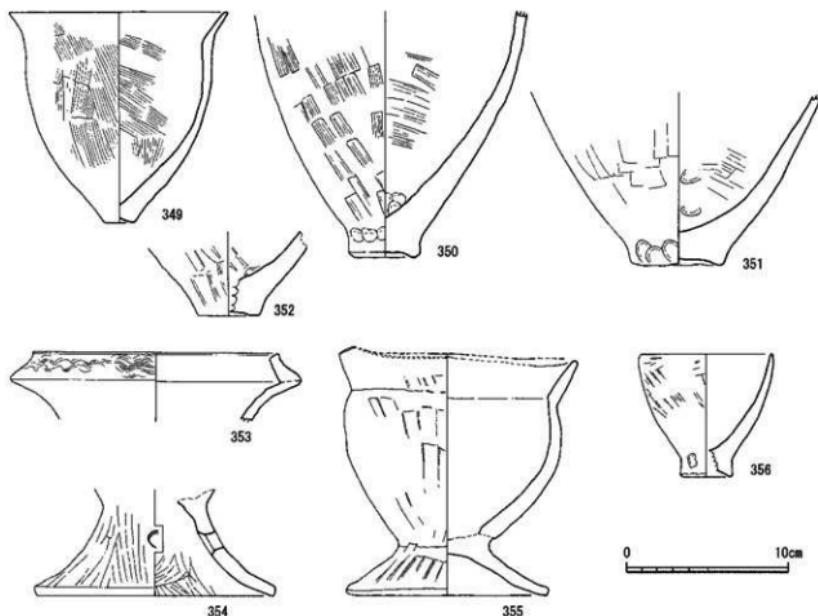
遺物（第81～84図—349～378）

349～359は弥生土器である。349～352は壺である。口縁部がゆるやかに外反し（349）、底部は、上げ底で端部がわずかに張り出するもの（350）、わずかな上げ底のもの（349・351・352）がある。353は櫛描波状文の文様のある二重口縁壺の口縁部である。354は円形透かしをもち、ラッパ状に開く高坏の脚部である。355～359は鉢である。355は高台脚付きの鉢である。356～358は深鉢で、ゆるやかな内湾する口縁部をもち（356）、底部は、上げ底で端部がわずかに張り出するもの（357・358）、わずかな上げ底のもの（356）がある。359は浅鉢である。頭部で屈曲し外反する口縁部をもち、底部は小さな平底である。

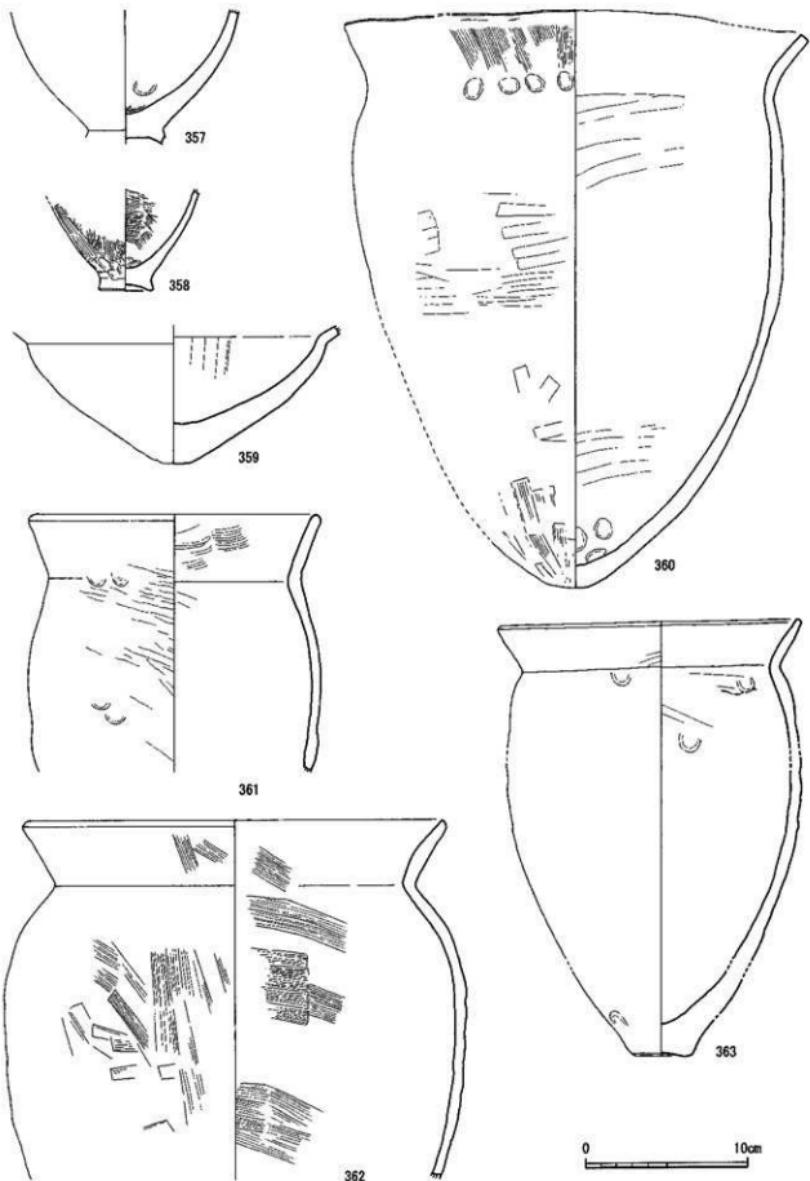
360～369は土器器である。360～366は壺である。表面の所々にタタキ日の残るもの（360・361）がある。口縁部は、ゆるやかに外反するもの（360・362・363）、やや直線的に開くもの（361）がある。底部は平底のもの（360・365・366）、わずかな上げ底のもの（363・364）がある。367はラッパ状に開く高坏の脚部である。368・369は鉢である。368は深鉢の底部で、平底である。369はレンズ状の底部に、内湾しながら立ち上がる口縁部をもつ浅鉢である。

370・371は石庖丁である。挟りのある砂岩製（370）と頁岩製（371）である。372は砂岩製の石錐である。373は砂岩製の棒状石製品で、前述したSA7・SA8においても出土した。374～376は磨・敲石である。全て砂岩製で、敲打痕や磨り面が残る。377は砂岩製の台石である。

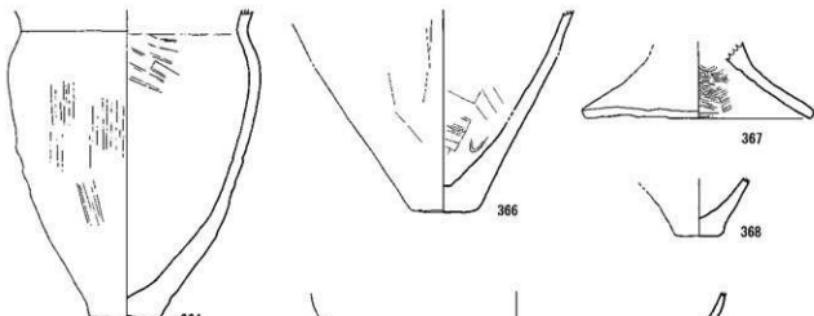
378は小型の土頭鎌である。全長5.5cm、刃部長1.0cm、鎌身部最大幅1.8cmで、鎌身部には布の付着が認められる。基部に繊維が見られるが、表皮は残っていない。口巻きに桜の皮が用いられていた可能性が考えられる。



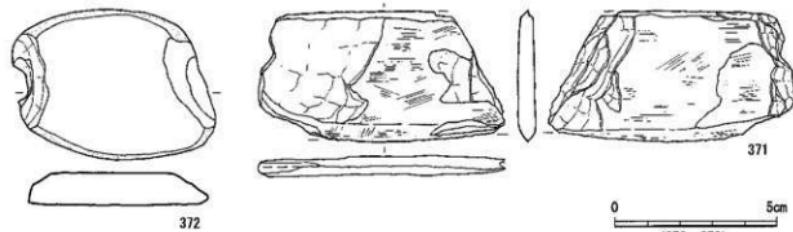
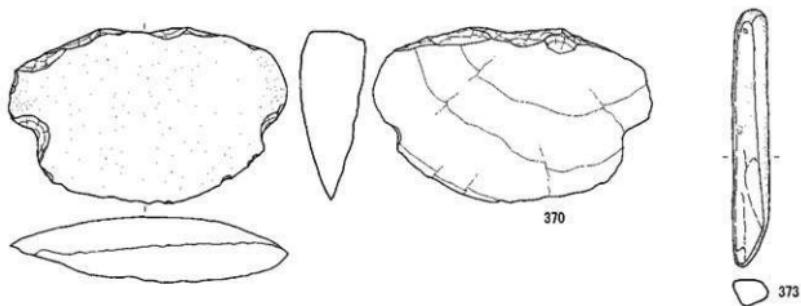
第81図 2号堅穴住居跡（SA2）出土遺物実測図1 (S=1/3)



第82図 2号竪穴住居跡 (SA2) 出土遺物実測図 2 (S=1/3)

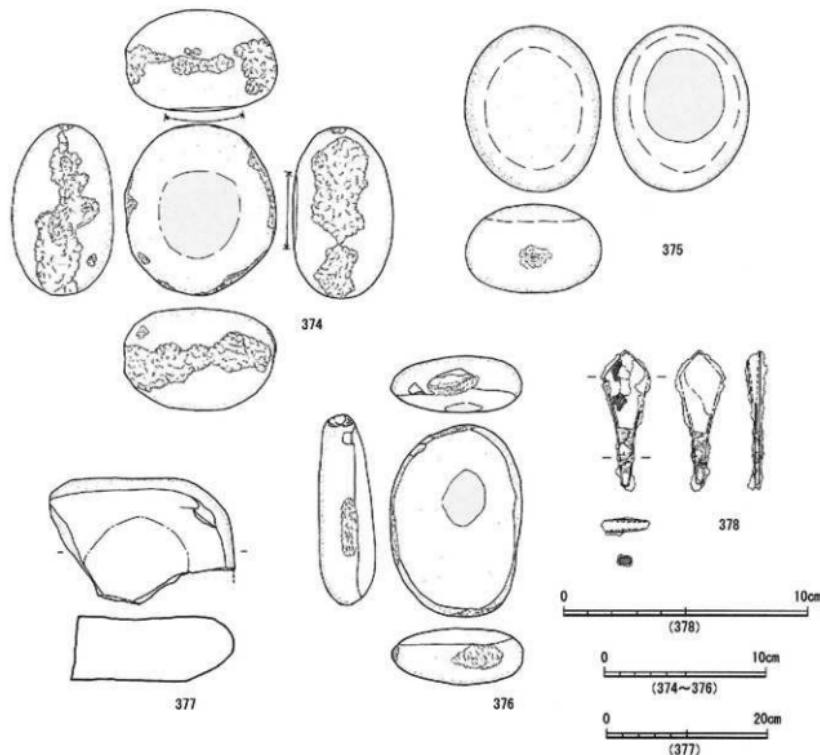


0 10cm
(364~369・373)



0 5cm
(370~372)

第83図 2号堅穴住居跡 (SA2) 出土遺物実測図 3 (S=1/3、2/3)



第84図 2号竪穴住居跡 (SA2) 出土遺物実測図 4 (S=1/2、1/3、1/6)

土坑

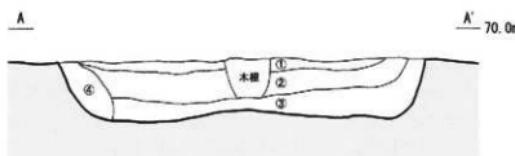
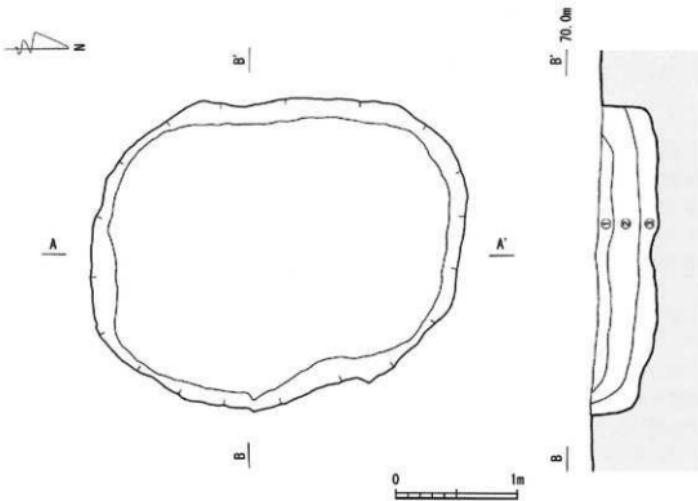
2号土坑 (SG2)

遺構 (第85図)

調査区 L4 グリッドに位置し、長軸 3.02m、短軸 2.50m、深さは最深で 0.50m の梢円形である。

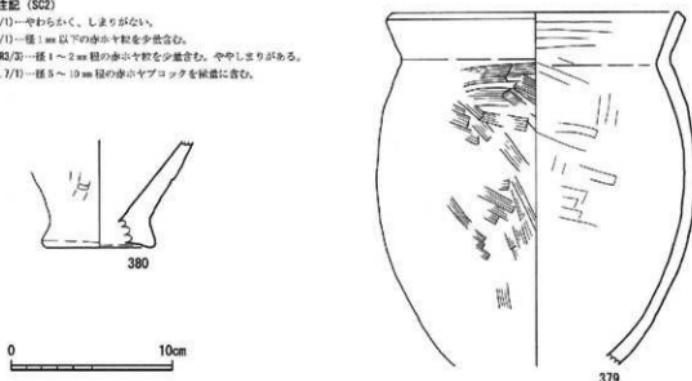
遺物 (第85図—379・380)

379・380は弥生土器の壺である。379は内外面をハケメ・ナデ調整しており、口縁部は短くしっかりと外傾している。380は底部で、上げ底であるが、端部の張り出しが小さく、上げ底の度合いも小さい。



2号土坑土層注記 (SC2)

- ①黒色土 (10YR2/1)…やもじらかく、しまりがない。
- ②黒色土 (10YR2/1)…径1mm以下の赤褐色粒を少許含む。
- ③褐色土 (10YR3/3)…径1～2mm程の赤褐色粒を少量含む、ややしまりがある。
- ④褐色土 (10YR3.7/1)…径5～10mm程の赤褐色ブロックを極量に含む。



第85図 2号土坑 (SC2) 実測図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

2 古墳時代前期～中期の遺構と遺物（第86～124図）

豊穴住居

9号豊穴住居跡（SA9）

遺構（第86・87図）

調査区G2グリッドに位置し、長軸8.20m、短軸7.80m、推定床面積は63.96m²の方形である。検出面からの深さは最深で0.75mである。赤ホヤブロックの混じる褐色の貼り床が施されていたが、住居跡の北東側壁から南東側は1.50m程傾斜しており、その部分は、貼り床ではなく掘り底をそのまま利用していた。主柱穴は4本（深さ1.20m～1.45m）で、柱穴の距離は東西3.60m～4.15m、南北3.20m～3.40mの、ほぼ対角線上の配置である。貼り床面上柱穴間に焼土を検出した。住居跡内には上坑（第87図）があり、そこから完形の状態で二重口縁壺（394）が出土した。土坑の規模は長軸0.70m、短軸0.65mで、貼り床面から0.25m程掘り込んでいた。その壙土は自然堆積ではない黒色土であり、人為的に埋め戻された可能性がある。西側部分には炭化材を良好な状態で検出し、樹種同定の結果（第IV章第2節）ハイノキ属、放射性炭素年代分析の補正値は1800±40年BPであった。

遺物（第88～91図—381～410）

381～393は壺である。381～383は大型の壺で、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いている。底部は、側面が直線的に立ち上がる平底（381）である。384～386は中型の壺で、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いている。底部は、側面が直線的に立ち上がる平底（385）である。387・388は底部で、外面にタタキ目を施してあり、側面が直線的に立ち上がる平底である。389～393は小型の壺で、外面にタタキ目の施してあるもの（389・390）、一部タタキ日の残るもの（391）、ハケメ・ナデヰ体のもの（392・393）がある。口縁部は、「く」の字状で直線的に開いているもの（389・391・393）、短く直立気味のもの（390・392）がある。

394は、外面にタタキ目を施してある大型の二重口縁壺である。直立気味に立ち上がる二次口縁全体に、櫛描波状文が描かれている。底部は粗雑な作りであるが、平底またはレンズ状の平底だと考えられる。出土状況は、住居跡内の十坑から、完形の状態で出土（第87図）しており、何らかの活動目的で壺を意図的に据えていたものと考えられる。

395は壺または壺の底部で、外面にタタキ目を施してあり、レンズ状の平底である。

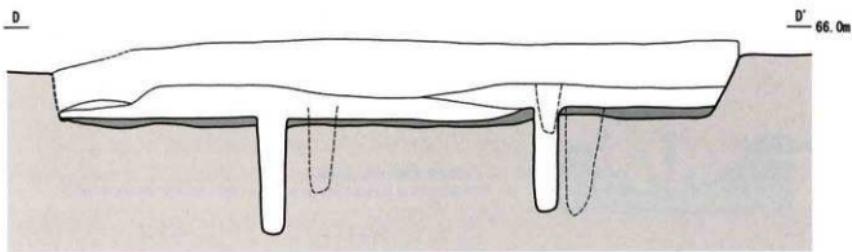
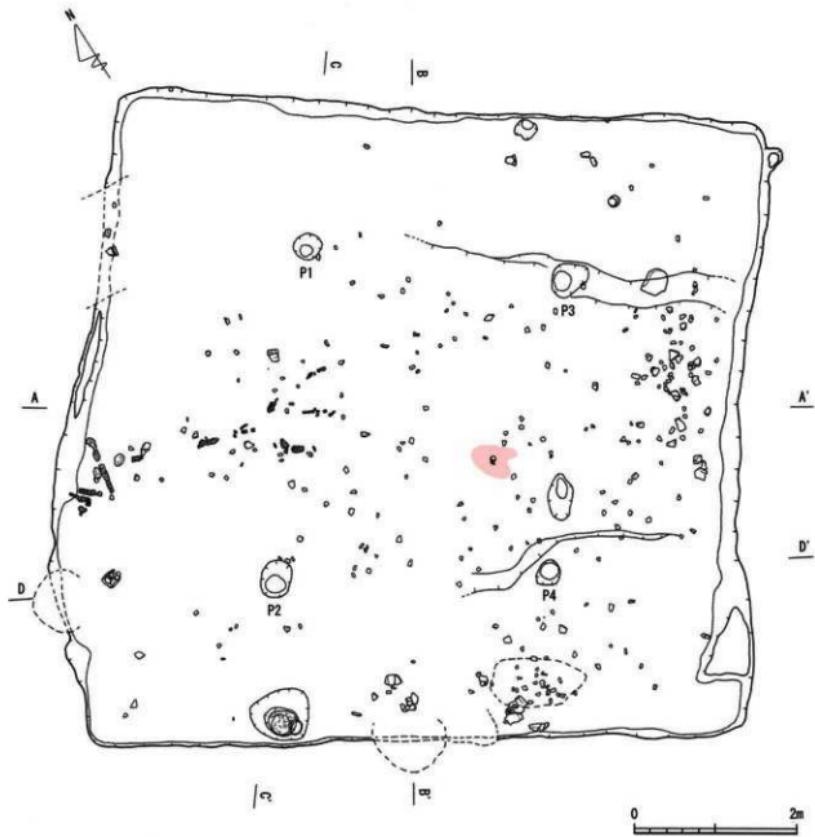
396～400は壺である。口縁部は外反するもの（396）、直立気味のもの（397）がある。底部は尖底に近い平底のもの（396）、レンズ状の平底のもの（400）がある。398・399は小型の壺で、短く外傾する口縁部（398）で、頬部付近にミガキが施されており、ソロバン下部の胸部に底部は丸底のもの（399）がある。400は、SA9とSA12で接合した遺構間接合の壺である。外面にはタタキ目を施してある。ちょうど真ん中から半蔵した形がそれぞれの住居跡から出土し、接合したものである。意図的に分割された可能性が高く、なんらかの行為性が考えられる。しかし、SA9では南西側壁付近から土器破片として出土、SA12では東側から土器破片として出土と、両住居跡間の山上位置に意図的な共通性は見られなかった。

401～403は鉢である。口縁部は外傾のゆるいもの（401・402）、ゆるやかに内湾するもの（403）がある。402にはミガキが、403にはタタキ目が外面に施されている。

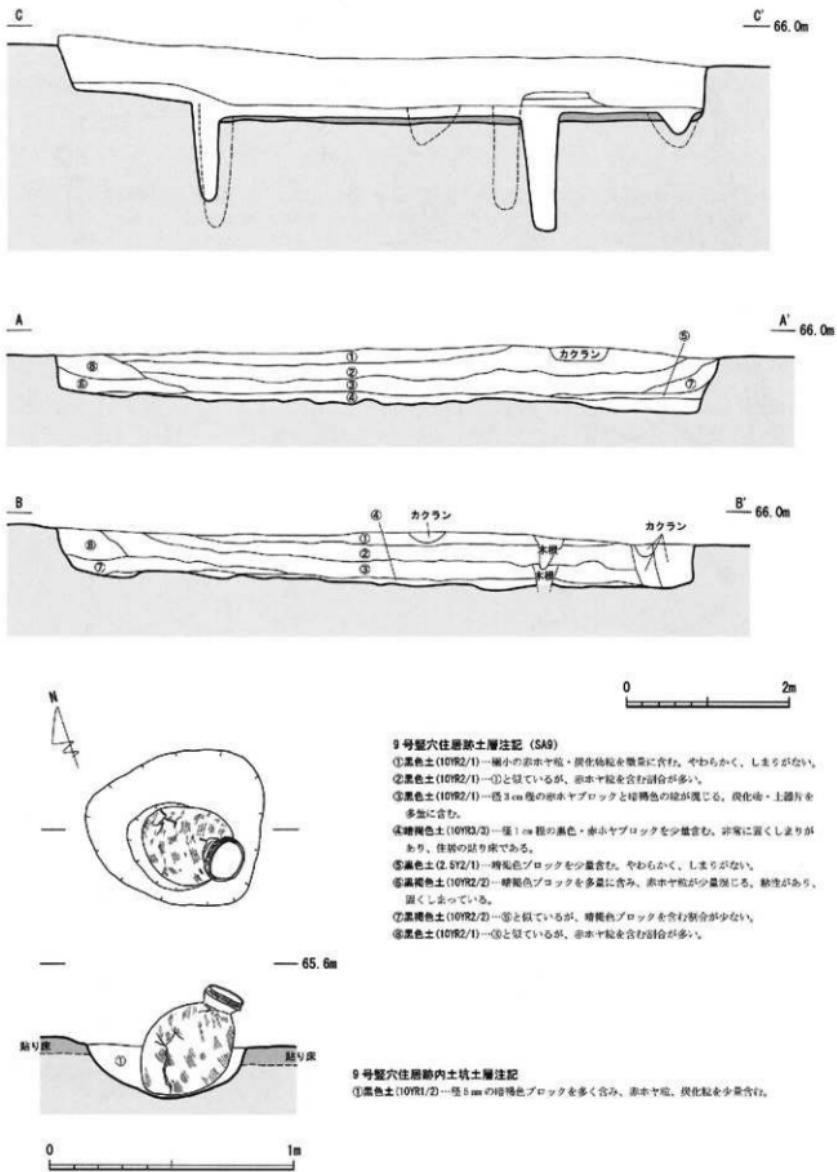
404は木葉痕のある壺または鉢の底部である。405は手挽土器で、内外面に指頭痕がある。

406は石庖丁で、抉りのある頁岩製である。407は砥石で、表裏面に擦痕の残る砂岩製である。408は磨・敲石で、各端に敲打痕、下面に磨り面の残る砂岩製である。409は砂岩製の台石である。

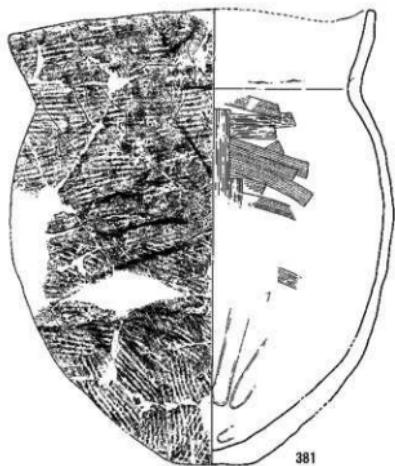
410は、残存長3.7cm、鐵身體最大幅1.8cmの柳葉鎌である。ただし、両面に木質が残っており、無茎鎌のように矢柄で鎌身體を挟み込んだ状態である。矢柄の舟装を強化する目的があったものと考えられる。



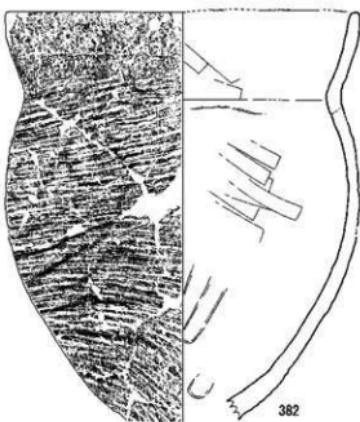
第86図 9号竪穴住居跡 (SA9) 実測図 1 (S=1/60)



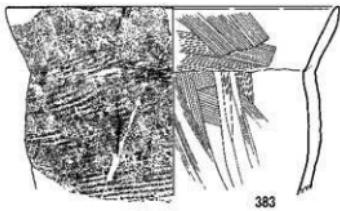
第87図 9号竖穴住居跡 (SA9) 実測図2 (S=1/60) 住居跡内土坑実測図 (S=1/20)



381



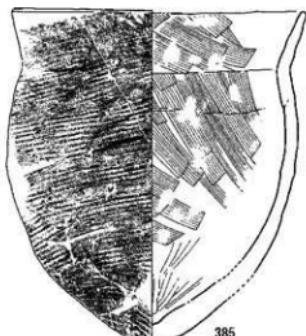
382



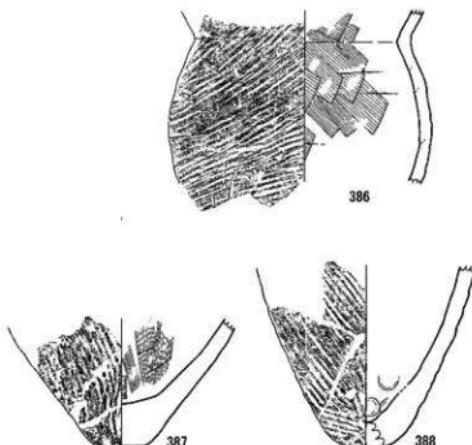
383



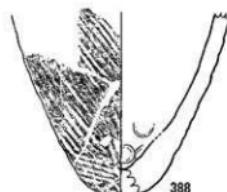
384



385



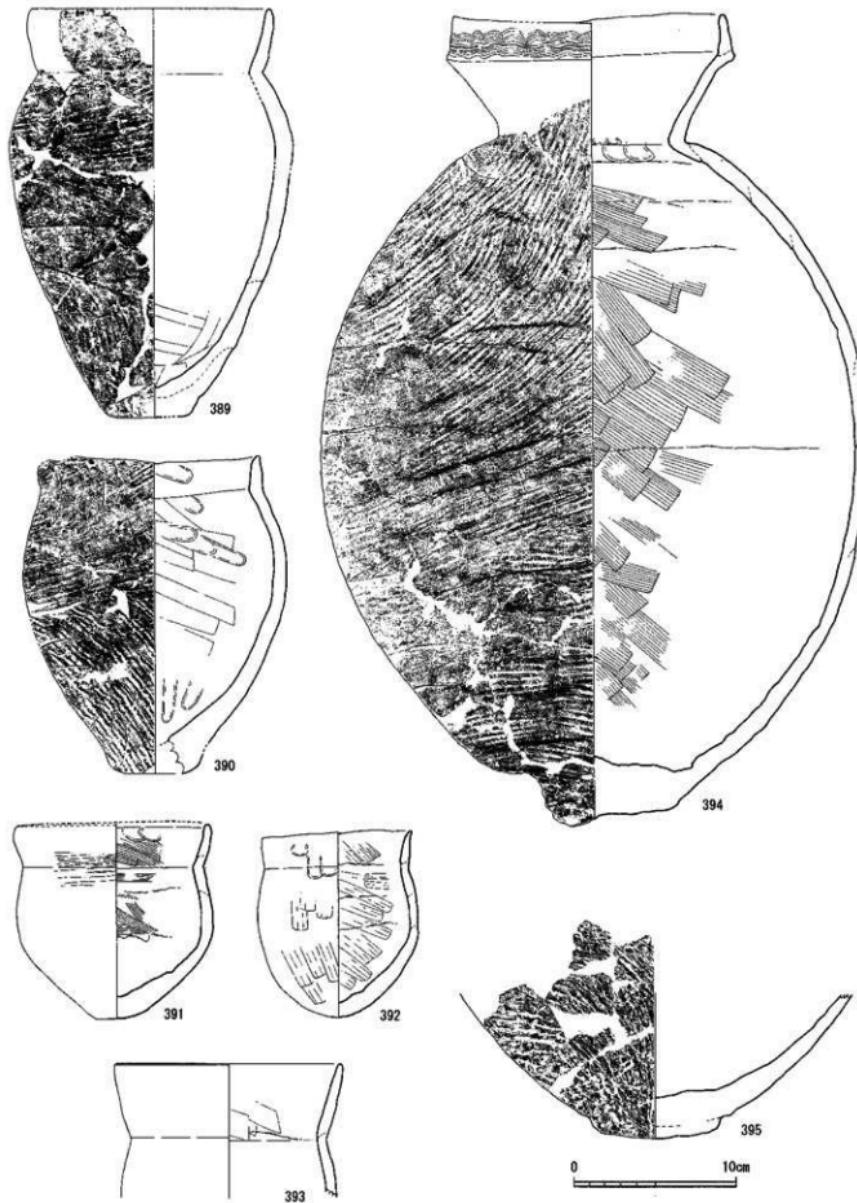
386



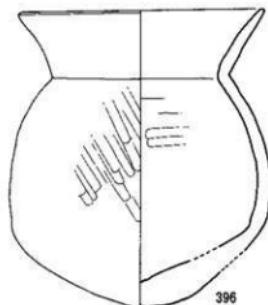
388

0 10cm

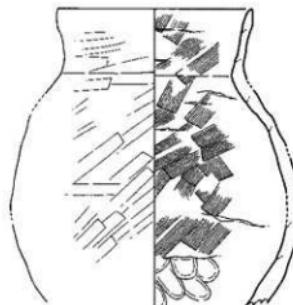
第88図 9号竪穴住居 (SA9) 出土遺物実測図 1 (S=1/3)



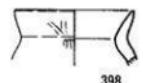
第89図 9号竪穴住居跡 (SA9) 出土遺物実測図 2 (S=1/3)



396



397



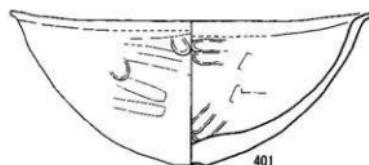
398



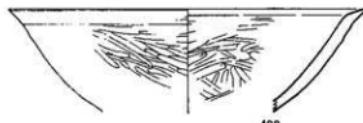
399



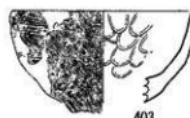
400



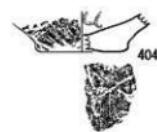
401



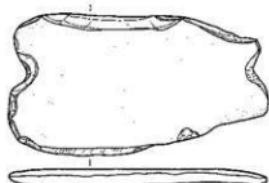
402



403



404

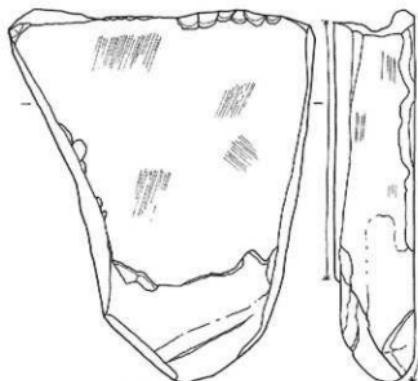


405

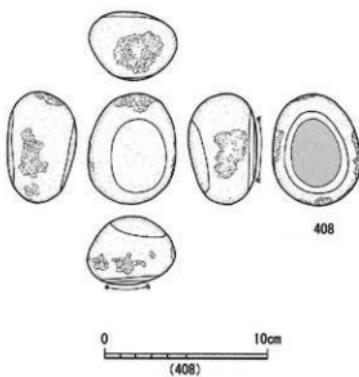
0 10cm
(396~405)

0 5cm
(406)

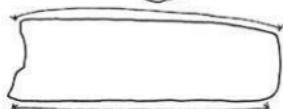
第90図 9号竪穴住居跡 (SA9) 出土遺物実測図 3 (S=1/3, 2/3)



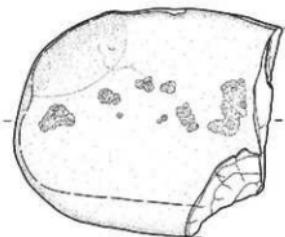
407



(408)



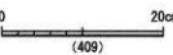
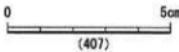
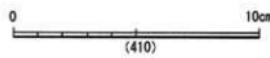
409



410



(410)

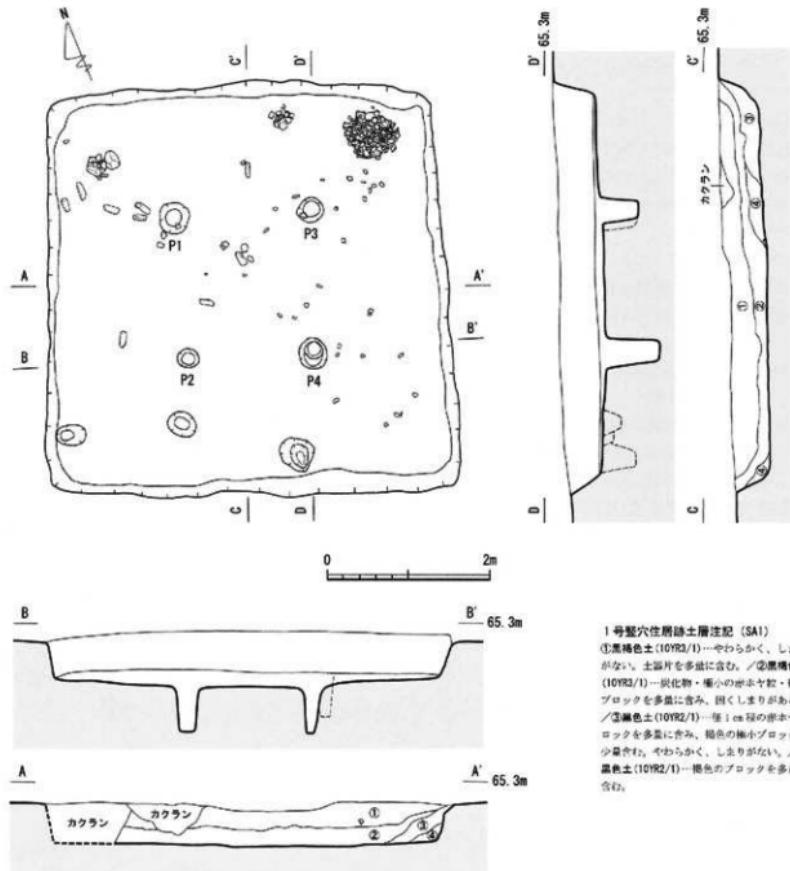


第91圖 9号竪穴住居跡(SA9)出土遺物実測図4 (S=1/3、1/2、2/3、1/6)

1号竪穴住居跡 (SA1)

遺構 (第92図)

調査区 D5 グリッドに位置し、長軸 5.05 m、短軸 4.95 m、推定床面積は 24.99 m² の方形である。検出面からの深さは最深で 0.55 m である。上層ベルトでは確認できなかったが、赤ホヤ粒の混じる黒褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は 4 本（深さ 0.50 m ~ 0.70 m）で、柱穴の距離は東西 1.55 m ~ 1.70 m、南北 1.75 m の、ほぼ対角線上の配置である。北東部の壁際に貼り床面より 10 cm 程上面で検出した土器片の集中部分がある。その部分で出土した土器は高い接合率で、完形近くまで復元できる個体も多く見られた。住居廃絶後の埋没過程の中で一括して廃棄された可能性もある。



1号竪穴性居跡土層注記 (SA1)

- ① 黒褐色土 (10YR2/1) …やわらかく、しまりがない。土器片を多量に含む。／② 黒褐色土 (10YR3/1) …灰化物・礫小の赤ホヤ粒・褐色ブロックを多量に含み、固くしまりがある。
- ／③ 黑色土 (10YR2/1) …堅い土程の赤ホヤブロックを多量に含み、褐色の極小ブロックを少量含む。やわらかく、しまりがない。／④ 黑色土 (10YR2/1) …褐色のブロックを多量に含む。

第92図 1号竪穴住居跡 (SA1) 実測図 (S=1/60)

遺物 (第93~96図—411~441)

411~424は壺である。411~421は大型の壺で、頸部下の表面所々にタタキ目が残るもの (411・414・415) がある。

口縁部は直線的に外反している。その中でも418・419は、他の口縁部に比べより長く伸びている。底部 (411~416、420・421) は、側面が直線的に立ち上がる丸みをもつ尖底で、わずかに平底面がある。

中型の壺は長胴形 (422) と球胴に近いもの (423) があり、422は口縁部が直線的に外反し、底部は丸みをもつ尖底である。

425~427は壺である。425は球形胴で、口縁部は短く直立している。

小型丸底壺は半球形 (426) と球形 (427) があり、427の底部は平底である。

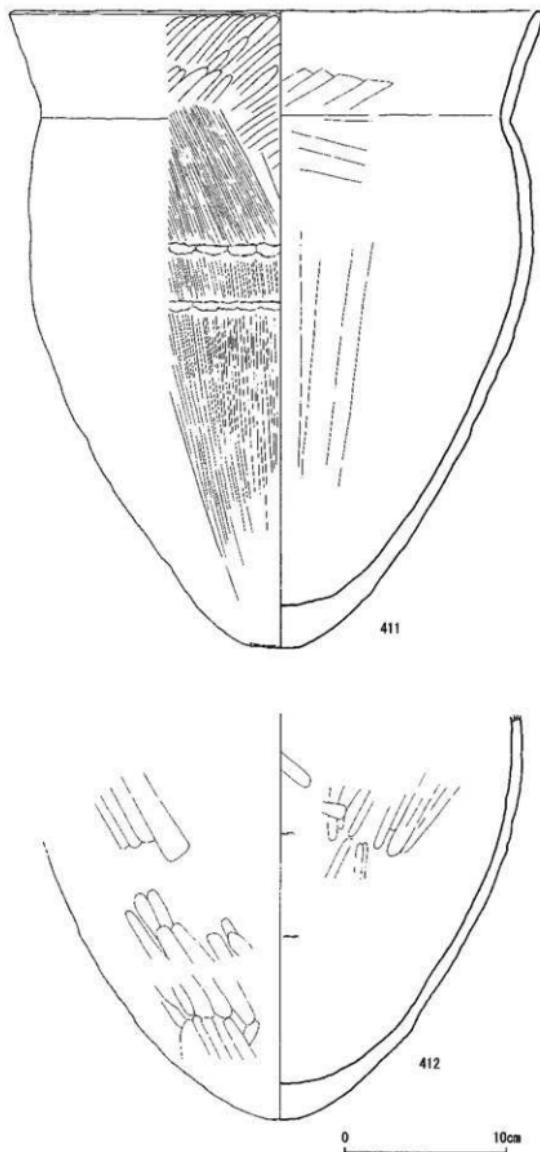
428~433は尚坏である。口縁部は直線的に外傾し、受部内面は平らに近いもの (428・429) がある。428は小さく屈曲して開く裾部がつく。

434~438は鉢である。いずれも深鉢で、口縁部が巻き込み気味に立ち上がるるもの (431)、ゆるやかに内湾するもの (435~437)、外傾するもの (438) がある。底部は平底 (434~436) である。

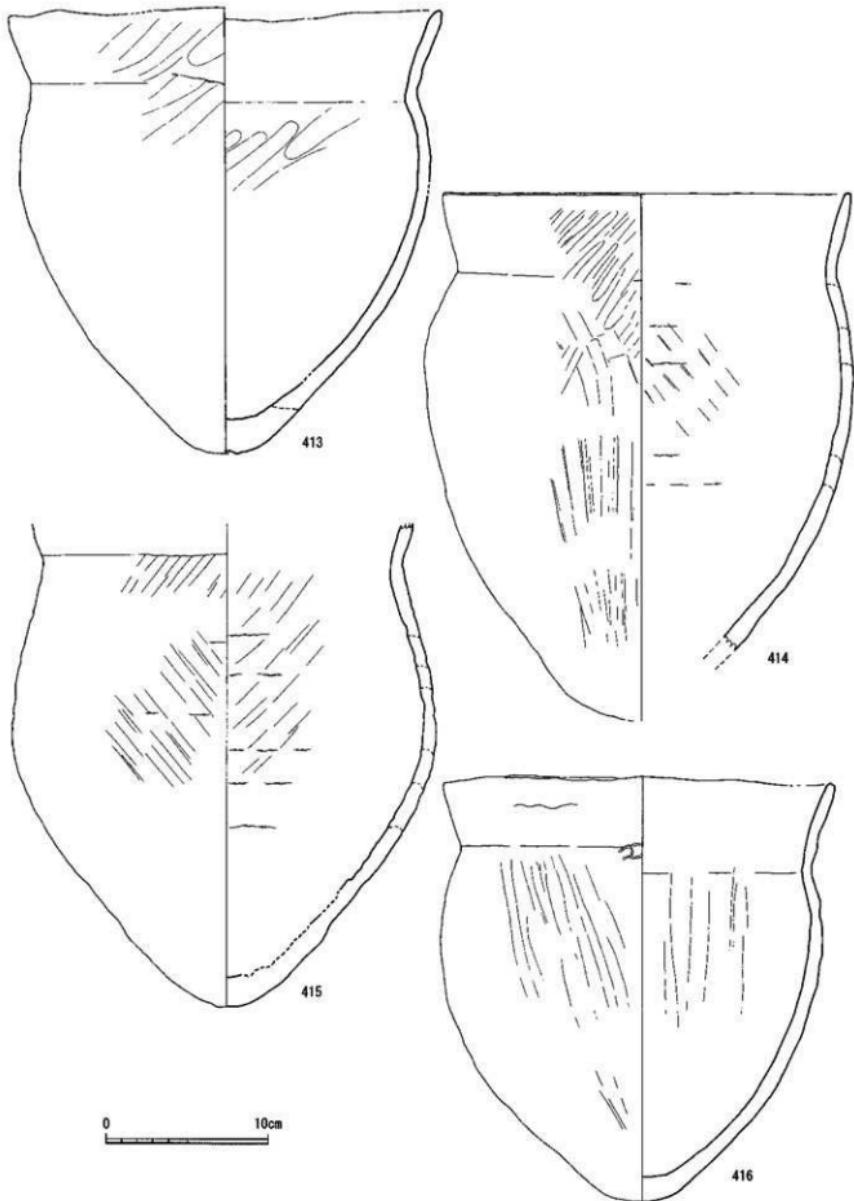
439は手捏土器で、内外面に指頭痕がある。

440は抉りのある砂岩製の石庵丁である。

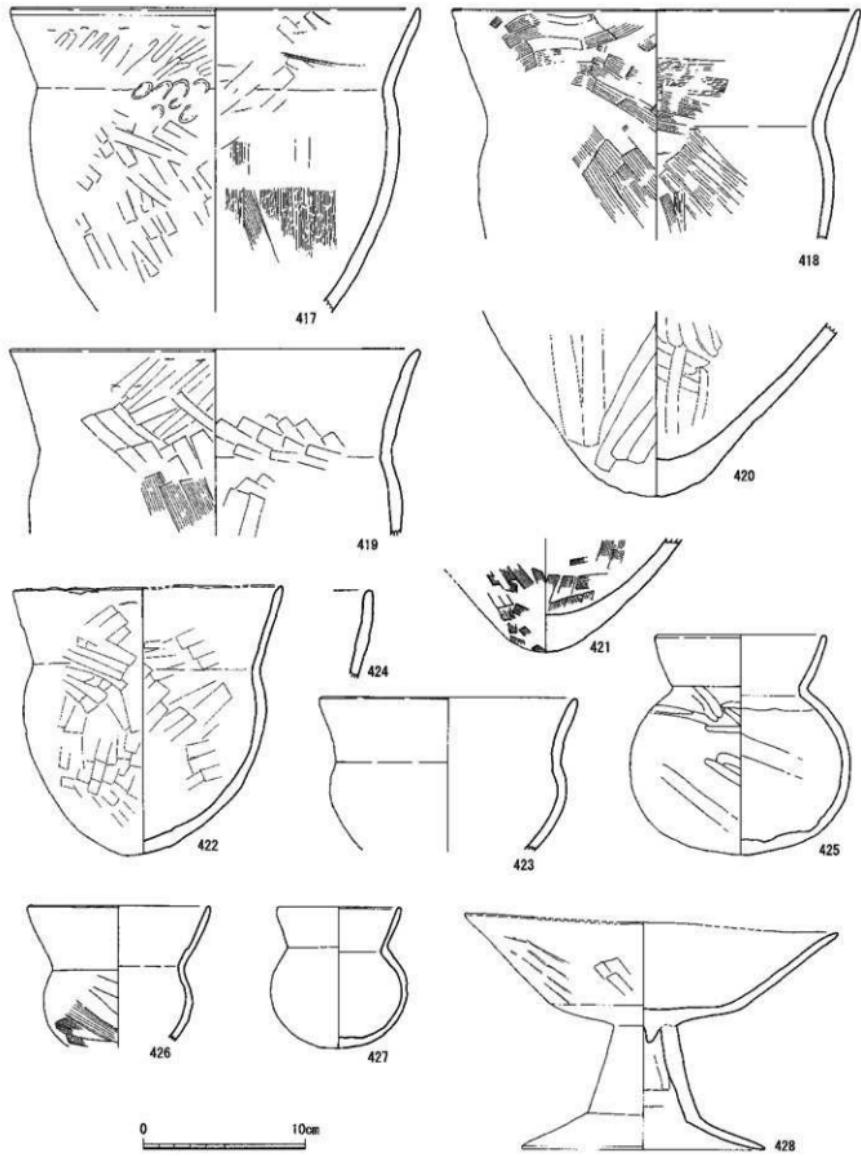
441は千枚岩製の敲石で下端に敲打痕が残る。



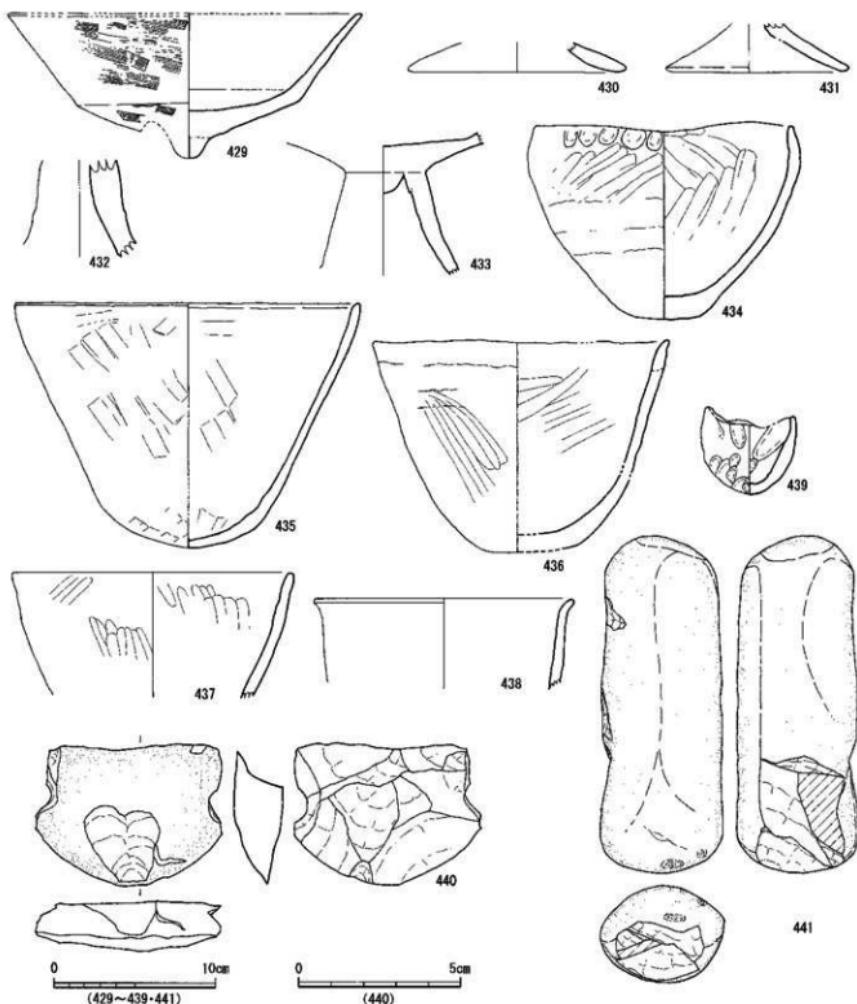
第93図 1号堅穴住居跡 (SAI) 出土遺物実測図 1 (S=1/3)



第94図 1号竖穴住居跡 (SA1) 出土遺物実測図 2 (S=1/3)



第95図 1号整穴住居跡 (SA1) 出土遺物実測図 3 (S=1/3)

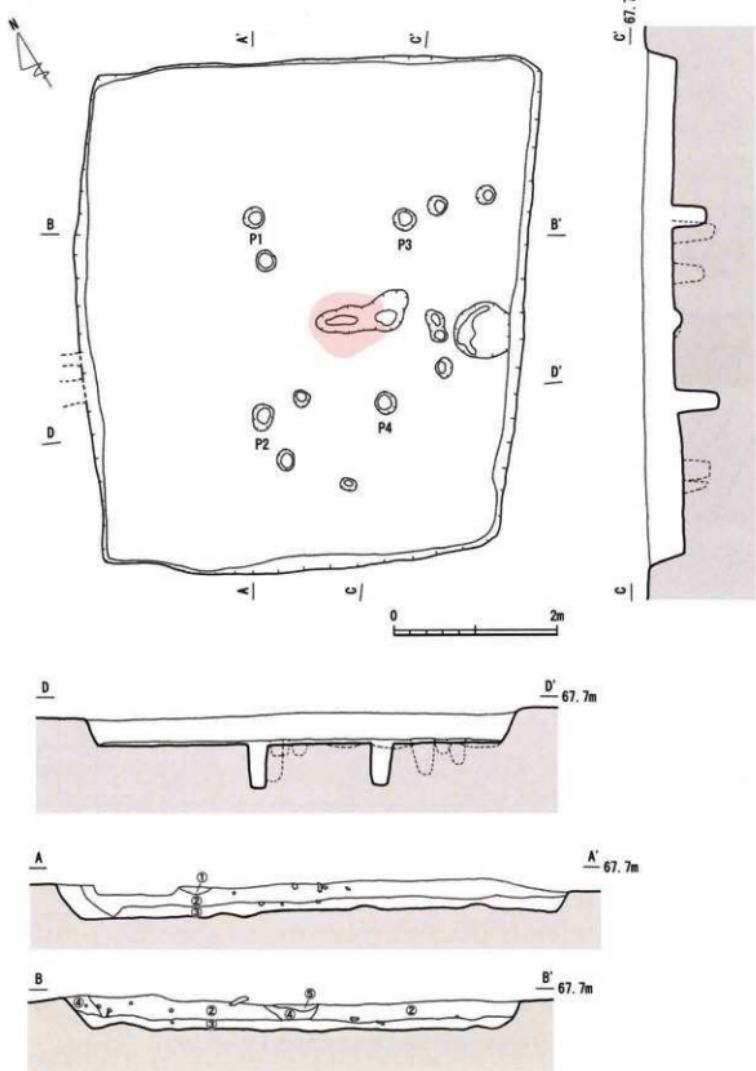


第96図 1号竖穴住居跡 (SA1) 出土遺物実測図 4 (S=1/3, 2/3)

3号竖穴住居跡 (SA3)

遺構 (第97図)

調査区 L3 グリッドに位置し、長軸 6.25 m、短軸 5.60 m、推定床面積は 35.00 m² の方形である。検出面からの深さは最深で 0.45 m である。赤ホヤブロックの混じる暗褐色の貼り床が施されていた。貼り床面では検出できなかったが、主柱穴は 4 本 (深さ 0.45 m ~ 0.55 m) で、柱穴の距離は東西 1.50 m ~ 1.85 m、南北 2.30 m ~ 2.45 m



3号竪穴住居跡土層注記 (SA3)

- ① 濃色土 (10YR2/1) … 微小の赤ホヤ粒を少量含む。やや粘性がある。
- ② 濃褐色土 (5YR2/1) … 径1~2mm程の赤ホヤ粒を少量含む。
- ③ 嫌褐色土 (7.5YR1.7/1) … 径1~2mm程の赤ホヤブロックを少數含む。固くしまりがあり。住居の貼り床である。
- ④ 濃褐色土 (7.5YR2/1) … やわらかく、しまりがない。
- ⑤ 濃褐色土 (7.5YR2/2) … 径1~2cm程の赤ホヤブロックを含み、固くしまっている。

第97図 3号竪穴住居跡 (SA3) 実測図 (S=1/60)

の、ほぼ対角線上の配置である。中央部の貼り床面では、柱穴間に焼上が広がり、 $1.15\text{m} \times 0.51\text{m}$ 程の地床がある。
遺物（第98～101図—442～485）

442～458は壺である。446・447は大型の壺で、口縁部がややゆるやかに外反している。中型の壺（442～445・448～458）は、胴部形態で長胴と球胴がある。長胴形では、外面全体にタタキ日の残るもの（442）、一部にミガキを施しているもの（443・444・455・457・458）がある。口縁部は直線的に外反しているもの（442～445・458）、直線的ではあるが、ややゆるやかに外反しているもの（446）、短く屈曲するもの（457）がある。底部は、丸底をもつ尖底やわずかに平坦面やくぼみのあるもの（448・454・455）、厚みのある平底のもの（444）がある。449は球形胴の壺で、口縁部が直線的に伸びている。

459・460は壺または壺の口縁部である。

461～473は壺である。口縁部は、やや外反するもの（461）、直立に近く立ち上がるものの（462～464）、頸部に格子目状の突帯があるものの（465）がある。462は表面の一部にタタキ日が残る。466は胴部から底部付近ではあるが、丸底に近い底部形態をしている。467～470は櫛描波状文や線刻による直線的な文様のある二重口縁壺の口縁部である。471も同じく二重口縁壺の口縁部であるが、内湾の度合いが強く、波状文もない。これは3号住居跡内と遺構外からとが接合したものであり、流入の可能性が高い。472・473は小型の壺である。472の口縁部は長く直立気味に外傾している。

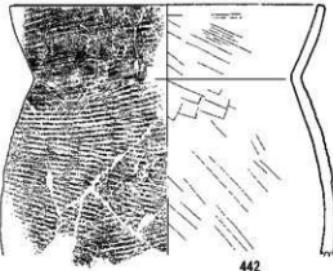
474・475は尚坏である。どちらもミガキを施してある。474は一段の円形透かしが施されており、同遺構遺物時期の中ではほとんど見られない。

476・477は鉢である。476は深鉢の底部で平底である。477は浅鉢の底部で平底である。

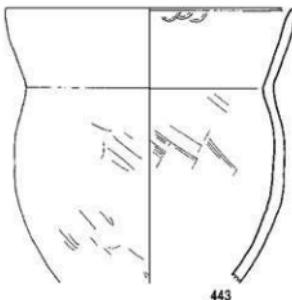
478・479は手挽土器で内外面に指痕がある。

480は抉りのある頁岩製の石庖丁である。481は花崗岩製の壺・磨石で、敲打痕や磨り面が残る。

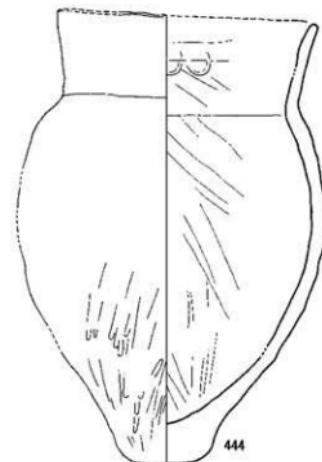
482～485は鉄製品である。482は破損・変形をしているが、残存長 6.8cm の柳葉鐵である。483は鉄鎌の基部である。484は鉢の一部で、片方の面に径 2mm の棒状の鉄が付着しており、両者を巻き合わせるかのような帯状の有機質も認められる。残存長は 4.4cm である。485は鉢の先端部付近の破片で、残存長 5.3cm である。厚さは 3cm 前後、裏すきの深さは約 0.1cm で、断面観は両側が丸みを帯びた形状である。



442



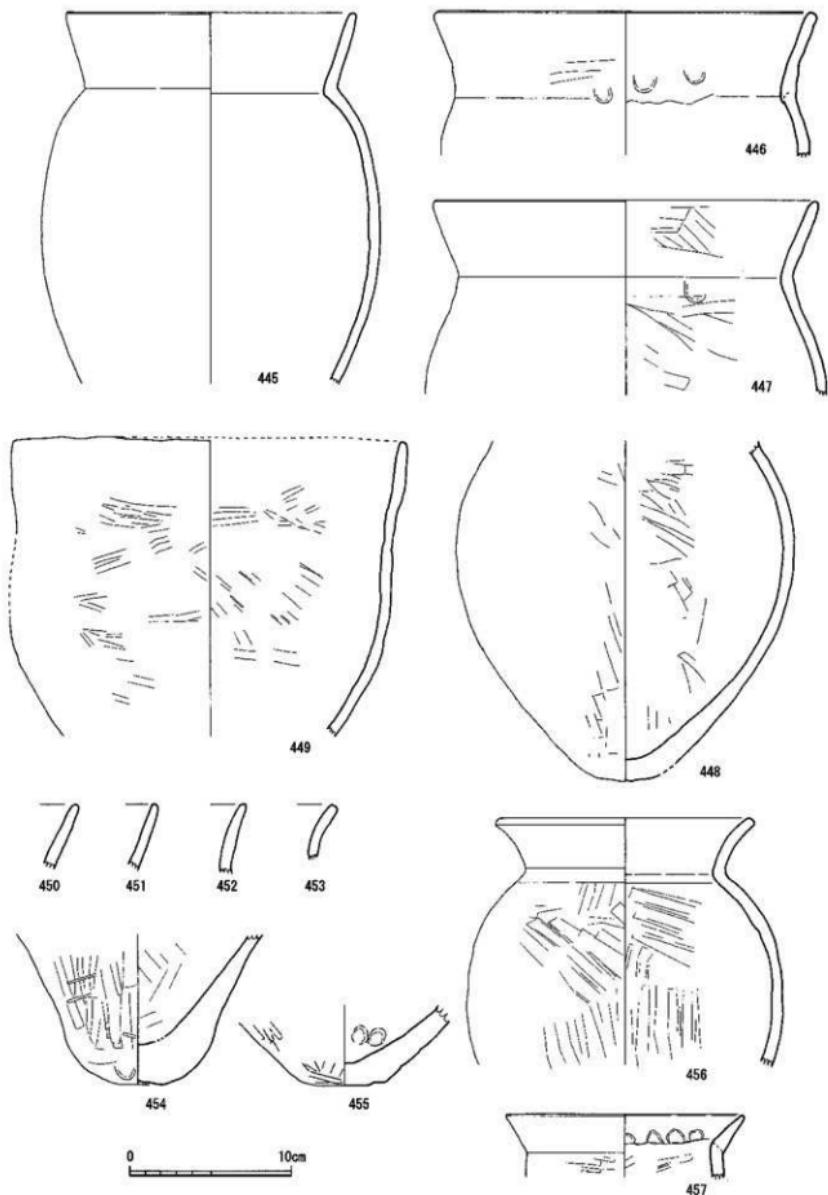
443



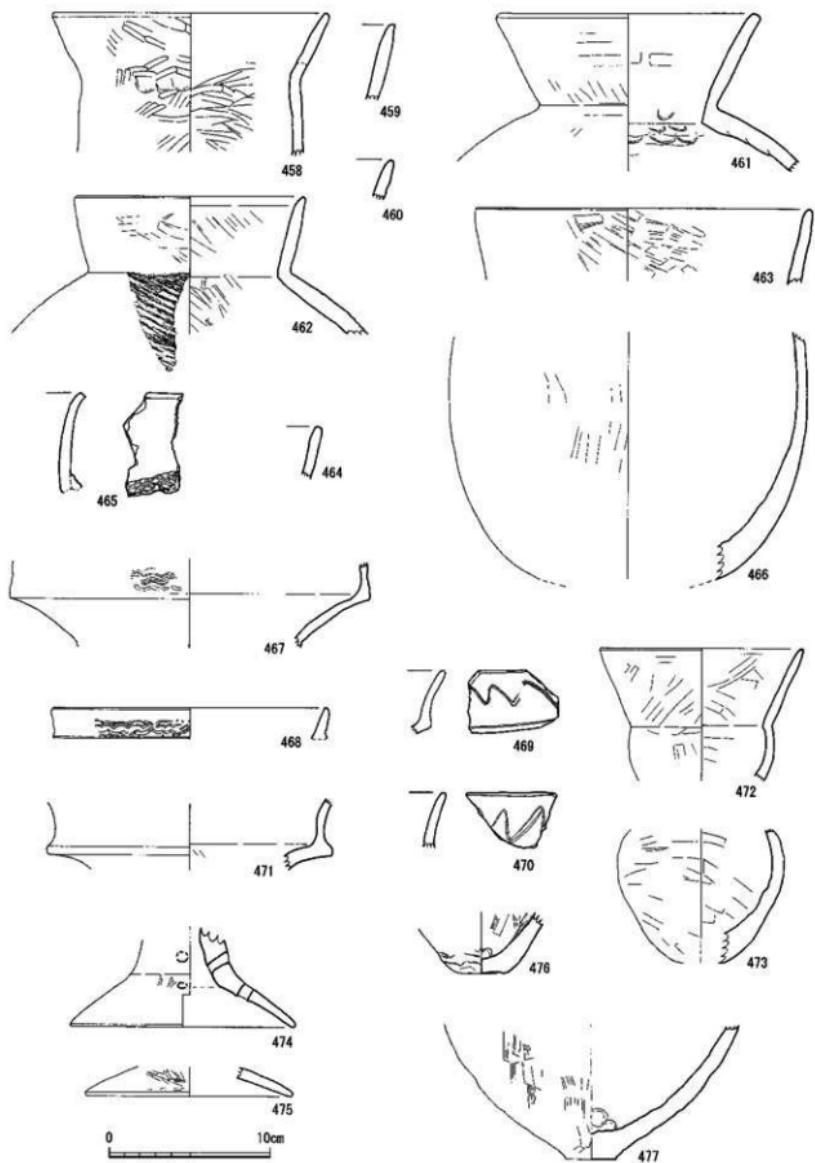
444

0 10cm

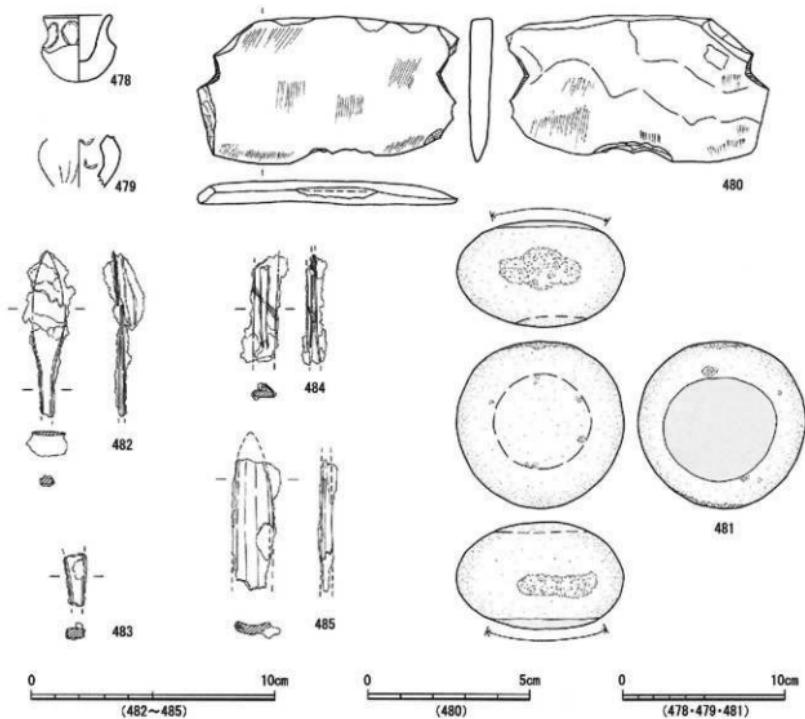
第98図 3号竪穴住居跡 (SA3) 出土遺物実測図 1 (S=1/3)



第99図 3号竪穴住居跡 (SA3) 出土遺物実測図 2 (S=1/3)



第100図 3号竪穴住居跡(SA3)出土遺物実測図3 (S=1/3)



第101図 3号竖穴住居跡 (SA3) 出土遺物実測図 4 (S=1/2, 2/3, 1/3)

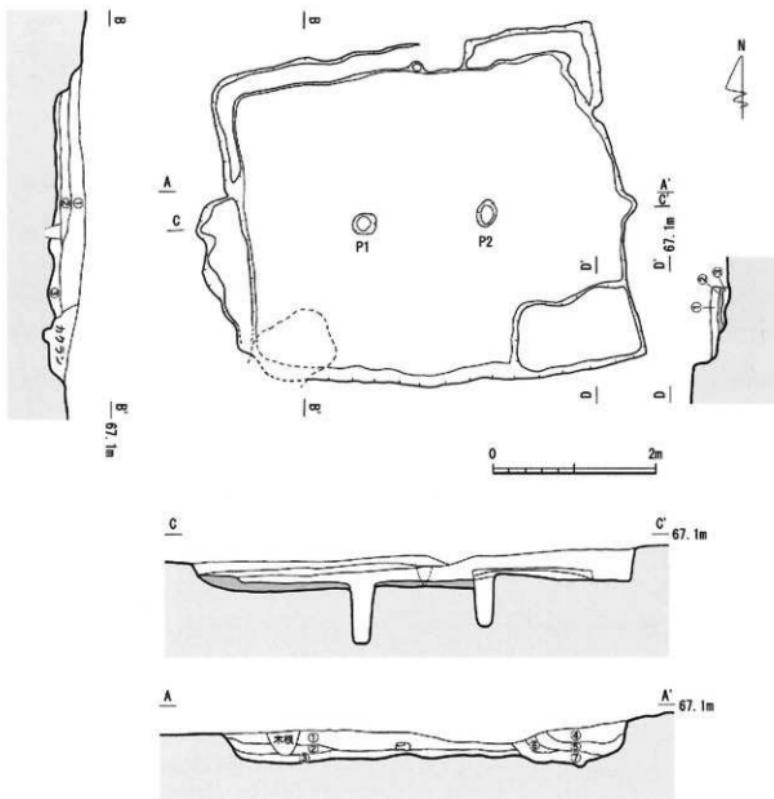
4号竖穴住居跡 (SA4)

遺構 (第102図)

調査区J4グリッドに位置し、長軸 4.90 m、短軸 4.00 m、推定床面積は 19.60 m² の長方形である。検出面からの深さは最深で 0.50 m である。赤ホヤブロックの混じる暗褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は 2 本（深さ 0.70 m ~ 0.75 m）で、柱穴の距離は東西 1.50 m で長軸方向にならんでいる。北東側、西側、南東側部分の壁には、幅 0.30 m ~ 0.90 m のベッド状遺構がある。そのうち南東側部分のベッド状遺構には赤ホヤ粒の混じる暗褐色の貼り床が施されていた。

遺物 (第103・104図-486~509)

486~496は壺である。486~491は長胴形の壺の口縁部である。直立気味に長くゆるやかに外反している。491には外面にミガキが施され、口縁端部に盛り上がりがある。492は球形壺の壺で、外面頭部下にミガキが施され、口縁部が直線的に伸びている。493は長胴形の壺の胴部で、底部付近は丸みをもつ尖底の底部形状をしている。494~496は底部で、丸みをもつ尖底である。494には外面にミガキが施されている。



4号竖穴住居跡土層注記 (SA4)

①赤褐色土 (10YR2/1)…5-40cm. 程2mm程の赤ホヤ粒を少量含む。腐食地塊を多量に含み、やわらかく、しまりがない。

②深褐色土 (10YR2/1)…SA4の埋土。径1cm程の赤ホヤブロックを多量に含む、やわらかく、しまりがない。

③暗褐色土 (10YR2/2)…SA4の埋土。墨色、暗褐色。赤ホヤブロックを含む。粘性があり固くしまっており、住居の貼り床である。

④深褐色土 (10YR3/1)…上杭の埋土。墨色、赤ホヤ粒を多量に含み、やわらかく、しまりがない。

⑤黒褐色土 (10YR3/1)…上杭の埋土。④と似ているが、墨色、赤ホヤ粒を多量に含む。

⑥黒褐色土 (10YR3/1)…土坑の埋土。④と似ているが、墨色の砂の割合が多い。

⑦暗褐色土 (10YR2/3)…土坑の埋土。墨色、暗褐色。赤ホヤブロックを含む、しまりがある。

ベッド状遺構土層注記

①暗褐色土 (10YR2/3)…径1mm以下の赤ホヤ粒と黒褐色ブロックを少量含む。

②暗褐色土 (10YR2/3)…径4mm程の赤ホヤ粒と墨褐色ブロックを多く含む。住居の貼り床の土と同じものと思われる。①よりも固く緻化している。

③暗褐色土 (10YR2/3)…①と似ているが、赤ホヤ粒と墨褐色ブロックの集合が多い。

第102図 4号竖穴住居跡 (SA4) 実測図 ($S=1/60$)

497～500は壺である。口縁部は、外反するもの（497）、直立に近く立ち上がるるもの（498）がある。498の外面にはミガキが施されている。499・500は小型丸底壺の直線的に開く口縁部である。

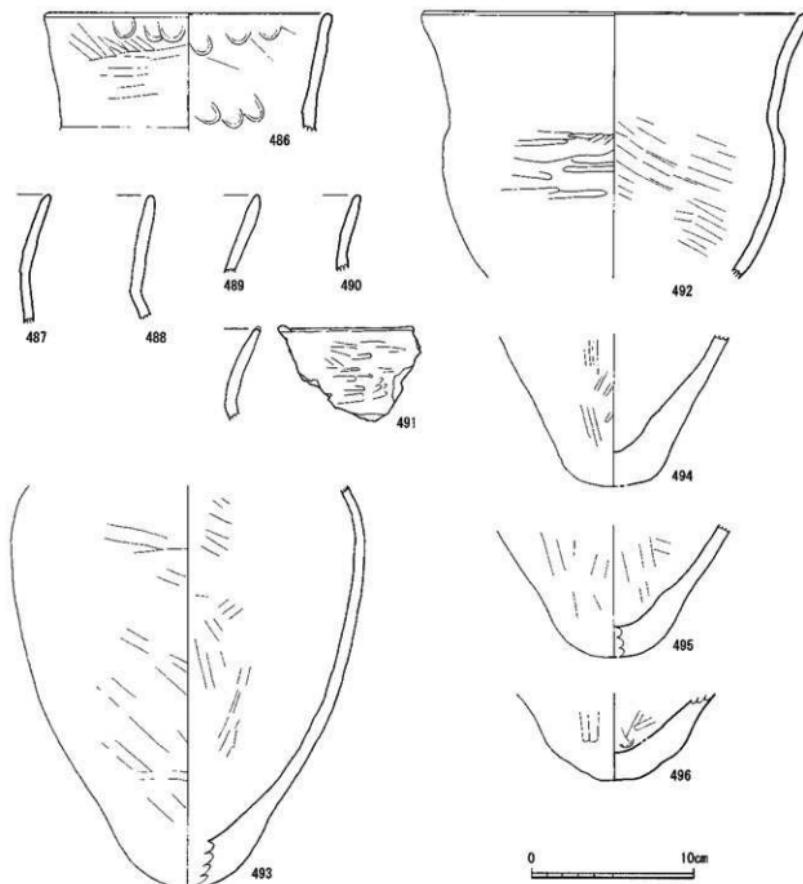
501・502は高壺である。501はいわゆる有段高壺の壺部と考えられ、有段部が外に張り出している。502は脚部で外面にミガキが施されている。

503は鉢である。ゆるやかに内湾する口縁部をもつ深鉢である。

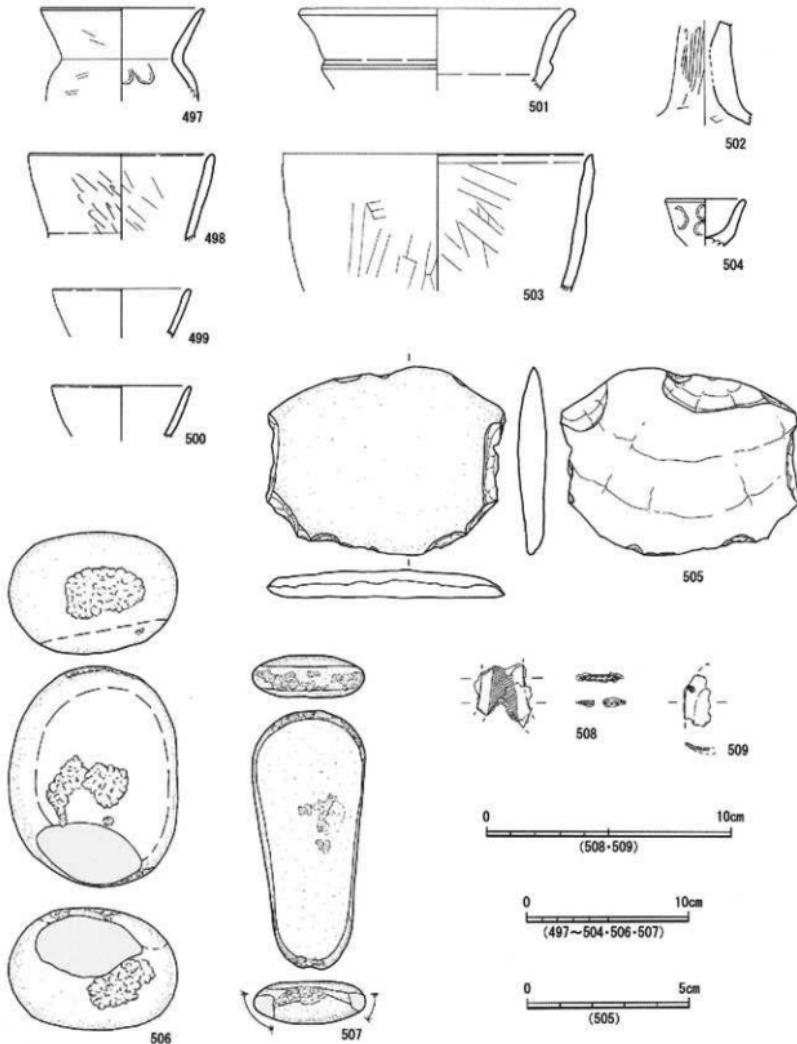
504は手捏土器で内外面に指痕がある。

505は抉りのある砂岩製の石臼である。506・507は礫・磨石で、敲打痕や磨り面が残る。花崗斑岩製（506）と砂岩製（507）である。

508・509は鉄製品である。508は逆刺が外側に開く形状の無茎鍔の破片である。中央部は明褐色に変色しており、矢柄の木質痕跡と考えられる。509は断面観がカーブする薄い鉄片で、鉋の先端付近と考えられる。



第103図 4号堅穴住居跡 (SA4) 出土遺物実測図 1 (S=1/3)

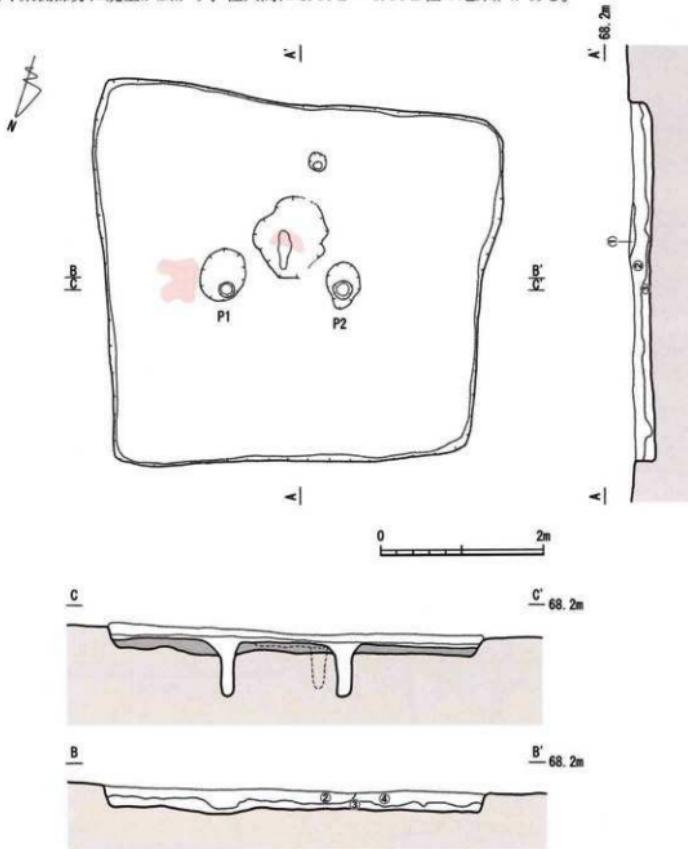


第104図 4号堅穴住居跡 (SA4) 出土遺物実測図 2 (S=1/2、1/3、2/3)

10号竪穴住居跡 (SA10)

遺構 (第105図)

調査区 M3 グリッドに位置し、長軸 4.65 m、短軸 4.40 m、推定床面積は 20.46 m² の方形である。検出面からの深さは最深で 0.30 m である。赤ホヤブロックの混じる褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は 2 本（深さ 0.70 m ～ 0.75 m）で、柱穴の距離は東西 1.45 m で長軸方向にならんでいる。中央部の貼り床面では、柱穴間や東側部分に焼土が広がり、柱穴間に 1.00 m × 0.90 m 程の地床炉がある。



10号竪穴住居跡土層注記 (SA10)

- ① 黒褐色土 (7.5YR2/2) …やわらかく、しまりがない。
- ② 黒褐色土 (10YR2/2) …粘性があり、径 5 ～ 10 mm 程の赤ホヤブロックを微量に含む。
- ③ 棕色土 (10YR4/4) …径 1 cm 以上の赤ホヤブロックを少量含む。粘性があり、固くしまっており、住居の貼り床である。
- ④ 棕色土 (10YR4/6) …赤ホヤブロックや黒褐色土を少量含み、固くしまっている。

第105図 10号竪穴住居跡 (SA10) 実測図 (S=1/60)

遺物（第106・107図—510～521）

510～512は甕である。外面はT工具によるナデ調整主体で、口縁部は直立気味に長くゆるやかに外反するもの（510）と、「く」の字状で直線的に開くものの（512）がある。

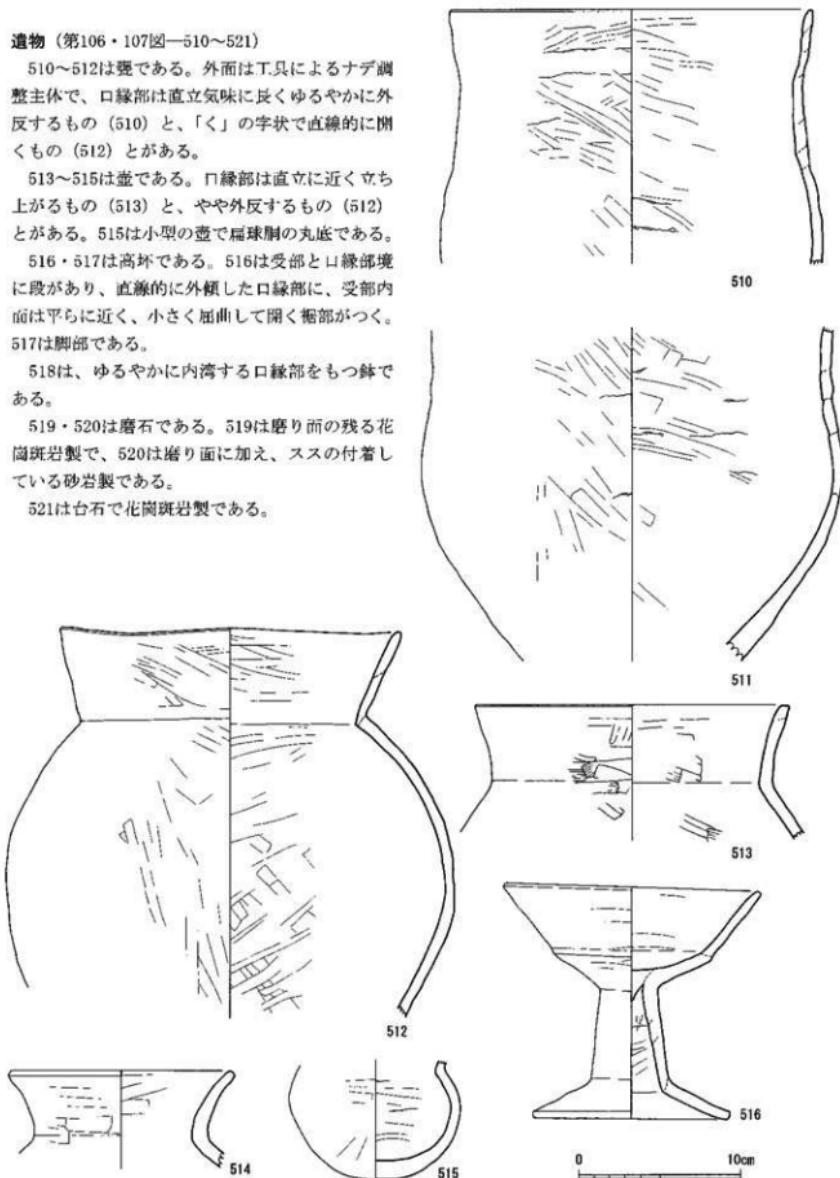
513～515は壺である。口縁部は直立に近く立ち上がるもの（513）と、やや外反するもの（512）がある。515は小型の壺で扁球形の丸底である。

516・517は高杯である。516は受部と口縁部境に段があり、直線的に外傾した口縁部に、受部内面は平らに近く、小さく屈曲して聞く部位がつく。517は脚部である。

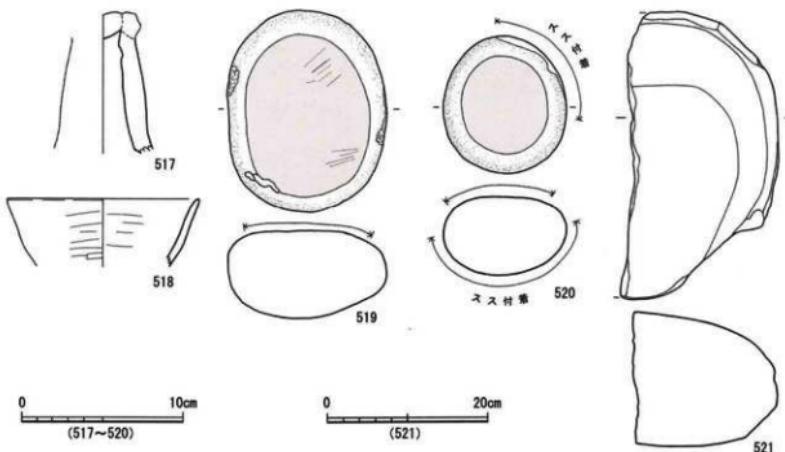
518は、ゆるやかに内湾する口縁部をもつ鉢である。

519・520は磨石である。519は磨り面の残る花崗斑岩製で、520は磨り面に加え、スヌの付着している砂岩製である。

521は白石で花崗斑岩製である。



第106図 10号竪穴住居跡 (SA10) 出土遺物実測図 1 (S=1/3)



第107図 10号竪穴住居跡 (SA10) 出土遺物実測図 2 (S=1/3、1/6)

11号竪穴住居跡 (SA11)

遺構 (第108図)

調査区D3 グリッドに位置し、長軸 6.35 m、短軸 5.35 m、推定床面積 33.97 m² の長方形である。検出面からの深さは最深で 0.55 m である。床面は、掘り底をそのまま利用したと考えられる。主柱穴は 4 本（深さ 0.65 m ~ 0.70 m）で、柱穴の距離は東西 2.05 m、南北 1.65 m ~ 1.85 m の、ほぼ対角線上の配置である。北側部分には 1.30 m × 2.00 m の張り出しがあり、西側部分に焼土を検出した。

遺物 (第109・110図—522~539)

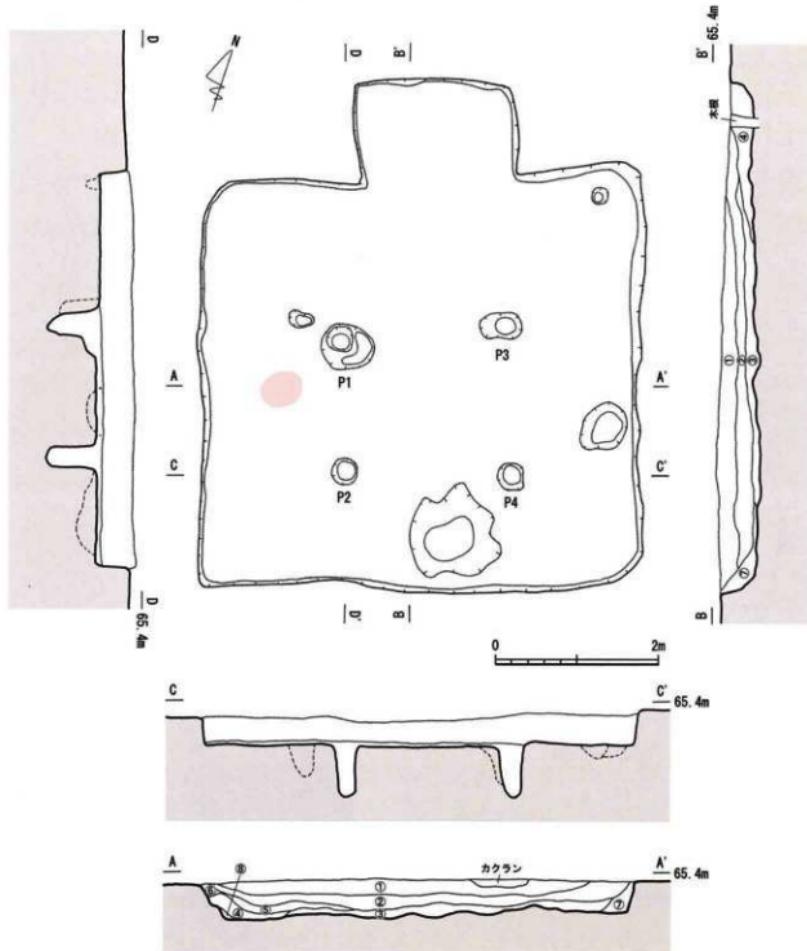
522~529は甕である。522・523はナデ調整主体の大型の甕で、口縁部は直立気味に長くゆるやかに外反している。524・525は中型の甕で、524はナデ調整主体に、口縁部は短く直立気味に外反し、底部は、わずかに平坦面のある尖底に近い平底である。525はハケメ調整主体に、口縁部は直立気味に長くゆるやかに外反し、底部は丸みをもつ尖底である。526は口縁部である。527は底部で、丸みをもつ尖底である。528は底部で、外面にタタキ目を施しており、平底である。529は、ナデ調整主体の小型の甕で、口縁部は短く直立気味に外反し、底部はわずかに平坦面のある尖底に近い平底である。

530・531は壺である。530は外面にタタキ目を施しており、口縁部は外反し、底部はわずかに平坦面のある尖底に近い平底である。531は外面にミガキを施しており、口縁部は長く直立している。

532~537は鉢である。532~535は深鉢である。532はハケメ調整主体に、口縁部はゆるやかに内湾し、底部は丸底である。533はナデ調整主体に、口縁部はゆるやかに内湾し、底部は丸底である。また、底部内面中央部は、押圧により凹んでいる。534は平坦面のある尖底に近い平底である。535はレンズ状の平底と考えられる。536・537は浅鉢である。536は外面にタタキ目を施しており、口縁部はゆるやかに外傾している。537はゆるやかに内湾する口縁部である。

538は手捏土器である。

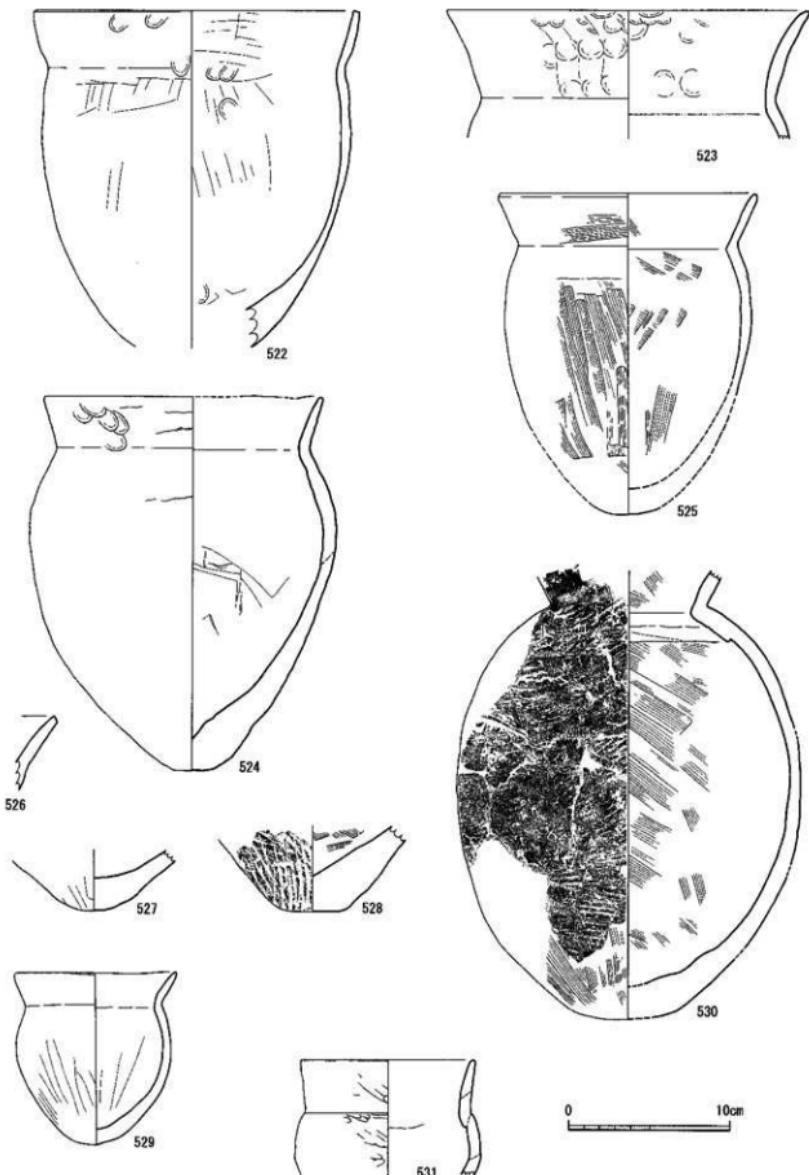
539は敲・磨石で、左側面に磨り面、両端に敲打痕が残る。砂岩製である。



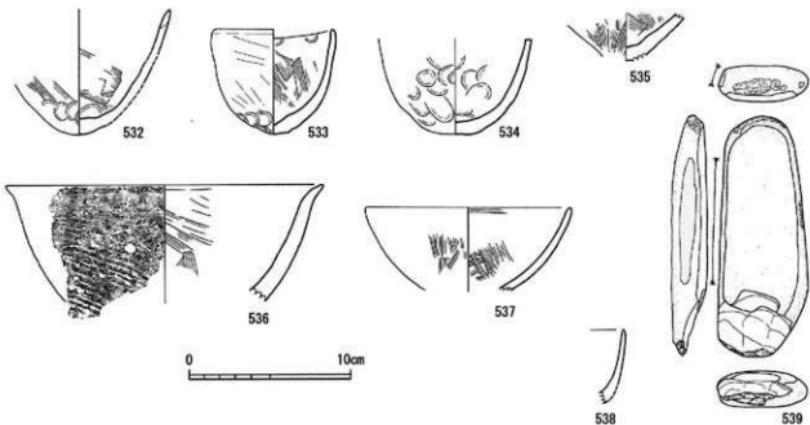
11号竪穴住居跡土層注記 (SA11)

- ①黒色土 (10R2/1) -赤ホホヤ粒を微量に含み、やわらかく、しまりがない。
- ②黒色土 (10R2/1) -①と似ているが、赤ホホヤ粒を含む割合が多い。
- ③暗褐色土 (10R3/2) -一様3cm程の赤ホホヤブロック・土器片を少量含む。粘性があり、固くしまりがある。
- ④黒色土 (10R1. 7/1) -①と似ているが、赤ホホヤ粒を含む割合が少ない。
- ⑤黒色土 (10R1. 7/1) -①と似ているが、赤ホホヤ粒を含む割合が少ない。
- ⑥黒色土 (10R1. 7/1) -①と似ているが、暗褐色ブロックを微量含む。
- ⑦黒色土 (10R1. 7/1) -一様3cm程の赤ホホヤブロックを少量含む。
- ⑧黒色土 (10R1. 7/1) -炭化物粒を多量に含む。

第108図 11号竪穴住居跡 (SA11) 実測図 (S=1/60)



第109図 11号竪穴住居跡 (SA11) 出土遺物実測図 1 (S=1/3)



第110図 11号堅穴住居跡 (SA11) 出土遺物実測図 2 (S=1/3)

12号堅穴住居跡 (SA12)

遺構 (第111図)

調査区C2 グリッドに位置し、長軸 6.60 m、短軸 6.60 m、推定床面積は 43.56 m² の方形である。検出面からの深さは最深で 0.65 m である。赤ホヤブロックの混じる暗褐色の貼り床が施されていた。主柱穴は 4 本 (深さ 0.65 m ~ 0.70 m) で、柱穴の距離は東西 2.35 m ~ 2.30 m、南北 2.20 m ~ 2.40 m の、ほぼ対角線上の配置である。北側部分には 1.80 m × 2.20 m の張り出しがあり、中央部の貼り床面では、柱穴間に焼土を検出した。東側部分の貼り床面主柱穴付近には、炭化材を良好な状態で検出し、焼失住居の可能性も考えられる。樹種同定の結果 (第IV章第2節) サカキ、放射性炭素年代分析の補正値は 1870 ± 40 年 BP であった。貼り床面除去後の床面において、それぞれの主柱穴の近くに、同じような柱穴 (深さ 0.25 m ~ 0.72 m) を確認した。柱の位置を変えたか、柱の補強を行った可能性が考えられる。

遺物 (第112~115図-540~575)

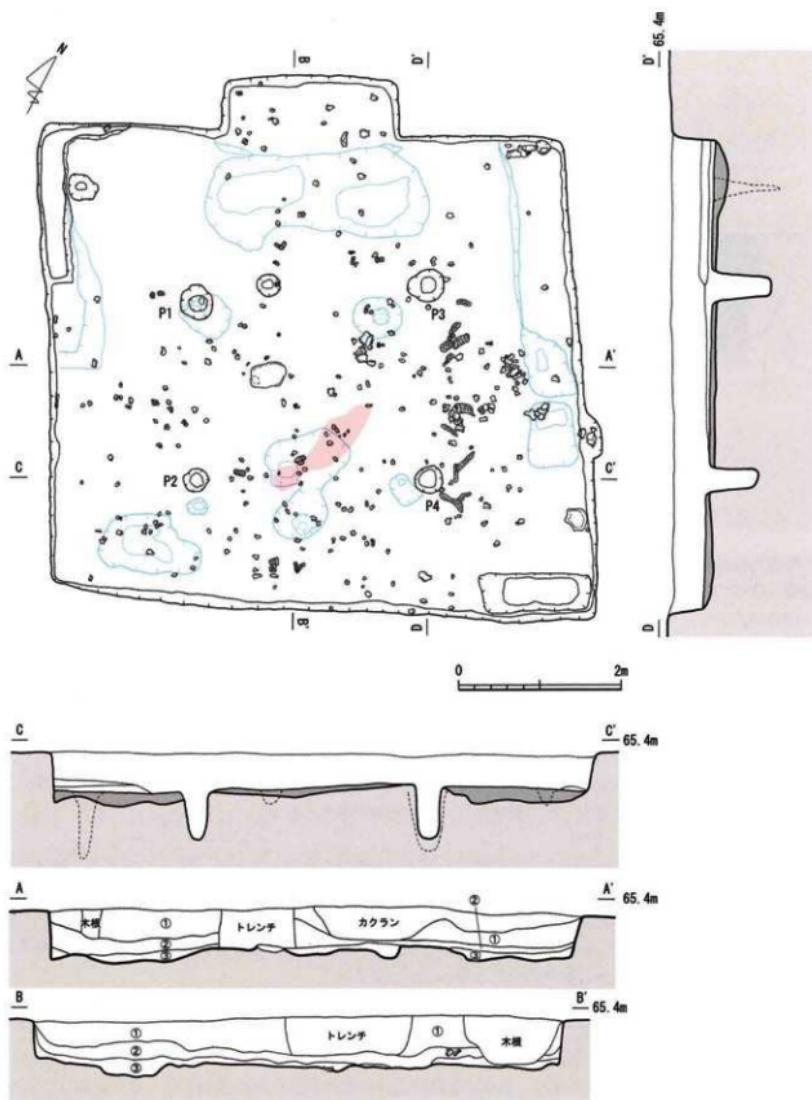
540~549は壺である。540~543は大型の壺で、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いている。底部は、丸みをもつ尖底 (543) である。544・545は中型の壺で、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いている。底部は、丸みをもつ尖底 (544) である。546・547は胴部で、外面にタタキ目を施してある。548・549は底部で、548は外面にタタキ目を施してある。両者とも、側面が直線的に立ち上がる平底である。

550は、壺または甕の底部である。

551~561は壺である。口縁部は、直立気味のもの (551・552)、二重口縁のもの (553)、やや外傾するもの (554~557)、大きく外反するもの (558) がある。553は櫛描波状文のある二重口縁壺の口縁部である。554の外面にはタタキ目を施してあり、底部は尖底に近い平底である。555の外面にはミガキを施してある。559・560は底部で、尖底に近い平底である。559の外面には、ミガキを施してある。561は、頭部付近に櫛描波状文がある。

562は壺または鉢の口縁部である。

563は高坪の襟部である。



12号竪穴住居跡土層注記 (SA12)

①褐色土 (10YRA/1) …やわらかく、しまりがない。

②黒褐色土 (7.5YR3/1) …極小の赤褐色を微量に含む。やや粘性があり、しまりがない。

③暗褐色土 (7.5YR3/4) …径1cm以上の赤褐色ブロックを少量含む。非常に固くしまりがあり、住居の貼り床である。

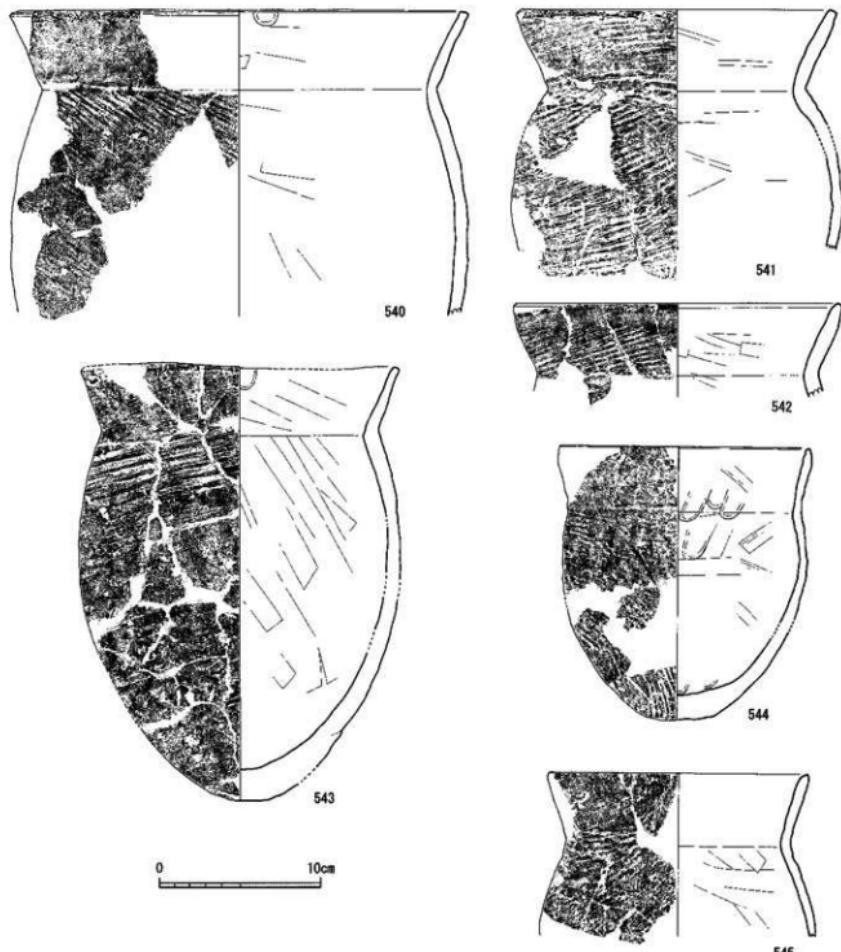
第111図 12号竪穴住居跡 (SA12) 実測図 (S=1/60)

564・565は鉢である。564は浅鉢で、外面にタタキ目を施しており、口縁部はゆるやかに外傾している。565は浅鉢で、ゆるやかに内湾する口縁部に、底部は平底である。

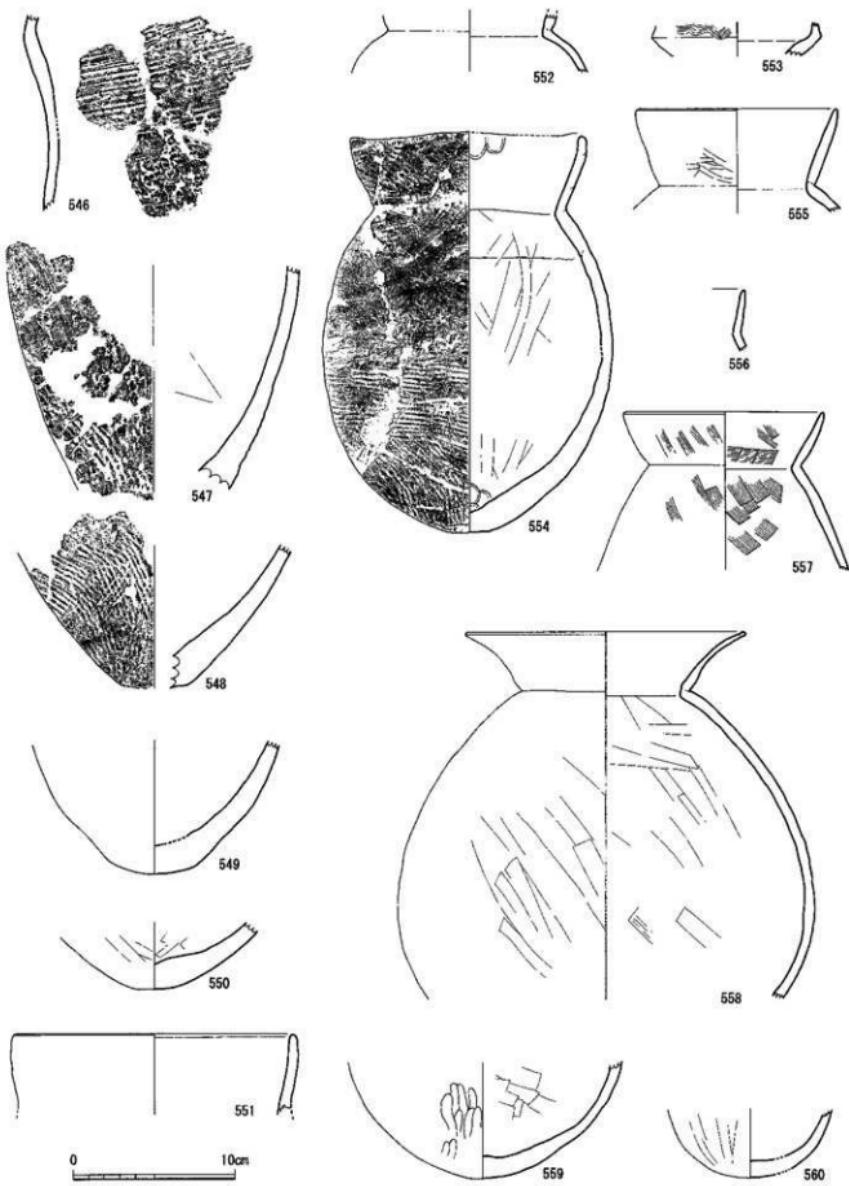
566は不明土器で、口縁部は大きく開いており、底部付近は注口に似た様相である。円形透かしと考えられるものが一か所ある。

567・568は、擦痕の残る砂岩製の砥石である。569は、敲打痕や磨り面の残る砂岩製の敲・磨石である。570～572は花崗斑岩製の台石で、572は中央部がやや凹んでいる。

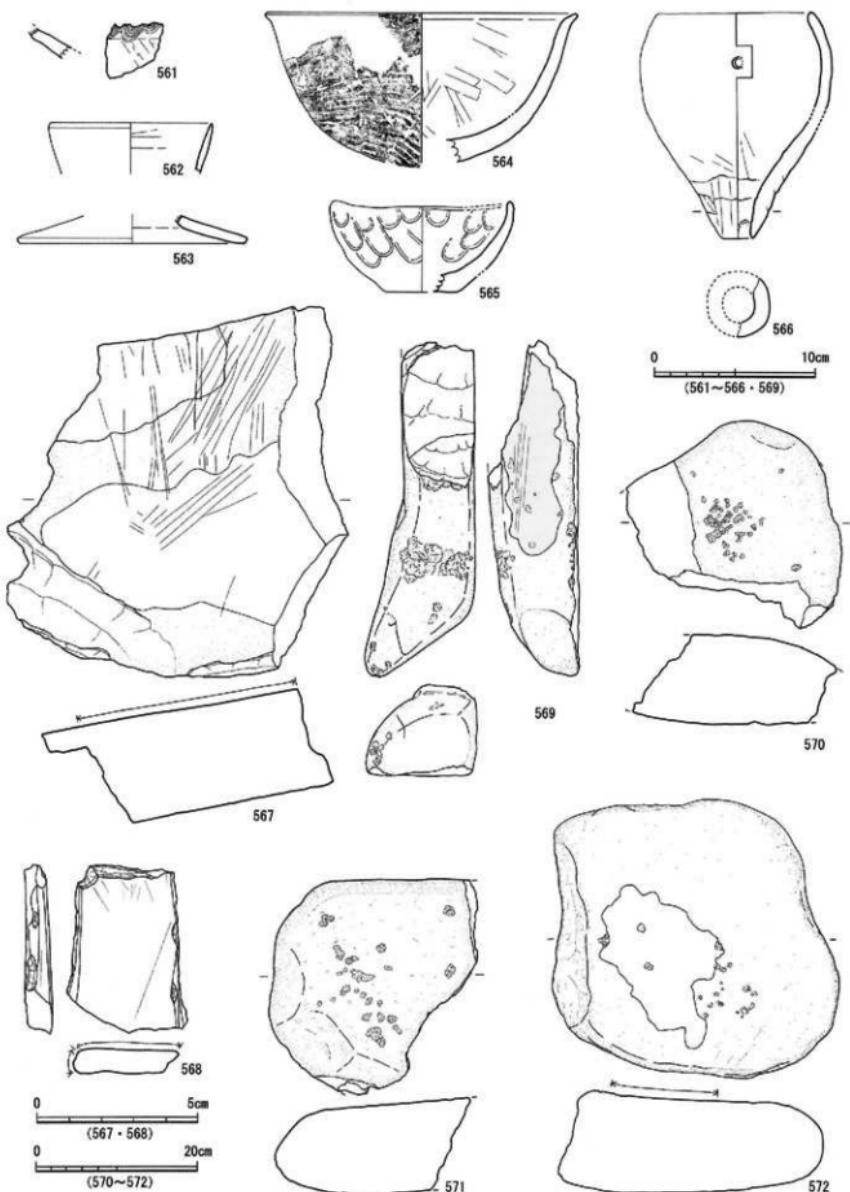
573～575は鉄製品である。573は、残存長4.9cmの脇挟鍔である。刃部に布の付着が認められる。574・575は、鉄鎌の茎部片であるが、詳細は不明である。



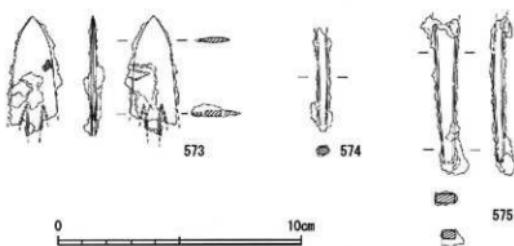
第112図 12号竪穴住居跡 (SA12) 出土遺物実測図 1 ($S=1/3$)



第113図 12号竪穴住居跡 (SA12) 出土遺物実測図 2 (S=1/3)

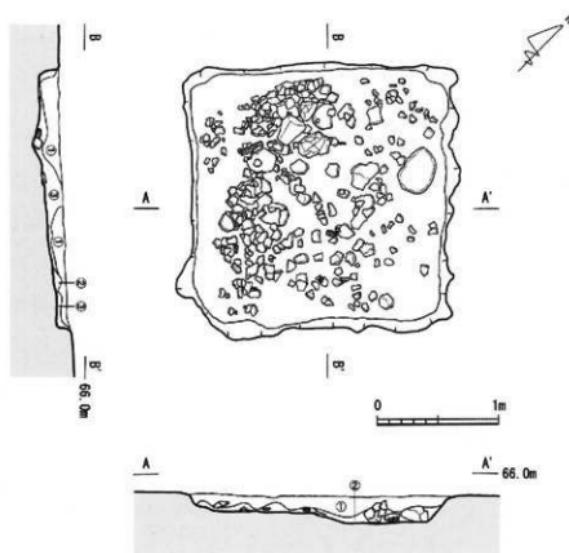


第114図 12号整穴住居跡 (SA12) 出土遺物実測図 3 (S=1/3, 2/3, 1/6)



第115図 12号竪穴住居跡 (SA12) 出土遺物実測図 4 (S=1/2)

**土坑
4号土坑 (SC4)**



4号土坑土層注記 (SC4)
 ①黒色土 (7, SVR1.7/1)…水耕に覆われ、やわらかく、しまりがない。
 ②赤褐色土 (10YR2/7)…粘性があり、固くしまっている。
 ③黒色土 (10YR2/1)…底 5~10 mm 程の赤土を少含む。

第116図 4号土坑 (SC4) 実測図 (S=1/40)

遺構 (第116図)

調査区H5グリッドに位置し、長軸2.20m、短軸2.20m、深さは最深で0.20mの方形である。床面全体に土器片が折り重なって出土し、完形近くまで復元できる個体も多く見られた。土器一括発表の目的をもつものと考えられる。床面の埋土を採取し、フローテーション後に炭化物を検出した。種別同定の結果(第IV章第3節)ムギ類、放射性炭素年代分析の補正値は257±34年BPであった。これは後世のものが遺構内に混入したものと考えられる。

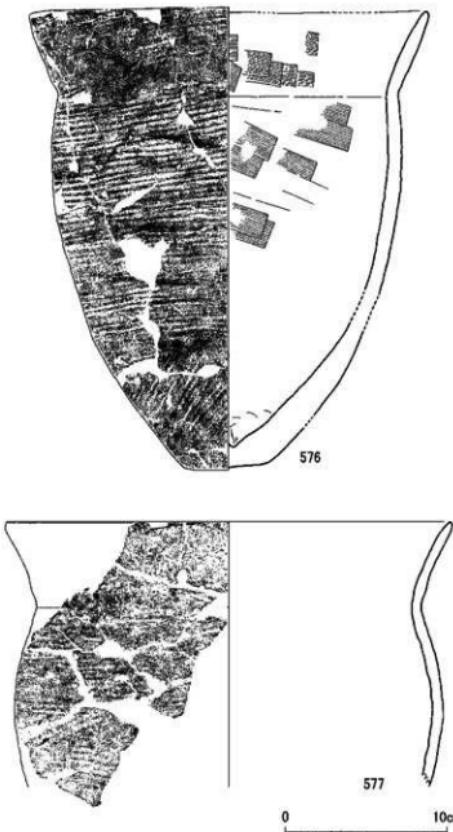
遺物 (第117~120図—576~601)

576~589は甕である。576~579は大型の甕で、外面にタタキ目を施してある。口縁部は、「く」の字状であるが、直線的に開いているもの(576・577)、直立気味にゆるやかに外反するもの(578・579)がある。底部は、側面が直線的に立ち上がる平底(576)である。580~584は中型の甕で、外面にタタキ目を施してあるもの(580・581・583・584)がほとんどである。口縁部は、「く」の字状であるが、直線的に開いているもの(580~582)、直立気味に伸びていくもの(583・584)がある。底部はわずかに平坦面を残す尖底に近い平底のもの(580)と、側面が直線的に立ち上がる平底のもの(581)がある。後者の底部外面中央部は、押出により凹んでいる。585・586は小型の甕で、外面にタタキ目を施してある。口縁部は、直立気味にゆるやかに外反するもので、底部は、わずかに平坦面を残す尖底に近い平底である。587~589は底部で、外面にタタキ目を施してあり、側面が直線的に立ち上がる平底である。

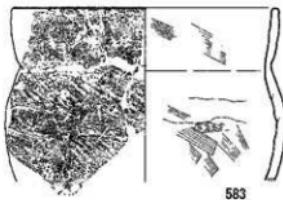
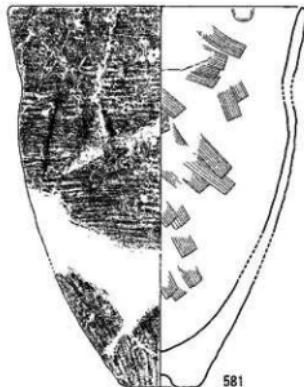
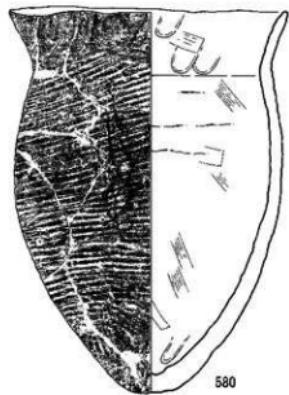
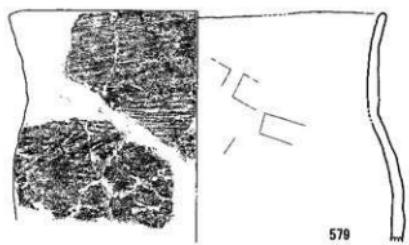
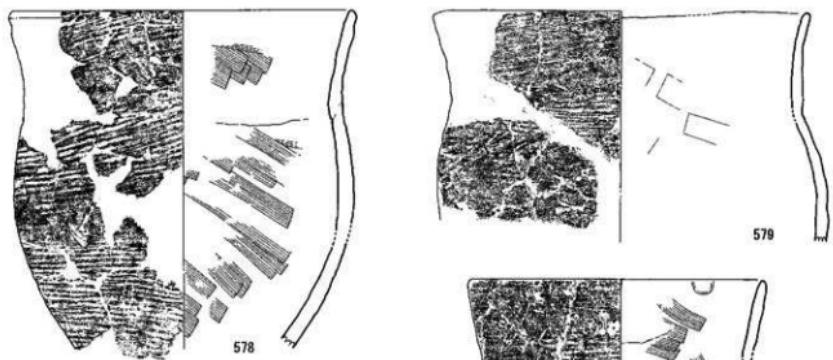
590~592は甕または壺である。590は口縁部で、ゆるやかに外反している。591・592は外面にタタキ目を施してある。

593~598は壺である。口縁部は、やや外傾するもの(593~594)、二重口縁のもの(595)、短く直立気味のもの(596)がある。594は外面にタタキ目を施してある。595・596は小型の壺で、595の外面胴部付近にはミガキを施してあり、596の外面胴部付近にはタタキ目が一部残っている。597・598は外面にタタキ目を施してあり、底部は、わずかに平坦面を残す尖底に近い平底である。

599~601は鉢である。599は深鉢で、ゆるやかに内湾する口縁部に、底部が外反しながら立ち上がる平底である。600~601は浅鉢で、口縁部はゆるやかに内湾している。



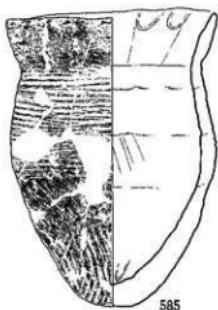
第117図 4号土坑(SC4)出土遺物実測図1 (S=1/3)



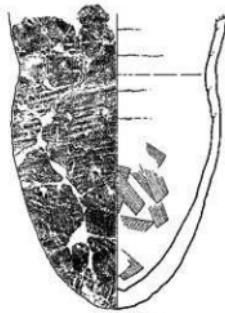
0 10cm



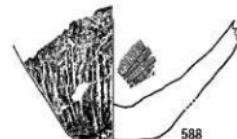
第118図 4号土坑 (SC4) 出土遺物実測図 2 (S=1/3)



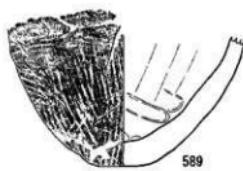
585



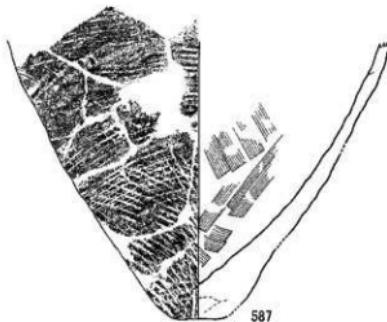
586



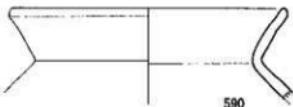
588



589



587



590



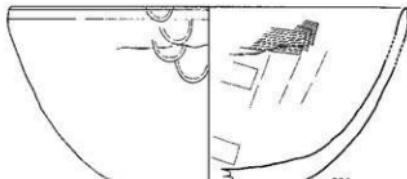
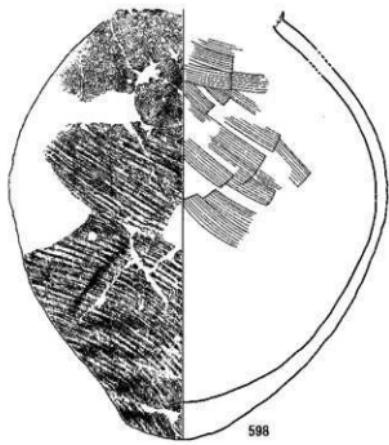
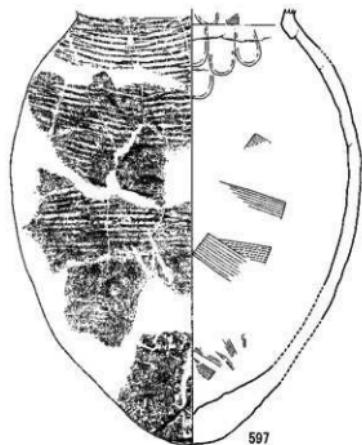
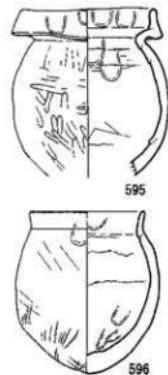
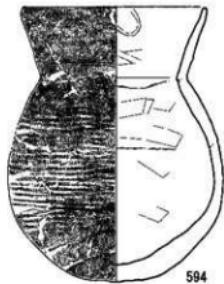
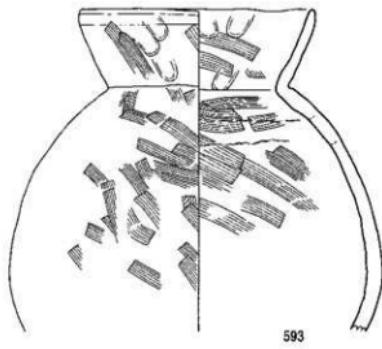
591



592.

A scale bar at the bottom right of the drawing, marked with '0' and '10cm'.

第119図 4号土坑 (SC4) 出土遺物実測図3 (S=1/3)



0 10cm

第120圖 4號土坑 (SC4) 出土遺物實測圖 4 ($S=1/3$)

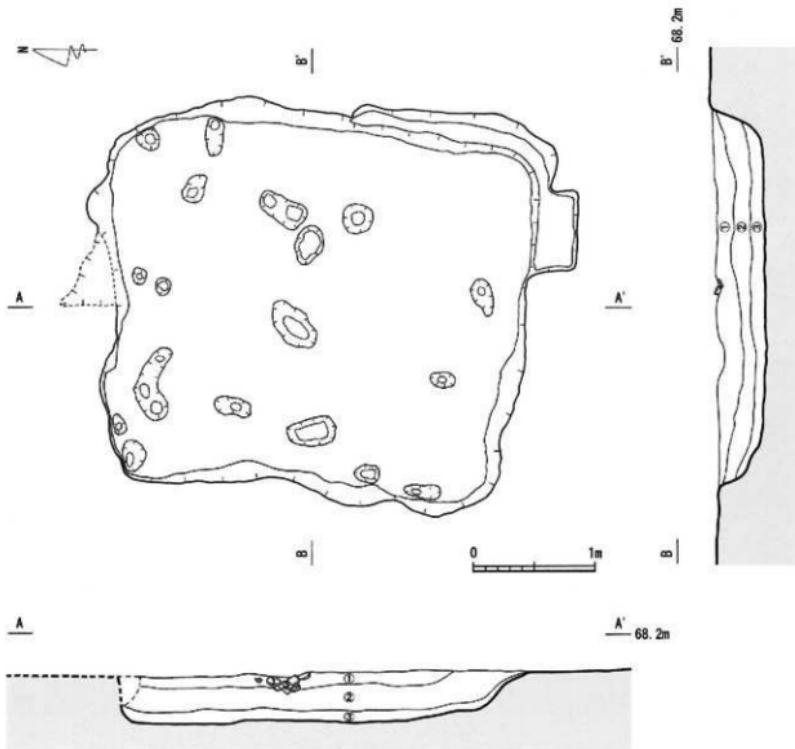
3号土坑 (SC3)

遺構 (第121図)

調査区M4グリッドに位置し、長軸3.35m、短軸3.10m、深さは最深で0.40mの方形である。赤ホヤ粒の混じる暗褐色の貼り床が施されていた。平面形の規模から考えると住居の可能性もあるが、主柱穴は確認できなかった。

遺物 (第122・123図—602~615)

602~610は甕である。602~605は大型の甕で、口縁部は「く」の字状であるが、直線的に開いているもの (602・603)、直立気味にゆるやかに外反するもの (604)、直線気味に伸びていくもの (605) がある。底部は、丸みをもつ尖底 (602) で、木葉痕がある。606~610は底部で、わずかに平坦面を残す尖底に近い



3号土坑土層注記 (SC3)

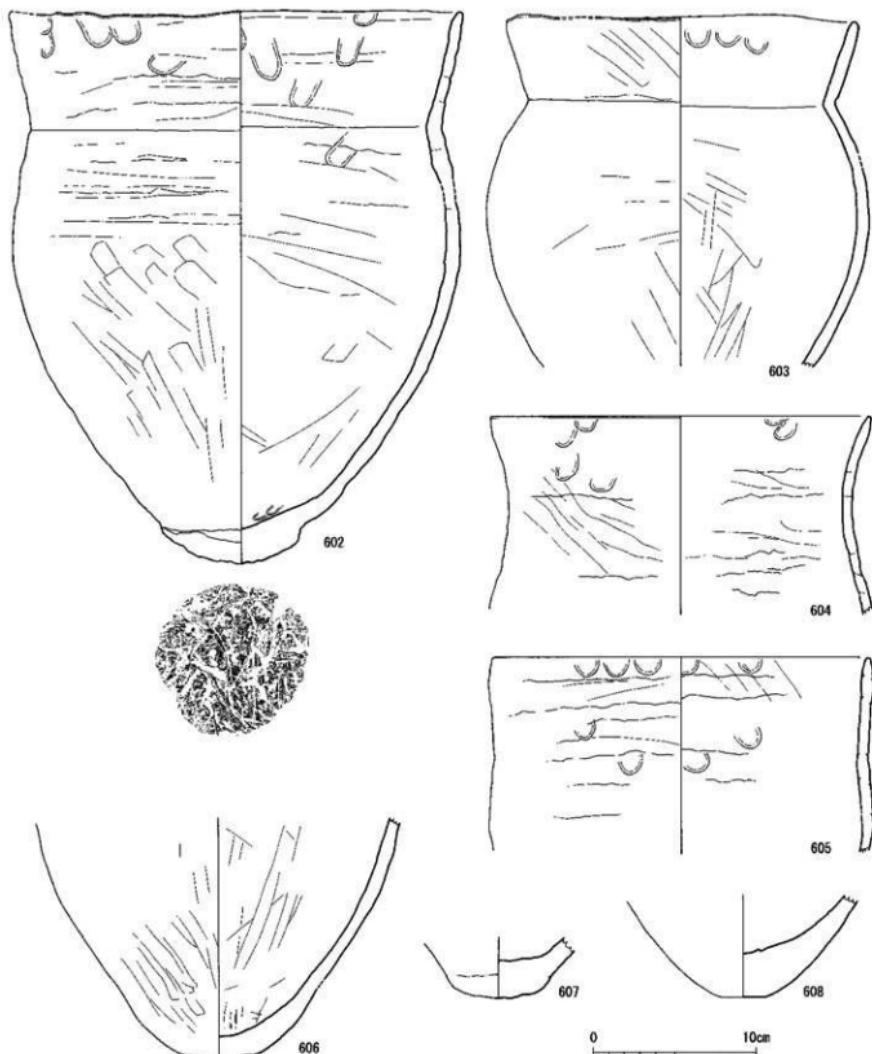
- ① 黒色土 (7.SYR1, 7/T) …やわらかく、しまりがない。
- ② 暗褐色土 (7.SYR2/1) …底1~2mm程の赤ホヤ粒を少盛含む。ややしまりがある。
- ③ 暗褐色土 (7.SYR2/4) …固くしまりがあり、土波の貼り床である。

第121図 3号土坑 (SC3) 実測図 (S=1/40)

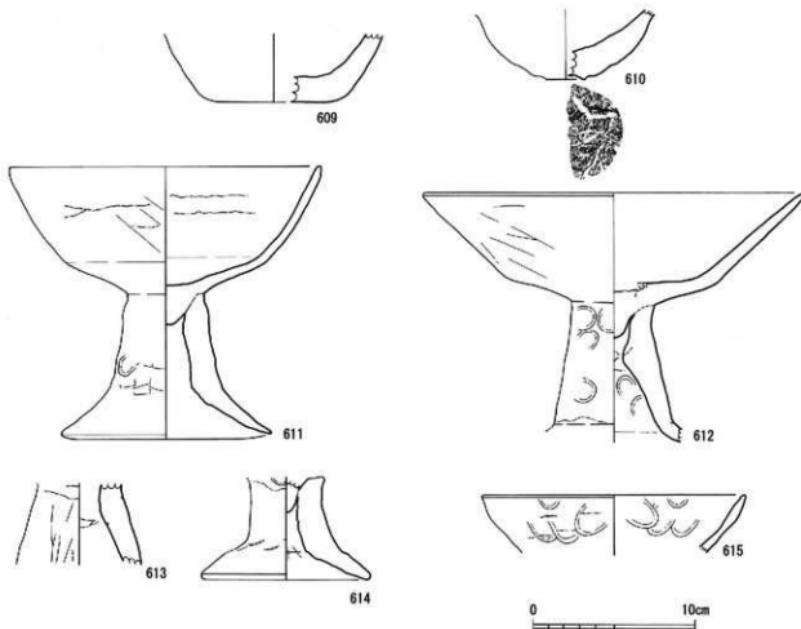
平底のもの（606・607）、半底のもの（608～610）がある。603・606の内外面には、ケズリとった様な調整が見られる。610には布目痕がある。

611～614は高坏である。611・612は口縁部が直線的に外傾し、受部内部は平らに近い。

615は鉢で、内外面に指頭痕の残る内湾気味の口縁部である。



第122図 3号土坑 (SC3) 出土遺物実測図 1 (S=1/3)



第123図 3号土坑 (SC3) 出土遺物実測図 2 (S=1/3)

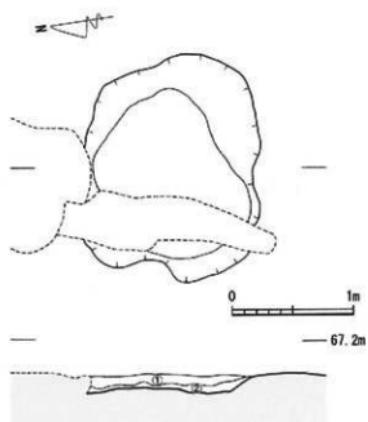
1号土坑 (SC1)

造構 (第124図)

調査区 H4 グリッドに位置し、長軸 1.82 m、短軸 1.40 m、深さ 0.15 m の楕円形である。

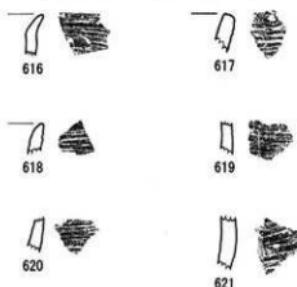
遺物 (第124図—616～621)

616～621は甕である。616～618は口縁部、619～621は胴部で、外面にタタキ目を施してある。



1号土坑土層注記 (SC1)

- ①黒色土 (10YR2/1)…やわらかく、しまりがない。
- ②黒褐色土 (10YR2/2)…終 1mm 以下の赤土や砂を少量含む。



第124図 1号土坑 (SC1) 実測図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

3 古墳時代後期の遺構と遺物（第125図）

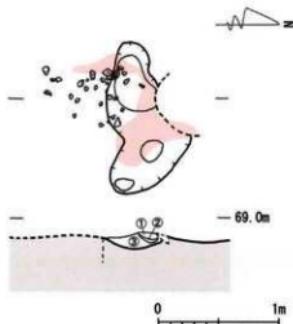
6号竪穴住居跡（SA6）

遺構（第125図）

調査区K3グリッドに位置している。遺構は削平を受け、竪穴住居跡の平面形を確認することができず、住居跡内の地床炉のみ検出した。地床炉は $0.40\text{m} \times 0.70\text{m}$ 程の楕円形で、検出面からの深さは 0.17m であった。検出面には焼土が広がり、住居床面直上だと考えられる。地床炉周辺には、土器片がまとまって出土した。

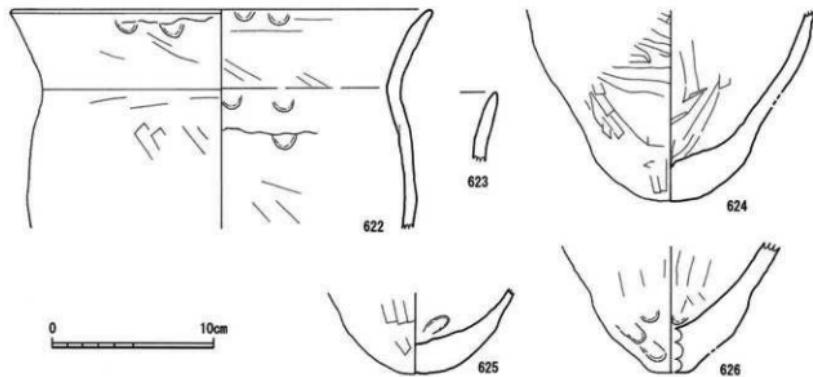
遺物（第125図—622～626）

622～626は甕である。622・623は口縁部で、直立気味に立ち上がり、口縁部端がゆるやかに外反している。624～626は底部で、器厚の厚い丸底のもの（624・625）、丸底に近い平底のもの（626）である。



6号竪穴住居跡内炉土層記（SA6内炉）

- ①赤褐色土 (5YR4/8)…径 1m 以下の炭化物質を少量含む。
- ②黒褐色土 (10YR2/2)…固くしまりがある。
- ③黒褐色土 (10YR2/2)…②と似ているが、やわらかく。しまりがない。



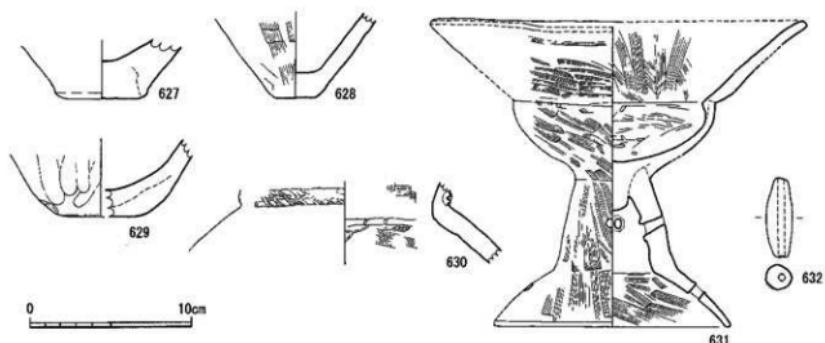
第125図 6号竪穴住居跡（SA6）住居跡内炉土層記測図（S=1/40）出土遺物実測図（S=1/3）

【参考文献】

松永幸寿2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号

第4節 包含層出土の遺物（第126図）

627・628は壺の底部で、平底である。629は甕または壺の底部である。630は頭部に刻目突帯をもつ壺である。631は高环である。丸みをもった受部に大きく外反する口縁部を具備し、脚部はお椀をひっくり返したような形状をしている。632は管状土錘である。



第126図 包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

番号	器種	出土 地点	重量(g)	備考
317	鉄鎌	SA5	1.5	2枚の刃部が折れて重なっている
318	鉄鎌	SA5	3.6	柳葉鎌／残存長4.1cm／鎌身部最大幅約1.5cm／茎部最大厚0.3cm
337	鉄鎌	SA7	1.6	茎部片／残存長3.3cm
378	鉄鎌	SA2	5.1	圭頭鎌／全長5.5cm／刃部長1.0cm／鎌身部最大幅1.8cm／布口・繊維付着
410	鉄鎌	SA9	3.4	柳葉鎌／残存長3.7cm／鎌身部最大幅1.8cm／鎌身部最大厚2.1cm
482	鉄鎌	SA3	6.7	柳葉鎌／残存長6.8cm
483	鉄鎌	SA3	2.1	茎部片
484	鉈	SA3	5.2	柄部／残存長4.4cm／細い棒状の鉄（有機質）が付着
485	鉈	SA3	9.6	残存長5.3cm／裏すきの深さ約0.1cm
508	鉄鎌	SA4	2.4	無茎鎌／残存長2.6cm／欠柄の木質痕らしきものあり
509	鉈	SA1	0.1	先端部分／木質付着
573	鉄鎌	SA12	5.3	脇抜鎌／残存長4.9cm／鎌身部最大厚0.2cm／茎部最大厚0.2cm
574	鉄鎌	SA12	2.1	茎部片か？
575	鉄鎌	SA12	6.5	茎部片／残存長5.7cm

第7表 弥生時代・古墳時代鉄製品計測表

番号	器種	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
313	石庖丁	SA5	砂岩	5.5	8.5	1.3	60.1	
314	砥石	SA5	砂岩	16.2	7.6	2.1	453.7	
315	砥石	SA5	頁岩	7.5	5.6	1.6	118.0	
316	磨石	SA5	花崗斑岩	7.3	6.6	4.6	301.4	
335	棒状石製品	SA7	頁岩	13.0	3.0	1.1	57.4	
336	敲石	SA7	ホルンフェルス	16.0	5.1	3.2	402.5	
345	棒状石製品	SA8	頁岩	10.3	2.4	1.0	41.5	
346	敲石	SA8	砂岩	12.2	3.2	2.5	135.3	
347	台石	SA8	砂岩	25.6	14.8	11.0	5,100.0	
348	台石	SA8	花崗斑岩	33.9	21.5	10.2	10,800.0	
370	石庖丁	SA2	砂岩	5.2	8.6	2.0	102.8	
371	石庖丁	SA2	頁岩	4.1	7.6	0.4	27.4	
372	石鍤	SA2	砂岩	6.3	4.7	1.0	41.3	
373	棒状石製品	SA2	砂岩	15.9	2.3	1.6	88.3	
374	敲・磨石	SA2	砂岩	10.6	9.4	6.3	930.0	
375	敲・磨石	SA2	砂岩	10.3	8.4	5.5	690.7	
376	敲・磨石	SA2	砂岩	11.9	7.2	3.5	472.5	
377	台石	SA2	花崗斑岩	23.0	15.9	8.1	4,100.0	
406	石庖丁	SA9	頁岩	4.4	8.0	0.5	27.8	
407	砥石	SA9	砂岩	11.5	9.5	2.5	391.2	
408	敲・磨石	SA9	砂岩	6.9	5.4	4.3	224.2	
409	台石	SA9	砂岩	28.2	33.4	9.0	12,400.0	
440	石庖丁	SA1	砂岩	4.3	5.8	1.5	46.1	
441	敲石	SA1	千枚岩	20.9	7.6	6.0	1,270.0	
480	石庖丁	SA3	頁岩	8.1	4.6	0.7	40.2	
481	敲・磨石	SA3	花崗斑岩	10.3	10.4	6.6	1,028.7	
505	石庖丁	SA4	砂岩	5.8	7.3	8.5	52.8	
506	敲・磨石	SA4	花崗斑岩	13.7	10.5	7.6	1,645.0	
507	敲・磨石	SA4	砂岩	16.0	7.1	2.6	444.6	
519	磨石	SA10	花崗斑岩	12.6	10.5	5.5	1,060.0	
520	磨石	SA10	砂岩	8.5	7.7	4.9	470.0	スス付着
521	台石	SA10	花崗斑岩	35.8	19.8	16.7	1,550.0	
539	敲・磨石	SA11	砂岩	14.9	5.7	2.2	274.4	
567	砥石	SA12	砂岩	11.4	10.6	4.5	470.5	
568	砥石	SA12	砂岩	5.2	3.7	0.9	21.4	
569	敲・磨石	SA12	砂岩	20.7	7.0	5.7	873.3	
570	台石	SA12	花崗斑岩	25.7	27.0	12.5	9,000.0	
571	台石	SA12	花崗斑岩	26.7	26.2	12.0	10,200.0	
572	台石	SA12	花崗斑岩	34.6	36.0	12.9	22,800.0	

第8表 弥生時代・古墳時代石器計測表

番号	種別	出土地点	器種	前位	法量(cm)		手法・調査・文様ほか		色調		地上的特徴	備考	
					上部	底部	剖面	外観	内面	外面	内面		
300	弥生土器	SAS	丸	口縁部～ 底部	17.0			タガ	工具ナゲ	褐色	に赤い褐色	4cm以下の褐灰色～に赤い褐色・乳白色を含む。	スヌ付器
301	弥生土器	SAS	夢	口縁部	底部 20.0			タガ	工具ナゲ	淡黄色	淡黄色	5mm以下の褐灰色～に赤い褐色・乳白色・乳白色を含む。	スヌ付器
302	弥生土器	SAS	直	口縁部～ 底部	底定 8.7	0.8	10.0	工具ナゲ、ナ ゲ、指痕痕	工具ナゲ、ナ ゲ、指痕痕	褐色	青灰色	6mm以下の青灰色・灰褐色・黑色・乳白色を含む。	
303	弥生土器	SAS	直	口縁部				ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	2cm以下の青色、7cm以下の新色鉛を含む。	鐵剣による直 撃的な文様
304	弥生土器	SAS	直	口縁部				ナゲ	ナゲ	明黄色	褐色	2m以上の黄色、3mm以下の青色・乳白色を含む。	褐色
305	弥生土器	SAS	直	口縁部				ナゲ	ナゲ	褐色	に赤い褐色	1mm以下の赤褐色・褐色、5mm以下の褐灰色・に赤い褐色を含む。	鉄剣拔抜文
306	弥生土器	SAS	直	口縁部				工具ナゲ	工具ナゲ	赤褐色	明黄色	2mm以下の黒色・赤色、3mm以下の灰褐色を含む。	
307	弥生土器	SAS	林	口縁部～ 底部	底定 26.0	2.0	9.2	工具ナゲ、指 痕痕	工具ナゲ	青灰色	褐色	5mm以下の青色、3mm以下の褐色、5mm以下の乳白色を含む。	一誠美堂
308	水戸 土器	SAS	朴	口縁部～ 底部	25.5	2.3	12.6	ナゲ、ヒガキ	工具ナゲ、ナ ゲ	褐色	褐色	3mm以下の黒色・赤褐色・褐色、4mm以下の赤褐色・褐色を含む。	新善友
309	弥生土器	SAS	林	口縁部		2.0		工具ナゲ	ナゲ、指痕痕	褐色	褐色	2mm以下の墨色・赤褐色、4mm以下の赤褐色を含む。	ミチルア
310	弥生土器	SAS	子母	口縁部～ 底部	6.7	3.3	5.4	工具ナゲ、指 痕痕	工具ナゲ	明黄色	褐色	2mm以下の茶色鉛を含む。	一誠美堂
311	水戸 土器	SAS	子母	口縁部～ 底部				ナゲ、指痕痕	工具ナゲ、指 痕痕	に赤い青褐色	淡黄色	4cm以下の灰褐色、5mm以下の褐灰色～に赤い褐色を含む。	
312	弥生土器	SAS	子母状 十輪					指痕痕	指痕痕	褐色	褐色	6m以上の乳白色・褐色・灰褐色を含む。	
313	弥生土器	SAT	林	口縁部～ 底部	底定 13.1	6.9	13.8	ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	3mm以下の青色・白色・赤褐色を含む。	一部黒度、外 表面とし基化度 高
314	弥生土器	SAT	林	口縁部～底 部		3.0		工具ナゲ	工具ナゲ	に赤い青褐色	赤褐色	3mm以下の墨色・に赤い褐色、5mm以下の灰褐色・6mm以下の褐色を含む。	外表面とし基 化度高
315	弥生土器	SAT	林	底部		4.2		ナゲ	工具ナゲ	に赤い褐色	淡黄色	3cm以下の明赤褐色、5mm以下の灰褐色～に赤い褐色、6mm以下の褐色を含む。	内外面とも基 化度高
316	弥生土器	SAT	林	底部		3.6		工具ナゲ、ナ ゲ	ナゲ	褐色	褐色	鐵剣の凹凸が火鉛鉛を傷めに含む。4cm以下の墨色・褐灰色・に赤い褐色・乳白色を含む。	
317	弥生土器	SAT	林	底部		4.0		工具ナゲ	ナゲ、指痕痕	淡黄色	淡黄色	鐵剣の凹凸が火鉛鉛を傷めに含む。4cm以下の墨色・褐灰色・に赤い褐色・乳白色を含む。	外表面とし基 化度高
318	弥生土器	SAT	林	底部		4.3		工具ナゲ、指 痕痕	工具ナゲ、指 痕痕	褐色	褐色	4mm以下の赤色・灰色・茶色・乳白色を含む。	

第9表 弥生時代・古墳時代土器観察表1

番号	種別	出土 地点	器種	部位	法 盤 (cm)		手法・調査・文様ほか		声 横		粘 土 の 特徴	備考	
					口径	底径	割高	外 四	内 面	外 面	内 面		
325	弥生 土器	SAT	鉢	口縁部～底 部	柱形 25.2	6.4	12.8	T.34ナデ 指痕	工具ナデ、指 痕	黄褐色	にふい黄褐色	6mm以下の白い褐色、黄色、褐色色、 6mm以上の褐色色、7mm以下の灰白色を含む。	
326	弥生 土器	SAT	鉢	調節部～底 部		6.3		ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	1mm以下の灰褐色、にふい褐色、褐色、 新褐色、深褐色、透明白色、褐色色を含む。	内外面とも風化のみ
327	弥生 土器	SAT	鉢	底部		柱形 5.0		ナデ、押出模 型	ナデ	褐色	褐色	1mm以下の褐色、灰白色を含む。	内外面とも風化のみ
328	弥生 土器	SAT	鉢	口縁部～底 部	満定 18.1	推定 0.4	8.9	上刃ナデ	ナゲ	にふい褐色	にふい黄褐色	3mm以下の白色、4mm以下の白い褐色、 6mm以下の褐色色、灰白色を含む。	外凸風化のみ
329	土師器	SAT	鉢	底部		4.1		工具ナデ、ミ ニギ	ナデ	褐色	褐色	1mm板の乳白色、3mm以下の灰色、 褐色、茶色、灰白色を含む。	外周風化のみ
330	土師器	SAT	器	底部		柱形 2.0		上刃ナデ	二見ナゲ	黄褐色	黄褐色	1mm以下の白色、褐色、茶色、灰白色を含 む。	内外面とも風化のみ
331	土師器	SAT	器	口縁部～ 腹部付近				上刃ナデ、ナ ゲ	ナゲ	褐色	にふい黄褐色	2mm以下の白色、灰白色、4mm以下の灰 白色、にふい褐色、乳白色を含む。	スヌ付番、内外 面とも風化のみ
332	土師器	SAT	器	口縁部～ 腹部付近				ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	2mm以下の褐色色、3mm以下の褐色、 にふい褐色、灰白色を含む。	
333	土師器	SAT	器	口縁部～ 腹部付近				ナゲ	ナゲ	黄褐色	黄褐色	6mm以下の褐色、茶色、灰白色を含む。	内外面とも風化のみ
334	土師器	SAT	器	口縁部～底 部		1.4		工具ナデ	工具ナデ	黄褐色	灰褐色	4mm以下の褐色、茶色、褐色色を含む。	
335	弥生 土器	SAB	器	口縁部				ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	2mm以下の褐色、茶色、灰白色を含 む。	
336	弥生 土器	SAB	器	口縁部				ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	褐色の褐色色斑、3mm以下の灰白 色、灰褐色を含む。	
337	弥生 土器	SAB	器	口縁部～底 部	満定 6.4			工具ナデ	工具ナデ	褐色	消滅褐色	2mm以下の灰褐色、褐色、毛白色を含 む。	
338	一済器	SAB	器	口縁部	16.2			二見ナデ	工具ナデ	暗褐色	赤色	6mm以下の白色、褐色、褐色色を含む。	
339	一済器	SAB	器	口縁部～底 部	推定 5.0			二見ナデ、ナ ゲ	上刃ナデ、ナ ゲ	褐色	消滅褐色	4mm以下の淡褐色、褐色、にふい褐色、 乳白色を含む。	スヌ付番
340	一済器	SAB	器	口縁部～底 部				工具ナデ	工具ナデ	褐色	褐色	3mm以下の白色、灰褐色、黑色板を含む。	
341	一済器	SAB	器	口縁部	19.0			工具ナデ	工具ナデ、指 痕	明褐色	にふい褐色	2mm以下の褐色、茶色、4mm褐色を少し 含む。6mm以下の灰褐色、褐色色を含む。 スヌ付番	
342	一済器	SAB	器	口縁部～底 部				工具ナデ、ナ ゲ	工具ナデ、ナ ゲ	褐色	消滅褐色	4mm以下の淡褐色、褐色、にふい褐色、 乳白色を含む。	
343	一済器	SAB	器	底部付近				工具ナデ	工具ナデ	褐色	褐色	3mm以下の白色、灰褐色、黑色板を含む。	
344	一済器	SAB	器	口縁部～底 部				工具ナデ	工具ナデ、指 痕	明褐色	にふい褐色	2mm以下の褐色、茶色、4mm褐色を少し 含む。6mm以下の灰褐色、褐色色を含む。 スヌ付番	
345	弥生 土器	SAB	器	口縁部～底 部	13.6	1.8	13.1	ハケメ	ハケメ	褐色	褐色	2mm以下の褐色、6mm以下の灰褐色を含 む。	一部黒斑、外 面とも風化のみ
346	弥生 土器	SAB	器	口縁部～底 部			3.7	ハケメ、指痕 痕	工具ナデ、指 痕	褐色	褐色	3mm以下の白色、灰褐色、茶色、褐色色を含 む。	一部黒斑、外 面とも風化のみ

第10表 弥生時代・古墳時代土器観察表2

番号	種別	出土 地点	器種	施灰	法 焼 (cm)		手法・調査・文様ほか 色 調				胎土の特徴	備考	
					コ 壁	底壁	高	外 面	内 面	外 面	内 面		
351	弥生 上部	SA2	甕	頭部～底 部		5.1		工具ナメ、布 施灰	工具ナメ、布 施灰	淡黃褐色	淡黃褐色	3mm以下の褐色、半褐色、4mm以上の 褐色、褐色、7cm以下の灰褐色を含む。	
352	弥生 下部	SA2	甕	底		相定 3.8		ハケメ	ハケメ	原褐色	青褐色	2mm以下の白色、4mm程の褐色、8mm 程の灰褐色を含む。	
353	弥生 上部	SA2	盆	口縁部	推定 15.2			ナゲ	ナゲ	淡黃褐色	淡黃褐色	4mm以下の青褐色、褐色、5mm以下の に近い褐色、1cm以下の灰褐色、灰褐色 を含む。	織錦模様文
354	弥生 土師	SA2	高杯	腹部		推定 15.0		ナゲ、毛ガサ	ナゲ、毛ガサ	藍褐色	藍褐色	2mm以下の褐色、白色、灰褐色、黑色を含む。	身化あり
355	弥生 下部	SA2	鉢	口縁部～ 底部	14.8	12.6	15.4	ハケメ	ナゲ	青褐色	青褐色	2mm以下の褐色、5mm以下の灰色を含む。	一部黒斑
356	弥生 上部	SA2	盆	口縁部～ 底部	推定 9.3	推定 3.0	推定 7.6	ハケメ、布 施灰	ナゲ	明る褐色	褐色	1mm程の褐色、2mm程の白色、系色粒 を含む。	
357	弥生 上部	SA2	鉢	頭部～底 部				ナゲ	ナゲ、表面は に近い黄褐色	に近い青褐色	2mm以下の灰褐色、3mm以下のに近い 褐色、褐色と灰褐色を含む。	スヌ分量	
358	弥生 下部	SA2	鉢	口縁部～底 部		12.4		ハケメ、表面 有	ハケメ、表面 有	黄褐色	青褐色	1mm程の白色、褐色、2mm以下の褐色 を含む。	一部黒斑
359	弥生 上部	SA2	鉢	頭部～底 部		2.1		褐色のため調 整不明	工具ナメ	褐色	褐色	1mm以下の白色、褐色、黑色、灰褐色、褐 色を含む。	表面黒化部 なし
360	上層部	SA2	甕	口縁部～ 底部	推定 29.0	1.6	33.9	ハケメ、西湖 灰、タクキ	四脚灰	青褐色	淡黃褐色	4mm以下の白色、系褐色を多く含む。	スヌ付、内外 面とも黒化部 なし
361	土師壺	SA2	甕	口縁部～ 底部	推定 17.7			タクキ、西湖 灰	二見ナメ	に近い青褐色	に近い褐色	5mm以下の黑色、青褐色、灰褐色、7cm 以下の灰白色を含む。	スヌ付、表面 も黒化部なし
362	上層部	SA2	甕	口縁部～ 底部	推定 26.4			ハケメ	ハケメ	青褐色	青褐色	2mm以下の褐色、3mm以下の素褐色 を含む。	内面黒化部 なし
363	土師壺	SA2	甕	口縁部～ 底部	推定 18.4	3.6	27.2	ナゲ、布施灰	ナゲ、布施灰	に近い青褐色	に近い青褐色	5mm以下の黑色、青褐色、灰褐色、灰白色 の粒を含む。	スヌ付
364	土師器	SA2	甕	底部～底 部		推定 3.9		ハケメ	工具ナメ	灰褐色	明る褐色	5mm以下の白色、褐色、黑色、灰褐色を 含む。	一切黒斑
365	土師器	SA2	甕	頭部～底 部		推定 2.4		ナゲ、布施灰	ナゲ、西湖灰	に近い青褐色	に近い褐色	4mm以下の褐色、淡褐色、5mm以下の 灰白色、10cm以下の褐色を含む。	表面黒化部 なし
366	上層部	SA2	甕	頭部～底 部		3.6		工具ナメ、ナ ゲ	工具ナメ、布 施灰	に近い褐色	に近い褐色	3mm以下の褐色、4cm以下灰褐色、 灰白色に近い褐色を含む。	スヌ付
367	土師器	SA2	高所	腹部		14.4		ナゲ	工具ナメ	明る褐色	明る褐色	1mm程の褐色、2mm程の灰褐色、6cm以 下の黑色を含む。	
368	上層部	SA2	鉢	頭部～底 部		3.6		風化のため調 整不明	風化のため調 整不明	褐色	褐色	2mm以下の白色、白、黑色、3mm程の黑色を 含む。	内外面とも風 化部なし
369	上層部	SA2	鉢	頭部～底 部		2.8		ハケメ	毛ガサ	褐色	褐色	3mm以下の黑色、青褐色、4mm以上の に近い褐色、褐色を含む。	内外面とも風 化部なし

第 11 表 弥生時代・古墳時代土器観察表 3

番号	種別	出土地点	器種	部位	法 墓 (cm)		手法・調査・文様ほか		色 調		胎 土 の 特 徴	備考		
					上幅	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
379	弥生土器	SC2	火	口縁部～底 鉢形	推定	19.8		ハケメ	工具ナダ	に赤い褐色	に赤い褐色	1mm以下に赤い褐色、灰白色、剥落 川色、褐色色。2mm以下の基底方式。 端・底部を含む。	スズ付着	
380	弥生 二五	SC2	壺	胴部～底 部	7.1			工具ナダ	ナダ	に赤い褐色	に赤い褐色	2mm以下に赤い褐色、青褐色、褐色、6mm 以下の赤い褐色に淡い褐色、褐色 色、褐色底色。底色を含む。		
381	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	22.0	2.8	25.5	タクタ	ハケメ、ナダ、 削痕	に赤い青褐色、灰褐色	3mm以下の基底、8mm以下の底色を 含む。	スズ付着	
382	土師器	SAG	壺	口縁部～ 底部附近	推定	21.0			タクタ	工具ナダ、ナ ダ	褐色	に赤い褐色	Base以下の基底、8mm以下の底色を 含む。小黒色斑を含む。	スズ付着
383	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	20.3			タクタ	ハケメ	に赤い褐色	に赤い褐色	1mm以下の白色、2mm以下の褐色、 7mm以下の底色を含む。	スズ付着
384	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	17.6			タクタ	ナダ	褐色	に赤い黄褐色	3mm以下の褐色、3mm以下の基底色 を含む。	表面毛ざみ
385	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	17.4	2.5	瓶底 20.5	タクタ	ハケメ、工具 ナダ	に赤い褐色	に赤い褐色	2mm以下の白色、4mm以下の白色 色、褐色色を含む。	スズ付着
386	土師器	SAG	甕	口縁部～底 部					タクタ	ハケメ	に赤い褐色	に赤い褐色	3mm以下の白色が剥離、4mm以下の乳 白色を含む。	一部剥離
387	土師器	SAG	甕	胴部附近 ～底部	推定	2.5			タクタ	ハケメ、削痕 等	褐色	褐色	3mm以下の乳白色、6mm以下の白色、 灰褐色、3mm以下の赤褐色を含む。	
388	土師器	SAG	甕	口縁部～底 部	推定	2.0			タクタ	ナダ、削痕	に赤い褐色	に赤い褐色	1mm以下の白色光沢、3mm以下の白 色、3mm以下の赤褐色、乳白色を含む。 表面光沢なし。	
389	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	13.9	4.9	25.4	タクタ	ナダ、工具ナ ダ	に赤い褐色	に赤い褐色	2mm以下の白色、3mm以下の灰褐色 色、褐色色、底色を含む。	表面毛ざみ
390	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	13.7	3.5	19.8	タクタ	工具ナダ、ナ ダ	に赤い褐色	に赤い青褐色	3mm以下の赤褐色、5mm以下の乳白色、 8mm以下の赤褐色を含む。	一部剥離
391	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	11.8	1.3	12.1	タクタ、ナダ	ハケメ、削痕 等、ナダ	に赤い褐色	に赤い褐色	物の光沢と透明光沢、1.5mm以下の 引摺り色、灰白色、灰褐色、4mm以下の赤 褐色、9mm以下の乳白色、灰褐色を含 む。	スズ付着
392	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	9.3	0.3	11.6	ハケメ、ナダ、 削痕	工具ナダ、ナ ダ	赤褐色	に赤い青褐色	3mm以下の赤い褐色、灰褐色、灰白 色、4mm以下の褐色を含む。	一部剥離
393	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	13.8			ナダ	工具ナダ	稍黃褐色	に赤い青褐色	4mm以下の灰白色、5mm以下の基底色 を含む。	表面毛ざみ
394	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	16.6	8.4	50.7	タクタ	削痕、ハ ケメ、ナダ	淡黃褐色	成灰褐色	5mm以下の白色、灰褐色、褐色、灰褐色 色を含む。	
395	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	7.3			タクタ	変化のため調 整不規	に赤い黄褐色	淡黃褐色	3mm以下の白色、灰褐色、灰褐色、灰 褐色を含む。	表面毛ざみ
396	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部	推定	15.1	0.7	18.6	工具ナ ダ	工具ナダ	全色	淡黃褐色	2mm以下の黑色光沢、赤褐色、5mm 以下の灰褐色を含む。	スズ付着
397	土師器	SAG	甕	口縁部～ 底部附近	推定	12.0			ナダ、工具ナ ダ	ハケメ、削痕 等	全色	淡黃褐色	1.5cm以下の黑色光沢、2mm以下の 白色、2.5cm以下の底色、3mm以下の 赤褐色、灰白色を含む。	一部剥離

第12表 弥生時代・古墳時代土器観察表4

番号	種別	出土 地點	器種	部位	法 量 (cm)	手法・調査・文様ほか		色 調		地 上 の 特 徴	備 考		
						口徑・底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
398	土師器	SAG	盃	口縁部～底 部	底定 7.4		ミガキ	ナゲ	に赤い青褐色 に赤い青褐色	4mm以下の灰白色・褐色を含む。			
399	土師器	SAG	盃	口縁部～底 部	6.4		ハケメ、ミガキ	ナゲ	褐色	に赤い褐色 に赤い褐色	1.5mm以下の墨色や赤褐色、赤褐色。 2mm以下の灰白色や青褐色、褐色や 灰白色、褐色や褐色を含む。		
400	土師器	SAG SA12	盃	口縁部～底 部	2.0		タタキ、ナゲ	表面層、ハケ ス、工具ナゲ	に赤い褐色 褐色	褐色	2mm以下の白色、4mm以下の墨色、灰 色、褐色を含む。	SAGとSA12で 遺傳関係	
401	土師器	SAG	杯	口縁部～底 部	底定 22.4	1.9	9.5	工具ナゲ、漆 黒	ナゲ、工具ナ ゲ、漆黒	暗褐色	漆黒褐色	6mm以下の水白色、に赤い青褐色、灰 褐色、に赤い青褐色を含む。	一部黒度
402	土師器	SAG	鉢	口縁部～ 底部	底定 22.3		工具ナゲ、ミ ガキ	工具ナゲ、ミ ガキ	褐色	に赤い青褐色	黒褐色の底が赤褐色を少し含む。 2mm以下の赤褐色や黒褐色、灰褐色、灰 褐色、5mm以下の墨色、灰褐色、褐色 を含む。		
403	土師器	SAG	鉢	口縁部～ 底部	底定 11.2		タタキ、漆黒	工具ナゲ、漆 黒	漆黒色	褐色	2mm以下の灰褐色や黒褐色、3mm以下の 褐色、5mm以下の灰褐色を含む。		
404	土師器	SAG	盤	口縁部～ 底部	底定 1.8		タタキ	ナゲ	多赤褐色	に赤い青褐色	2mm以下の灰白色、3mm以下の褐色を 含む。	火焔紋	
405	土師器	SAG	盤或鉢	底部			工具ナゲ、漆 黒	工具ナゲ、漆 黒	褐色	褐色	3mm以下の墨褐色、灰褐色、6cm以下 の青褐色を含む。		
411	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	底定 33.3	1.9	39.8	ハケメ、タタキ 工具ナゲ	工具ナゲ	明黄褐色	灰褐色	5mm以下の黄褐色、白色を含む。	一部黒度
412	土師器	SA1	甕	口縁部～底 部		1.3	工具ナゲ、ナ ゲ	工具ナゲ、ナ ゲ	に赤い青褐色	に赤い青褐色	6mm以下の灰褐色を少し含む。 10mm以下の灰褐色を多く含む。	一部黒度、ヌ ク若	
413	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	底定 26.9	1.6	26.6	ナゲ、工具ナ ゲ	工具ナゲ	に赤い青褐色	に赤い青褐色	黒褐色の底が少く含む。4cm以下の 灰褐色、灰褐色、灰褐色を多く含む。	一部黒度、ヌ ク若
414	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	底定 25.2		ナゲ、タタキ 工具ナゲ	工具ナゲ	青褐色	褐色	1cm以下の墨色、茶褐色、6mm以下の灰 褐色を含む。	ヌク若	
415	土師器	SA1	甕	口縁部～底 部	底定 1.4		ハケメ、タタキ 工具ナゲ	ハケメ	青褐色	青褐色	5mm以下の墨色、茶褐色、灰色を含む。	一部黒度	
416	土師器	SA1	甕	口縁部～底 部	底定 24.3	1.0	26.6	ナゲ、工具ナ ゲ、漆黒	ナゲ	に赤い青褐色	に赤い青褐色	黒褐色の透明度が低く含む。4mm以下の 灰褐色、灰褐色を多く含む。	ヌク若
417	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	底定 23.4		工具ナゲ	工具ナゲ、漆 黒	漆黒	漆黒	2mm以下の黄色、赤褐色、3mm以下の白 色を含む。	ヌク若	
418	土師器	SA1	甕	口縁部～底 部	底定 25.4		ナゲ、工具ナ ゲ	ナゲ、工具ナ ゲ	褐色	褐色	2mm以下の黄色、4mm以下の灰色、5mm以 上の青褐色を含む。		
419	土師器	SA1	甕	口縁部～底 部	底定 25.4		ナゲ、工具ナ ゲ	ナゲ、工具ナ ゲ	褐色	褐色	5mm以下の白色、黑色を含む。		
420	土師器	SA1	甕	口縁部～底 部		1.8	工具ナゲ	工具ナゲ	に赤い青褐色	に赤い青褐色	3cm以下の黑褐色、灰褐色、灰褐色を 多く含む。5mm以下の茶褐色、灰褐色 を少し含む。		
421	土師器	SA1	甕	底部		0.9	ハケメ	ハケメ	褐色	褐色	2mm以下の墨色、9mm以下の白色を含 む。		

第13表 弥生時代・古墳時代土器観察表 5

番号	種類	出土 地点	器種	部位	法 量 (cm)		手作・削型・文様ほか		色 調		船 十 の 特 徴	備 考	
					コ 桿	底 径・器 高	外 面	内 面	外 面	内 面			
422	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	16.7	0.8	16.8	ナゲ、工具ナ ゲ	工具ナゲ	青褐色	赤褐色	5mm以下の白色・茶色・乳白色を多く含む。	一刀彌文
423	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	推定 16.0			ナゲ	ナゲ	淡黃褐色	淡黃褐色	3mm以下の茶褐色・灰褐色・乳褐色を多く含む。	スズ付着
424	土師器	SA1	甕	口縁部				ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	2mm以下の白色、3mm以下の茶色を含む。	
425	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	推定 10.6		推定 1.2	13.7	ナゲ、ナゲ	ナゲ	褐色	6mm以下の茶褐色・灰褐色・乳白色を多く含む。	
426	土師器	SA1	小豆丸 盛器	口縁部～ 底部	推定 11.4			ナゲ、ハケメ	ハケメ	明る褐色	明る褐色	3mm以下の茶色、6mm以下の茶色を含む。	内外面とも風化がみ
427	土師器	SA1	小豆丸 盛器	口縁部～ 底部	推定 7.7	1.5	8.8	ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	1mm以下の茶褐色・茶色を多く含む。	
428	土師器	SA1	高杯	口縁部～ 底部	推定 15.0		推定 1.7	ナゲ	工具ナゲ	褐色	明黄褐色	1mm以下の茶色・乳白色を含む。	内外面とも風化がみ
429	土師器	SA1	高杯	口縁部	推定 22.1			ナゲ、工具ナ ゲ	ナゲ、工具ナ ゲ	褐色	明黄褐色	2mm以下の茶色・茶色・3mm程の白色を含む。	
430	土師器	SA1	高杯	切鉢			推定 13.6	ナゲ	ナゲ	にがい青褐色	明黄褐色	強烈な透明白沢栓を含む。2mm以下の茶褐色・灰褐色・乳褐色を多く含む。	
431	土師器	SA1	高杯	切鉢			推定 11.4	ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	1mm以下の乳白色・3mm以下の茶褐色・灰褐色を多く含む。	
432	土師器	SA1	高杯	脚鉢				ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	3mm以下の茶褐色・灰褐色・乳白色を多く含む。9mm以下の灰褐色を少し含む。	
433	土師器	SA1	高杯	脚鉢				ナゲ	ナゲ	にがい青褐色	にがい褐色	微細な透明白沢栓を含む。3mm以下の茶褐色・灰褐色を多く含む。6mm以下の乳白色・灰褐色を含む。	スズ付着
434	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	推定 17.0	2.2	12.1	ナゲ、工具ナ ゲ、内底底	ナゲ、工具ナ ゲ、内底底	にがい青褐色	にがい褐色	微細な透明白沢栓を含む。3mm以下の茶褐色・灰褐色を多く含む。	スズ付着
435	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	推定 21.8	0.7	15.2	ナゲ、工具ナ ゲ	ナゲ、工具ナ ゲ	明褐色	淡黃褐色	3mm以下の茶色・4mm程の茶色・3mm 程の乳白色を含む。	
436	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	18.5	1.8	13.3	工具ナゲ	工具ナゲ	にがい青褐色	にがい青褐色	該当な透明白沢栓を含む。5mm以下の茶褐色・灰褐色を多く含む。	スズ付着
437	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	推定 17.0			工具ナゲ、相 應底	工具ナゲ	にがい青褐色	にがい青褐色	微細な透明白沢栓・4mm以下の茶褐色 を多く含む。	
438	土師器	SA1	甕	口縁部～ 底部	推定 16.2			ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	3mm以下の茶褐色を含む。	内外面とも風化がみ
439	土師器	SA1	平底 土器	口縁部～ 底部	5.9	0.5	4.5	ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	6mm以下の灰白色・茶褐色・乳褐色を 多く含む。	
440	土師器	SA3	甕	口縁部～ 底部	推定 18.5			シグネ	工具ナゲ	褐色	褐色	3cm以下の灰白色・4mm以下の茶色・ 6mm以下にがい青色・にがい青褐色 を含む。	スズ付着

第14表 弥生時代・古墳時代土器観察表 6

番号	種別	出土 地點	器種	部位	法 畳 (cm)		手法・調型・文様ほか				色 調	粘 土 の 特 徴	備考	
					コ径	底径	深高	外 面	内 面	外 面				
433	土師器	SAS	甕	口縁部～ 腹部	推定	17.8		ナゲ、ミガキ	工具ナゲ、指 模痕	にぶい褐色 にぶい青褐色	3mm以下のにぶい褐色、3mm以上の 灰色・暗灰色を含む。	スズベ、碧		
444	土師器	SAS	甕	口縁部～ 底部	推定	15.6	2.1	28.3	ミガキ、ナゲ	工具ナゲ、指 模痕	にぶい褐色	明め褐色	8mm以下の毛褐色・赤褐色、10mm以 上の灰白色を含む。	
455	土師器	SAS	甕	口縁部～ 腹部	推定	18.0		ナゲ	ナゲ	赤褐色	明め褐色	3mm以下の灰褐色、4mm以下の白色、 6mmの外壁吹を含む。		
466	土師器	SAS	甕	口縁部～ 腹部	推定	23.0			工具ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	2mm以下の灰褐色・青褐色、3mm以上の 黑色、5mm以下の灰褐色、8mm以下の 褐色を含む。	スズベ、碧
477	土師器	SAS	甕	口縁部～ 腹部	推定	23.6		ナゲ	スズナゲ、指 模痕	赤褐色	褐色	3mm以下の灰褐色・暗灰褐色、10mm以下 の灰褐色を含む。	スズベ、碧	
488	土師器	SAS	甕	縦並付近～ 底部	推定	2.6		工具ナゲ	工具ナゲ	にぶい褐色	にぶい褐色	6mm以下の灰褐色、7mm以下のにぶい 褐色を含む。		
499	土師器	SAS	甕	口縁部～ 腹部	推定	24.3		ナゲ、T.ミガ キ	ナゲ、工具ナ ゲ	赤色	赤色	3mm以下の灰褐色・灰色、3mm年の灰褐色、 5mm程の灰褐色を含む。	-41年度	
500	土師器	SAS	甕	口縁部				ナゲ	ナゲ	明め褐色	明め褐色	J-m型の灰褐色・黑色・乳白色を含む。		
511	土師器	SAS	甕	口縁部				ナゲ	ナゲ	にぶい赤褐色	赤褐色	1mm以下の灰褐色、2mm程の灰褐色、3mm 年の灰褐色を含む。		
522	土師器	SAS	甕	口縁部				ナゲ	ナゲ	暗赤褐色	暗赤褐色	2mm程の褐色、5mm以下の灰褐色を 含む。		
533	土師器	SAS	甕	口縁部				ナゲ	ナゲ	暗褐色	暗褐色	2mm程の褐色、4mm程の灰褐色を含 む。		
544	土師器	SAS	甕	口縁部～ 底部		3.4		工具ナゲ、指 模痕	工具ナゲ	にぶい褐色	にぶい褐色	2mm以下の褐色、4mm以下のにぶい褐色 色、6mm以下の褐色、7mm以下のに ぶい褐色を含む。	スズベ、碧	
555	土師器	SAS	甕	底部		5.4		ミガキ	ナゲ、指模痕	赤褐色	明め褐色	2mm以下の褐色、4mm以下の褐色、 6mm程の灰褐色を含む。	内外面とも黒 化がみ	
566	土師器	SAS	甕	口縁部～ 腹部	推定	16.0		ナゲ、工具ナ ゲ	ナゲ、工具ナ ゲ	褐色	淡黄色	3mm以下の灰褐色・灰色・黑色を含む。 5mm程の灰褐色を含む。		
577	土師器	SAS	甕	口縁部～ 腹部	推定	14.8		ミガキ	工具ナゲ、指 模痕	暗赤褐色	赤褐色	2mm程の白色・黑色、6mm程の灰褐色 を含む。	外表面化がみ	
588	土師器	SAS	甕	口縁部～ 腹部	推定	17.2		ナゲ、ミガキ	ナゲ、ミガキ	赤褐色	赤褐色	5mm程の褐色、6mm程の灰褐色を含 む。		
599	土師器	SAS	甕	口縁部				ナゲ	ナゲ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	2mm以下の灰褐色を含む。		
600	土師器	SAS	甕	口縁部				ナゲ	ナゲ	暗褐色	暗褐色	1mm年の灰褐色を含む。		
611	土師器	SAS	甕	口縁部～ 腹部	推定	15.6		工具ナゲ、ナ ゲ	ナゲ、指模痕	にぶい青褐色	褐色	3mm以下の墨色、3mm以下の青褐色、 7mm以下のにぶい褐色を含む。		

第 15 表 弥生時代・古墳時代土器観察表 7

番号	種別	出土点	器種	部位	法 量 (cm)		下法・削整・文様はか		色 調		胎土の特徴	備考
					口徑	底径	器高	外面	内面	外面		
462	土師器	SA3	盃	口縁部～ 腹部	推定 14.4		タタキ、工具 ナガ	上刃ナダ	褐色	褐色	3mm以下の茶色、4mm以下の茶色、5mm 以下の黒灰色を含む。	
463	土師器	SA3	盃	口縁部	推定 21.0		ナガ、工具ナ ダ	ナガ、工具ナ ダ	褐色	褐色	6mm以下の茶色を含む。	
464	土師器	SA3	盃	口縁部			ナダ	ナダ	褐色	褐色	1mm以下の茶色、3mm以下の灰白色を含 む。	
465	土師器	SA3	盃	口縁部			ナダ	ナダ	褐色	褐色	3mm以下の茶色を含む。	破片欠け
466	土師器	SA3	盃	口縁部～ 腹部			T具ナダ	ナダ	灰褐色	灰褐色	2mm以下の茶色、2mm以下の茶色、5mm 以下の灰白色を含む。	内面にさみ
467	土師器	SA3	盃	口縁部付 近			ナダ	ナダ	褐色	褐色	3mm以下の茶色・灰白色、4mm以下の 黒灰色に多い褐色を含む。	褐色波状文
468	土器器	SA3	盃	口縁部	推定 17.2		ナダ	ナダ	褐黃褐色	褐黃褐色	2mm以下の茶色を含む。	褐黃波状文
469	土師器	SA3	盃	口縁部			ナダ	ナダ	褐色	褐色	2mm以下の茶色、5mm以下の灰白色を含 む。	褐色文
470	土師器	SA3	盃	口縁部付 近			ナダ	ナダ	褐色	褐色	2mm以下の茶色を含む。	褐色文
471	土師器	SA3	盃	口縁部付 近			ナダ	ナダ、工具ナ ダ	に多い褐色	に多い茶褐色	2mm以下の茶色が少く、3mm以下の茶 色・灰白色を含む。	
472	土器器	SA3	盃	口縁部～ 腹部	推定 12.6		ナダ、工具ナ ダ	T具ナダ	褐色	褐色	2mm以下の茶色、3mm以下の灰白色、 4mm以下のに多い褐褐色、5mm以下の 黒灰色を含む。	
473	土師器	SA3	盃	口縁部～ 腹部			T具ナダ	工具ナダ	赤褐色	明褐色	2mm以下の茶色、4mm以下の灰白色を含 む。	褐色文
474	土師器	SA3	高脚 提梁		13.8		二輪ナダ、ミ ガキ	ナダ	に多い茶褐色	に多い茶褐色	2mm以下の灰白色、3mm以下のに多い 茶色・褐色、4mm以下の灰白色を含む。	茶うみり
475	土器器	SA3	高脚 提梁		推定 13.0		ミガキ	工具ナダ	褐色	褐色	2mm以下の茶色・茶色・乳白色を含 む。	
476	土師器	SA3	鉢	底部	3.0		工具ナダ、褐 色	に多い茶色	褐色	褐色	3mm以下の茶色・灰褐色を含む。	
477	土師器	SA3	鉢	側部～底 部	推定 3.0		ナダ	ナダ、削痕	褐褐色	明褐色	3mm以下の茶色・墨色・黑色を含む。	褐色文
478	土師器	SA3	手盆 上部	口縁部～ 腹部	4.3	0.5	推定 4.2	削痕、ナダ	ナダ	褐色	1mm以下の茶色、2mm以下の白色・褐色・ 灰褐色を含む。	
479	土師器	SA3	手盆 上部	口縁部～ 腹部付近			工具ナダ	ナダ、削痕	に多い褐色	に多い茶褐色	3mm以下のに多い褐色、4mm以下の 黒褐色・灰白色を含む。	
480	土器器	SA4	盃	口縁部～ 腹部	推定 17.3		工具ナダ、均 衡	上刃ナダ、均 衡	に多い褐色	褐色	3mm以下のに多い褐色、5mm以下の茶 色・墨色、8mm以下のに多い褐色を含 む。	ズヌ付着

第16表 弥生時代・古墳時代土器観察表 8

番号	種別	出土 地點	器種	部位	法 量 (cm)		手法・調査・文様ほか		色 調		施 工 の 特 徴	備 考	
					口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面		
487	土器	SA4	釜	口縁部～ 腹部				ナグ	オブ	明るい褐色	青褐色	1mm以下の茶褐色、8mm以下の乳白色を含む。	
488	土器	SA1	釜	上縁部～ 腹部				工具ナグ	ナグ	名古屋白	赤褐色	2mm以下の乳白色、5mm以下の茶褐色を含む。	半圓窓
489	土器	SA4	釜	口縁部				工具ナグ	工具ナグ	暗赤色	赤色	3mm以下の乳白色を含む。	
490	土器	SA4	釜	コ唇部～ 腹部				工具ナグ	工具ナグ	暗褐色	濃い茶褐色	1mm以下の乳白色を含む。	一側深窓
491	土器	SA1	釜	口縁部				工具ナグ、ミ ガキ	工具ナグ	青褐色	赤色	2mm以下の乳白色、5mm以下の茶褐色を含む。	口縫付に漆 り上がりあり
492	土器	SA4	釜	口縁部～ 腹部	幅2.6			工具ナグ、ミ ガキ	ナグ、工具ナ グ	細緻な褐色	赤褐色	3mm以下の茶色、4mm以下の褐色を含む。	
493	土器	SA4	釜	腹部～底 部	幅2.4			工具ナグ	工具ナグ	暗褐色	暗褐色	8mm以下の黄褐色を含む。	
494	土器	SA1	釜	側部～底 部	0.7			工具ナグ、ミ ガキ	工具ナグ	に赤い黃褐色	に赤い褐色	2mm以下の茶色、8mm以下の鐵灰色、 に赤い黃褐色、10mm以下の乳白色を含む。	
495	土器	SM	釜	底部～瓶 部	幅2.0			工具ナグ	工具ナグ	に赤い黃褐色	赤褐色	1mm以下の茶白色、3mm以下の鐵灰 色、8mm以下のに赤い褐色を含む。	
496	土器	SA4	釜	口縁部～底 部	0.7			工具ナグ	工具ナグ、指 輪底	に赤い黃褐色	赤褐色	6mm以下の茶白色、9mm以下のに赤い 褐色、11mm以下のに赤い褐色を含む。	
497	土器	SA4	釜	口縁部～ 腹部	幅2.1			ナグ	ナグ、無釉灰	に赤い黃褐色	赤褐色	1mm以下の茶色光沢、2mm以下の茶 色、4mm以下の乳白色を含む。	
498	土器	SM	釜	口縁部～ 腹部	幅2.4			工具ナグ、ミ ガキ	工具ナグ	赤色	黃褐色	1mm以下の茶色、6mm以下の乳白色を含む。	
499	土器	SA4	小型丸 火鉢	口縁部	幅2.4			ナグ	ナグ	赤褐色	淡褐色	微細な透明白沢感、2mm以下の褐色 色に赤い褐色を含む。	
500	土器	SA4	小型丸 火鉢	上縁部	幅2.5			ナグ	ナグ	淡褐色	淡褐色	2mm以下の茶褐色、褐色、黑色、 乳白色を含む。	
501	土器	SA4	高所	全體	幅2.5			ナグ	ナグ	に赤い黃褐色	赤褐色	微細な透明白沢感、2mm以下の茶色光沢、 に赤い褐色、4mm以下の乳白色を含む。	
502	土器	SA1	高所	胸部				ミガキ	二具ナグ	に赤い黃褐色	鐵灰色	2mm以下の茶色・鐵灰色、4mm以下の 乳白色を含む。	
503	土器	SM	釜	口縁部～ 腹部	幅2.2			工具ナグ	工具ナグ	細緻な褐色	暗褐色	5mm以下の茶褐色を含む。	
504	土器	SM	平把 土器	口縁部～ 腹部付近	幅2.0			ナグ、工具ナ グ	ナグ	に赤い乳褐色	赤褐色	2mm以下の茶褐色を含む。	
510	土器	SA10	釜	口縁部～ 腹部	幅2.6			ナグ、工具ナ グ	工具ナグ	に赤い褐色	赤褐色	2mm以下の茶褐色、褐色、6.5mm以下の茶白色、 鐵灰色、黑色を含む。	スヌイ斧

第17表 弥生時代・古墳時代土器観察表 9

番号	種別	出土地点	鉢種	部位	法 気 (cm)		手法・調査・文様ほか			色 調		粘 土 の 特 徴	備考
					口幅	底径	器高	外 围	内 面	外 面	内 面		
511	土器部	SA10	束	腹部近 底附近				工具ナメ	工具ナメ	に赤・黄褐色 に赤・黄褐色	に赤・黄褐色 に赤・黄褐色を含む。	2mm以下の赤褐色・無色透明白 陶・10mm以下の赤褐色・無色 陶色・褐色・褐色・褐色・黑色・白色を 含む。	スズ付着
512	土器部	SA10	尖	口縁部～ 底面	推定 21.2			工具ナメ	工具ナメ	赤褐色	明る褐色	2mm以下の赤褐色透明白陶色・灰褐色、 9mm以下の赤褐色・灰褐色・灰褐色・ 灰褐色・灰褐色・褐色を含む。	スズ付着
513	土器部	SA10	直	口縁部～ 底面	推定 19.6			ハケメ、ミガキ	ハケメ、ナメ	明る褐色	褐色	1mm以下の暗色光沢陶・赤褐色、 0mm以下の透明白陶色・灰褐色・灰褐色・ 灰褐色・灰褐色・褐色を含む。	
514	土器部	SA10	直	口縁部～ 底面	推定 14.2			工具ナメ	工具ナメ	褐色	褐色	1mm以下の暗色光沢陶・赤褐色、 0mm以下の透明白陶色・灰褐色・灰褐色・ 灰褐色・灰褐色・褐色を含む。	
515	土器部	SA10	直	腹部～底 面		0.5		工具ナメ	工具ナメ	明る褐色	褐色	微細な薄色透明白陶・6mm以下の暗 色・灰褐色・灰褐色・灰褐色・灰褐色 に赤褐色・褐色を含む。	スズ付着
516	土器部	SA10	高杯	口縁部～ 底面	推定 16.1	12.3	推定 11.7	工具ナメ、ナ メ	工具ナメ、ナ メ	褐色	褐色	砂粒な薄色透明白陶・4mm以下の暗 色・灰褐色・灰褐色・灰褐色・灰褐色 に赤褐色・褐色を含む。	
517	土器部	SA10	高杯	脚部				ナメ	ナメ、工具ナ メ	褐色	褐色	微細な薄色透明白陶・2mm以下の暗 色・灰褐色・8mm以下の暗褐色・ 灰褐色・灰褐色・褐色を含む。	
518	土器部	SA10	鉢	口縁部～ 底面	推定 12.0			工具ナメ	工具ナメ	明る褐色	褐色	微細な薄色透明白陶・3mm以下の暗 色・灰褐色・灰褐色・灰褐色・灰褐色 に赤褐色・褐色を含む。	
522	土器部	SA11	直	口縁部～ 底面	推定 20.4			工具ナメ、ナ メ、指捺痕	工具ナメ、ナ メ、指捺痕	に赤・褐色	褐色	3mm以下の暗褐色・黑色・明る褐色 に赤褐色・褐色を含む。	一軒窯裏、ス ズ付着
523	土器部	SA11	直	口縁部～ 底面	推定 22.5			ナメ、指捺痕	ナメ、指捺痕	に赤・褐色	褐色	3mm以下の暗褐色・黑色・明る褐色 に赤褐色・褐色を含む。	スズ付着
524	土器部	SA11	尖	口縁部～ 底面	推定 17.5	3.8		ナメ、指捺痕	工具ナメ、ナ メ	に赤・褐色 淡黄褐色	褐色	3mm以下の赤褐色・無色透明白 陶・灰褐色・3mm以下の赤褐色・灰 褐色・灰褐色・褐色を含む。	スズ付着
525	土器部	SA11	直	口縁部～ 底面	推定 15.9	0.8	20.0	ハケメ	ハケメ	に赤・褐色 に赤・褐色	褐色	3mm以下の赤褐色・灰褐色・黑色を含 む。	スズ付着
526	土器部	SA11	直	口縁部				ハケメ	ナメ	に赤・褐色	褐色	4mm以下の赤褐色・灰褐色・黑色を含 む。	スズ付着
527	土器部	SA11	尖	底面		1.8		ナメ、工具ナ メ	ナメ	に赤・褐色	褐色	3mm以下の赤褐色・灰褐色・黑色・白色 を含む。	スズ付着
528	土器部	SA11	直	底面		4.0		タタキ	ハケメ、ナメ	に赤・褐色	褐色	6mm以下の赤褐色・灰褐色・黑色を多く 含む。	糊痕
529	土器部	SA11	直	口縁部～ 底面	10.1	0.2	10.7	ナメ	ナメ	に赤・褐色	褐色	6mm以下の赤褐色・灰褐色・黑色を多く 含む。	スズ付着
530	土器部	SA11	直	口縁部付 近～底面				タタキ、ハケ メ、ナメ	ハケメ、ナメ	に赤・褐色	褐色	6mm以下の赤褐色・灰褐色・白色・黑色 を多く含む。	スズ付着、黒化 跡
531	土器部	SA11	直	口縁部～ 底面付近	推定 10.3			ミガキ	ナメ	に赤・褐色 に赤・褐色	褐色	3mm以下の赤褐色光沢陶・に赤・褐色 7.5mm以下の赤褐色・灰褐色・灰褐色・ 灰褐色・灰褐色・褐色を含む。	外表面がざら み
532	土器部	SA11	鉢	口縁部～ 底面		0.7		ナメ、ハケメ、 指捺痕	ナメ、ハケメ、 指捺痕	に赤・褐色	褐色	3mm以下の赤褐色・灰褐色・灰褐色・ 灰褐色・灰褐色・褐色を含む。	内表面がざら み

第18表 弥生時代・古墳時代土器観察表10

番号	種別	出土点	器種	部位	法 直 (cm)		手法・器型・文様ほか		色 調		胎 上 の 特 徴	備考	
					口径	底径	高さ	外面	内面	外面			
333	上野原	SA11	鉢	口縁部～底部	推定	8.3	6.6	ナゲ、振袖状 振袖底	ナゲ、ハケス、 振袖底	にぶい黄褐色 淡黄褐色	5mm以下の灰色・新褐色・白色粒を含む。	一部黒斑	
334	土師器	SA11	鉢	口縁部付近～底部				ナゲ、振袖状	ナゲ、振袖底	褐色	3mm以下の茶褐色・灰色・黑色粒を含む。	スズ付着	
335	土師器	SA11	鉢	底部				ハケス、ナゲ	ハケス、ナゲ	にぶい褐色	にぶい褐色	スズ付着	
336	上野原	SA11	鉢	口縁部～底部	推定	19.8	タタキ、工具 ナゲ	工具ナゲ、ハ ケス	にぶい黄褐色	褐色	6mm以下のにぶい黄色・灰褐色・黑色・ 青褐色・褐色・灰褐色・淡黄褐色・にぶい褐色・ 黑色・灰色等を含む。		
337	土師器	SA11	鉢	口縁部～底部	推定	12.0	ハケス、ナゲ	ハケス	褐色	褐色	3mm以下の黑色・にぶい黃褐色・灰褐色・ 灰白色・にぶい黄褐色・淡黃褐色等を含む。		
338	土師器	SA11	平底	口縁部～上部				ナゲ	ハケス	灰白色	にぶい黄褐色	2mm以下の茶褐色・灰色・黑色等を含む。	
340	上野原	SA12	釜	口縁部～側面部	推定	27.7	タタキ、ナゲ、 振袖底	工具ナゲ、振 袖底	にぶい褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の褐色・4mm以下のにぶい 黄色・7mm以下のにぶい黄褐色等を含む。	スズ付着	
341	土師器	SA12	甕	口縁部～底部	推定	19.2	タタキ、振袖 底	工具ナゲ	褐色	褐色	3mm以下の灰色・6mm以下の黑色・灰 白色・褐色・5mm以下のオーリーブ色等を含む。	スズ付着	
342	土師器	SA12	甕	口縁部～底部	推定	20.2	タタキ、ナゲ	工具ナゲ、ナ ゲ	褐色	にぶい褐色	微細な透明な凹凸・3mm以下の灰褐色・ 灰白色・黑色等を含む。	スズ付着	
343	上野原	SA12	釜	口縁部～底部	推定	19.9	0.9	27.3	タタキ、ナゲ、 振袖底	工具ナゲ	にぶい褐色	微細な透明な凹凸・5mm以下の灰褐色・ 灰白色・黑色・灰褐色等を含む。	スズ付着
344	土師器	SA12	甕	口縁部～底部	推定	15.6	4.2	17.0	タタキ、ナゲ、 振袖底	工具ナゲ、振 袖底	にぶい褐色	にぶい褐色	2mm以下の茶褐色・褐色・8mm以下の 褐色等を含む。
345	上野原	SA12	甕	口縁部～側面部	推定	16.2	タタキ	ナゲ、工具ナ ゲ	透明白色	透明白色	2.5mm以下の白色・3.5mm以下のにぶ い褐色・7.5mm以下の褐色・灰褐色等を含む。	内外壁とも風化等	
346	土師器	SA12	甕	側面部～底部				タタキ	工具ナゲ	褐色	褐色	4mm以下の茶褐色・6mm以下の灰褐色・ 褐色・6mm以下の灰白色・灰褐色等を含む。	スズ付着
347	土師器	SA12	甕	側面部～底 部付近				タタキ、二重 ナゲ	ナゲ、工具ナ ゲ	にぶい黄褐色	灰褐色	4mm以下の茶褐色・8mm以下の灰白 色・灰褐色等を含む。	スズ付着
348	上野原	SA12	甕	側面部～底 部				タタキ	工具ナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	4mm以下の黑色・6mm以下の灰白色・ 褐色等を含む。	
349	土師器	SA12	甕	底部				ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	1.5mm以下の灰白色・黑色・1.5mm以下 のにぶい褐色・6mm以下の灰褐色等を含む。	一部黒斑
350	土師器	SA12	燒成窯	底部			12.0	工具ナゲ	工具ナゲ	明黄褐色	にぶい褐色	2mm以下の赤褐色・5mm以下の火炎 色・黑色・灰白色等を含む。	一部黒斑、スズ 付着
351	上野原	SA12	甕	口縁部～底 部	推定	17.2	ナゲ	ナゲ	にぶい褐色	褐色	微細な透明な凹凸・1.5mm以下の灰白 色・2mm以下の褐色等を含む。		
352	上野原	SA12	釜	頭部～模 様	模様			工具ナゲ、ナ ゲ	工具ナゲ、ナ ゲ	にぶい褐色	褐色	1mm以下の灰白色・4mm以下の灰褐色 ・10mm以下の灰白色・黑色等を含む。	

第19表 弥生時代・古墳時代土器観察表 II

番号	種別	出土 場所	器種	部位	法 長(cm)		手筋・調整・文様ほか		色 調		胎 上 の 特 徴	備 考		
					口 径	底 径	高 度	外 面	内 面	外 面	内 面			
553	土師器	SA12	盃	口縁部				ナゲ	ナゲ	に赤い黄褐色、灰褐色	2mm以下の灰褐色、3mm以下の黒褐色、5mm以下の黄褐色を含む。	表面波状文		
554	土師器	SA12	盃	口縁部～ 底部	14.4	1.3	24.9	タタキ、ナゲ、 粗面質	工具ナゲ、粗 面質	に赤い褐色	褐色	5mm以下の黒褐色、2mm以下の黒褐色、 に赤い赤褐色、10mm以下の黄褐色を含む。	スヌ付茶	
555	土師器	SA12	盃	口縁部～ 底部	推定	12.2		タタキ、ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	褐色な褐色又赤褐色、2mm以下の黒褐色、 灰褐色を含む。	有孔文	
556	土師器	SA12	盃	口縁部～ 底部				工具ナゲ	工具ナゲ	褐色	褐色	2mm以下の灰褐色、3.3mm以下の黒褐色、 4.3mm以下の灰褐色を含む。		
557	土作器	SA12	盃	口縁部～ 底部	13.3			ハケメ	ハケメ	褐色	褐色	3mm以下の黒褐色、5mm以下の灰褐色、 7mm以下の灰白色、5mm以下の灰褐色を含む。	内外面も風化がみ	
558	土師器	SA12	盃	口縁部～ 底部	推定	17.5		ナゲ、工具ナ ゲ、下工具ナ ゲ	ナゲ、工具ナ ゲ	に赤い褐色	に赤い褐色	3mm以下の黒褐色又黒褐色、5mm 以下の灰白色、6mm以下の黄褐色を含む。	スヌ付茶	
559	土師器	SA12	盃	口縁部～ 底部		0.8		タタキ、工具ナ ゲ	工具ナゲ	赤褐色	明るい褐色	1.5mm以下の灰白色、3.3mm以下の灰 褐色を含む。	引剥落	
560	土師器	SA12	盃	網目～ 底部	推定	0.9		工具ナゲ、ナ ゲ	工具ナゲ	に赤い褐色	褐色	褐色な黒褐色光沢質、2mm以下の黒褐色、 灰褐色、4mm以下の灰褐色を含む。	褐色質	
561	土師器	SA12	盃	網目附近				工具ナゲ	工具ナゲ	に赤い褐色	灰褐色	2mm以下の灰褐色、10mm以下の黒褐色 を含む。	表面波状文	
562	土師器	SA12	盃	口縁部～ 底部	推定	10.0		ナゲ	工具ナゲ	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	黒褐色な透明白光沢質、1mm以下の黒褐色、 3mm以下の灰褐色を含む。		
563	土師器	SA12	高杯	杯縁	推定	14.4		ナゲ	工具ナゲ	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	微細な不透明光沢質を含む。		
564	土師器	SA12	杯	口縁部～ 底部	推定	19.2		タタキ、ナゲ	工具ナゲ	に赤い黄褐色	褐色	3mm以下の不透明光沢質、4mm以下の黒褐色、 5mm以下の赤褐色、5mm以下の灰白色～黒褐色、 8mm以下の灰白色～赤褐色を含む。		
565	土師器	SA12	杯	口縁部～ 底部	推定	10.8	4.5	ナゲ、粗面質	ナゲ、粗面質	に赤い黄褐色	褐色	3mm以下の黒褐色、5mm以下の灰褐色、 8mm以下の灰褐色を含む。	一部風化	
566	土師器	SA12	不系					工具ナゲ	ナゲ、粗面質	褐色	褐色	2mm以下の褐色、4mm以下の灰褐色、 6mm以下の黒褐色、灰褐色を含む。	変化あり	
567	土師器	SC4	盃	口縁部～ 底部	24.4	4.6	28.9	タタキ、ハケメ	ハケメ、滑潤 質	に赤い灰褐色	灰褐色	3mm以下の灰褐色、5mm以下の褐色、 8mm以下の黒褐色を含む。		
568	土師器	SC4	盃	口縁部～ 底部	推定	27.6		タタキ	風呂のため表面 變不規	灰褐色	に赤い褐色	4mm以下の灰褐色、5mm以下の灰 褐色～白色、7mm以下の黒褐色～灰褐色を含む。	スヌ付茶、内面 風化著しい	
569	土師器	SC4	盃	口縁部～ 底部	推定	21.2		タタキ	ハケメ	に赤い黄褐色	褐色	2mm以下の灰褐色、3mm以下の黒褐色、 5mm以下の灰褐色を含む。	スヌ付茶	
570	土師器	SC4	甕	口縁部～ 底部	23.3			タタキ	工具ナゲ	に赤い黄褐色	褐色	1mm以下の褐色、4mm以下の黒褐色、 6mm以下の灰褐色～灰褐色を含む。	内面正止め風 化がみ	
580	土師器	SC4	甕	口縁部～ 底部	17.2	3.2	26.1	タタキ、粗面 質	工具ナゲ、粗 面質	に赤い褐色	褐色	4mm以下の褐色、8mm以下の黒褐色、 9mm以下の黒褐色を含む。	スヌ付茶	

第20表 弥生時代・古墳時代土器観察表 12

番号	種別	出土地点	器種	部位	法 周 (cm)		手法・調査・文様ほか		色 調		胎 上 の 特 徴	備考	
					口 径	底 径	厚 高	外 壁	内 壁	外 壁	内 壁		
581	土師器	SC4	壺	口縁部～底部	横径 18.2	4.3	23.8	タタキ、西脇 痕	ハケメ、埴輪 痕	褐色	淡青灰色	2mm以下の褐色、4mm以下の褐色 白色、7mm以下の灰白色・淡青色を含む。	初期型
582	土師器	SC4	壺	口縁部～ 腹部	横径 20.5			ナゲ	ナゲ	淡黄褐色	に赤い褐色	3mm以下の褐色、4mm以下の褐色 白色、7mm以下の灰白色・淡青色を含む。	内外面とも風化びみ
583	土師器	SC4	壺	口縁部～ 腹部	横径 16.2			タタキ、ナゲ	ハケメ	褐色	に赤い褐色	4mm以下の褐色・に赤い褐色 白色、7mm以下の褐色、8mm以下の灰褐色 を含む。	スルカ型、内外 面とも風化びみ
584	土師器	SC4	壺	口縁部～ 底部付近	横径 15.1			タタキ、ナゲ	ナゲ、浮雕痕	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	5mm以下の褐色・褐色・に赤い褐色、 7mm以下の灰褐色を含む。	スルカ型
585	土師器	SC4	壺	口縁部～ 底部	12.9	1.4	18.6	タタキ、ナゲ	二重ナゲ、指 痕	に赤い褐色	に赤い褐色	5mm以下の褐色、7mm以下の灰褐色を含む。	一重型
586	土師器	SC4	壺	腹部～底 部		0.6		タタキ	ハケメ	に赤い褐色	褐色	4mm以下の褐色、5mm以下の褐色 白色、8mm以下の灰褐色・に赤い褐色を含む。	内外面とも風化びみ
587	土師器	SC4	壺	腹部～底 部		3.4		タタキ	ハケメ	淡黄褐色	淡褐色	2mm以下の褐色、5mm以下の褐色 白色、6mm以下の灰白色、8mm以下の灰褐色 ・淡褐色を含む。	内外面とも風化びみ
588	土師器	SC4	壺	腹部～底 部				タタキ	ハケメ	褐色	に赤い黄褐色	4mm以下の灰白色、5mm以下の褐色 白色・褐色を含む。	
589	土師器	SC4	壺	腹部～底 部		1.8		タタキ、ハケメ	上見ナゲ	に赤い褐色	に赤い褐色	6mm以下の褐色・褐色を含む。	調査用
590	土師器	SC4	壺	口縁部～ 腹部	横径 16.8			ナゲ	ナゲ	褐色	褐色	2mm以下の褐色、3mm以下の灰褐色 白色・灰褐色を含む。	内外面とも風化びみ
591	土師器	SC4	壺	口縁部～ 腹部		2.0		タタキ、ナゲ	固定のため調 査不規	に赤い褐色	に赤い褐色	3mm以下の褐色・5mm以下の褐色 白色・褐色、10mm以下の灰褐色を含む。	内面風化著し い
592	土師器	SC4	壺	腹部付近～ 底部付近				タタキ	ナゲ	に赤い褐色	に赤い褐色	3mm以下の褐色光沢、4mm以下の褐色 白色、6mm以下の褐色・褐色を含む。	スルカ型
593	土師器	SC4	壺	口縁部～ 腹部	14.5			ナゲ、ハケメ、 埴輪痕	ナゲ、ハケメ、 浮雕痕	に赤い褐色	に赤い褐色	2mm以下の褐色、3mm以下の灰白色、 7mm以下の灰褐色を含む。	
594	土師器	SC4	壺	口縁部～ 腹部	横径 11.5	0.5	17.1	タタキ、ナゲ、 工具ナゲ、ナ ゲ、浮雕痕	工具ナゲ、ナ ゲ、浮雕痕	に赤い褐色	褐色	3mm以下の褐色、4mm以下の褐色 白色・褐色、5mm以下の灰褐色を含む。	スルカ型
595	土師器	SC4	壺	口縁部～ 腹部		8.3		ミガキ、ナゲ、 工具ナゲ、指 痕	ナゲ、工具ナ ゲ、浮雕痕	に赤い褐色	に赤い褐色	2mm以下の灰白色、4mm以下の褐色 白色、5mm以下の褐色・褐色を含む。	スルカ型
596	土師器	SC4	壺	口縁部～ 腹部	横径 7.5	0.3	粗末 10.1	二重ナゲ、タ タキ、ナゲ、指 痕	ナゲ、浮雕 痕	に赤い褐色	に赤い褐色	2mm以下の褐色光沢、5mm以下の褐色 白色・褐色を含む。	一部剥落
597	土師器	SC4	壺	腹部～底 部		0.8		タタキ	ハケメ、浮雕 痕	に赤い褐色	に赤い褐色	5cm以下の灰白色、6mm以下の褐色 白色・褐色、8mm以下の灰褐色を含む。	スルカ型
598	土師器	SC4	壺	腹部～ 底部		0.9		タタキ、ハケメ	ハケメ	褐色	褐色	8.5mm以下の褐色・褐色、8mm以下 の灰褐色を含む。	スルカ型
599	土師器	SC4	壺	口縁部～ 底部	横径 10.2	3.9	7.2	ナゲ、浮雕痕	工具ナゲ、指 痕	に赤い褐色	に赤い褐色	3mm以下の褐色、6mm以下の灰褐色 を含む。	内外面とも風 化びみ

第21表 弥生時代・古墳時代土器觀察表 13

番号	種別	出土地点	器種	部位	寸 丈 (cm)			手法・調査・文様ほか		色 模		胎土の特徴	備考	
					口 径	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面			
600	土師器	SC4	杯	口縁部～底部附近	横定 12.4	横定 3.1		ナゲ、指痕有 ナゲ、指痕有	ナゲ、指痕有 ナゲ、指痕有	褐色	褐色	2mm以下の灰白色・褐色、2.5mm以下の灰褐色を含む。		
601	土師器	SC4	少	口縁部～底部附近	横定 21.5			ナゲ、指痕有 ナゲ、指痕有	ナゲ、指痕有 ナゲ、指痕有	褐色	にぶい褐色	2mm以下の灰白色・褐色、3mm以下の灰白色・明る褐色、4mm以下の灰褐色を含む。		
602	土師器	SC3	壺	口縁部～底部附近	横定 27.8	8.4	31.4	ナゲ、二段ナ グ、指痕有 ナゲ、指痕有	ナゲ、上段ナ グ、指痕有 ナゲ、指痕有	にぶい灰褐色	にぶい灰褐色	1mm以下の墨色・褐色、4mm以下の灰白色・褐色、6mm以下の灰褐色を含む。	本面無	
603	土師器	SC3	壺	口縁部～底部附近	21.2			ヘラケズリ?	ヘラケズリ?	明赤褐色	明赤褐色	3mm以下の褐色・灰褐色、5mm以下の墨色・にぶい褐色、6mm以下の灰白色を含む。		
604	土師器	SC3	壺	口縁部～底部附近	横定 23.4			ナゲ、指痕有 ナゲ、指痕有	ナゲ、指痕有 ナゲ、指痕有	灰褐色	灰褐色	1mm以下の透明白光沢、4mm以下の半透明光沢を含む。	×付箋	
605	土師器	SC3	壺	口縁部～底部附近	横定 23.2			ナゲ、指痕有 ナゲ、指痕有	ナゲ、指痕有 ナゲ、指痕有	灰褐色	にぶい灰褐色	2mm以下の灰白色・褐色、3mm以下の灰褐色・灰黄色を含む。	×付箋、内面 黒化有	
606	土師器	SC3	壺	口縁部～底部附近	横定 2.2			ヘラケズリ?	ヘラケズリ?	赤褐色	明赤褐色	3mm以下の墨色・褐色、4mm以下の灰白色・5mm以下のにぶい灰褐色・灰黄色を含む。		
607	土師器	SC3	壺	底部～底部附近	横定 1.0			工具ナゲ	工具ナゲ	ナゲ	にぶい黄褐色	灰褐色	1mm以下の透明白光沢・墨色光沢、3mm以下の半透明光沢を含む。	
608	土師器	SC3	壺	口縁部～底部附近	2.5			工具ナゲ	工具ナゲ	にぶい黄褐色	灰褐色	3mm以下の墨色、3mm以下の灰白色、4mm以下のにぶい灰褐色、5mm以下のにぶい灰褐色を含む。		
609	土師器	SC3	壺	底部附近	横定 8.0			工具ナゲ	工具ナゲ	ナゲ	灰褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の墨色、4mm以下のにぶい褐色、7mm以下の灰白色を含む。	
610	土師器	SC3	壺	底部附近	横定 2.5			工具ナゲ	工具ナゲ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	3.5mm以下の褐色、9.5mm以下の灰白色を含む。	日赤	
611	土師器	SC3	高杯	口縁部～底部附近	横定 19.6	横定 13.2		ナゲ、工具ナ ゲ、指痕有 ナゲ、工具ナ ゲ、指痕有	ナゲ、工具ナ ゲ、指痕有 ナゲ、工具ナ ゲ、指痕有	褐色	褐色	3mm以下の灰白色・5.5mm以下の灰褐色を含む。		
612	土師器	SC3	高杯	口縁部～底部附近	横定 23.7			ナゲ、指痕有 ナゲ、工具ナ ゲ、指痕有	ナゲ、指痕有 ナゲ、工具ナ ゲ、指痕有	にぶい褐色	にぶい褐色	3mm以下の墨色光沢・にぶい褐色、3mm以下の灰白色・5mm以下の不透明光沢を含む。	内赤と少し黒化有	
613	土師器	SC3	高杯	脚部				七ヶキ	七ヶキ	ナゲ	にぶい黄褐色	灰褐色	3mm以下の墨色光沢・にぶい褐色、3mm以下の灰白色・4mm以下の灰褐色・7mm以下の灰白色・8mm以下の灰白色を含む。	
614	土師器	SC3	高杯	脚部	横定 12.2			工具ナゲ、指 痕有	工具ナゲ、指 痕有	ナゲ	淡青灰色	灰褐色	2mm以下の墨色光沢・3mm以下の墨色・4mm以下の灰褐色・4mm以下の灰褐色、6mm以下の灰白色を含む。	
615	土師器	SC3	杯	口縁部附近	横定 10.2			ナゲ、指痕有 ナゲ、指痕有	ナゲ、指痕有 ナゲ、指痕有	にぶい褐色	にぶい褐色	微細な墨色光沢を少し含む。3mm以下の灰白色を含む。		
616	土師器	SC1	壺?	口縁部～底部附近				タクキ	タクキ	ナゲ	にぶい褐色	3mm以下の灰白色・淡青色・水堀色を含む。		
617	土師器	SC1	壺?	口縁部附近				タクキ	タクキ	ナゲ	にぶい黄褐色	3mm以下の灰白色・にぶい黄褐色を含む。		
618	土師器	SC1	壺?	口縁部附近				タクキ	タクキ	ナゲ	にぶい黄褐色	灰褐色	1mm以下の墨色、3mm以下の灰褐色を含む。	

第22表 弥生時代・古墳時代土器観察表 14

番号	種別	出土 場所	器種	部位	法 量(cm)		手形・調整・文様ほか		色 調		地 土 の 特 徴	備 考		
					1 横	底 径	器 高	外 面	内 面	外 面	内 面			
619	土師器	SC1	焼?	鉢部				タタキ	ナゲ	淡黄色	にぶい褐色 2mm以下の墨色、3mm以下の褐色 灰褐色を含む。			
620	土師器	SC1	焼?	鉢部				タタキ	ナゲ	淡黄色	にぶい褐色 3mm以下のにぶい褐色、4mm以下の褐色 灰褐色を含む。			
621	土師器	SC1	焼?	鉢部				タタキ	工具ナゲ	にぶい褐色 灰褐色	3mm以下の褐色、墨褐色、5mm以下の 灰褐色、6mm以下のにぶい褐色を含む。			
622	土師器	白合形	器	鉢部	推定 5.7			ナゲ	ナゲ	にぶい褐色 にぶい褐色	2mm以下の墨色光沢やにぶい褐色 褐色、墨褐色、青色、10mm以下のにぶい 褐色、灰褐色、灰褐色、深褐色、にぶい褐色 褐色を含む。			
623	土師器	丸食器	器	底部	推定 2.8			ハケメ	ナゲ	にぶい褐色 にぶい褐色	5mm以下の褐色、灰褐色、褐色光沢、灰白 色、灰褐色、にぶい褐色を含む。			
624	土師器	白合形	器	鉢部	推定 5.6			ナゲ、指痕	工具ナゲ、ナ ゲ	にぶい褐色 灰褐色	2mm以下の墨色光沢や、墨褐色、褐色 褐色、6mm以下の褐色、灰褐色、灰白 色、10mm以上のにぶい褐色を含む。	一般墓室 色		
630	土師器	丸食器	器	底部				タタキ	ハケメ、ナゲ、 指痕	褐色	にぶい褐色	5mm以下のにぶい褐色、灰褐色、褐色 褐色、灰褐色を含む。	足付穴空 き	
631	土師器	丸食器	器	口縁部～ 腹部	23.2	推定 13.7	18.9	ハケメ、ナゲ ミガキ	ナゲ、ハケメ、 ミガキ	墨色	墨色	4mm以下の褐色、褐色、墨褐色を多く含 む。	文化あり	
632	土師器	丸食器	器	底部	4.9	1.6	11.3							

第23表 弥生時代・古墳時代土器観察表15

第5節 不明遺構（第127図）

第III層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面検出遺構のうち、人為的な可能性のある土坑が4基あり、一括して記載する。いずれも焼上を伴う土坑である。

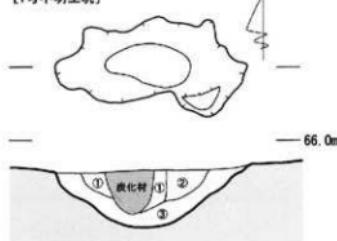
1号不明土坑（SC4近くの焼土を伴う土坑）

調査区中央部H5グリッドに位置しており4号土坑（SC4）の北側に隣接している。埋土中に0.20m×0.20m程の炭化材を検出し、樹種同定の結果（第IV章第2節）コナラ属アカガシ亞種、放射性炭素年代分析の補正値は 920 ± 40 年BPであった。遺物は出土していない。

2・3・4号不明土坑

調査区北西部に位置し、いずれも不定形で長径が0.60～0.70m程、深さが0.50～0.80m程あり、焼土ブロックや炭化粒を多く含んでいる。いずれからも遺物は出土していない。

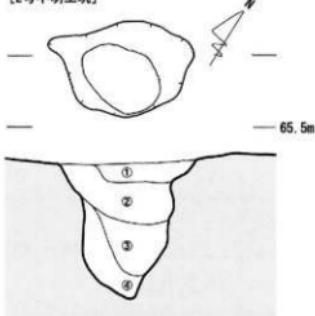
[1号不明土坑]



1号不明土坑土層注記

①に多い真褐色土(2.5YR4/3)…燒土。／②稍赤褐色土(5YR5/6)…①と似ているが、やや粘性がある。／③黒褐色土(10YR3/2)…やわらかくしまりがない。

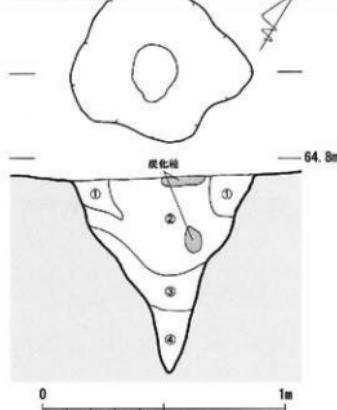
[2号不明土坑]



2号不明土坑土層注記

①暗赤褐色土(5YR3/2)…赤色中軟、炭化物粒を多量に含む。やわらかくしまりがない。／②に多い赤褐色土(5YR4/4)…燒土ブロックを多量に含む。やわらかくしまりがある。／③赤褐色土(2.5YR4/6)…炭化物粒を少量含む。やわらかくしまりがある。／④赤褐色土(5YR4/8)…炭化物粒を少量含むが、③よりも含む割合は少ない。ややまとりがある。

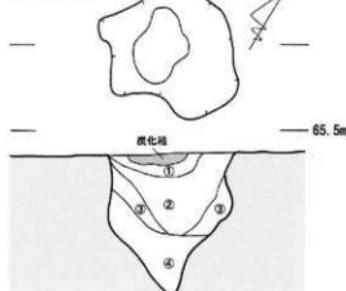
[3号不明土坑]



3号不明土坑土層注記

①暗褐色土(7.5YR7/6)…赤ホヤがあるが、薄く赤みがかった色調である。やわらかくしまりがない。／②明赤褐色土(2.5YR5/6)…燒土。炭化物粒を多量に含む。やわらかくしまりがある。／③暗赤褐色土(5YR3/6)…燒土。②と似ているが、炭化物粒を含む割合が少ない。／④暗赤褐色土(10YR3/2)…燒土粒を多量に含む。③と似ているが、炭化物粒を含む割合が少ない。

[4号不明土坑]



4号不明土坑土層注記

①暗赤褐色土(5YR3/2)…赤色中軟、炭化物粒を多量に含む。やわらかくしまりがない。／②明赤褐色土(5YR5/8)…燒土。炭化物粒を少量含む。やわらかくしまりがある。／③暗赤褐色土(5.5YR3/3)…燒土粒を多量に含む。やわらかくしまりがある。／④赤褐色土(5YR2/2)…赤ホヤブロックを少量含む。やわらかくしまりがある。

第127図 不明土坑実測図 (S=1/20)

第IV章 自然科学分析

第1節 黒曜石の原産地同定

IH石器時代の石器石材である黒曜石について、肉眼観察による石材产地推定を、科学的根拠に基づく検証および裏付けを行う機会を得た。この分析は、蛍光X線分析法による原産地推定を佐賀大学文化教育学部の角嶺進氏と熊本人大学大学院生（当時）の芝康二郎氏に依頼して行ったものである。

1 試料

試料は黒仁田遺跡から出土した黒曜石石器 39 点である。

2 方法

分析は、佐賀大学文化教育学部に設置されている波長分散型蛍光X線分析装置を用いて各試料における化学組成 (Nb、Zr、Y、Sr、Rb、Fe) の定量分析を非破壊で行った。

3 結果

分析結果および推定产地は以下の表の通りである。不明なものは不明と記している。

注記 番号	247	接合資料 315・449	356	232	51	548	603	755	66	接合資料 161・738
Nb	0.188779	0.318907	0.196655	0.309019	0.446631	0.347100	0.376309	0.242702	0.296763	0.277405
Zr	0.166824	0.439017	0.341788	0.509734	0.528037	0.620459	0.607493	0.467718	0.420110	0.370616
Y	0.545041	1.668644	1.193541	1.611031	1.783800	2.052208	2.476759	1.929879	1.373543	1.379592
Sr	0.034098	0.088148	0.073040	0.108514	0.110845	0.131088	0.133335	0.098122	0.091075	0.078228
Rb	0.870788	2.559653	2.124464	3.228638	3.340059	3.961450	4.045318	3.014590	2.816121	2.461354
Fe	0.057243	0.074871	0.066794	0.075634	0.097659	0.100718	0.167651	0.078506	0.115877	0.093790
Rb%	37.1	39.8	40.9	41.4	41.4	41.6	42.3	41.9	42.6	42.6
Sr%	19.6	18.5	19.0	18.8	18.6	18.6	18.8	18.4	18.6	18.3
Zr%	43.3	41.7	40.2	39.9	40.0	39.8	38.8	39.7	38.8	39.1
判定	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留

注記 番号	接合資料 108・112	473	546	539	接合資料 310・508	86	54	746	接合資料 302・504	609
Nb	0.234374	0.284917	0.049172	0.171486	0.326552	0.298255	0.467718	0.257637	0.207071	0.103377
Zr	0.330289	0.471540	0.140831	0.381629	0.480293	0.712366	0.757648	0.374201	0.332448	0.134015
Y	1.300706	1.502689	0.404341	1.171442	1.824658	2.310832	2.496580	1.366480	1.215982	0.488290
Sr	0.067137	0.097331	0.021422	0.074333	0.069471	0.142411	0.156561	0.082623	0.063740	0.026888
Rb	2.120102	3.107893	0.685169	2.425005	3.274916	4.847040	5.357769	3.006670	2.533785	1.077687
Fe	0.065953	0.073378	0.056803	0.082154	0.081048	0.134148	0.119423	0.072644	0.066671	0.075001
Rb%	42.0	42.6	37.4	42.1	43.4	43.6	44.3	46.9	46.7	47.7
Sr%	18.0	18.0	15.8	17.4	17.8	17.3	17.5	17.4	15.9	16.1
Zr%	40.0	39.4	46.9	40.5	38.8	39.1	38.2	35.7	37.4	36.2
判定	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留	桑ノ木津留

注記 番号	411	63	850	846	610	79	97	653	867	208
Nb	0.246687	0.250671	0.645663	0.795853	0.824771	0.735175	0.476130	0.686090	0.092467	0.180631
Zr	0.169330	0.208671	0.364999	0.525270	0.444323	0.408456	0.261300	0.378463	0.100717	0.145781
Y	0.693456	1.109499	1.962213	2.718596	2.012640	2.122919	1.012496	1.987795	0.283207	0.430565
Sr	0.039641	0.051052	0.080256	0.116921	0.096101	0.085528	0.051010	0.085053	0.021736	0.022594
Rb	1.343715	2.071776	3.327012	5.226422	4.312832	3.973034	2.370376	4.118285	1.198045	1.264566
Fe	0.064190	0.080121	0.091029	0.134089	0.112251	0.113605	0.081507	0.102830	0.055160	0.061721
Rb%	46.1	51.4	50.1	52.2	51.8	52.1	50.9	54.4	56.9	51.4
Sr%	18.4	17.1	16.3	15.8	15.6	15.1	14.8	15.1	13.9	12.4
Zr%	35.5	31.6	33.6	32.0	32.6	32.7	34.3	30.5	29.2	36.2
判定	腰岳									

注記 番号	851	625	355	613
Nb	0.242756	0.241559	0.174811	0.084148
Zr	0.194249	0.236928	0.140003	0.141835
Y	0.651391	0.783935	0.411807	0.330959
Sr	0.033030	0.046823	0.024769	0.024275
Rb	2.049481	3.318049	2.234237	2.384570
Fe	0.070034	0.087889	0.066697	0.067981
Rb%	55.7	61.5	65.3	66.6
Sr%	12.1	11.7	9.8	9.2
Zr%	32.2	26.8	25.0	24.2
判定	腰岳	不明	不明	不明

【参考文献】

- 角嶺 進・石坂岳二・川野良信1999「ガラス円板を用いた珪酸塩岩石中の主成分元素および微量元素の蛍光X線分析」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』3-2佐賀大学文化教育学部, p. 133-140.
- 角嶺 進・宇都宮恵2003「蛍光X線分析法による黒曜石の産地同定(2)」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』7-2 佐賀大学文化教育学部, p. 47-58.

第2節 炭化材についての分析

弥生時代・古墳時代の住居跡貼り床面と土坑中から検出された炭化材の樹種同定と放射性炭素年代分析を株式会社古環境研究所に委託し実施した。以下は、株式会社古環境研究所の分析調査報告書を改編して掲載している。

樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

試料は、SA5、SA7、SA9、SA12、1号不明土坑から採取された炭化材5点である。

3 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結果

以下の表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

試料	結果（学名／和名）	
試料1（SA5）	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
試料2（SA5）	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
試料3（SA7）	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
試料4（SA9）	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属
試料5（SA12）	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
試料6（1号不明土坑）	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属

以下に同定根拠となった特徴を記す。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科（図版4）

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20.0m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科（図版4）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、

放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15.0m、径0.6mぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科（図版4）

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30.0m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強韌、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科（図版5）

横断面：小型の道管が単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8.0～10.0m、径20.0～30.0mである。材は強韌、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ハイノキ属 *Symplocos* ハイノキ科（図版5）

横断面：小型で角張った道管が単独あるいは2～4個不規則に複合して散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりハイノキ属に同定される。ハイノキ属には、ハイノキ、クロバイ、サワフタギ、クロキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉性の高木または低木である。

5 所見

分析の結果、サカキ2点、ツブライジ1、コナラ属コナラ節1、コナラ属アカガシ亜属1、ハイノキ属1が同定された。コナラ属アカガシ亜属、ツブライジ、サカキは、温帯下部の暖温带照葉樹林を構成する常緑高木である。コナラ属アカガシ亜属には二次林種も含まれ、ツブライジも二次林を形成することがある。コナラ属コナラ節には、ナラガシワや二次林種のコナラが含まれる。ハイノキ属は、暖地の山地や林内に生育する広葉樹である。いずれも照葉樹林ないし広葉樹の二次林要素であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

【参考文献】

- 佐伯浩・原田浩1985「針葉樹材の細胞」木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
佐伯浩・原田浩1985「広葉樹材の細胞」木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
島地謙・伊東隆夫1988「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣、p.296.
山川昌久1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242.

放射性炭素年代測定

1はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(^{14}C)の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は現在とは異なっていることから、年輪年代学などの成果を利用して較正曲線により ^{14}C 年代から曆年代に較正する必要がある。

2 試料と方法

試料名	地点・届出	種類	前処理・調整	測定法
No.1	S A 5	炭化材(ツブライジ)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.2	S A 5	炭化材(コナラ属コナラ等)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.3	S A 7	炭化材(サカキ)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.4	S A 9	炭化材(ハイノキ属)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.5	S A 12	炭化材(サカキ)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.6	1号不明土坑	炭化材(コナラ属アカガシヤ属)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例によりLibbyの5,568年を使用した(実際の半減期は5730年)。BPIはBefore Physicsの略。

(2) デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(%)に標準化することによって得られる年代である。

(4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

曆年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の曆年代値を意味する。 1σ (68%確率)と 2σ (95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ 、 2σ 値が表記される場合もある。

3 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	曆年代(西暦) (1σ :68%確率, 2σ :95%確率)
No. 1	223349	1790±40	-26. 6	1760±40	交点: cal AD 250 1σ : cal AD 230~340 2σ : cal AD 150~390
No. 2	223350	1810±40	-26. 5	1790±40	交点: cal AD 240 1σ : cal AD 220~260 2σ : cal AD 130~350
No. 3	223351	1910±40	-27. 9	1860±40	交点: cal AD 130 1σ : cal AD 100~220 2σ : cal AD 70~240
No. 4	223352	1820±40	-26. 4	1800±40	交点: cal AD 230 1σ : cal AD 150~250 2σ : cal AD 120~340
No. 5	223353	1870±40	-26. 7	1840±40	交点: cal AD 150 1σ : cal AD 120~230 2σ : cal AD 80~250
No. 6	223354	930±40	-25. 8	920±40	交点: cal AD 1060, 1080, 1150 1σ : cal AD 1030~1180 2σ : cal AD 1020~1210

4 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化材では 1760 ± 40 年BP(1σ の曆年代でAD230~340年)、No.2の炭化材では 1790 ± 40 年BP(同AD220~260年)、No.3の炭化材では 1860 ± 40 年BP(同AD100~220年)、No.4の炭化材では 1800 ± 40 年BP(同AD150~250年)、No.5の炭化材では 1840 ± 40 年BP(同AD120~230年)、No.6の炭化材では 920 ± 40 年BP(同AD1030~1180年)の年代値が得られた。このうち、No.6では放射性炭素年代測定値よりも曆年代の年代幅がかなり大きくなっているが、これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。

【参考文献】

- Stuiver et al. 1998 「INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration」 Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫1999 「放射性炭素法」 考古学のための年代測定学入門, 古今書院, p.1~36.

第3節 炭化種子についての分析

弥生時代・古墳時代の住居跡貼り床面と土坑中の埋土採取後にフローテーション作業を行い、その結果検出した炭化物の種実同定と放射性炭素年代分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し実施した。以下は、パリノ・サーヴェイ株式会社の分析調査報告書を改編して掲載している。

1はじめに

分析調査では、集石遺構(SII)と住居跡(SA)、土坑(SC)より検出された種実遺体の同定を実施し、当時の植物利用や周辺植生に関する資料を作成する。また、種実遺体の放射性炭素年代測定を実施し、年代に関する資料を作成する。

2試料

試料は、土坑2基、住居跡3軒と、集石遺構1基の覆土より検出された種実73試料(No.1-73)である。種実同定は全試料を対象に、放射性炭素年代測定はNo.6、No.37の2試料を対象に実施する。以下に、各試料の詳細を記す。

- ・SC4(土坑)24試料(No.1-24)
- ・SC2(土坑)3試料(No.25-27)
- ・SA5(住居跡)(No.28-33)、SA5床面に広がる焼土(No.40-45)
- ・SA7(住居跡)(No.37-39)
- ・SA9(住居跡)(No.46-50)、SA9内土坑(No.37-36)、炉(No.54,55)、SA9より出土した壺中の埋土(56-72)
- ・SI1(集石遺構)(No.73)

3方法

(1)種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実を抽出する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。

(2)放射性炭素年代測定

土壤や根など日目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1.0mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした“C-AMS専用装置(NIC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HO₂-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期は、LIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差とし

て標準偏差(One Sigma)を用いる。

4 結果

(1) 種実同定

分析の結果、炭化が認められた種実について、木本2、草本の栽培植物3、その他の草本3の合計8分類群が同定された。検出された種実は、コナラ属—シイ属(SA5焼土)、シイ属?(SC4)と、栽培植物のヒエーキビ(SA12)、ムギ類(SC4(No. 6:年代測定対象))、マメ類(SA7(No. 37:年代測定対象))である。その他(エノキグサ、タデ属など)は、元々黒く硬い果皮や種皮をもつため、炭化の有無の厳密な判別は困難である。分類群及び個数を以下の表に示す。

試料No.	遺構	分類群	部位	状態と個数	備考
No. 2	SC4	シイ属?	果実	破片1	
No. 6	SC4	ムギ類	胚乳	破片1	年代測定対象
No. 8	SC4	タデ属?	果実	完形3破片2	
		エノキグサ	種子	完形3	
No. 37	SA7	マメ類	種子	半分2	接合し1個体、年代測定対象
No. 40	SA5	コナラ属—シイ属	子葉	破片1	
No. 41	SA5	エノキグサ	種子	完形1	
No. 46	SA9	タデ属?	果実	完形1破片1	
No. 48	SA9	タデ属	果実	完形2	
No. 52	SA12	ヒエーキビ	胚乳	完形1	
No. 55	SA9	タデ属?	果実	完形1	萼残存

以下に、本分析にて同定された種実の形態的特徴等を記す。

<木本>

コナラ属—シイ属 *Quercus—Castanopsis* ブナ科 (図版6)

子葉の破片が検出された。炭化しており黒色。卵状橢円体の子葉の合わせ目に沿って縦半分未溝に割れた破片で大きさ4.0 mm程度。外面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられ、合わせ日の表面は平滑。

シイ属? *Castanopsis*? ブナ科 (図版6)

果実が検出された。炭化しており黒色、長さ8.0 mm、径7.0 mm程度の広卵体。基部は切形で着点は円状不定形。果皮は薄く、表面には細く浅い溝が縦列する。果皮が剥がれた部分に確認される子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。

<草本:栽培植物>

ヒエーキビ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno—*Panicum miliaceum* L. イネ科ヒエ属—キビ属 (図版6)

胚乳が検出された。炭化しており黒色。長さ1.7 mm、幅1.4 mm、厚さ1.0 mm程度のやや扁平な広卵体。背面は丸みがあり、基部正中線上に幅広い凹の凹みがある。腹面は平ら。表面はやや平滑。

ヒエ、キビなどの同定は、走査型電子顕微鏡下による内外顎の観察で判別可能とされるが(松谷1980・2000など)、本試料に同定根拠となる顎の付着は認められないことから、ヒエーキビにとどめた。

ムギ類 *Hordeum vulgare* L. - *Triticum aestivum* L. イネ科オオムギ属-コムギ属(図版6)

胚乳の破片が検出された。炭化しており黒色。頂部を欠損し、紡錘状長楕円体のオオムギと楕円体のコムギの判別が困難であったため、ムギ類にとどめた。破片の長さは4.0 mm、径3.0 mm程度。腹面は正中線上にやや太く深い縱溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面は粗面。

マメ類 *Leguminosae* マメ科(図版6)

種子の破片が検出された。炭化しており黒色。子葉の合わせ目上に沿って半分に割れており、接合した個体となる。長さ6.2 mm、径4.6 mm程度の長楕円体で腹面方向にやや湾曲する。腹面の子葉の合わせ目上にある長楕円形で縁が隆起する細長い脣を欠損する。子葉内面の幼痕や初生葉が確認され、北大基準(吉崎1992)の「アズキグループ(幼根が脣の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する。種皮表面はやや平滑。

遺跡出土の炭化マメ類は、子葉内面の幼痕や初生葉の形態から、アズキ、リョクツウなどを判別する試みが行われている(吉崎1992)。一方、野生種との雑種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しいとも考えられている(南本1991など)。近年では、DNA分析による判別が開発されつつある(矢野2002)。

今回確認された種子は、「アズキグループ」に該当するが、種類の特定は議論の段階にあるため、「マメ類」ととどめた。今後の資料の蓄積を待ち、再検討が望まれる。

<その他の草本>

タデ属 *Polygonum* タデ科(図版6)

果実が検出された。黒色、長さ1.8 mm、径1.5 mm程度の三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は粗面。

タデ属? *Polygonum?* タデ科(図版6)

果実が検出された。灰黒色、長さ2.0 mm、幅1.6 mm程度のやや偏平な広卵体。頂部は尖り、基部は切形。半分に割れる個体が多くみられる。果皮表面は粗面。エノキグサの種子に似るが、半剖し、果皮断面は厚く柵状であることや、基部に萼が残存する個体(Ko. 55)がみられることから区別される。

エノキグサ *Acalypha australis* L. トウダイグサ科エノキグサ属(図版6)

種子が検出された。黒褐色、長さ1.5~1.8 mm、径1.3~1.5 mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、断面は柵状組織が内側に湾曲する。表面には細かい粒状の凹みが密布しがらつく。

(2) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を、以下に示す。

試料名	補正年代 (BP)	曆年較正年代(cal)				相対比
No. 6 SC4	257±34	σ	calAD 1,528 ~ 1,550	calBP 422 ~ 400		0.181
			calAD 1,634 ~ 1,667	calBP 316 ~ 283		0.641
			calAD 1,783 ~ 1,796	calBP 167 ~ 154		0.178
	2σ	calAD 1,515 ~ 1,598	calBP 435 ~ 352		0.297	
		calAD 1,617 ~ 1,679	calBP 333 ~ 271		0.516	
		calAD 1,764 ~ 1,800	calBP 186 ~ 150		0.161	
		calAD 1,939 ~ 1,951	calBP 11 ~ -1		0.026	
No. 37 SA7	761±35	σ	calAD 1,227 ~ 1,233	calBP 723 ~ 717		0.094
			calAD 1,239 ~ 1,248	calBP 711 ~ 702		0.150
			calAD 1,251 ~ 1,279	calBP 699 ~ 671		0.756
	2σ	calAD 1,215 ~ 1,287	calBP 735 ~ 663		1.000	

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。曆年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に曆年較正プログラムや曆年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

曆年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差をσとして計算させた結果、No. 6(ムギ類の炭化胚乳)はcalAD1,528~1,796、No. 37(マメ類の炭化種子)はcalAD1,227~1,279を示す。

5 考察

種実同定の結果、コナラ属—シイ属、シイ属?、ヒエーキビ、ムギ類、マメ類、タデ属、タデ属?、エノキグサが確認された。

ヒエーキビ、ムギ類、マメ類は、古墳時代では確実な栽培植物とされ(南木1991)、本遺跡周辺域における植物質食糧としての利用が推定される。また、いずれも炭化していることから、火を受けたことが推定される。

ただし、その利用時期に関して、土坑(SC4)から検出されたムギ類(No. 6)の測定年代は260±40BP、曆年較正結果はcalAD1,528~1,796、住居跡(SA7)から検出されたマメ類(No. 37)の測定年代は760±40BP、曆年較正結果はcalAD1,227~1,279と、発掘調査所見から推定された遺構の年代観よりも新しい年代を示し、両試料間の年代差も大きい。すなわちムギ類、マメ類は、後代のものが遺構内に混入した可能性があるため、現時点では各遺構から確認された栽培植物の種実を、当該期における利用に直結させるのは慎重にならざるを得ない。今後は、試料採取時の土壤の観察所見や採取時及び採取後の履歴等の検証を行い、これらの利用時期を慎重に評価することが求められる。

一方、栽培植物を除いた分類群では、木本のコナラ属—シイ属、シイ属?は、本地域に分布する照葉樹林の主要構成種で、堅果が食用可能な有用植物である。これらは、周辺域の森林に生育していたものに由来

すると思われ、遺構内に持ち込まれ利用された可能性もある。また、炭化していることから、火を受けたことが推定される。ただし、時期に関しては、上述の栽培植物と同様に慎重に評価する必要がある。
草本のタデ属、タデ属?、エノキグサは、開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であることから、調査区周辺域の草地等に生育していたものに由来すると思われる。

【参考文献】

- 石川茂雄1994 「原色日本植物種子写真図鑑」 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 松谷曉子1980 「十勝太岩月遺跡出土炭化物の識別について」 浦幌町郷土博物館報告, 第16号, 203-211.
- 松谷曉子2000 「植物遺残の識別と保存について」 Ouroboros, 東京大学総合研究博物館ニュース, Volume5, Number1, 8-10.
- 南木陸彦1991 「栽培植物、古墳時代の研究 4生産と流通Ⅰ」 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編, 雄山閣, 16
5-174.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志2000 「日本植物種子図鑑」 東北大学出版会, 642p.
- 矢野 桂2002 「遺跡から出土した小豆のDNA分析」 DNA考古学Newsletter3.
- 吉崎昌一1992 「古代雜穀の検出」 考古学ジャーナル, 355, ニューサイエンス社, 2-14.

第V章 まとめ

今回の調査では、旧石器時代～古墳時代にかけて多くの遺構・遺物を検出した。各遺構・遺物についてはすでに述べたが、その中でも特徴的な事柄について検討をし、まとめとしたい。

第1節 旧石器時代の様相

旧石器時代では、始良Tn 火山灰層（第IX層）上位のVII層中部でナイフ形石器、剥片尖頭器を中心とする第Ⅰ期が、VI層上部で細石刃石器群を中心とする第Ⅱ期を確認した。

1 第Ⅰ期の様相

第Ⅰ期は、ナイフ形石器や剥片尖頭器を中心とする一群であるが、量的に少なく散漫な状態であった。遺物は合計 72 点を確認し、器種別の内訳は、ナイフ形石器 2 点、剥片尖頭器 2 点、スクレイパー 1 点、その他は剥片類である。石材別に見ると、流紋岩 61 点、ホルンフェルス 11 点で、第Ⅰ期の特徴的な石器は全て木遺跡の眼下に位置する五ヶ瀬川で採集可能な流紋岩（松田 2005）である。

ナイフ形石器（1）は、右側縁の全体（長側縁）、左側縁下部（短側縁）および下端にプランディング加工が施されており、加工のほとんどが腹面側からだが、基部付近では背面側からの加工も施され、いわゆる狸谷型ナイフ形石器の範疇に入ると考えられる。また、素材の利用方法や加工状況から、ナイフ形石器（2）も、いわゆる狸谷型ナイフ形石器に類似する。剥片尖頭器は、両側縁にプランディング加工を施し、プランディングによる快りのないもの（3）と、あるもの（4）がある。接合作業を試みた結果、接合資料は 4 例確認され、そのうち石器製作作業の復元の可能な接合資料（第 8 図）は、縦長剥片製作を目的にしたものであった。

第Ⅰ期の編年的位置づけとしては、宮崎県旧石器文化談話会の設定した編年の第 5 段階に相当すると考えられる。

2 第Ⅱ期の様相

第Ⅱ期は、細石刃石器群を中心とする本遺跡Ⅲ石器時代の主体であり、数多くの接合資料が得られた。また、石器石材においては、流紋岩だけでなく、黒曜石製石器も多数出土している。

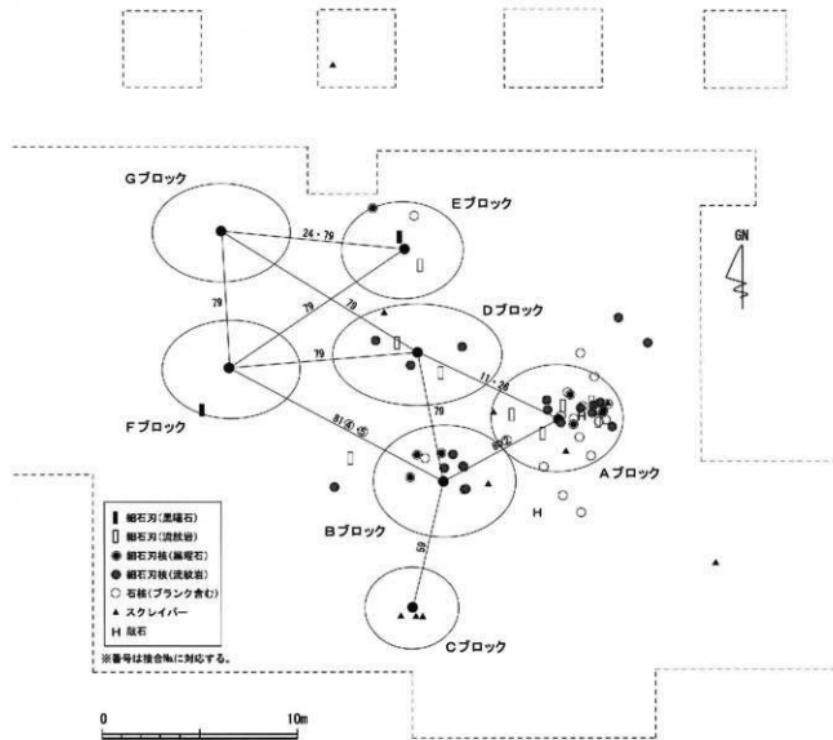
以下、石器石材消費の特徴から、遺跡における集団の行動と場の復元、また、細石刃製作技術の特徴から、第Ⅱ期の編年位置づけについて検討を行う。なお、以下の接合資料についての説明には、便宜上接合 No. を用いて記述を行う（第 24 表を参照）。

（1）遺跡における行動と場の復元

石器群ブロックの同時性について

本遺跡においては、7 か所の石器群ブロックが視覚的に認識できる。第Ⅲ章第 1 節の 2 で述べた通り、K4 グリッドと J4 ～ 5 グリッドの 2 か所の密集分布を A・B ブロック、出土石器量はそれより少ないものの、調査区南東側から順に C・D・E・F ブロックとした（第 12 図）。各ブロックに明確な線引きができるわけではないが、以下、説明の便宜上それぞれ区分し、それらの同時性について検討を行う。

接合資料の接合関係を見ると、全てのブロックに石器が分布する例は存在しない。しかし、複数のブロックにまたがって分布しているものがある（第 128 図）。接合 No. 79 は、A と C ブロックを除く全てに、また接合 No. 11 と No. 26 は A と D、接合 No. 24 は E と G、接合 No. 59 は B と C、接合 No. 80 は A と B、接合 No. 81 は B と F と、複数のブロックにまたがって分布している。全接合資料 76 例のうち、複数のブロックにまたがる接合資料が 7 例というのは、同時性を示す点で多い数とは言い難い。しかし、それら接合資料の各石器が、A ～ D のブロック全てに分布しているということから、VI 層出土の石器群については、同時性を有しているものと考える。



第128図 細石刃石器群におけるブロック相関概念図 (S=1/250)

石器製作作業の復元

第二期における石器総数は793点で、石器接合率は49.6%にのぼり、半数の石器が何らかの接合資料に属していることになる。石器石材については大きく流紋岩製と黒曜石製とに分けられ、前者が720点、後者が40点と前者のほうが主体となる。その他駆石には、チャートや漂岩も利用されている。以下、主体となる流紋岩を中心とした非黒曜石と黒曜石との2つに石材を分け、石器製作作業の復元を検討し、石材の搬入から搬出にいたる過程について比較を行う。なお、基本的に接合資料を中心に検討を行う。

流紋岩を中心とする非黒曜石 (第129図上)

接合No.80は扁平な梢円縫を2分割し、それぞれ別々に作業が行われる。分割後、その分割面あるいはその対極の面を打面とした剥片剥離が行われる。剥片の形状は幅広の不定形で、二次加工は施されていない。これらの剥片剥離作業は、分割面を打面とする細石刃核の側面調整として行われているものである。しかし、細石刃核あるいはブランクは欠落しており、同一母岩の細石刃核も存在しないため、遺跡外に搬出された可能性が高い。

接合No.81は、接合No.80よりも推定される原縫は大きいが、搬入形態としての大きさはほぼ同じ大きさである。分割縫の平坦面から、打面再生、打面転移を介しながら剥片剥離作業が行われる。剥離された剥片は、

平面形状や厚みなどが多く、特に傾向は見出せない。接合石器中、明確な二次加工が認められるのは、打面再生剥片を利用したもののみである。欠落部分はあるが、何を目的として剥片剥離が行われたかは不明である。

接合 No.83 は、上述した 2 つの接合資料とは異なり、縦長剥片剥離が行われている。円礫を輪切りにするように打面を形成し、打面転移を介しながら数枚の縦長剥片を剥離している。この縦長剥片の一部は細石刃核として利用されている。接合資料には欠落部分が大きく存在しており、それらは搬出された可能性が高い。

その他接合 No.24 は、分割礫を利用した分割面からの側面調整を示すものであり、おそらく細石刃核ブランク製作に関連するものと考えられる。接合 No.79 は、縦長剥片の他に不定形剥片が剥離され、さらに石核も存在するが、明確に細石刃核と呼べるものではない。

以上は、原礫あるいは分割礫の搬入から作業が開始され、細石刃核前段階までの作業工程を示すものが主体である。この他に細石刃製作ではなく不定形剥片を剥離するものも存在している。ただし、後者の目的剥片が何かという点については不明である。

一方、素材剥片あるいは細石刃核から作業が開始されるものがある。それらは細石刃核に調整剥片が接合するものがほとんどであり、次の 3 つに分けることが可能である。

- ① 細石刃核と側面あるいは下面調整剥片が接合するもの（接合 No.16・18・34・43・71）
- ② 細石刃核同士が接合するもの（接合 No.7・33）
- ③ 細石刃核が分割され、それが接合するもの（接合 No.78）

最も多い①の中で、接合 No.34 は、細石刃核に調整剥片 10 点が接合し、細石刃剥離によって調整剥片と細石刃核との間に生じた欠落部分は約 3.0 cm と、縮小部分が分かる。接合 No.16 は、打面形成から細石刃製作までの工程が全て観察できる資料で、初期段階の石核の打面と最終的に整形された細石刃核の打面とは、その大きさが異なっており、長軸 4.5 cm が 3.5 cm まで、短軸 3.5 cm が 1.5 cm まで縮小している。

次に多い②の中で、接合 No.33 は、細石刃核 2 点が打面同士で接合しており、打面形成後には別々に作業が行われている。これに対して、接合 No.7 では、細石刃核の打面再生後に、全く別の打面から細石刃製作が行われている。この点で接合 No.33 と接合 No.7 とはやや異なる。

以上のような石器製作作業の復元から、流紋岩の石材の搬入には、原礫あるいは分割礫の搬入から作業が開始されるものと、細石刃核あるいはその素材剥片から作業が開始されるものとが確認でき、搬出にいたる過程については、細石刃核が欠落するものと、細石刃核が遺跡内に残されるものとが確認できた。このような違いを、接合資料類型として以下のよう 2 つに分類する。

接合類型 a 「原礫あるいは分割礫から作業を開始し、細石刃核が欠落するもの」
接合類型 b 「細石刃核あるいはその素材を搬入し、細石刃製作が行われ細石刃核が遺跡内に残されるもの」
この二者は、後述する石器分布においても対照的な位置を示している。

黒曜石

蛍光 X 線分析の結果（第 IV 章第 1 節）、黒曜石は大きく桑ノ木津留産と腰岳系とに分けられる。これらの搬入形態は流紋岩のそれとは明確に異なり、また产地ごとにも相違が認められる。

桑ノ木津留産黒曜石（第 129 図左下）

接合資料から想定される大きさは最大でも長軸 5.0 cm 前後であり、搬入形態は、そうした小角礫あるいは簡易な石核調整の施された石核であったと想定される。細石刃核あるいは石核と打面形成（再生）剥片との接合資料（接合 No.63・64・65）が存在していることから、石器製作が遺跡内で行われたことは確実である。しかしながら、それらの接合資料は石器数が全て各 2 点で構成され、細石刃は 1 点しか出土していないことから、石器製作の規模は相対的に小さいものであったと考えられる。

腰岳系黒曜石（第129図右下）

蝶形態で搬入された痕跡は認められない。石器総数は11点で、その内訳は、細石刃1点、細石刃核1点、スパール1点、剥片類8点である。剥片類の中には、細石刃核の調整剝片と呼べるものもあるが、細石刃核とは接合しない。また、数点は遺跡内で剥離されたものである可能性が高いが、遺跡外で製作されたものが製品として搬入されたと推測できるものもある。それらの形態は、概して整っており、微小剥離痕も認められる。スパールも同様である。スパールも遺跡内での製作の痕跡が認められず、スパールの打点部には明瞭な擦痕が認められる。なお、蛍光X線分析によって不明黒曜石と判定されたものも、肉眼観察では腰岳系に近い。また、石器の縦線上には潰れが認められ、消耗度という点においても腰岳系黒曜石と類似している。3点のみの存在であることから、きわめて少量の搬入であったと考えられる。

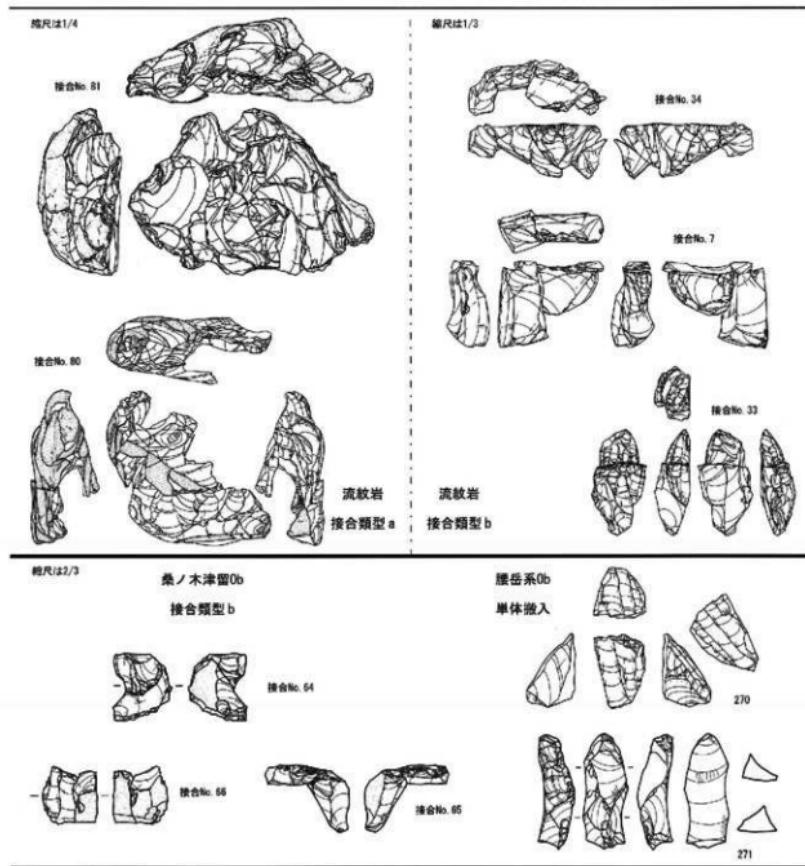
小結

以上のように、石器製作作業において、流紋岩を中心とする非黒曜石と黒曜石では、搬入から搬出にいたる過程が異なっている。非黒曜石の接合資料から推測される石器の搬入形態には、石器製作作業における接合資料類型として、大きく2つに分類できる。1つは原礫あるいは分割礫を搬入し細石刃核プランクを製作するが、細石刃核が欠落する一群（接合類型a）、もう1つは細石刃核あるいは細石刃核の素材剥片を搬入し、遺跡内に細石刃核が残される一群（接合類型b）である。厳密な個別資料分類は行っていないが、接合していない剥片類に自然面の認められるものは、ほとんど存在しない。そのため、仮に厳密な個別資料分類を行ったとしても、後者が前者に組み込まれる可能性は低い。

原礫あるいは分割礫で搬入されるものには、原礫の大きさの窺い知れる資料がある。接合No.24は、長軸20.0 cm、短軸10.0 cm、厚さ10.0 cm程の楕円礫、接合No.80は、長軸15.0 cm、短軸12.0 cm、厚さ5.0 cm程の（亜）円礫、接合No.81は、長軸28.0 cm、短軸15.0 cm、厚さ15.0 cm程（推定）の円礫、接合No.83は、長軸12.0 cm以上、短軸10.0～12.0 cm、最大厚13.0～15.0 cm程の円礫となる。接合No.24と接合No.81の搬入形態はほぼ半割された分割礫なので、それぞれの搬入時点での大きさは、長軸20.0～30.0 cm、短軸10.0～20.0 cm、厚さ10.0 cm前後の礫ということになる。このように非黒曜石では、20.0 cm程の円礫を搬入し、旺盛な石器製作が認められるのに対し、黒曜石では、小角礫あるいは製品を搬入し、石器製作の痕跡はあまり認められない。

番号	接合No.	石材	数	搬入形態	作業内容	搬出
II-①	7	流紋岩	4	細石刃核	細石刃核→細石刃製作（2段階）	細石刃
II-②	16	流紋岩	8	石核	石核整形→細石刃製作（失敗）	
II-③	17	流紋岩	4	石核？	連続的な剥片剥離→スクレイパー製作	石核
II-④	18	流紋岩	4	細石刃核	石核整形→細石刃製作	細石刃
II-⑤	24	流紋岩	9	分割礫	石核整形	石核
II-⑥	31	流紋岩	10	石核	石核整形→細石刃製作？	剥片・細石刃核
II-⑦	33	流紋岩	3	細石刃核	石核整形→細石刃製作	細石刃
II-⑧	34	流紋岩	11	細石刃核	石核整形→細石刃製作	細石刃
II-⑨	37	流紋岩	3	石核	石核修正（打面再生）→剥片剥離	剥片
II-⑩	43	流紋岩	3	細石刃核	細石刃核→細石刃製作	細石刃
II-⑪	71	流紋岩	2	細石刃核	細石刃核→細石刃製作	細石刃
II-⑫	78	流紋岩	3	細石刃核	細石刃核→細石刃剥離→細石刃核分割	剥片？
II-⑬	79	流紋岩	23	分割礫	縱長剥片剥離→石核整形→細石刃製作（失敗か）	数点の縱長剥片
II-⑭	80	流紋岩	39	原礫	原石分割→石核整形→細石刃製作	剥片・細石刃核
II-⑮	81	流紋岩	62	分割礫	原石分割→一般剥片剥離か	数点の剥片
II-⑯	83	流紋岩	26	分割礫	縱長剥片剥離→石核整形→細石刃製作（失敗か）	数点の縱長剥片
II-⑰	64	黒曜石	2	細石刃核	細石刃核→細石刃製作	細石刃
II-⑱	66	黒曜石	2	細石刃核	細石刃核→細石刃製作	細石刃
II-⑲	65	黒曜石	2	原礫	原石分割→細石刃製作	細石刃

第24表 第II期接合資料作業内容一覧



第129図 石材別消費状況の比較

石器製作作業と場との関係

第12図の主要遺物の分布と接合関係の通り、調査区南側と北側では、石器分布に量的な多寡が認められる。南側に位置するAブロックとBブロックは、それぞれ径5.0 m前後の円形を呈し、ブロックには多くの剥片類とともに細石刃核を含む石核が存在している。総数25点の細石刃核のうち、12点がAブロックに、8点がBブロックに分布する。また、Aブロックにチャート製の敲石が、さらにブロック外ではあるもののA・Bブロックに近接して麻岩製の敲石が出土している。これらは、A・Bブロックにおける石器製作の旺盛さを示していると考えられる。

一方、北側に位置するC～Gのブロックは、石器数も少なく、Dブロックに3点分布しているものの、その他のブロックでは、複数の細石刃核は分布していない。接合資料も少なく、この北側のブロックのみに分布する接合資料は6例しかない。これらは、北側と南側とで作業内容に何らかの差異があった可能性

を示していると考えられる。

以降では、A・Bブロックを南側ブロック群、C～Gブロックを北側ブロック群と呼称し、この南・北ブロック群の作業内容の差異の存在を念頭に、非黒曜石と黒曜石製石器とに分けた石器分布から、石器製作作業と場との関係について検討を行う。

流紋岩を中心とする非黒曜石製石器の分布

南側ブロック群における接合資料を見ると、Aブロックで完結する接合資料は40例、Bブロックで完結する接合資料は7例である。接合資料76例のうち半数以上がこの2つのブロックで完結しており、A・Bブロック付近で石器製作作業が旺盛に行われたことは明らかである。さらに、この両ブロックとともに多くの細石刃核が分布しており、また、細石刃製作に觸れる接合資料も存在している。

まず、前述した石器製作作業における接合資料類型別に分布を見た場合、接合類型bに属する資料がA・Bブロックのみに存在し、また、その分布は1つのブロックで完結する点が特徴的である。例えば、Aブロックでは、接合No.16・18・33・34・43が出土しており、Bブロックでは、接合No.7・71が出土している。このように、細石刃製作に関わる接合資料は全て南側ブロック群に確実に分布している。対照的に、北側ブロック群では、細石刃製作に関わる接合資料は存在しない。

これに対して接合類型aに属する資料は、数ブロックにまたがって分布する点が特徴的である。例えば、接合No.79は、AとCブロックを除く全てのブロックに、接合No.24はEとG、No.59はBとC、No.80はAとB、接合No.81はBとFにそれぞれ分布している。このように、南側ブロック群のみに集中するわけではなく、他のブロックも含まれることが、先の接合類型bに見られた特徴との大きな違いである。

接合類型bの中でも、分布の中心となるブロックは存在しているものの、作業工程によって分布に差異が認められるものがある。接合No.79は、作業が開始されたと考えられるDブロックを中心に分布しているが、剥片数点が別ブロックに分布しており、作業終了時点と考えられる石核が残されたブロックは、BブロックとEブロックとに分布している。接合No.81では、作業工程の初期段階資料はBブロックで収まるのに対し、打面転移が行われた以降の資料は、Bブロックを中心に分布しつつも、数点の剥片がブロック外に分布している。接合No.83では、2つの分割縫の双方で分布に違いがあり、1つがAブロックに集中しているのに対して、もう一方はBブロックにも広がる。

このように、接合資料類型別では分布の仕方が接合類型別により異なること、さらに、接合類型aでは作業工程によって分布に差異があることが特徴的である。この差異が何に起因するかは分からぬが、作業工程が多くなるに従い、分布するブロック数が増える傾向にあり、作業によって場所を変えていた可能性、あるいは異なる作業場所で作業が並行して進行していた可能性が考えられる。

次に、石器を器種別に見た場合、スクレイパーはA・Bブロックに4点分布しているが、この他にもC・Dブロックに1点ずつ、さらにブロック群から大きく離れて2点分布している。また、細石刃はAブロックに集中して分布する傾向があるものの、2点がDブロックに、1点がEブロックに分布している。このうち、Eブロックに分布している細石刃(16)には両側縫に、Dブロックの1点(17)には片側縫に微小剥離痕が認められ、細石刃に関しては消耗度の高い細石刃が北側ブロック群に分布する傾向にある。

このように、器種別の分布では、特に細石刃の分布に差異があり、消耗度の高い細石刃が、製作ブロックと考えられる南側ブロック群とは離れた北側ブロック群に分布することが特徴的である。

黒曜石製石器の分布（第130図）

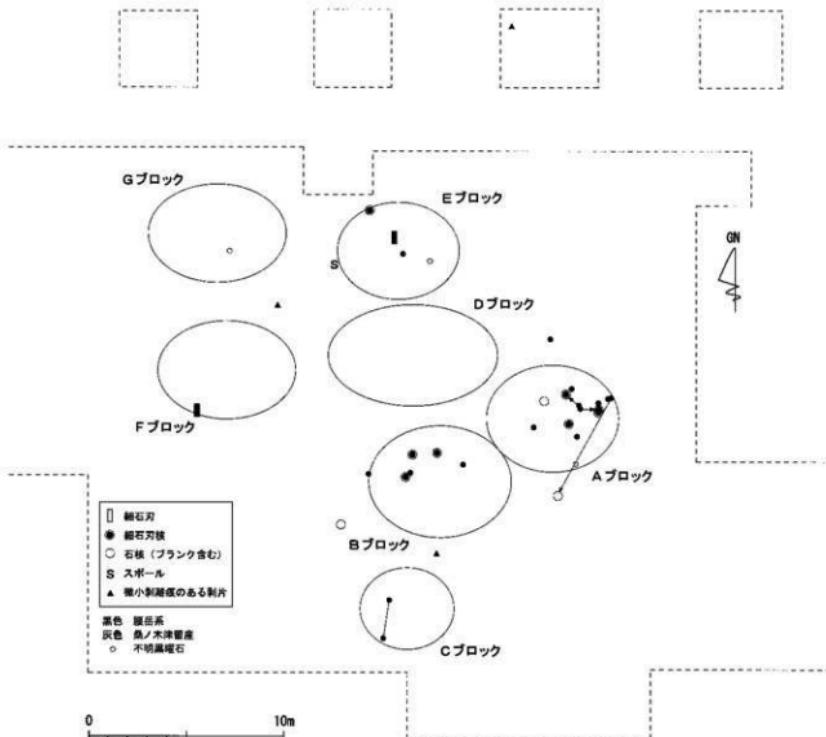
桑ノ木津留産黒曜石を見ると、Aブロックに集中する傾向にある。ただし、遺跡内製作を示すと考えられる細石刃核はBブロックにも分布しており、こうした南側ブロック群を中心とする分布の特徴は、非黒曜石のそれと類似している。しかし、細石刃は南側ブロックではない、Eブロックに分布しており、細石刃核の分布とは全く異なる。この細石刃には微小剥離痕が認められ、おそらく使用されたものと考えられる。これが遺跡内で製作されたものかどうかは定かでないが、製作ブロックと考えられる南側ブロック群

とは離れて分布している点は重要である。

腰岳系黒曜石を見ると、桑ノ木津留産黒曜石とは違い、どのブロックに集中するわけでもなく散漫な分布を示している。しかし、腰岳系の中でも形態的に整った石器、すなわちスパール、細石刃、細石刃核、微小剥離痕のある剥片に関しては南側ブロック群からは出土しておらず、石器分布の散漫なEブロックなど、概して北側ブロック群に認められる。

不明黒曜石は、3点ともに別々のブロックで出土している。3点中稜上の潰れの確認できる2点(281・282)は、調査区北側のE・Gブロックに分布している。

以上のような黒曜石产地別分布や石器の消耗度(使用の有無)から、石器製作作業と場との特徴として、製作ブロックとしての南側ブロック群と、そうではない石器使用に特化した北側ブロック群とに区別できることが考えられる。



第130図 黒曜石产地別分布 (S=1/250)

小結

石器製作作業と場との関係を、全体的な分布、非黒曜石の分布、黒曜石の分布から3点にまとめると次の通りである。

1点目は、全体的な分布の傾向として、石器の多くが南側ブロック群に分布し、北側ブロック群では石器数や接合資料も少なく、石器製作の痕跡に乏しいことである。

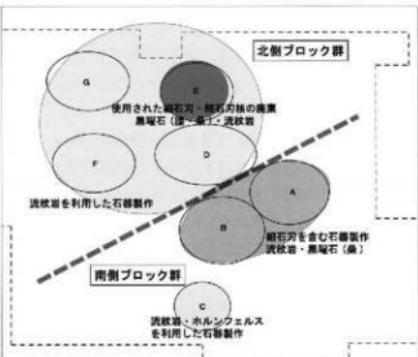
2点目は、非黒曜石の細石刃の分布に特徴があり、消耗度の高い細石刃が、北側ブロック群に分布することである。

3点目は、黒曜石の分布が、南側ブロック群では製作ブロックとして、北側ブロック群では石器使用に特化したブロックとに区別できることである。

つまり、南側ブロック群では細石刃製作を中心とする石器製作作業が行われ、北側ブロック群では、石器製作作業は行われるもの、基本的に細石刃製作作業は行われず、消耗度の激しい石器が残されていると言える。

また、後者で石器使用行動が行われていたとは考えにくく、スクレイバーなどの加工工具と考えられる石器は、むしろ南側ブロックに多く分布している。さらに、使用された細石刃と腰岳系黒曜石製石器が北側ブロック群に偏在し、特にEブロックには、腰岳系黒曜石型の細石刃核、スボール（擦痕あり）、使用痕のある桑ノ木津留産黒曜石と流紋岩製の細石刃が存在している。これらは、使い古された石器がEブロックを中心とする北側ブロック群に廃棄されたことを物語っているのではないだろうか。

以上のことから、石器製作作業と場との関係においては、南・北の両方のブロック群とともに石器製作に関係があるものの、南側ブロック群は細石刃製作に特化した場、北側ブロック群は使い古された石器が残された場であると考えられる（第131図）。



第131図 南・北ブロック群の機能的差異

(2) 第Ⅱ期の編年的位置づけ

細石刃製作技術の特徴から、第Ⅱ期の編年的位置づけについて検討を行う。

まず、非黒曜石における細石刃製作技術の特徴である。素材は基本的に剥片素材だが、その供給方法は、分厚い剥片あるいは分割様をそのまま利用するものと縦長剥片を利用するものがある。しかし、縦長剥片が規格的に剥離された石核は存在せず、どちらかといえば前者の素材供給方法が多く認められる。したがって、特定の方法が採用されているわけではないと考えられる。

素材利用の方法としては、素材剥片の主要剥離面を侧面に設定する場合が多い。そして、その前後に形成される单剥離面を打面に設定している。

石核調整は、基本的に細石刃剥離時と同一の打面からの側面調整である。側面調整の他に下縁調整や背縁調整が施されるものもある。正面形はV字状あるいは長方形である。

作業面は、素材剥片の一端を作業面としている。基本的に打面転移は行われないが、短軸両端で細石刃剥離が行われるものや異なる平坦面を打面とした細石刃剥離が見られるものもある。

本遺跡の出土資料において、特に重要なのは細石刃剥離開始後に石核の縮小過程を示す資料の存在である。例えば接合No.33は、2つの細石刃核が打面同士で接合しており、縮小過程の把握が可能である。すな

わち、細石刃核（残核）と、その背部に接合する剥片との打面幅が異なっており、初期段階の細石刃核の打面幅と、残核の打面幅では 5.0 ~ 6.0 mm の縮小が認められる。また接合 No.34 では、側面調整剥片と細石刃核の間に生じた欠落部分によって、約 3.0 cm 分の細石刃剥離が行われていたことが分かる。

このように縮小過程の想定できるもの他、技術的に見た場合に重要なのは接合 No.7 である。この接合資料では、細石刃核の打面再生以前と打面再生後に採用された技術に相違が認められる。再生以前には、平坦打面からの細石刃剥離が行われているのに対して、再生後には横打打面調整によって整形された打面が採用され、石核調整も入念である。この技術は、従来の分類に当てはめれば前者が船野型、後者が福井型となり、両者が 1 つの細石刃核において共存していることになる。

次に、黒曜石における細石刃製作技術の特徴である。非黒曜石における特徴と比べ、実に単純である。小角縫を素材として、石核調整はほとんど施されず細石刃剥離にいたるもので、打面再生は行われているが、打面調整はほとんど施されていない。

以上のような細石刃製作技術の復元される細石刃核は、従来の分類では全て船野型（橋1975）、あるいは上下山型（橋1991）の特徴を備えるものである。ただし、下縁調整や背縁調整が施されるものもあり、これは、船野型というよりも福井型の特徴である。上述した接合 No.7 では、1 つの接合資料中に船野型と福井型とが文字通り「共存」している。この接合資料をあえておしなべて理解しようとするならば、その普遍的な属性は、平坦打面と小山面の意識である。その際の石核調整は必要に応じてなされたものであり、おそらく石核調整の一部は、固定具との関連があるものと考えられる。細石刃核打面上には、細石刃剥離とは直接関係しない側面からの調整が認められるものがあり、これは、従来から指摘されている細石刃剥離に伴う固定具装着の可能性がある（宮田1998）。

最後に、編年的位置づけであるが、技術的な面から第Ⅱ期は、芝庶次郎氏の設定した F-S 群（芝2007b）としての評価が可能であり、細石刃期後半に相当すると考えられる。当該期の石器群には土器が共存している場合があるが、本遺跡では出土していない。上器編年と石器群編年とのすりあわせは非常に難しい。しかしながら木遺跡の資料は、これらを考える上での重要な材料を提供するものだと言えよう。

第 2 節 繩文時代早期の様相

縩文時代早期では遺構として、破碎繩が大部分を占めている集石遺構 I 基（第 68 図）を検出した。遺物は、チャート製の石鏃が 8 点出土し（第 75 図）、二等辺三角形の形状で、平基のもの、正三角形に近い形状で、基部に浅い抉りのあるもの、二等辺三角形の形状で抉りのあるものがある。また、木遺跡 1 点のみ山上の石匙は（第 75 図）、つまみから身が横に広がる横型で、石材はサヌカイトである。遺跡周辺には採取不可能な石材のため、持ち込まれたものと考えられる。さらに、櫻乱部分ではあったが貝殻条痕土器が出土した。深鉢の口縁部は（第 75 図）、直立しやや丸みをおびている。口縁部に貝殻腹縁刺突文を、口縁下に貝殻条痕文を、その上から列点状の刺突文を施している。

以上のような遺構・遺物を確認したが、その分布は極めて疎であり、本遺跡においてこの時期は、活動が希薄であったものと考えられる。

第3節 弥生時代・古墳時代の様相

弥生時代・古墳時代の堅穴住居跡は全部で12軒検出し、住居跡間の切り合いはなかった。これらからの遺物の出土層位は、大きくは床面などの最終機能面と堆積土とに分かれる。本報告書に掲載している遺物は、遺構堆積土の下位～床面のものであるが、堆積土中においても、床面で取り上げたものと接合した遺物を取り扱っている。

以下では、まず出土遺物の遺構別器種構成から、出土量の多さや完形の度合いを考慮に入れ、それらの特徴を比較し、出土土器の編年的位置づけを行う。さらに、検出した遺構（堅穴住居跡・土坑）の特徴から、黒仁田遺跡の集落構成の復元を行う。

1 出土遺物の遺構別器種構成

(1) 出土土器

報告書記載の上器総数は274点で、その器種構成の割合は、壺が49%、壺が20%、高环が7%、鉢が16%、その他が8%で、壺が最も個体数の割合が多く、本遺跡の主要器種となる。しかし、これらは通時的に見た場合である。そこで以下、堅穴住居跡別に器種構成の特徴を比較し、各時期の比較を行う。なお、出土した遺物は弥生時代終末から古墳時代の土器群である。その編年的位置づけについては、松永編年（松永2001）と今塙屋・松永編年（今塙屋・松永2002）を用いる。

堅穴住居跡別の器種構成

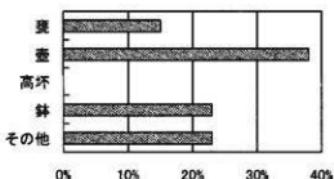
5号堅穴住居跡（SA5）

本遺構の土器総数は13点で、全て弥生土器である。その器種構成の割合（第74・75図）は、壺が38%と最も多く、鉢（23%）、壺（15%）となっている。壺は、横描波状文や線刻による直線的な文様のある二重口縁壺の口縁部がある。鉢は浅鉢で、口縁部は短くしっかりと外傾しており、底部は丸底、貼付円盤状の平底、平底がある。以上の特徴から松永編年の4期（弥生時代終末）と考えられる。

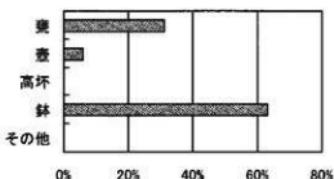
7号堅穴住居跡（SA7）

本遺構の土器総数は16点で、器種構成の割合（第77図）は、全て弥生土器の鉢が63%と最も多く、次いで十師器の壺（31%）、土師器の壺（6%）となっている。鉢の中でも深鉢の底部は、上げ底で端部がわずかに張り出るもの、張り出さないもの、平底で端部が張り出さないものがある。浅鉢の底部は、貼付円盤状の平底、尖底がある。壺の底部は、内面が平坦ではない平底がある。口縁部は、ゆるやかに外反している。壺は長形胴で、わずかに平坦面を残す尖底に近い平底である。以上の特徴から松永編年の4・5期（弥生時代終末～古墳時代初頭）と考えられる。

第132図 SA5の器種構成



第133図 SA7の器種構成



8号竪穴住居跡 (SA8)

本遺構の土器総数は7点で、器種構成の割合（第79図）は甕（弥生土器・土師器の混在）が71%と最も多く、次いで土師器の壺（14%）・甕（14%）となっている。流入したと考えられる弥生土器の甕の口縁部には、端部に貼付突帯がある。個体数が少なく時期の異なるものが混じっているが、その中において完形の度合いが高いものに、甕の底部には平底が、鉢は深鉢で、底部は上げ底の端部がわずかに張り出しているものがあり、7号化粧跡で出土した底部の特徴と似ている為、松永編年の4・5期（弥生時代終末～古墳時代初頭）と考えられる。

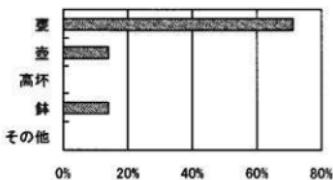
2号竪穴住居跡 (SA2)

本遺構の土器総数は21点で、器種構成の割合（第81～84図）は甕（弥生土器・土師器の混在）が52%と最も多く、次いで鉢（弥生土器・土師器の混在）が33%、高坏（弥生土器・土師器の混在）が10%、弥生上器の壺（10%）となっている。弥生土器の甕の口縁部はゆるやかに外反し、底部は上げ底で端部がわずかに張り出すもの、わずかな上げ底のものがある。土師器の甕には、表面の所々にタタキ日の残るものがある。口縁部は、ゆるやかに外反するもの、やや直線的に開くものがある。底部は平底、わずかな上げ底がある。弥生土器の鉢には、深鉢の口縁部が、ゆるやかに内湾するものがある。底部は、高台脚付の平底、上げ底で端部が張り出するもの、わずかな上げ底のものがある。浅鉢には、頸部で屈曲し外反する口縁部をもち、底部は小さな平底がある。土師器の鉢には、平底をもつ深鉢の底部やレンズ状の底部に、内湾しながら立ち上がる胴部をもつ浅鉢がある。以上の特徴から松永編年の4・5期（弥生時代終末～古墳時代初頭）と考えられる。

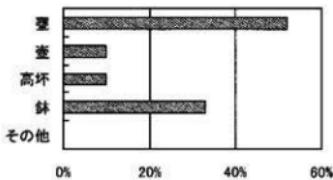
9号竪穴住居跡 (SA9)

本遺構の土器総数は24点で、器種構成の割合（第88～91図）は甕が51%と最も多い。次いで壺（21%）、鉢（13%）となっている。甕には大型・中型・小型がある。大型の甕は、外面にタタキ日を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開き、底部は側面が直線的に立ち上がる平底である。中型の甕は、外面にタタキ日を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開き、底部は側面が直線的に立ち上がる平底である。小型の甕は、外面にタタキ日の施してあるもの、一部タタキ日の残るもの、ハケメ・ナデ主体のものがある。口縁部は、「く」の字状で直線的に開いているもの、短く直立気味のものがある。壺は、直立気味に立ち上がる二重口縁壺や口縁部が外反するもの、直立気味のものがある。底部は尖底に近い平底のもの、レンズ状の平底のものがある。小型の壺は、短く外傾する口縁部で、頸部付近にミガキが施されており、ソロバン下状の胴部に底部は丸底のものがある。鉢は、口縁部は外傾のゆるいものの、ゆるやかに内湾するものがある。以上の特徴から今塙・松永編年の3・4期（古墳時代前期～中期）と考えられる。

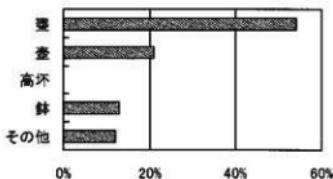
第134図 SA8の器種構成



第135図 SA2の器種構成



第136図 SA9の器種構成



1号竪穴住居跡 (SA1)

本遺構の上器総数は29点で、器種構成の割合（第93～96図）は壺が48%と最も多い。次いで高坏（21%）、鉢（17%）、壺（11%）、となっている。壺には大型・中型・小型がある。大型の壺は、頸部下の表面所々にタタキ目が残るものがあり、口縁部は直線的に外反している。底部は側面が直線的に立ち上がる丸みをもつ尖底で、わずかに平坦面がある。中型の壺は長胴形と球胴に近いものがあり、長胴形は、口縁部が直線的に外反し、底部は丸みをもつ尖底がある。高坏の口縁部は直線的に外傾し、受部内面は平らに近いものがある。鉢はいずれも深鉢で、口縁部が巻き込み気味に立ち上がるもの、ゆるやかに内湾するもの、外傾するものがある。底部は平底がある。壺は球形胴で、口縁部は短く直立するものがある。小型丸底壺は半球形と球形がある。以上の特徴から今塙屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

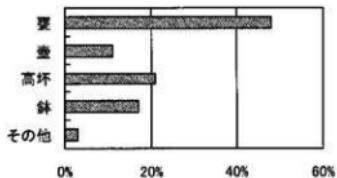
3号竪穴住居跡 (SA3)

本遺構の土器総数は38点で、器種構成の割合（第98～101図）は壺が45%と最も多く、次いで壺（34%）、高坏（5%）、鉢（5%）となっている。壺には、大型と中型がある。大型の壺の口縁部がややゆるやかに外反するものがある。中型の壺は、胴部形態で長胴と球胴がある。長胴形では、外面全体にタタキ目が残るもの、一部にミガキを施しているものがある。口縁部は直線的に外反しているもの、直線的ではあるが、ややゆるやかに外反しているもの、短く屈曲するものがある。底部は、丸みをもつ尖底やわずかに平坦面やくぼみのあるもの、厚みのある平底がある。壺の口縁部は、やや外反するもの、直立に近く立ち上がるもの、頸部に格子目状の突起があるものがある。また、櫛状波紋状や線刻による直線的な文様のある二重口縁壺もある。以上の特徴から今塙屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

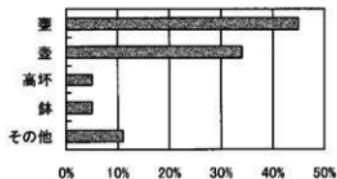
4号竪穴住居跡 (SA4)

本遺構の土器総数は19点で、器種構成の割合（第103・104図）は壺が58%と最も多く、次いで壺（21%）、高坏（11%）、鉢（5%）となっている。壺は、胴部形態で長胴と球胴がある。長胴形では、口縁部が直立気味に長くゆるやかに外反し、底部は、丸みをもつ尖底がある。球形胴の壺は、外面頸部下にミガキが施され、口縁部が直線的に伸びているものがある。壺の口縁部は、外反するもの、直立に近く立ち上げるものがある。小型丸底壺の口縁部は、直線的に開くものがある。高坏の脚部は外面にミガキが施されているものがある。鉢は深鉢で、口縁部はゆるやかに内湾するものがある。以上の特徴から今塙屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

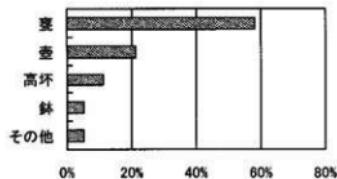
第137図 SA1の器種構成



第138図 SA3の器種構成



第139図 SA4の器種構成



10号堅穴住居跡 (SA10)

本遺構の土器総数は9点で、器種構成の割合（第106・107図）は壺と壺がそれぞれ33%と最も多く、次いで高杯（22%）・鉢（12%）となっている。壺の外面は工具によるナデ調整主体に、口縁部は直立気味に長くゆるやかに外反するもの、「く」の字状で直線的に開くものがある。壺は、口縁部は直立に近く立ち上がるものの、やや外反するものがある。小型の壺は、扁球胴の丸底のものがある。高杯は、受部と口縁部境に段があり、直線的に外傾した口縁部に、受部内面は平らに近く、裾部は小さく屈曲して開いているものがある。鉢は、ゆるやかに内湾する口縁部のものがある。以上の特徴から今塙屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

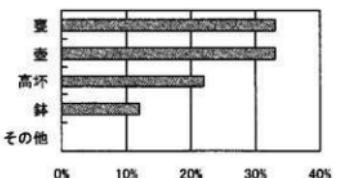
11号堅穴住居跡 (SA11)

本遺構の上器総数は17点で、器種構成の割合（第109・110図）は壺が47%と最も多く、次いで鉢（35%）、壺（12%）となっている。壺よりも鉢の割合の高いことが特徴的である。壺の外面はナデ調整主体に、口縁部は直立気味に外反し、底部は、わずかに平坦面のある尖底に近い平底のものがある。鉢は深鉢では、ゆるやかに内湾する口縁部で、底部は丸底のもの、平坦面のある尖底に近い平底のもの、レンズ状の平底のものがある。浅鉢では、口縁部はゆるやかに外傾するもの、ゆるやかに内湾するものがある。以上の特徴から今塙屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

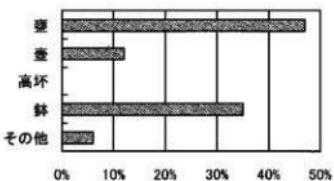
12号堅穴住居跡 (SA12)

本遺構の上器総数は28点で、器種構成の割合（第112～115図）は壺が42%と最も多く、次いで壺（35%）、鉢（7%）、高杯（4%）となっている。壺よりも壺の割合の高いことが特徴的である。壺の口縁部は、直立気味のもの、二重口縁のもの、やや外傾するもの、大きく外反するものがある。底部は尖底に近い平底のものがある。壺は大型と中型のものがある。大型の壺は、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いており、底部は、丸みをもつ尖底のものがある。中型の壺は、外面にタタキ目を施してある。「く」の字状の口縁部であるが、直線的に開いており、底部は、丸みをもつ尖底のものがある。鉢は浅鉢で、外面にタタキ目を施してあり、口縁部はゆるやかに外傾しているもの、ゆるやかに内湾する口縁部に、底部は平底のものがある。壺の中に、大きく外反する口縁部のものはやや異質であるが、その他の器種の特徴から、今塙屋・松永編年の4期（古墳時代中期）と考えられる。

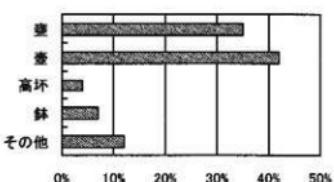
第140図 SA10の器種構成



第141図 SA11の器種構成



第142図 SA12の器種構成



6号竪穴住居跡（SA6）

本遺構は住居跡内の地床跡のみの検出で平面形態は確認できず、出土器（第125図）も壺が6点のみである。壺の口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁部端がゆるやかに外反するものがある。底部は器厚の厚い丸底のもの、丸底に近い平底のものがある。以上の特徴から今塙層・松水編年5期（古墳時代後期）と考えられる。

各時期別の器種構成

出土遺物の特徴から、I期を弥生時代終末から古墳時代初頭（SA5・SA7・SA8・SA2）、II期を古墳時代前期から中期（SA9・SA1・SA3・SA4・SA10・SA11・SA12）、III期を古墳時代後期（SA6）と、大きく3時期に分けることができる。しかし、各時期においては、さらに細分できる可能性は否めない。

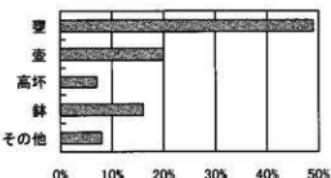
II期のSA9は、同時期とした他の住居跡の遺物時期と比べると幅があるが、SA9とSA12で一個体分の壺が遺構間接合したことから、同時期のものとみなし、II期として括することにした。以下、個体数の多いI期とII期の器種構成の比較を行う。

前述したように、報告書記載の上器総数は274点で、その器種構成の割合（第143図）は、壺が49%、壺が20%、高杯が7%、鉢が16%、その他が8%で、壺が最も個体数の割合が多く、全住居跡から出土しており、本遺跡の主要器種となる。これらをI期とII期の時期別に分けて見ると若干の差異が認められる。

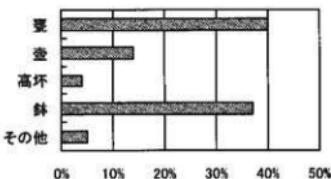
I期の器種構成の割合（第144図）は、壺が40%、壺が14%、高杯が4%、鉢が37%、その他が5%で、壺と鉢の個体数の割合がさほど変わらず、他の器種よりも、それらの個体数の割合が高いのが特徴的である。壺や鉢（深鉢）の底部は、小さな張り出しのある上げ底が多く、浅鉢の口縁部は短くしっかりと外傾している。本遺跡周辺の山田遺跡（第1図）においては、弥生時代終末と考えられる住居跡から、壺や壺、鉢等の遺物が13点出土している。そのうち、鉢の個体数の割合が高く、本遺跡と同様な傾向にあるが、時期幅において直結させるには難しい面がある。

II期の器種構成の割合（第145図）は、壺が46%、壺が26%、高杯が8%、鉢が12%、その他が8%で、I期と比べ壺が主体となり、鉢よりも壺の割合が高くなるのが特徴的である。壺は、胸部形態で長胴と球胴があり、長胴形の壺は、口径から大型（口径19cm以上）、中型（14~19cm）、それ以下の小型と区分できる。外面にタタキ目を施すものが多く、底部は尖底に近い平底や側面が直線的に立ち上がる丸みをもつ尖底が多く、口縁部は直線的に外反するもの、直線的ではあるが、ややゆるやかに外反するものがある。壺は大型壺と広口の中型壺、さらに小型壺と小型丸底壺がある。鉢では、深鉢の口縁部は、巻き込み気味に立ち上がるものの、ゆるやかに内湾するものが多く、底部は、半円面のある尖底に近い平底が多い。浅鉢の口縁部は、外傾のゆるいもの、ゆるやかに内湾するものがあり、底部は平底のものが多い。高杯は、口縁部が直線的に外傾し、受部内面が平らなものが多い。本遺跡周辺の吉野第2遺跡・山田遺跡第2地点（第1図）

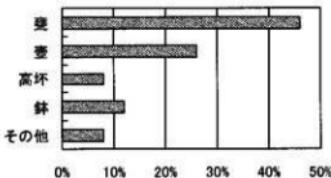
第143図 遺構全体の器種構成



第144図 I期の器種構成



第145図 II期の器種構成



においては、古墳時代中期と考えられる住居跡から、壺や壺、高壺、鉢等の土器が出土し、本遺跡と同じように壺主体の傾向にある。本遺跡では、須恵器の出土はない。上記の2遺跡においても、出土量は概して低く、土器の占める割合が、本遺跡と同様に極めて高い。

以上、堅穴住居跡別に器種構成の特徴を比較し、その編年的位置づけを行った。宮崎県の県北地域における弥生時代終末から古墳時代中期の集落遺跡調査例は、県内の他地域に比べると多くはない。本遺跡の資料は、当該時期の土器様相を考える上で、重要な材料を提供するものだと言えよう。

(2) 出土石製品

各住居跡から25点の石製品が出土している。時期としては、I期から18点、II期から7点である。器種別では、石窓丁が7点(SA1・SA2・SA3・SA4・SA5・SA9)で、どれも両端に抉りのあるものである。磨石は3点(SA5・SA10)で、厚みのある精円礫を用いている。台石は8点(SA2・SA8・SA9・SA10・SA12)で、どれも一抱えもある大きさの花崗斑岩を用いる場合が多く、特に12号堅穴住居跡に集中して出土した。蔽石は12点(SA1・SA2・SA3・SA4・SA7・SA8・SA9・SA11・SA12)で、精円やコッペパン状の礫を用いており、蔽打痕とともに磨り痕もある蔽・磨石として扱う器種が、9点であった。その他には、砥石が5点(SA5・SA9・SA12)、用途は不明であるが、棒状石製品が3点(SA2・SA7・SA8)であった。棒状石製品は、本遺跡周辺の吉野第2遺跡(第1図)において、古墳時代中期の住居跡から10~15cm規模の棒状の砂岩礫が10箇点出土しており、さらに、都城市坂元A遺跡の弥生後期の住居跡や中尾遺跡の古墳時代の住居跡においても確認されている。

(3) 出土鉄製品

7軒の堅穴住居跡(SA2・SA3・SA4・SA5・SA7・SA9・SA12)から14点の鉄製品が出土している。時期としては、I期から4点、II期から10点である。器種別では、鐵と鉈が出土しており、鐵には圭頭鐵、柳葉鐵、無茎鐵、脇抉鐵の4種類が認められる。鐵は、刃部に布を巻くことで、保護または保管をしていたのではないかと考えられる。

2 集落構成の復元

(1) 堅穴住居跡(SA)の特徴

堅穴住居跡は、12軒検出した。そのうち1軒(SA6)は、住居跡内の地床炉のみの検出で、平面形態は確認できなかったが、残りの11軒については第25表の通りである。集落の時期については、前述したように出土遺物の特徴から、I期を弥生時代終末から古墳時代初頭、II期を古墳時代前期から中期、III期を古墳時代後期と大きく3時期に分けられる。

本遺跡の堅穴住居跡群は、平面形態が方形・長方形主体の住居跡群と言える。住居跡の規模は、一辺が5.00mを超える大型住居跡が7軒(SA1・SA2・SA3・SA5・SA9・SA11・SA12)、4.00~5.00mの中型住居跡が4軒(SA4・SA7・SA8・SA10)で、大型住居跡の多い点が特徴的である。特にSA9は、8.20m×7.80mと本遺跡最大であった。集落時期の特徴では、I期よりもII期が比較的大型の住居跡であり、時期が遡るほど小規模化していく傾向にある。本遺跡周辺の山口遺跡第2地点(第1図)においては、弥生時代後期から古墳時代中後期の住居跡が約30軒確認されている。住居跡の規模を比較した結果、本遺跡とほぼ同様な傾向である。

構造的な特徴は、11号堅穴住居跡を除く全てに貼り床が施されている。また、貼り床面が被熱によりが化し、掘り方の浅い単純な地床炉の確認された住居跡が4軒ある。また、焼土面のみ確認された住居跡は5軒あり、明らかに火を用いた何らかの活動が行われていたことを示すものである。1号堅穴住居跡にはベッド状構造が、11・12号堅穴住居跡それぞれの北側部分には張り出しがある。本遺跡周辺の張り出しのある住居跡については、地蔵ヶ森遺跡(第1図)に類似例がある。主柱穴については2本または4本で、大型住居跡はすべて4本柱であった。これは当然、床面規模に応じて自ずと規模を増す上屋構造に対応した結果と言える。12号堅穴住居跡には、主柱穴検出後の貼り床面を除去した床面において、それぞれの主柱穴の近くに、同じような柱穴を確認し、柱の位置を変えたか、柱の補強を行った可能性が考えられる。

遺構間接合については、SA9とSA12で一個体分の蓋が接合した。ちょうど真ん中から半截したものが、それぞれの住居跡から出土し、接合したものである。意図的に分割された可能性が高く、なんらかの行為性が考えられる。しかし、SA9では、南西側壁付近から土器破片として出土、SA12では、東側から土器破片として山上と、両住居跡間に意図的な共通性は見られなかった。

遺構番号	規模(m)			床面積 (m ²)	平面形態	柱数	時期	主な遺物	備考
	長軸	短軸	深さ						
S A 5	5.40	3.60	0.55	19.44	長方形	2	I期	甕・壺・鉢・手捏土器・杓子状土器・鐵器・石庖丁・砥石・磨石	焼土・貼り床
S A 7	4.20	3.80	0.30	15.96	方形	2	I期	甕・壺・鉢・鐵器・敲石	焼土・貼り床
S A 8	4.10	3.40	0.30	13.94	長方形	2	I期	甕・壺・鉢・敲石・台石	貼り床
S A 2	6.55	6.25	0.40	40.93	方形	4	I期	甕・壺・鉢・高坏・鐵器・石庖丁・石錐・敲・磨石	地床炉・貼り床
S A 9	8.20	7.80	0.75	63.96	方形	4	II期	甕・壺・鉢・手捏上器・鐵器・石庖丁・砥石・敲・磨石・台石	焼土・貼り床
S A 1	5.05	4.95	0.55	24.99	方形	4	II期	甕・壺・小型丸底甕・鉢・高坏・手捏土器・石庖丁・敲・磨石	貼り床
S A 3	6.25	5.60	0.45	35.00	長方形	4	II期	甕・壺・高坏・鉢・手捏上器・鐵器・石庖丁・敲・磨石	地床炉・貼り床
S A 4	4.90	4.00	0.50	19.60	長方形	2	II期	甕・壺・小型丸底甕・高坏・鉢・手捏土器・鐵器・石庖丁・敲・磨石	ベッド状遺構・貼り床
S A 10	4.65	4.40	0.30	20.46	方形	2	II期	甕・壺・鉢・高坏・磨石・台石	地床炉・貼り床
S A 11	6.35	5.35	0.55	33.97	長方形	4	II期	甕・壺・鉢・手捏土器・敲・磨石	焼土・張り出し
S A 12	6.60	6.60	0.65	43.56	方形	4	II期	甕・壺・鉢・高坏・鐵器・砥石・敲・磨石・台石	焼上・張り出し・貼り床
S A 6	—	—	—	—	—	—	III期	甕	地床炉

第25表 整穴住居跡(SA)一覧

(2) 土坑 (SC) の特徴

土坑は4基検出し、第26表の通りである。そのうち4号土坑は、土器一括廻棄の目的をもつもので、その他は不明である。時期については、出土遺物の特徴から、2号土坑は弥生時代終末から古墳時代初頭のI期、その他の上坑は古墳時代前期から中期のII期と、大きく2時期に分けられる。4号土坑に投棄されている土器は、II期の主要器種である甕が大部分であった。

遺構番号	グリッド	規模(m)			平面形態	時期	主な遺物	備考
		長軸	短軸	深さ				
SC2	L 4	3.02	2.50	0.50	楕円形	I期	甕	
SC4	H 5	2.20	2.20	0.20	方形	II期	甕・壺・鉢	上器一括廻棄
SC3	M 4	3.35	3.10	0.40	方形	II期	甕・鉢・高杯	貼り床
SC1	H 4	1.82	1.40	0.15	楕円形	II期	甕	

第26表 土坑 (SC) 一覧

(3) 集落内における活動

I期の弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落は、堅穴住居跡4軒 (SA2・SA5・SA7・SA8)、土坑1基 (SC2) で、丘陵上の台地平坦面に集中し、比較的散漫な状況で分布している。2号堅穴住居跡からは、石錐が1点ではあるが出土しており、漁撈活動の存在が窺われる。

II期の古墳時代前期から中期にかけての集落は、堅穴住居跡7軒 (SA1・SA3・SA4・SA9・SA10・SA11・SA12)、土坑3基 (SC1・SC3・SC4) で、丘陵上の台地平坦面と台地頂部付近の2か所に分かれている。おそらく集落の中心は、調査区外の北側部分だと考えられる。住居跡の主軸は北西方向をとるもののが主となっている。中でも9号堅穴住居跡は、長軸8.20m、短軸7.20mで床面積63.96m²と非常に大きなものとなる。当時の一般的な堅穴住居跡の規模から考えると、今回検出された9号堅穴住居跡は、一般住居ではなく集会施設のような利用が考えられる。さらにその住居跡内には土坑(第87図)があり、そこから完形の状態で二重口縁壺(394)が出土した。土坑の規模は長軸0.70m、短軸0.65mで、貼り床面から0.25m程掘り込んでいる。その埋土は自然堆積ではない黒色土であり、人為的に埋め戻された可能性がある。おそらく何らかの活動目的で壺を意図的に据えていたものと考えられる。

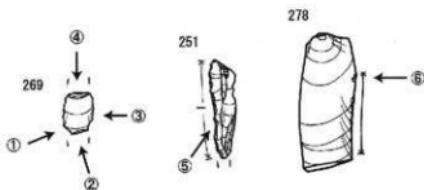
III期の古墳時代後期の集落は、6号堅穴住居跡の地床がのみの検出で、詳細は不明である。

以上のことから本遺跡は、主として弥生時代終末から古墳時代中期にかけて活動をしており、住居跡等の切り合いもなく、比較的散漫な状況で分布していることから、一時期、あるいは短期間のみ営まれていた集落と考えられる。また、収穫物の収納施設たる「倉庫」(掘立柱建物)は検出されず、堅穴住居を中心の活動であったと考えられる。

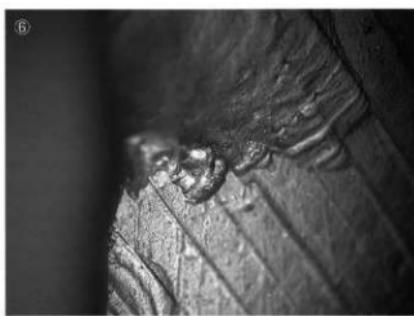
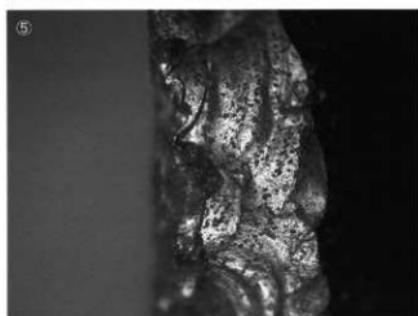
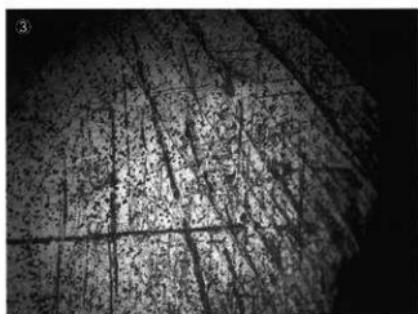
自然科学分析結果(第IV章第2・3節)から、遺跡周辺の環境は、ツブラジイ、サカキといった照葉樹が分布し、草木のタデ属、エノキグサも生育する草原的な環境であったと考えられる。また、畑作活動が行われていた傍証となる、ヒエ・キビ、ムギ類、マメ類といった栽培植物が確認されている。しかし、ムギ類、マメ類の年代測定では、後のものの遺構内に混入した可能性が指摘される結果となり、当該期における利用に直結させるのは無理があった。栽培植物を除いた分類群のコナラ属・シイ属、シイ属?といった堅果が、食用可能な有用植物として確認されている。これらは、周辺城の森林に生育していたものに由来すると思われ、遺構内に持ち込まれ利用された可能性がある。また、炭化していることから、火を受けたことが推定されるが、時期に関しては、上述の栽培植物と同様に慎重に評価する必要がある。

【参考文献】

- 宮崎県旧石器文化談話会2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66
- 秋成雅博2005「宮崎10段階編年」の要要『九州旧石器』第9号 九州旧石器文化研究会
- 小畠弘己2002「第四章 考察」『吉武遺跡群 XIV』福岡市埋蔵文化財調査報告書第731集 福岡市教育委員会 pp. 61-68
- 国武貞克2006「後期旧石器時代前半期も居住行動の変遷と技術構造の変容」『物質文化』78 物質文化研究会 pp. 1-25
- 芝原次郎2007a「九州細石刃石器群編年の再検討」『古文化終叢』第56号、1-23頁、九州古文化研究会、福岡。
- 芝原次郎2007b「細石刃文化の到来とその変遷について」『九州旧石器』第11号、41-54頁、九州旧石器文化研究会、福岡
- 橋 昌信1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3 別府大学考古学研究会 pp. 1-70
- 橋 昌信1990「船野技法についての考察」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会 pp. 21-32
- 松田清孝2005「宮崎黒下の地質的背景」宮崎県旧石器文化談話会「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66
- 旧石器文化談話会所収 pp. 47-50
- 松本 広2002「東南部九州における細石刃石器群編年に関する観察—宮崎県岩十原遺跡第2文化層の当検討—」『富山大学考古学研究室論集蜃氣楼—秋山進午先生古稀記念—』六一書房 pp. 27-45
- 官山栄二1998「細石刃の製作技術—細石刃核の固定方法からの視点—」『九州の細石器文化 九州島における細石器文化の石器と技術—』九州旧石器文化研究会 pp. 35-40
- 松永幸寿2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号
- 今塙巖綱・松永幸寿2002「口向における古墳時代中～後期上師器—宮崎平野部を中心にして—」『古墳時代中・後期の上師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会 第5回九州前方後円墳研究会実行委員会
- 宮崎県埋蔵文化財センター2005「山口遺跡第2地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第99集』
- 宮崎県埋蔵文化財センター2007「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集』
- 宮崎県埋蔵文化財センター2007「吉野第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第155集』



- ①②④：刃部に直交する線状痕
- ③：刃部に平行する線状痕
- ⑤：連続する微小剥離痕
- ⑥：微小剥離痕と線状痕



黒曜石製石器における使用痕

図版4 炭化材 I

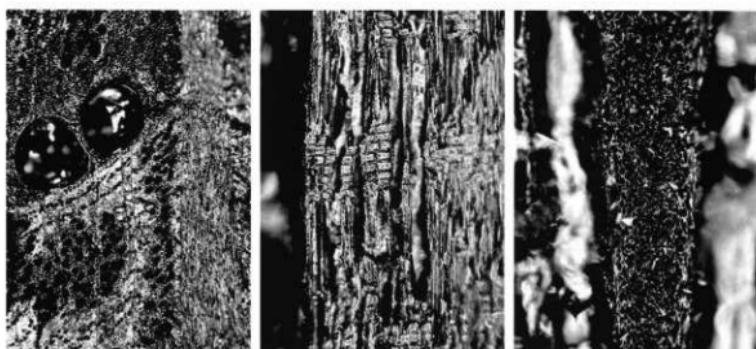


横断面 : 0.4mm

試料1 (SA 5) ツブライ

放射断面 : 0.4mm

接線断面 : 0.2mm

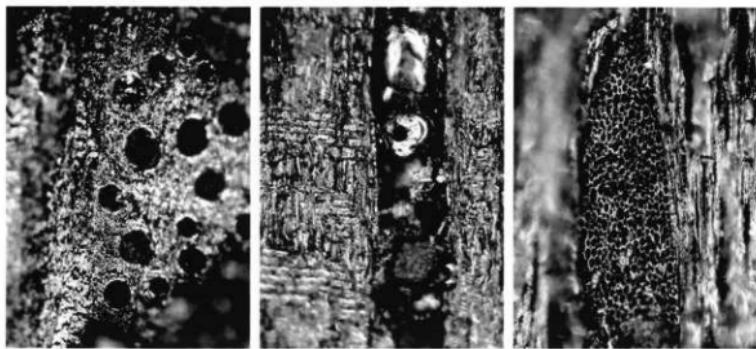


横断面 : 0.4mm

試料2 (SA 5) コナラ属コナラ節

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

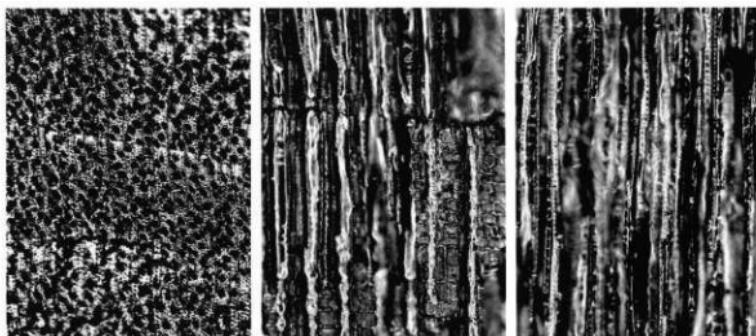


横断面 : 0.4mm

試料6 (1号不明土坑) コナラ属アカガシ亜属

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm



横断面 : 0.4mm

試料3 (SA 7) サカキ

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

横断面 : 0.4mm

試料4 (SA 9) ハイノキ属

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

図版6 炭化種子



試料2 シイ属? 果実



試料6 ムギ属 胚乳



試料8 エノキグサ 種子



試料8 タデ属? 果実



試料8 タデ属? 果実



試料40 コナラ属-シイ属



試料37 マメ属 種子



: 2 mm



試料48 タデ属 果実



試料37 マメ属 種子



: 2 mm



試料52 ヒエーキビ 胚乳



SA9遺物出土状況



SA9壺（394）出土状況



SA1土器集中部分



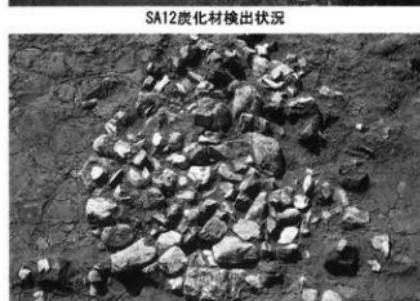
SA7鉢（319）出土状況



SA12炭化材検出状況



SC4遺物出土状況



集石遺構検出状況（縄文時代早期）



作業風景